異世界回帰ナイトメア

ウスバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界回帰ナイトメア

【Ｎコード】
Ｎ６９７０Ｙ

【作者名】
ウスバー

【あらすじ】
深夜０時、気付くと俺はファンタジーゲームのような世界に立っていた。
夜毎に異世界に飛ばされる俺は、今夜もこの悪夢の世界で消えた幼なじみを探す。

お読みになる前に（読み飛ばし可）

ここには色々と頑張らない宣言を載せていたのですが、結局色々と頑張ってしまったので、作品に関するちょっとした注意点だけを載せておきます

・不定期更新です
・この作品のコンセプトは『テンプレでもチートでもない異世界トリップ』ですが、段々と主人公は最強に、ヒロインは複数になっていく予定です
・異世界への移動や幼なじみの失踪の謎、戦闘や成長に重きを置いているため、生活や文化の描写は意図的に控えめにしています
・この作品は伏線をあまり伏せていないため、ネタバレ防止と主に作者のモチベーション低下防止のため現在感想欄を閉鎖しています、ご了承下さい

では、楽しんで頂ければ幸いです。

プロローグ

――たぶん、十日ほど前のことだったと思う。
月明かりの下で、俺はいつものように縁（ゆかり）と話をしていた。

『世界は暗闇に包まれ、既存の秩序や法則は全て崩壊し、確かな物は何一つありません。
この世界で貴方が初めに見つけた物は何ですか？』
『それ、何の心理テストだ？』
突飛なことばかり言う奴だったが、今日のそれは一際荒唐無稽だった。

『んー。悪夢の世界を生き抜けるかどうかのテスト、かもね』
『意味が分からねえよ』
なんて突っぱねても、俺が縁の言葉を無視できるはずもなく、数秒ほど置いて、俺は結局答えていた。

『光、かな？』
『ひかり？』
意外そうな顔をされたけど、それほど意外な答えでもないはずだ。

『だって、真っ暗なんだろ？　だったら懐中電灯でも、ペンライトでも何でもいい。
とにかく明かりがないと、困るじゃないか』
『どうして？』
真顔で聞いてくる。

『どうして、って……』

それが当たり前だからと、俺はそう答えたかった。
しかし、縁の表情がそれを許さない。
なぜなら実際に、俺が考えていたのはもっと別の理由なのだ。

『どうして明かりがないと、困るの？』
それを読み取ったみたいに、窓から身を乗り出して、幼なじみの顔が近付いてくる。
俺は、これに弱い。
急に心臓が狂ったみたいに高鳴って顔面に熱が集中して、何を考えていいのか分からなくなる。
そして、それが分かってこいつはこんなことをしてくるのだ。

『だって、明かりが、ないと……』
だから俺は、為す術もなく重い口を開く。
耳の後ろを流れる血潮の音が耳障りで、月明かりで火照った顔を見られないように、微妙に顔を逸らしながら……。

それでも、俺は言ったんだ。
赤面物の台詞を、真顔で。

『お前を、探しに行けない』

それを聞いて、不意打ちを受けたみたいに目をまるくして、それからその顔が泣きそうな形にくしゃっとゆがんで、まるで泣き笑いのような顔で、縁は――

「ごめんね、光一。さよなら……」

「お兄ちゃん！」

静寂を揺らす無粋な声に、俺はゆっくりと目を開ける。
途端に俺の網膜に、刺すような人工的な明かりと、年下らしき少女の顔が映る。

――こいつ、誰、だっけ？

まだ、頭が働かない。

――というか、ここ、どこだっけ？

まだ、意識が夢の中からもどらない。
当たり前に分かるべきことが、何も理解できない。
世界の空気に体がなじまず、体の機関が全て空転している。

「なんでお兄ちゃんはこんなとこで呑気に寝てるの？！」

そんなこと俺にだって分からない。
とにかく体が重い。
眠らせて欲しい。

「縁お姉ちゃんがお兄ちゃんだけどっかに連れてっちゃったから、なにかあるのかなって思って、結芽（ゆめ）もついてきたのに！」

――縁、お姉ちゃん？　それに、お兄ちゃん？

脳が軋みを上げる。

――結芽、か。ええと、こいつは俺の妹、だったっけ？

「もーいいよ！　わたしはまた寝ちゃうから！」

ベッドの正面にある扉を開けて、

「もう全部知らないから！　絶対起こさないでね！」

奥の部屋に行ってしまおうとする結芽。

――あれ？　こいつ行っちゃう、のか？

なんとなく、奥に見えたベッドだけの部屋が寂しげで、

「結芽！」

俺は意味もなく、結芽を引き留めていた。

「なに？」

結芽が俺を、驚くほど感情のこもらない目で見る。

「あー、その……」

思えば、たぶんここで俺は少しだけ、夢から醒めた。

夢から醒めて、なのにまた寝ぼけたことを言った。

「いい夢、見ろよ」

これはないだろう。年下とはいえ思春期の少女に、そんな子供だましにもならないような言葉が意味をなすはずがない。

案の定、結芽は一瞬だけきょとんとしたが、すぐに悪戯っぽい笑みでこちらを見返してきた。

「へー。お兄ちゃんは、わたしにどんな夢を見てほしいのかな？」

申し訳ないが、そんなに期待するような目で見ないで欲しい。
こっちの脳みそは既に限界だ。
眠りたい。とにかく眠りたい。出来れば楽しく眠りたい。

「俺と結芽が楽しく暮らす夢、とか？」

そんな連想から生まれたその苦し紛れの言葉は、意外にも結芽にまで届いたようで、

「ふぅん。……それはとても、いい夢だね」

温かい言葉を返してくれた、と思う。

なのにその時結芽が浮かべた寂しげな表情。
それは、少女に似つかわしくない、とてもとても、大人びた顔で、

「おやすみ……お兄ちゃん」

それでも結局扉は閉まる。
結芽の姿は、その奥に消えていく。

「おやすみ……結芽」

それを見届けて、俺も目を閉じた。

――それが、俺にとって全ての終わりで、全ての始まりだった日の記憶。

この日こそが俺の、平和で平凡で平穏だった日常が、退屈だけれど愛すべき世界が終わった日。

そして、俺の前から縁が消えた日だったのだと思い出すのは、だいぶ後になってからの事だった。

1．ハロー、トラベラー

――たぶん、『あの日』から一ヶ月と少し前。

俺は、縁の突拍子のない話に、つい驚きの声を上げてしまった。

『ゲーム？　夢の中で？』

『あんまりびっくりしないでね、って言ったのに』

縁は少しだけ唇をとがらせた。

そんな仕種も愛らしい、ではなくて、

『だけど、そんなこと出来るのか？』

『分からないよ。分からないから、聞いてるんだし』

こっちとしてはもっと訳が分からない。

『そもそもお前って、夢で見るほどゲーム好きだっけ？』

俺も縁も、ゲームはあまりやらない方だったはずだ。

かろうじて俺は最新のゲーム機くらいは持っていたりもするが、縁の家にそんな物があったかどうかは……正直記憶にない。

『やらないよ。特にＲＰＧとかそういうのあんまりやったことないから、最初は苦労した』

まだ少しだけふくれっ面のまま、縁がぶっきらぼうに言う。

『苦労、って？』

『キャラクタービルド、とか、パーティの構成、とか？』

『はぁ？』

縁の口からあまりに似合わない言葉が出て来て、俺はつい間抜け顔を晒してしまった。

『そんな顔しないでよ。なんとなく集団のリーダーみたいなのを任されちゃったから色々大変だったの！』
顔を真っ赤にして怒る縁もやっぱり愛らしい、ではなくて、
『あ、悪い。でも、なんか本格的だなって思ってさ』
ちょっと失礼な態度を取りすぎたか、と俺は慌ててフォローを入れた。

それを聞いても縁はまだ不機嫌そうな顔をしていたが、俺が頑張って視線を外さずにいると、やがて表情を緩めた。
『んー、もういい。
光一にゲームのこと、色々聞いてみようと思ったけど、考えてみれば光一だってそんなにゲーム詳しい訳じゃないもんね。ネットとか使って自分で調べる。
あーあ、説明書さえあればなぁ……』

そして、ようやく機嫌を直した縁に対して、
『さすがに夢にマニュアルはないだろ』
と無神経な一言を言ってまた縁をふくれっ面に戻すことになるのだが、それもまた、遠い日の記憶で……。

「……ただいま」

俺はあいさつというより、独り言みたいにそう言い捨てながら、玄関の扉を開けて、

「おかえり」

すぐにその返答が返ってきたことに驚いて、玄関の前でしばし、硬直した。

「おかえり、お兄ちゃん」

それが不満だったのか、自分の存在を主張するみたいに、もう一度声がかけられる。

それで、ようやく俺の硬直は解けた。

「な、何だ、結芽（ゆめ）か」

息をつくようにそう言って、俺は靴を脱いだ。

声の正体が義妹だと分かって俺は少しだけ緊張を解くが、それでも心臓はなかなか平常運転に戻ってくれない。

靴を脱ぐためその場にかがんでいる間にも、妹の視線を感じる。

上からのプレッシャーがすごい。

靴を脱ぎながら、ちらりと前をうかがう。
妹の真っ白な素足と、その少し上辺りまで垂れた、水色のエプロンの端が見えた。
これの色違い、俺も持ってるんだよな、なんて考えながら、出来るだけ時間をかけて靴を脱ぐ。

それでもそんな時間稼ぎには限界がある。
とうとう靴を脱ぎ終えてしまった俺は、顔を上げながら妹に何でもないように声をかけて、
「どうしたんだよ、こんな所で。何か用事でも……」
「お兄ちゃんを、待ってた」
最後まで言わせてももらえなかった。
妹は、その黒目がちの大きな瞳にどこか思い詰めた色をたたえて俺を見ている。
……正直、何か色々ぞくぞく来た。

「お兄ちゃん。最近結芽のこと、避けてるよね」
疑問ではなく断定。
想像して然るべきだった指摘に、それでも律儀に動揺する心を鎮めるのに数瞬。
けれどすぐに持ち直して、俺は必死に取り繕って口を開いて、
「まさか。そんなことな――」
「それって、好きな人ができたから？」
またも、言葉の出足を潰される。

しかしそれも当然か。
俺と結芽では言葉に入れている力が違う。
こいつの言葉はいつも直球勝負だ。
あらゆる意味で遊びがない。

だから妹は攻め手を緩めない。
「天壌先輩は、お兄ちゃんのことなんてたぶん気にもしてないよ？」
痛烈な言葉を、たぶん、俺に痛烈に響くだろうと考えている言葉を、容赦なく吐いてくる。

……だが残念。
そんな言葉に意味はない。
そんなことはとっくに知っている。
そもそも、俺が『惚れているという設定の』天壌先輩とは廊下ですれ違ったことすらない。なのに気にされていたとしたら、それの方がずっとホラーだ。

俺の無言をどう解釈したのか、妹は少しだけ語気を緩めて俺に歩み寄ってくる。
「ねぇ。お兄ちゃん。前みたいにはできないのかな？
好きな人ができたら、妹とは一緒に話すこともできないの？」
「……」
俺は、何も答えられなかった。

そもそも、順番が違う。
好きな人が出来たから前のように話せないんじゃなくて、前のように話せないから、好きな人が出来たなんて嘘を吐いたんだ、なんて事情、当人に話せるはずもなく、
「悪い。疲れてるから」
その一言だけで話を打ち切ると、
「お兄ちゃん！」
無言の背中で妹の声を跳ね返しながら、俺は自分の部屋に向かう。

それでも、妹の声は俺を追いかけてくる。

「待って！　お兄ちゃん、ご飯は？」
「…要らない。向こうで食べてきた」
嘘だった。
けれど、要らないのは本当だ。
まるで食欲がわかない。
もういっそこのまま寝てしまおうと考えながら、俺は部屋に入る。

ドアが閉まる瞬間、

「こんなのぜんぜん楽しくないよ、お兄ちゃん……」

聞こえてきた妹の言葉が、やけに胸に突き刺さった。

「ふぅ……」
俺は後ろ手に部屋のドアを閉め、手早く制服から着替えるとベッドに倒れ込んだ。

――俺たちが倦怠期の夫婦みたいな会話を交わす羽目になったのには、一応理由がある。

結芽は俺の本当の妹ではない。
一年ほど前のある日、家主の諒子（りょうこ）さんが、

「今日から家族が増えることになったよ」

と言っていきなり連れて来たのが、彼女、遠野結芽（とおのゆめ）だった。

突然新しく出来た家族に当然俺は戸惑ったが、幸いにも結芽と俺の相性は悪くなかった。

俺たちは少しずつ少しずつ、お互いのことを理解していって、それにつれてゆっくりと、ちょっとずつ仲良くなっていって、段々と仲良くなっていって、さらに仲良くなっていって、もっと仲良くなっていって、もっともっと仲良くなっていって……結果、仲良くなりすぎた。

普通の兄妹なんて物を知らなかった俺たちは、お互いに愛情を注ぐことにばかり夢中になって、いつの間にか兄妹という関係性を飛び越えてしまっていた。

……いつからだっただろうか。

妹の俺を見る目が、妙に熱く潤んでいることに気付いたのは。

……いつからだっただろうか。

妹の俺への態度に、単なる兄妹愛以上の何かを見出したのは。

いくら義理とはいえ兄妹で色恋沙汰なんて冗談にもならない。

何より、俺たちをこうして養ってくれている諒子さんに申し訳が立たない。

――そうして俺は、結芽の熱が冷めるまで、妹と距離を取ることを決めた。

そうは思っていても、無邪気に懐いてくる結芽を邪険に扱うのはどうにも心苦しい。
おまけに付け焼刃の兄の悲しさか、そういうことを意識してからこちら、どうしても結芽を『妹』ではなく『かわいい年下の女の子』として見てしまう自分にも気付いていた。

だからせめて、好きな人が出来たと言って距離を置こうとしたのだが、

「それを理由に詰め寄って来られちゃ、逆効果だよなぁ……」

あの妹が、そんな嘘でどうにかなるような相手であるはずがなかった。

「あー、もういいや！　寝よ寝よ！」

本当に眠る気なんてなかったはずだったが、これ以上起きていても気が滅入るだけだ。
蛍光灯の光を、腕をかざしてさえぎる。
そのまま全てを忘れるように目をつぶって、頭の中を空っぽにする。

幸い遅くまで遊び歩いていたせいか、自分の想像よりも体は疲れて眠りを欲していた。
意識は瞬く間に、夢の世界へと旅立って……。

（……あれ？）

気が付いた時、辺りは真っ暗になっていた。

（俺、いつ電気消したっけ？）

そんな呑気なことを考えたのも束の間、すぐに異常に気付く。

（なんだ、これ…！）

明かりどころの話じゃない。
俺は今、自分の疑問を声に出して言ったつもりだった。
なのに、声が出ない。
いや、声の出し方が分からない。

（なんなんだ？　なんなんだよ、これは…！）

それどころか、体の感覚が一切ない。
手を動かそうにも、手の動かし方が思い出せない
足を動かそうにも、足がどこにあるのかすら分からない。

目や耳も鼻も利かない。
世界を知覚する全ての情報が遮断されていた。

何が何だか分からない。
あまりに状況が理解出来ず、パニックを起こしかける。

――だがそんな時、闇に『声』が響いた。

「ハロー、トラベラー。
ナイトメアの世界にようこそ。
貴方は７０１３０２７４９２人目の探訪者（トラベラー）です」

2. ユニークスキル

――たぶん『あの日』から、十日ほど前の記憶。

『だって、明かりが、ないと……』

だから俺は、為す術もなく重い口を開く。

耳の後ろを流れる血潮の音が耳障りで、月明かりで火照った顔を見られないように、微妙に顔を逸らしながら……。

それでも、俺は言ったんだ。

赤面物の台詞を、真顔で。

『お前を、探しに行けない』

それを聞いて、不意打ちを受けたみたいに目をまるくして、それからその顔が泣きそうな形にくしゃっとゆがんで、まるで泣き笑いのような顔で、縁は――

『うん、不合格！』

――それまでの雰囲気をぶち壊すようなことを、言ったのだった。

『な、何でだよ』

俺は釈然としない思いを抱いてそう抗議したが、縁にとってそれは当然の答えだったらしい。

『んー。夢の中っていうのはさ、イメージがそのまま形になる世界なんだよ？

わたしを見つけるためにまず明かりっていう発想からしてかなり遠回りだし、どうせ光を選ぶにしてももっとこう、太陽、とか、スケールの大きい物を言うべきだと思う』

『いや、太陽なんて出てきたら焼け死んじゃうだろ、みんな』

俺が当然の切り返しをすると、縁は呆れたようにため息をついた。

『そういう常識的な考えが夢では障害になるんだよ。

熱がない太陽も相手だけを焼き尽くす炎も夢の中なら存在させられるし、その辺りはとにかくイメージ次第。

だったら何でもイメージを広げていって、壮大にやっていかなきゃね』

『……いや、それは、違うんじゃないか？』

その言葉に、お前はスケールの小さい男だ、と言われた気がして俺は少しムキになった。

『例えば、ほら。懐中電灯だって便利だろ。

そりゃ太陽ほど明るくないかもしれないけど、余計な場所を照らすこともないし、どんな場所でも、たとえ太陽の光が届かないような物陰だって、うまく使えば明るくしてくれる。

何でもでっかければいいってもんじゃない。そもそもイメージなんて広げる物じゃない、研ぎ澄ます物なんだよ』

自分でも今一つ理解の出来ない理屈を振りかざして、反駁する。

いつも通り、俺たちの意見は真っ向対立、正面衝突した。

俺たちはしばし、にらみ合って、

『……ふふっ』

『……ははっ』

いつものように、笑い出した。

『やっぱり光一とは、びっくりするくらい合わないね』

『そりゃあこっちの台詞だよ』

縁とは幼なじみで、誰よりも、たぶん両親よりも長い時間を一緒に過ごしているのに、考え方は正反対だったりする。

行動派と思考派というか、感覚派と理論派というか。

俺に言わせれば縁は感覚派というよりも無鉄砲を楽しむ愉快犯だし、縁に言わせれば俺は用心深く考えた時ほどありえない選択肢を選ぶ変な奴らしい。

まあどの言葉が真実かはさておき、とにかく考える前に思い付きで行動する縁と、行動する前にどうしても考えずにいられない俺とでは、何かと意見が対立する。

そして意外とそんなところが、俺と縁が長く一緒にいられる理由なのかもしれなかった。

それを証明するみたいに、次の縁の声に、先程までの苛立ちは微塵も見えなかった。

『だったらさ。いつか《その時》が来ても、迷ったらダメだよ』

『その、時…？』

俺の問いに、縁は直接は答えることはせず、

『わたしには理解できない考えだけど、その質問に《光》って答えたそれが、きっと光一の本質なんだよ。
だから、光一は自分の信念を貫いて』
『ん、ああ……』
まるでさとすような言葉に、曖昧に俺はうなずいた。
バカにされるのは嫌だが、あんな思いつきの言葉を応援されても困ってしまう。

少し眉根の寄った俺の顔を見て、縁はやわらかく微笑んで、
『そんな困った顔しないで。
難しく考えるようなことじゃないんだよ。
……光一の信じてることを、わたしは信じてる。
ただそれを、覚えていてほしいだけだから』
そして単純な俺は、もうそれだけで何もかもを信じられるような気がしたのだった。

――そして今。
闇の中に、誰とも知れない『声』が響く。

「世界は暗闇に包まれ、既存の秩序や法則は全て崩壊し、確かな物は何一つありません。
この世界で貴方が初めに見つけた物は何ですか？」

（な…！　今、の……）

それはあまりにも聞き覚えのあるフレーズで、驚愕がほとんど物理的な衝撃となって俺の頭を直撃する。
もちろん響いてくる『声』は縁とは似ても似つかない。
それでも、縁の言葉が、縁の声が、一年以上もの時間を越えてよみがえってくるようだった。

（そう、なのか……）

何より俺の胸に、ストンと腑に落ちる物があった。
だってそうだろう。
もちろん、どうやって縁がこの事態を予見していたのかは分から

ない。
だが、
（今が『その時』なんだな、縁！）
俺にはそれで構わなかった。
本当に久しぶりに、縁を感じた。
縁の真意どころか『声』の意味も、正体にも見当はつかない。
だが、その声の主が誰であれ、俺の言葉は決まっていた。
「光、だ！」
声なき声で俺が叫んだ瞬間、その意志に呼ばれたように目の前に、光の筋が生まれる。
だが、弱い。
出て来たのは、周りの闇にあっという間に飲み込まれてしまいそうなほど弱く、頼りない光。
（違う。そうじゃないだろ）
そんなものじゃないんだ。
俺が望んでたのは。
（そうだ。俺が、俺が望むのは……）
縁のいる所まで、俺を導いてくれる光。

どんな闇にも負けない、悪夢の世界を貫く光明。
全ての暗闇を切り裂いて、真実を照らし出すための剣。

（だから……）

もっと強く、と念じる。
小さくても構わない。ただ、縁のいる場所まで届くほど、鋭く、強く！

（まだ、まだ足りない。もっと、もっとだ！！）

イメージを研ぎ澄ます。
淡い光の束をより合わせて、鋭い閃光を生み出すイメージ。

俺の意志に合わせて、光が収斂する。
密度を増した光が、その光度を上げていく。

（……やっとつかんだ、あいつの手掛かりなんだ）

一年前、唐突に俺の前から姿を消した幼なじみ。
あの言葉が縁の言った台詞と同じ物なら、この道はおそらく縁がかつてたどった道で、だったらその先には縁が待っていると、俺は信じる。
だから、

（光を！　俺に、縁を見つけ出すための、光を！！）

脳がねじ切れるほどに強く念じる。

迷いなく、ただ愚直に、光だけを望み続ける。
俺が答えて、縁が信じたその光を、この世界に具現化させる。

そして、とうとう、

（出来、た…？）

俺の前に、それは姿を現した。

ちっぽけで細い、吹けば飛ぶほどの矮小な光。
だがその本質は違う。

――闇に屈さず、決して折れない確固たる意志の輝きが、その光には宿っていた。

（これが、俺の……）

俺はその光に魅入られたように手を伸ばす。
だが、俺の手が光に届く前に、闇の中に再び『声』が響く。

「おめでとうございます。
貴方はユニークスキル『真実の剣』を発現しました。
ユニークスキルは貴方を映す鏡であり、生涯を共にする相棒であり、頼れる武器でもあります。
悪夢の世界ナイトメアを旅する上で、是非とも役立てて下さい」

（ユニーク、スキル…？）

「また、ユニークスキルの発現に成功したため、貴方は『トラベラー』のクラスを獲得、ナイトメアの『探訪者』として認められました。
では、これより新たなる探訪者、普賢光一（ふげんこういち）をナイトメアの世界へと転送します」

（待って、くれよ！　いきなり何を言ってるのか……）

この『声』には聞きたいことがたくさんある。
けれど、どれだけ制止の言葉を紡ごうとしても、体のない俺は無力で、結局、何も分からないまま、

「――では、良い悪夢（グッドナイト）を！」

俺の意識は闇から引きずり出され、別のどこかへと連れて行かれる。

その、最後の瞬間、

『おかえり、光一』

懐かしい声を聞いたような気がして、俺は――

「…え？」

――俺は、森の中に立っていた。

3．氷結世界

――たぶん『あの日』よりも二ヶ月くらい前。

『わたし、寝るのが怖い。最近、夢の中に他人がいる気がするの』

そう口にした縁の顔色は、月明かりの下でもはっきりと分かるほど青白かった。

『夢の中に他人が出て来るなんて普通だろ？　俺の夢にもよく縁が出て来るぞ』

だから俺は、わざと冗談めかしてそう告げる。

しかし、もちろんそんなことで縁の気分が晴れることはなかった。

『わたしの夢にだって、いつも光一が出て来るけど、そういうのじゃなくて……』

俺としては、縁の夢に『いつも』俺が出て来る話は興味深かったが、問題は意外に根深いらしい。

『夢だからはっきりとは覚えてないんだけど、わたしの夢の登場人物じゃない、本当の他人がそこにいるの。

ううん、というより、他人と、たくさんの人と同じ夢を見ている感じ』

さらに沈鬱な表情で縁はそうこぼした。

ストレス、とか、強迫観念、という言葉が真っ先に浮かんだが、俺が口にしたのは別のことだった。

『なら、今晩は俺の部屋で寝るか？』

『…え？』

縁が、珍しく驚いたような顔でこっちを見ていた。
そりゃあ当然だろう。
口にした俺の方まで「…え？」とか言いそうになったくらいだ。

『あ、いや、深い意味とかなくてな？
ただ、そんなに不安なんだったら誰かが傍にいた方が何かと都合が……』

本当に俺は何を言ってしまったんだろうか。
俺に限って無意識の内に何か言うなんて、考えもしなかった。

焦って弁解していると、縁はクスッと笑った。
『ありがと。何だか勇気出た』
『あ、ああ。そうか……』
そのいつも通りの反応が、ありがたいような少し寂しいような。

うん、と可愛らしくうなずいて、迷いのなくなった目でこっちを見る。
『もうちょっと、自分でがんばってみるよ』
『そ、その方がいいかもな』
なぜか口にしたこっちの方が動揺を隠し切れず、言葉が上滑りする。

それを、縁は特に気にした風もなく、
『それじゃ、わたしはもう寝るね』
『あ、ああ……』
今日の会話は終了になる。

俺は動揺を隠そうとすぐ部屋に戻ろうとして、

『あ、待って』
ちょっと焦ったような縁に引き留められる。
振り返った先にいた縁は、最初とはまた違う感じでうつむいて、
『また、今度。ほんとに光一の部屋で寝させてもらうから』
その言葉に世界中の時間が一瞬だけ止まって、俺は口を間抜けにも半開きにして、驚きの声を――

「…え？」

俺は間抜けにも口を半開きにして、驚きの声を上げた。

一瞬前まで何もない暗闇にいたはずの俺は、なぜか一面の木々の群れの中にいた。

いや、それよりも……。

「声が、出せる」

その事実に、心の底から安堵する。

それから、ちゃんと自分の体があるか確かめようと、目線を下に下げて、

「何だ、この服……」

自分が着ている、奇妙な服に気付いた。

いや、奇妙と言うほどにおかしくはない。

ＴＨＥ・ぬののふく、という風情の、ＲＰＧの村人とかが着てそうな簡素な服だ。

しかし問題なのは、俺のクローゼットには絶対にこんな服は入っていなかったという事実。

そして、それ以上に奇妙なのが、

「これ、何だ？」

俺の左の腰にぶら下がっている物。

革で出来てるっぽいケースの中に、何か細長い物が収まってるっぽい。

「ええと……」

まさかな、とは思いつつ、ケースから飛び出ている握りっぽい所を掴んで、引き抜いてみる。

――ギラリと光る、白い刀身が姿を現した。

「マジ、かぁ……」

思わず嘆息する。

まあ実は、見た目から想像がついてはいた。

革のケースが鞘で、中には剣が入っているだろうということは。

「しかし、これ、剣って言うには……」

短い。

短すぎる。

けれどもナイフだの短剣だのと呼ぶには長い。

「ショートソード、って奴かな？」

俺の中の乏しいゲーム知識がそう言っていた。

間違っているかもしれないが、だとしても問題ないだろう。

それよりもこんな物騒な物を抜き身で持っていたくはない。

俺は用心深く、『ショートソード（仮）』を鞘に戻した。

「で、結局、どういうことだ？」

部屋で寝ていたら、突然真っ暗な世界にいて体が全く動かせなかった。

そこで色々やったら、今度は森の中に飛ばされて、おかしな服と剣を持っている。

「さっぱり分からん」

そもそもここはどこなのか。

『声』は『ナイトメアの世界』に転送しますとか言っていたが、『ナイトメアの世界』という時点で訳が分からない。

ナイトメアと言うくらいなのだから悪夢という意味なんだろうが、だからどうしたというレベルの話だ。

夢という単語で心当たりと言えば、消える前に縁が言っていた『夢の世界でゲームをしていた』という話が思い浮かぶくらいだが、これは夢だとかゲームだとか言うにはリアルすぎた。

そもそも縁が言っていた『ゲーム』の詳しいジャンルは専門的すぎて分からなかったが（確か『ＶＲＭＭＯ』とか『デスゲーム』みたいだとか言っていた）、ＲＰＧっぽいとも言っていたので、たぶんボードゲームやカードゲームの類ではなくテレビゲームだろう。

だったら最低でもディスプレイとコントローラーが必要なはずだが、こんな森の中にそんな物が置いてあるとは思えない。

縁につながるヒントを期待していたので残念だが、少なくともこの異常事態とはあまり関係がなさそうだった。

「第一こんな森、近所に……って、うわ！」

改めて森を眺めようと振り返ってみて、とんでもない物を見てしまった。
服装の確認に夢中になって気付かなかったようだが、森の後ろ半分は大変なことになっていた。
「こりゃ、確かに……。悪夢の世界、かもな」
思わずそう呟かずにはいられないほど、現実離れした光景が目の前に広がっていた。
――氷の森。
そう評するのが適当なほどに、凍りついた森がそこにはあった。
俺の周りはまだ霜が降りている程度だが、森の奥に目を凝らすと、木がまるまる一本氷漬けになっていたりと、なかなかにファンタジーかつファンタスティックな景色が展開されているようだ。
「さて、どうしようかね……」
状況は混迷している。
というより、俺の現状認識が混迷している。
このままここにいても事態が好転するとは思えない以上、ここか

ら移動するというのが一番よさそうな選択肢なのだが……。

「猛獣とか、いないよな？」

得体の知れない場所には、得体の知れない生き物がいてもおかしくはない。

その時に、武器がこのショートソード一本というのは心もとない。

他になにか、武器になりそうな物はないだろうか。

「あれ？」

自分の持ち物を改めて調べ始めて、左手首にやはり見覚えのない腕時計がはめられているのに気付いた。

ちょっと大きめなサイズの、アナログ時計。

時刻を確認すると、１２時９分を指していた。

「俺、結局あのまま四時間近くも寝ちゃってたのか…」

なんて奇妙な感慨が込み上げてきたりもするが、そんなことを考えるのもこのおかしな状況から抜け出した後にする方が賢明だろう。

これ以上特に役立ちそうな物を持ってはいないようだ。

俺は覚悟を決め、安全そうな場所か、事情を知っていそうな人を求めて、ここから移動することにした。

しかしそうなると考えなくてはいけないのが、

「どっちに進むべきか」

という問題だ。

前方は、穏やかそうな春の日差しが差し込む森。
後方は、穏やかそうな春の日差しが差し込んでるのに凍りついた森。

まあ安全性を考えるなら、断然前方の普通の森に進むべきだと思うのだが……。

「よし、決めた」

俺は少しだけ考えた後、後方、凍りついた森に向かって歩を進めた。

明らかに不自然なことが起こっている氷の森なら、俺の身に起こったこの異常な事態の答えも分かるかもしれない。
などという後付けの理由をこねくり回してもいいが、俺がこっちを選んだ答えは簡単。

なんてことはない。
単純に未知への恐怖より好奇心が勝ったのだ。

好奇心に殺された猫っていうのは俺みたいな奴だったのかなと思いながら、俺はぽかぽかとした暖かそうな木々に別れを告げ、結晶化した白いオブジェの方へと歩いていく。

「――ぐべっ！」

氷の森に足を進めて五分ほど、俺は早くもこっちのルートを選んだことを後悔していた。
最初の内はよかった。
地面の草には霜が降りていたし、最初にいた場所より気温は低かったが、普通に歩くことが出来た。

だが、奥に進むにつれて森の凍り方はひどくなり、今ではデコボコしたスケートリンクを歩いているような具合で、

「あぶっ！」

俺はたびたび転んだ。
幻想的なこの風景の中で、かっこつかないことこの上ない。

だが不思議と、ほとんど痛みはない。
顔面が地面にぶつかってもスポンジが間にあるような感触がして、ほとんど衝撃を感じないのだ。

「絶対、おかしいよなぁ……」

もしかして痛覚が麻痺しているのかとほおをつねってみたのだが、それは普通に痛かった。
一体何が起こっているのやら。
謎が一つ増える。

「というか、この森もやっぱおかしい」

この辺りの木は幹どころか枝葉の先まで完全に氷に覆われているが、こんな広葉樹だらけの見るからに暖かな気候の森が凍りつくはずないし、そこに目をつぶったとしてもここの道は整然としすぎて

いた。
道には木の枝一つ落ちていないのに、そこから一歩でも外れようとすると密集した木々が邪魔をして進めなくなる。
まるでゲームに出て来る森のフィールドみたいで、何だか不自然に感じた。

「大体、考えてみれば今が夜の12時なら、こんなに明るいはず、ないし……」

そう考えると、こんなに明るい森の中が、やはりどうにも不気味に映る。
変な生き物に襲われないだろうか、という恐怖がよみがえってきて、俺はちらりと腰のショートソードに目をやった。

そもそも、俺は荒事には向いていない。
喧嘩をしたことなんて数えるほどしかないし、とっさの判断が必要な状況に弱い。
考える前に行動する縁と違って行動する前に考える俺は、切羽詰まった状況になるほど色々と考えてしまって、逆に動けなくなってしまうのだ。

『ピンチになると、脳からアドレナリンとかがどばどば出てさ。何か動かずにはいられないんだよね！』
などと縁は語っていたが、俺は完全に逆だった。
ピンチになるほど頭だけは冷えて、それこそ無意識に善後策を探す。
でも結局選択肢が多すぎて、何か行動を起こす前に時間切れになる。
そんな感じだ。

正直暴走トラックとかが突っ込んできたら、一歩も動けずに轢かれる自信がある。
一応縁に言われて対策みたいな物を考えたこともあるが、それだってうまく行くとは……。
なんて、心の中で愚痴をこぼしながら進んでいた時だった。

「……お？」

奥に、少しだけ開けた場所を見つけた。
氷の森に入り込んでから、初めての道の変化だ。
道が曲がりくねっているため、ここからでは全体像は見えないが、もしかするとそこに何かあるかもしれない。
とりあえずそこまでは頑張ろうと足を進める。

逸る気持ちのままに、また何度か派手に転びながら俺はようやくその場所までたどり着いて、

「――――！？」

俺は瞬間、息を飲んだ。
そこにはこの世の物とは思えない、幻想的な生き物がいた。

――氷の世界に佇むそれは、氷よりも澄み切った肌と、月光を湛えたかのような銀髪を持つ、一人の少女。

彼女はこちらに背を向けているため、その表情をうかがい知ることは出来ない。
だが彼女はその後ろ姿だけで、俺を圧倒する。
その姿はまるで、触れた瞬間砕け散る、氷細工の芸術品。
線の細い妖精じみた体躯に、危うい程に白い肌。
月の光のように妖しく波打つ銀髪と、そこから控えめにのぞく、人の物ではありえない、大きく尖った耳。

「エル、フ…？」

俺の口から、意図せず言葉が漏れる。

「――！？」

だが不用意に漏らされたその言葉は、彼女に俺の存在を気付かせた。
彼女は弾かれたように振り返る。
そこで初めて、後ろからでは見えなかった、彼女の顔が俺の前に晒されて……。

「な、に…？」

――そして俺は、再び驚きに息を飲むことになる。

「よ、四方坂（よもさか）、ナキ…？」

振り返ったエルフの少女は、現実での俺のクラスメイトと全く同じ顔をしていた。

4．テンミニッツアドベンチャー

――『あの日』よりも前、いつとも知れないほどありふれた日の記憶。

『お前はすごいよな。ああいうとっさの時、何も考えずに動けるんだから』

『ん、光一は頭でっかちだもんね。いちいち考えてからじゃないと動けないんだっけ』

『こればっかりは性分というか、条件反射みたいな物だからなぁ』

『じゃあさ。もういっそ、こういう時はこうするって、全部あらかじめ考えておけばいいんじゃない？』

「よ、四方坂（よもさか）、ナキ…？」

呆然とこぼした、俺のそんな問いかけに対する返答は、

「――ッ！」

「あ？　え、ちょ…っ！」

わき目も振らない『逃亡』だった。

俺の言葉を聞くなり、彼女は即座に俺に背を向け、躊躇いのない動作で地面を蹴り、脱兎のごとく逃げ始めた。

「ちょ、ちょっと待った！」

彼女が俺のクラスメイトの四方坂であれ、そうでないにしろ、とにかく彼女は大事な情報源だ。逃がす訳にはいかない。

俺は慌てて追いかけたのだが、

「だから、少し待っヘブ！」

地面が凍っていたのを忘れていた。

俺はまたも無様に転んで地面に頭突きを食らわせていた。

やはりあまり痛くはないが、その間に四方坂には距離を離される。

「くっそ！！」

起き上がって必死に足を踏ん張るが、冷たい地面はそれに応えてくれない。
四方坂はその間にも曲がりくねった道を器用に進み、森の木々に隠れて姿が見えなくなってしまった。
それでも死にもの狂いで進んでいく内に、

『スキル発現　魔力機動』

頭の中に変な文字列が浮かび上がり、同時に、

「お、おおっ？」

氷の上での移動が、スムーズになった。
先程までと違い、ちゃんと体の動きをイメージすると氷の上でも滑らずに足がぴたっと止まる。
蹴り足の力が不十分かな、と思うような時も、十分な加速が生まれる。

……なんとなく、地面に足がついていない時も加速していたり、作用反作用的な物を考えるとちょっと不自然なくらい移動している気もしたが、とにかく速度は上がった。

今までとは比べ物にならない速さで森を進む。
それはもう、飛ぶように走る。
時々角を曲がり切れずに木にぶつかりそうになりながらも、俺は何とか速度をキープしつつ道を曲がって、

「いた！」

ようやく四方坂の姿を見つけた。
彼女はやはり木々の少し開けた場所に、女の子座りで呆然とへたり込んでいた。

「何だ、様子が……」

探していた相手を見つけた安堵よりも、違和感の方が勝る。
氷の地面に座り込む彼女の表情は、明らかに尋常ではなかった。
だがその疑問の答えは、すぐに見つかった。

「な…！？」

四方坂が呆然と見上げるその視線の先には、今にも四方坂に飛び掛からんとする、怪物の姿があったのだ。

「冗談、だろ？　あんな、生き物……」

だが、そこには、確かに怪物としか言えない生物が存在していた。
目測だが2メートル近い長身に、びっしりと黒い鱗を生やした、異形の化け物。
魚人、なんて言葉が、脳裏をちらつく。

そんな怪物が、手にした曲刀を振りかざし、今にも人を襲おうとしている。
あそこに行けば、もしかすると俺も殺されるかもしれない。
そう認識した時、俺の足は恐怖にすくんだ。

順調に進んでいた動きは滞って、全身を冷えた血が回り始める。
頭の芯が冷えて、脳の回転ばかりが速まるイメージ。

これからどうすればいいか考え始めた脳に合わせて、行動までも戸惑って進むのを止めて……。

――しかし、そんな硬直は一瞬だった。

さて、問い。

『目の前で女の子が化け物に襲われそうになっています。あなたはどうしますか？』

こんな質問にどう答えるか、真面目に考えたことはあるだろうか。

俺は、ある。

たぶん何十年生きていようが一度もあるはずがないシチュエーションだと知りつつも、細かい設定まで考えて１５０パターンについてシミュレーションしてみた俺は間違いなく馬鹿だが、今回ばかりはその馬鹿さ加減が役に立つ。

なぜなら、１５０パターン全ての答えは同じだった。

つまり、

「全力で、助ける！！」

俺は固まった足を叱咤して、もう一度強く地面を蹴って加速、一瞬だけ躊躇った分の勢いを取り戻すように、さらに走る速度を上げる。

行動する前に考える俺は、とっさの判断が必要な時でも、いや、そういう時こそ余計に考えることを優先してしまう。

だがそれはつまり、事前に方針さえ決めておけば、ここぞという時にいつだって自分の思う通りに行動出来るということでもある。

「う、おぉおおおお！！」

大声を上げて、怪物と四方坂の所まで突っ込んでいく。

考えなしにただ叫んでいる訳じゃない。

彼我の距離は１０メートル。

この距離を縮めるまでに、怪物の注意を四方坂から逸らす必要があった。

（まだ、速度が上がる…！）

怪物の許に一直線で向かいながら、俺は自分の走る速度に驚いていた。

自転車に乗っている時のような、いや、それ以上の風を体でかき分けながら、飛ぶように走る。

（これ、なら…！）

７メートルの距離を、瞬く間に０にする。

そして、最後の跳躍。

３メートル以上も離れた場所にいる鱗の怪物に向かって、俺は飛

ぶ。

思い切り地面を蹴りつけ、さらに空中で加速する。

そして、その最後の加速をした瞬間、俺の体にあって俺の後押しをしてくれていた何かが、全て使い果たされたことを知る。

たぶんもう、さっきみたいな速さで移動は出来ない。

一瞬不安がよぎる。

だが、その速度だけは、今もこの体にある。

近くで見るほどに迫力を増す怪物の体がぐんぐんと近付いてくる。

遠くに見えたはずのその化け物は、今はもう目前に迫っていた。

（このまま、ぶち当たる！！）

速さとは、力だ。

それは物理学も証明している。

運動エネルギーは速度の二乗×質量で決まる。

速ければ強い。止まってれば弱い。単純明快！！

「こ、の――」

そこで、鱗の化け物がようやくこちらに気付く。

真っ黒な鱗で覆われたその顔面目掛け、俺はショートソードを振りかぶって、

「喰らえ、鱗野郎！！」

思い切り、叩き付けた。

我ながら剣を使うのが初めてだとは思えないほどの、会心の一撃だった。

しかし、

「ぐ、ぅ！」

返って来たのは、攻撃したこちらが思わず呻くほどの、どこまでも硬質な手応え。

反動で手首が悲鳴を上げ、剣を取り落としそうになる。

それでも、

「ま、だ…っ！」

この一撃が決まらなければ終わる。

こんな怪物と、まともにやり合えるはずがない。

それが分かっているから、俺は……。

『スキル発現　オーバードライブ』

頭の中に、おかしなメッセージが届く。

だが気にしない。気にならない。気にしている余裕などない。

「これ、でぇえええ！！」

叫ぶ。振り抜く。押し込んでいく。

既に俺の最大の優位だった、速度と勢いはほとんど殺されている。

それでも体に湧き上がった新たな力に全てを賭けて、希望にすが

って俺は剣を振るう。

「ぐっ！」

なのに堅い、堅すぎる手応え。

軋む刃と軋む腕。

悲鳴を上げる体に、しかし壊れても構わないとばかりに力を込めた。

そして、ある瞬間、急に手元が軽くなる。

（通っ、た…？）

そんな錯覚を抱いた俺の視界に、スローモーションのように映る、キラキラときらめく光。

――手にしていたショートソードが、砕け散っていた。

（そん、な……）

顔から血の気が引く。

鱗の怪物と目が合う。

奴はにんまりと笑った、気がした。

「う、あぁあああああああああああ！！」

それでも、それでも俺は剣を振り抜いた。

もう全てが終わってしまったと分かっていても、恐怖が、焦りが、そして何より事ここに至っても諦めない俺の脳が、体を突き動かす。

残った刀身を、怪物の鱗に押し付けるように俺は右手に力を込めて、

「あ、れ？」

スルッとすべるように鱗の上を抜けていく刀身。

急速に抜けていく力。

急速に遠のいていく意識。

（なに、が……）

起きたのか分からない。

ただ不意に訪れた圧倒的な脱力感に、抗うことも出来ないまま、俺は地面に吸い込まれるように倒れていく。

「ＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！」

薄れゆく意識の中、鱗の怪物が断末魔の声を上げ、その体が小さな光の粒子となって天に昇って行くのが見えた。

「――お兄ちゃん！　しっかりして！　お兄ちゃん！」

「ん、ん…？」

俺はまた、妹の声で目が覚めた。

見ると、結芽が俺の体にすがりつくようにして、必死に声をかけている。

「あれ、結芽？　何でここに……」

「お兄ちゃん！？　よかった！」

俺が目を覚ますと、妹はぎゅっと俺にしがみついてきた。

「あ、れ……？」

突然の妹の来襲に目を白黒させながら辺りを見回すが、当然ながらそこには凍りついた木も、鱗の怪物もいない。

いつも通りの自分の部屋だった。

「一体、何があったんだ？」

俺が尋ねると、結芽はハッとして俺から離れ、後ろめたそうに答えた。

「あ、あの、勝手に部屋に入ってごめんなさい。
え、ええと……お兄ちゃんの部屋から苦しそうな声が聞こえて、部屋の中を見たらお兄ちゃんがうなされてるから起こそうとして、でも、全然起きなくて……」
「ああ、そうか……」
どうやらやっぱり俺は、夢を見ていたらしい。

冷静になってみると、急に体がなくなってしまったり、いきなり変な場所にいて知り合いに会ったり、怪物と戦ったり、夢だとでも考えなければ辻褄が合わない。
そして逆に、さっきのを夢だと考えると、あの理屈に合わない支離滅裂な感じは確かに夢の特徴だなと納得出来る。
第一、女の子を助けるために剣一本で怪物に向かって行ったり、エルフ耳になったクラスメイトを見て『氷細工の芸術品』とか論評してみたり、実際にいたらかなり痛い奴である。
夢の中でもなければ、俺がそんな行動を取るはずがなかった。

微妙な顔をしている俺を見てどう思ったのか、
「ごめん、ごめんね、お兄ちゃん。いやな夢、見たんだよね」
涙ながらに謝罪してくる妹に、俺は、
「……いや」
首を横に振ってみせた。
別に結芽のせいで悪夢を見た訳ではないし、そもそも……。

「良い夢……だったと思う」
「え？」
俺がひどくうなされている所を見ているからだろう。
そう口にすると、妹はひどく驚いた。

だがそれは、俺の本心だった。

はっきりとは覚えていないが、最後の瞬間、四方坂を襲っていた怪物が光になって消えていくのを見た気がする。
だったら俺は、ちゃんと四方坂を助けられたってことだ。
ならそれは、良い夢だったと言ってもいいんじゃないだろうか。

「いい夢、だったの？　……ほんとうに？」
いかにも恐る恐る、という具合に、結芽が聞いてくる。
「ああ。本当に、そう思うよ」
その言葉に、俺がしっかりと答えてやると、

「そっ、か。いい夢、だったんだ……」
なぜかとても嬉しそうに、妹はうなずいた。

「えへ、えへへへ……」
それから急に元気になった結芽は、いきなりそんな風に笑い出した。
正直、ちょっと怖い。

さらにそこから、ドン引きしている俺の右手を両手でぎゅっと握り締めると、
「ね、ねえお兄ちゃん。さっきお姉ちゃんが帰ってきて、わたし、ご飯温めたんだけど……」
「ん？」
「お兄ちゃんも、夕飯まだだったよね？　一緒に、食べないかな？」
上目遣いに、そんなことをねだってくる。

さっき見たおかしな夢のせいだろうか。
結芽に対するわだかまりが、胸の中から消えていた。

むしろ兄妹なんだから仲が良くて当然、という開き直りの気持ちがあふれてきた。

「ああ。じゃあ、頼むよ」

俺が答えると、

「ほんとっ!?　じゃ、じゃあ、お兄ちゃんの分も温めるから、すぐ来てね！

ぜったい、逃げちゃやだよ?!」

妹は即座に跳び上がり、ドアの向こうに駆け出して行った。

その様子を見て、俺は思わず苦笑してしまう。

「作ってもらってるのは、こっちだって言うのに……」

それでももちろん、悪い気がするはずはない。

（でもそういえば、三人そろって食事をするの、最近はなかったかな？）

なんてことを思いながら、俺はベッドから起き上がった。

流石にあんなに喜んでいる結芽を待たすのは悪いとすぐにドアに向かって歩き出し、その途中、何の気なしに枕元に目を向けた。

「……あれ？」

俺の目に留まったのは、枕元に置かれていた、何の変哲もない目覚まし時計。

ただ、それを見て俺は少しばかり眉をひそめる。

――その時計は、しっかりと現在の時刻、『１２時４分』を示し

ていた。

5．現実へ

――『あの日』からおそらく、一ヶ月くらい前の記憶。

一時期は夢のことで不安定だった縁だったが、どうやら最近は逆に夢でゲームをするのが面白いらしく、楽しそうに話すことが多くなっていた。

今日も縁は窓から身を乗り出さんばかりの勢いで、俺に昨夜の夢での話をしていた。

『昨夜はね、すごかったんだよ！
なんと十二人も人が集まって、一緒に巨大なモンスターを倒してね……』

『それは……確かにすごそうだな』

大人数でモンスターに挑んだのも凄いのだろうが、俺はそれより一ダースもの大人数が、横一列に並んで延々とテレビ画面に向かってゲームをする光景を思い浮かべた。

ある意味壮観とは言えるかもしれないが、シュール過ぎる……。

おかしな映像を頭を振って追い出して、俺は縁に尋ねた。

『あ、そういえば。もし夢の中で本当に他人とゲームをやってるなら、現実の世界にもその人たちがいるってことだよな？』

『そうだけど？』

あっさり答える縁。

『だったら、現実で連絡取り合ったりってことはないのか？
ほら、連絡先交換するのが怖いならさ、例えばネットの掲示板とか使って……』
ああ、という風に縁がうなずいて、ちょっとだけバツの悪そうな顔をした。

『あー、うん。他の人に話を聞くまでは、そういうことしようかなって思ったこともあったんだけど……』
『何か問題があるのか？』
俺が尋ねると、何とも微妙な顔で縁は答えた。
『わたしはこうやって光一に話してるし、全然問題ないんだけど、基本的には――』

一夜明けて。

朝は三人の時間が微妙に合わないこともあり、朝食を取る習慣はあまりないのだが、今朝は俺が起きると既に結芽がばっちりと朝ご飯を用意していた。

三人そろっての食事を取り終わり、三人の中で一番出発の早い妹を台所から追い出して、ざっと後片付けをする。

手早く洗い物を片付けた俺がリビングに戻ってみると、諒子さんが一人、ソファでぐてっと寝そべっていた。

――未森諒子（みもりりょうこ）。

この家の家主で俺と結芽の保護者。

年齢不詳。ショートカットで黒髪。凛々しい顔立ち。……胸が大きい。

大きな病気のせいで高校に通えなかったが、奇跡的に回復。

大検を受けて今は大学に通っているが、人付き合いは苦手。

ただし勉強はものすごく出来るらしい。

俺と結芽以外には家族や親戚と呼べる者はおらず、天涯孤独。

そこそこに膨大だったという両親の遺産を受け継いで、そのお金で俺たちを養っている。

というのが諒子さんの自己申告によるプロフィールだが、確かめたことはない。

というか、物心ついた頃から一緒に住んでいるというのに、年齢すら分からないというのはどうなのだろうか。
今年の諒子さんの誕生日も、結芽と二人で準備してちゃんと誕生会までやったのに、諒子さんは頑として自分の年を教えてはくれなかった。
家でお酒を飲んだりしているし、二十歳は越えているとは思うのだが。

その二十歳越えの諒子さんがごろんと動く度、だるっだるのTシャツの胸元が揺れる。
というか絶対ノーブラだろこの人、とか思いながら、俺は諒子さんに声をかけた。
「諒子さん、俺もう行っちゃいますから、そんなとこで寝られても起こせませんよ？」
その言葉に、諒子さんは「んー？」と明らかに寝ぼけた感じの声を出してから、ソファから一歩も動かずに答えた。

「あぁ、大丈夫。午後からはバイトだし、今日は大学をサボってもう少し寝るよ」
「いやそれ、全然大丈夫じゃないですから！！」
基本的には諒子さんは比較的勤勉な大学生だが、家族絡みのイベントがあると必ずそちらを優先した挙句、体力を使いすぎて次の日大学を休みたがる。

俺の剣幕に、
「ふふ、冗談だよ」
と諒子さんは笑ったが、正直俺の見立てでは８：２くらいという所だ。
もちろん８割の方が大学をサボってバイトに行く確率。そして２割が大学をサボってバイトもサボる確率だ。

……既に大学に行かないことは確定していた。

「本当に、寝ないでくださいね」

無駄と知りつつも一応そう声をかけて、その場を離れる。

「行ってらっしゃい光一君。結芽を頼んだよ」

結局ソファから一度も離れないままの諒子さんの声に見送られ、俺は学校へと向かうことにした。

何で諒子さんに結芽のことを頼むなんて言われたのか不思議だったのだが、学校に行く支度を整えて玄関までやってきた途端、その謎は即座に氷解した。

「き、奇遇だね、お兄ちゃん。わたしもちょうど学校に行くとこだったんだ」

玄関の前には、先に行ったはずの結芽がちゃっかりと待ち構えていた。

「いや、奇遇って、お前……」

いくら何でも苦しすぎる言い訳だった。

「それに、時間大丈夫なのか？」

「……あっ！」

俺の問いに、結芽が泣きそうな顔になる。

結芽の通っている中学は俺の通う高校より若干遠いため、俺と時間を合わせると随分とギリギリになってしまうのだ。

結芽はしきりに前髪を、正確に言えば、前髪に留めてある髪留めをいじりながらオロオロとしている。

そうやって髪留めをいじるのは、本当に困った時の結芽の癖だ。
……ちなみに、その髪留めも昔、俺があげたものだったりするんだが。

だがまあこうなっては仕方がない。
俺はため息をつくと、
「駅まで走るぞ、結芽」
そう声をかけて、先に立って走り出した。

「う、うん！　お兄ちゃん！」
それを聞いて、なぜか嬉しそうに俺の横を走り出す結芽。
実際に俺の左隣を並走する結芽は、全身から嬉しいという感情をダダ漏れにしていた。

それを横目に、もう一度こっそりため息をつく。
今度のため息は、自分自身に対してだ。

もう一度、ちらりと横を見る。
遅刻しそうになって走っているというのに、結芽は幸せそうにしていた。
ちょっとうぬぼれた台詞になるが、こんなに素直に兄を慕う妹を遠ざけようだなんて、俺はどうかしていた。

（たぶん、気を回しすぎなんだよな、俺は……）
考えすぎるのが、俺の悪い所だ。
踏み込んでみて初めて分かることだってあるというのに。

（踏み込む、か）
そういえば、このまま学校に行けば、クラスには俺の夢に出て来た少女、四方坂がいる。

（ちょっとだけ、踏み込んでみようか）
俺はそんな密かな決意を固めながら、妹と二人、駅への道を急いだのだった。

俺の所属する2年A組で一番有名な生徒は、間違いなく四方坂ナキだ。
まずもう格好からして他と違う。
病的な寒がりで、真夏でもニット帽にマフラーにロングコートの完全装備。
担任の説明では『特別な病気みたいなもの』らしいということで教師もスルーしているが、病気『みたいなもの』という説明が既に胡散臭さ爆発である。

おまけにしゃべらない。
教師に当てられても、無言で首を振るだけ。体育の授業は必ず見学。
でもテストの成績は良く、いつも学年で１０位以内。
しゃべらないのは授業だけでなく、休み時間も同様で、友達やクラスメイトと話している所をほとんど見たことがない。
前に隣の席にいた男子が三ヶ月で聞いた彼女の唯一の肉声が、「寒い」の一言だったというのだから、これはまた相当だ。

なのに美人。
マフラーとニット帽を外さないため、露出している顔のパーツは少ないのだが、それだけでも十分に美人だと分かるレベルの美人。

噂ではその美貌に引かれて告白した男子もいるとかいないとか。
それについては、嘘か真か、返事がどうこう言う前に告白自体をスルーしたという逸話まで残っている。

そんな所から、クラス内でのあだ名は『ブリザード』。
あるいはマンガか何かのキャラ名から、『氷結の魔女』なんて呼ばれたりもしているらしい。

で、あるからして、
（そんな人間に話しかけるなんて無理、だよなぁ……）
朝、密かに決意を固めたはずの俺は、放課後間近になっても四方坂に声がかけられないでいた。

最後の授業が終わってから、担任が来るまでの自由時間。
俺は勇気を出して、彼女から2メートルほどの距離にまでは近付いてみたのだ。
だが、声をかけるきっかけが掴めない。
というか、今思ったのだが、

『やー、実は昨日の夢に君が出て来てさぁ……』

思いっきりナンパの台詞だった。
本当にあったかも分からない夢の話を口実に、女の子を口説こうとしている変な奴だった。

（ま、まあ妙にリアルな夢だったけど、別に俺の見た夢が四方坂と関係あるはずないんだし……）
話しかけたりしなくてもいいや、と自己完結しようとした時だっ

た。

（……え？）

今まで彫像のようにじっと正面を見て動かなかった四方坂が、横を、俺の方を向いた。

そして、

「……なに？」

しゃべった！！

いや、人間なんだからしゃべるのは当たり前だが、四方坂の肉声を聞いたのは初めてだったので、俺はえらくテンションが上がった。

しかも、その声が確かに俺に向けられたというのがなぜだか誇らしかった。

もうこうなればと覚悟を決め、話しかける。

「き、昨日、変な夢を見たんだけど、その夢に四方坂が出て来たから、ちょっと気になったんだ」

やっぱり完全にナンパの台詞だったが、気にしない。

じっと四方坂だけを見つめる。

「…ゆ、め？」

小さな言葉と共に、彼女の無表情がほんの少しだけ揺れた。

その反応が嬉しくて、俺はさらに身を乗り出すようにして話を続けて、

「そう！　おかしいんだけどな。
その夢では四方坂が銀色の髪にとがった耳をしてて、まるでエル――」
けれど、最後まで言葉を続けることは出来なかった。

――パシン！！

という乾いた音が耳元で破裂して、俺は文字通り言葉を失った。
いつの間にか立ち上がった四方坂に、俺が平手打ちをされたのだと気付いたのは、さっきまで喧騒に包まれていた教室が、水を打ったように静まり返ってからだった。

打たれた頬を押さえることも出来ず、呆然とする俺に、

「あなたがどういうつもりかは、知らない」

静かな迫力を湛え、四方坂が詰め寄ってくる。
その迫力に押されたように、窓ガラスがピシピシと音を立てる。

「でも、それ以上話すつもりなら――」

四方坂と俺以外が凍りついたように静止した教室で、一歩、二歩と後ずさる俺を、彼女は視線だけで追い詰めて、

「――あなたを、殺すから」

決定的な一言を放つ。

そのあまりの迫力に、俺はヒュッと息を飲んだ。

俺は最後の気力で、俺が話しかけたはずのクラスメイトの姿を見る。

だがそこにいたのはもう、何をしても無感動な、謎めいた少女なんかではなかった。

――あらん限りの呪いを込めて敵をにらみつける、傷つけられた猛獣のごとき存在が、俺の前には立っていたのだった。

6．ナイトメアの歩き方

――『あの日』から数えて、二週間ほど前。

『あの、さ』

縁がそう語りかけて来た時、これは『来る』なと俺は覚悟を決めた。

いつだって縁は唐突だが、最近は少し、その唐突さの始まりを察知出来るようになってきた。

……ただしそう分かったからと言って、縁が何を言うかは全く見当もつかないのだが。

で、案の定、

『これ、何か分かる？』

俺は、縁が取り出した物を見て、首を傾げた。

『鍵、だよな？』

面白味のない答えを返すが、縁の表情は変わらない。

もちろん、縁もそんな言葉が聞きたかった訳ではないだろう。

問題はどこの鍵かということだ。

考える。

どこかで見たことがあるようにも見えたが、鍵のデザインなんていちいち覚えていない。

俺が視線で降参の意を伝えると、縁はあっさりと答えを教えてくれた。

『光一の机の、一番下の引き出しの鍵だよ』

『おいっ！？』

これには流石の俺も声を荒げた。

しかし縁は平気な顔で、

『あそこ、全然使ってなかったでしょ。

夕方、光一が外に出かけてる時、部屋に入って取ってきちゃった』

『取ってきちゃったって……』

そんなあっけからんと言われても困る。

まあ確かに縁の部屋の窓の正面に俺の部屋のベランダがあるため、忍び込もうと思えば忍び込み放題だ。

作った時これはマズイと思わなかったのか不思議なくらい防犯意識のない家だが、だからこそそういう悪ふざけはやめて欲しかった。

そう思って非難がましい目で縁を見ると、縁は『あ、ちがうちがう』とでも言語化出来そうな仕種で手を振った。

『そうじゃなくて、ちゃんとチャイム鳴らして玄関から入ったよ？

光一の部屋に行きたいので家に入れて下さい、って言ったら普通に開けてくれた』

『マジかぁ……』

防犯意識が甘いのは、家ではなくて家族の方だった。

いや、まあ、縁だったら問題はないだろうけどさ。

『で、何でそんな物持ってきたんだ？』

脱力しながらも、一応それだけは問いかける。

すると、縁はやっぱりマイペースに答えた。

『ちょっと、光一に持っておいて欲しくて、その引き出しに本を入れてきたの』

『本？』

『正確には、マニュアルかな。《ナイトメアの歩き方》って題名』

『ナイトメア、って何だ？』
やっぱり意味が分からない。

『べつに、まだ分からなくていいよ。
ただ、この鍵はわたしの部屋においておく。
それでもし、わたしがいなくなったら、思い出して欲しいの。
光一に必要になる……かもしれないから』
『何言ってんだよ、お前』
俺はそれを、まるで遺言みたいだと感じて、苛々して……。

「――あなたを、殺すから」

なんて言われた時はどうなるかと思ったが、それからすぐに教室に担任がやってきて、俺と四方坂のやり取りはうやむやの内に中断。

考えようによってはあれ以上状況が悪化する前に無事に騒動をやり過ごせたと言うことも出来るのだが、やはりあんな言葉を本気で他人から投げかけられるのは初めてだったので、俺はショックを隠し切れなかった。

ちなみに、四方坂の一番近くにあった窓ガラスには、原因不明のヒビが入っていたらしい。

何人かが恐る恐る近付いては確かめてすげーとか言っていたが、俺にはとてもそんな気力はなかった。

結局ホームルームが終わっても俺に四方坂と話す度胸はなく、帰宅部の俺は生気の抜けた足取りで家に帰った。

家に帰っても、俺の頭の中を支配していたのは依然として四方坂のあの強い、なんて言葉では言い表せないほどの鋭い眼差しで、その間俺はずっと上の空だった……らしい。

一方、妹の結芽はどうも昨夜から何かのフィーバータイムにでも突入しているらしく、いつも以上に元気に飛び回り、やたらと俺の世話を焼こうとした。

帰るなり荷物を持つと言ってくれたり、肩をもむとか言い出したり、俺の部屋の片づけを申し出て実際にてきぱきとやり始め、夕食は当番でもないのに妹が作ったし、食事中もいちいち俺の皿におかずを取り分けてくれたり、食べさせてあげると言ってきたり、お風

呂に行こうとすると当然のようについてきて背中流すねと言ってくれて……。

俺はその全てに生返事を返していたが、流石に最後ので我に返ってそれだけは断った。

ちょっとだけ妹に対する疑惑が復活した。

普通の兄妹ってこんなものだろうか。良く分からない。

そんなこんなであっという間に１１時４２分。

俺は自分の部屋のベッドの上で、ぼうっと天井を見上げていた。

そうすると考えてしまうのは、やっぱり昼間のこと。

四方坂の瞳を思い出す。

あれほど憎しみに染まった目を俺は今まで見たことがなかったが、それだけではなく、四方坂の様子からは俺に対する怯えのような物も感じられた。

「一体、何がいけなかったんだろうなぁ……」

そう、呟いてみる。

十中八九、あの夢の話がトリガーになったことは間違いない。

だが、その夢の話のどこに地雷が潜んでいたのか、それが皆目見当もつかなかった。

いや、すぐに諦めるのは良くないか。

ちょっと想像してみる。

――例えば、こんなのはどうだろう。

実は彼女、代々伝わる退魔師の家系で、夜な夜な異空間に出かけては妖怪を討伐していた。
そんな世界に偶然紛れ込んだのが俺。
しかし彼女のお役目は普通の人間には秘密にしている。
異空間で人間（俺）に出会った彼女は一般人に見つかってはいけないと逃げ出したが、油断して妖怪（あの鱗人間）にやられそうになってしまった。
しかしそれは一般人と思ってた人間（俺）によって退治され、一般人と思っていた少年（しつこいくらいに俺）は実は同業の退魔師なのだと認識する。
それならバレても問題ないだろうと安心していた所、その少年（もはや補足不要なくらい俺）に学校で異空間の話をされる。
こいつ同業者なら妖怪退治の話はしちゃいけないって分かってるだろと怒り狂って平手打ちを……。

「いや、意味分かんねぇ。退魔師とか妖怪って何だよ……」

その辺りまで考えて、俺はその馬鹿げた妄想を一蹴した。

そうなるとわざわざ教室で俺に声をかけた意味が分からないし。
あっちの世界で見た四方坂の銀色の髪ととがった耳が説明出来ないし。
後は俺が体験したユニークスキルがどうとかという声も関係してこない。

「ほんとに、なんなんだか、なぁ……」

昨夜妹に起こされた時は、おかしな夢を見たとしか思わなかった。
だが、四方坂の反応を見て、ただの夢ではないのではという疑いが生まれてしまった。
なんとなく、もやもやする。

あの夢には、何か俺にとって大事な物が関わっているのではないかという予感めいた感覚が、さらに俺の不安感を煽る。

俺がそんな風に懊悩していた時、

「お兄ちゃん？　ちょっと、入ってもいい？」

ドアが控えめにノックされ、扉越しに妹の声が聞こえた。

……こんな時間に、何の用だろうか。

もし結芽の用事というのが、

「お兄ちゃん。今日、いっしょに寝てもいい？」

とかだったら確実に妹への疑惑レベルをマックスにまで引き上げなければいけないが、なんて馬鹿なことを考えながら俺は、

「いいぞー」

と素直に返事をしていた。

すると、

「お邪魔します」

右手で前髪をいじいじといじくりながら、妹が部屋に入ってきた。

もう中学三年だというのに、水玉模様の水色パジャマが非常に子供っぽい。

ただ、少なくとも枕を抱えていたりはしなかったので、俺はちょっと安心した。

「それで、こんな時間にどうしたんだ？」

前髪を弄るばかりで何も言おうとしない妹に、俺から水を向けてやる。

結芽は何か譲れない物がある時は積極的にガンガン主張するタイプだが、どうでもいい用件の時は逆になかなか言い出さなかったりする。

今はその消極モードのようだ。

「あの、ね。今日、お兄ちゃん、あんまり元気がなかったみたいだけど……」

「え？　あ、ああ」

一瞬否定しようかと思って、すぐにやめた。

流石にあれだけぼうっとしていれば家族は気付くだろう。

「そ、それってさ。お兄ちゃんが最近やってるゲームに関係あるのかな、って」

「ゲーム？」

予想もしなかった妹の言葉に、俺は首を傾げた。

正直、全く心当たりがなかった。

だが結芽は、またひとしきり前髪をいじってから、意を決したように、言う。

「今日、お兄ちゃんの部屋の掃除をしてる時、見つけちゃったんだ」
「な、なに…？！」
そういえば、確かに結芽が俺の部屋を掃除したいと言うのに許可を出したような覚えはある。
だが、見つけちゃったって、何をだ？
まさか、まさかまさかまさか――

「オンラインゲームの説明書」
「よしセーフ！！！」

まさかではなかった！！
助かった！！
俺は、俺は助かったんだ！！

「お兄ちゃん…？」
妹が目を丸くしてこっちを見つめているが、とにかくこの喜びを誰かに伝えたい気分でいっぱいです！
ありがとう日本！
ありがとう地球のみんな！

……じゃなくて、
「オンラインゲーム、って、いわゆるネトゲって奴か？
普通のＲＰＧとかじゃなくて？」

少なくとも俺は、そんな物を部屋に持ち込んだ覚えはない。

俺が疑わしげに聞くと、結芽は、

「たぶん……」

と自信なさそうにうなずいた。

しかし、実は結芽は大のゲーム好き。

うちの中では一番のゲーマーで、それこそネトゲにも手を出していると聞いたことがある。

そんな結芽が、ゲームのジャンルを間違えるとは思えない。

それでも半信半疑で結芽を見ていると、

「あ、じゃあお兄ちゃんも確かめてみて」

と、俺の部屋の隅、本がまとめて平積みにされている場所に行くと、マンガくらいのサイズの、一冊の冊子を持って戻って来た。

「これ、なんだけど……」

「な、これ……」

差し出された本を見て、俺は言葉を失った。

なぜなら、そこに書かれていたタイトルが、

『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』

だったからだ。

「……」

なんだろう、この名状し難い感覚。

とても大切な物を手に入れたような、ひどいパチモンを掴まされたような、何とも言い難い感慨が押し寄せた。

「これ、どこにあったんだ？」

こんな残念なセンスの物を買った覚えはない。

少なくとも、俺の目につく所にはなかったはずだ。

「あ、もしかしてお前、勝手に引き出し開けたりとか……」

俺が疑いの目で見ると、結芽は慌てて首を横に振った。

「わ、わたしだって、掃除でそんなとこまで開けたりしないよ！ベッドの下だって、ちゃんと自重したし……」

それはそれでコメントに困る。

結芽はちょっとだけ考える素振りを見せ、それから前髪をせわしなくいじりながら答えた。

「ごめんなさい、お兄ちゃん。

本は一箇所に退けといたから、どこから取って来たのかは覚えてない。

この部屋のどこかなのは間違いないと思うけど……」

「そっか」

まあ、落ちてた場所が分かったからと言って、何が変わる訳でもない。

それよりも中身を確かめてみようかと俺はその説明書を開いて――

ペイモン（以下ペ）「ハロー、トラベラーズ！　オレ様はペイモン！　お前ら新米トラベラーにナイトメアの世界のいろはを教える救世主悪魔だぜ！」

アスタナ（以下ア）「はろーとらべらーず！　わたしアスタナちゃん！　ペイモンちゃんとなかよしのプリティ悪魔なのー！」

――すぐに閉じた。

「え？　何だこれ？」

二等身くらいのミニキャラがひたすら掛け合いをしているだけの文章が見えた気がしたのだが、気のせいだろうか。

もしかして俺が知らないだけで、最近のゲームのマニュアルとい

うのはこういう物なのだろうか。

　すると俺の反応を見ていた結芽が、言い難そうに口を挟んだ。

「たぶんそれ、正式なマニュアルの付録じゃないかな？　ほら、簡易マニュアル、みたいな」

「……あぁ」

　不本意ながら、納得してしまった。

　というかむしろ、マンガで分かるナイトメア、みたいなノリか。

　あまり読みたくはないが、俺の昨夜の夢にも出て来た『ナイトメア』という単語はやはり気になる。

　俺は覚悟を決めて、『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』を開いた。

ペイモン（以下ペ）「ハロー、トラベラーズ！　オレ様はペイモン！　オマエら新米トラベラーにナイトメアの世界のいろはを教える救世主悪魔だぜ！」

アスタナ（以下ア）「はろーとらべらーず！　わたしアスタナちゃん！　ペイモンちゃんとなかよしのプリティ悪魔なのー！」

ペ「うわ！　自分でプリティとか、言ってて恥ずかしくねえのかよ！」

ア「ひ、ひっどいよー！　ペイモンちゃんなんてあくまのくせにき

ゅうせいちゅとかいってるくせにー！」

ペ「きゅうせいちゅじゃねえよ！　救世主だよ！
……はあ、まあいいや。とにかく、記念すべき初授業で教えるのはこの世界、ナイトメアについてだ」

ア「ナイトメアの世界なのー！」

ペ「まあ行ったことのある奴なら当然気付いていると思うが、オレ様たちのいるこの『ナイトメアは、眠った時にだけ訪れることの出来る夢の世界』だ。
普通の世界と一緒だと考えてもらっちゃ困るぜ？」

ア「困るぜー？」

ペ「ナイトメアは正にファンタジーの世界。現実ではありえないようなモンスターも出て来るし魔法とかも使える、オマケにスキルとかパラメータまである、まるでゲームみたいな所なんだ」

ア「わー、すごーい！」

ペ「ただ、普通のゲームと違うのは、ナイトメアの世界では現実の世界と同じように自分の意思で体を動かせるし、叩かれたら痛いし斬られたら死ぬってことだ。
しかも『現実世界の体が眠っている間は元の世界に戻ることは出来ない』から、ピンチになったら現実世界に帰る、なんて都合のいいことは出来ない。
けどまあ、所詮は夢の世界。『こっちの世界で死んでも現実世界で死ぬ訳じゃない』から、そこは安心してくれ」

ア「まるで『ＶＲＭＭＯとりっぷ』したみたいな世界だけど、『ですげーむ』じゃないってことだねー？」

ペ「オマエ、何でバカなのにそんな専門用語知ってるんだ？　まあ、その通りかな」

ア「やったー！　ペイモンちゃんにほめられたー！」

ペ「いや、あんま褒めてもねえけど……」

ア「てれなくてもいいよ、このつんでれさん！」

ペ「なんか無性にイラッとしたけど話の続きな。
　ナイトメアで死んでも現実世界では死ぬ訳じゃないって言ったけど、もちろんペナルティはあるぜ」

ア「『ですぺな』だね？　『しにもどり』すると経験値が１わりとんだりするんだね？」

ペ「オマエ絶対ゲーオタだろ！　じゃなくて、ナイトメアでの死亡はある意味で現実世界での死と同じなんだ」

ア「ええー？　じゃあナイトメアで死んでも、たましいが『ばるはら』へといざなわれちゃうのー？！」

ペ「いや、悪魔のくせにその死生観はどうなんだ？
　ていうかぜんぜんちげえよ！　『ナイトメアで死んだら、二度とナイトメアの世界にはやって来れない』んだ！」

ア「ナ、ナンダッテー！？」

ペ「つまりナイトメアは、即死＝ゲームオーバーの厳しいゲームだってことなんだ！」

ア「いや、そのりくつはおかしい！」

ペ「何もおかしくねえよ！　いい加減覚えた言葉を適当に使うのやめろよ！」

ア「ひ、ひしょがやったことです……」

ペ「じゃあオマエの監督不行き届きだから、オマエ責任とってクビな！」

ア「う、うぅー。ペ、ペイモンちゃんのひとでなしー！　あくまー！」

ペ「むしろどっちも正解だよ！！」

ア「そ、それよりはなしのつづき！　つづき！」

ペ「あ、しまった！　ちゃんと説明しようと思ったのに、余計な話をしてたせいでもう時間がないじゃねえか！」

ア「ええーやったーざんねんー」

ペ「途中本音がはさまってんぞ！？　はぁ、まだアバターとかユニークスキルとかトラベラーについて説明したかったんだが、それは次回だな」

ア「じかいじかいー！」

ペ「さて、とりあえず、今回の復習だ。『』でくくったところが大事な部分なんだが、オマエは覚えてるか」

ア「もっちろん！」

ペ「じゃあ言ってみろ。間違ってたらギッタンギッタンにしてやるからな！」

ア「よーし、いくよー。
『オレ様はきゅうせいちゅあくまだぜ！』
『まあきづいていると思うが、オレ様をふつーといっしょにしてもらっちゃこまるぜ』
『さて、ふくしゅーだ。ぎったんぎったんにしてや……」

ペ「なんだよその悪意ある抽出！！　勝手にオレ様を厨二病に仕立てるんじゃねえ！　正しくはこれだよ！」

『ナイトメアは、眠った時にだけ訪れることの出来る夢の世界』
『現実世界の体が眠っている間は元の世界に戻ることは出来ない』
『こっちの世界で死んでも現実世界で死ぬ訳じゃない』
『ナイトメアで死んだら、二度とナイトメアの世界にはやって来れない』

ア「みんなー、おぼえたかなー？」

ペ「オマエ、これ終わったらギッタンギッタンだからな？」

ア「あう……。はじめてだから、やさしくしてね／／／」

ペ「頬を染めんな、うっとうしい！！　とにかくこれで初回の授業は終わり！」

ア「それじゃ、じかいまで……」

ペ・ア「グッナイ、トラベラーズ！　良い悪夢を！！」

「無駄に、疲れた……」

軽く長編映画を一本見たレベルの疲労感を抱えながら、俺はとりあえず本を閉じた。

それとどうでもいいが、どっちも子供っぽい顔をしているので、どっちがペイモン君でどっちがアスタナちゃんか、顔だけでは正直分からなかった。

たぶんリボンをつけた方がアスタナちゃんなのだろうが、アクセサリや髪型に頼らず、顔の描き分けはちゃんとして欲しい物だ。

いやほんとどうでもいいが。

（しかし……）

疲れる物を読まされた気はするが、その分の成果は充分にあった、気がした。

掛け合い自体は下らなかったが、もし本当に眠った時にだけ行け

るゲームみたいな世界が実在するなら、俺は昨夜、実際にそこに行ったのかもしれない。

荒唐無稽ではあるのだが、以前にも『夢の中でゲームをする』という話をどこかで聞いたような覚えがあるし、昨夜の夢のリアルさは、そんなことでもないと説明がつかないように感じられたのだ。

しかし、そこでぼうっと考え込んでたのがいけなかった。

「読まないなら、わたしにも読ませて！」

俺が読んでいる間、すっかり焦れてしまっていた妹の手が、俺から『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』をさらっていった。

「あ、待てって結芽！　まだそれ読んでる途中……」

このまま本を奪われてはたまらない。

俺は本を取り返そうと、結芽に向かって手を伸ばし――

むにゅっ！

――代わりに、何だかやわらかい物を掴んでいた。

ていうか、え？　むにゅ？

いつの間にか仰向けになっていた俺が見上げれば、そこには寒々と青い空と凍った森。

そして凍りついたように固まる四方坂ナキと、俺を見下ろす氷点下の瞳。

そしてそして、伸ばされた俺の手は、彼女のささやかなふくらみを……って、

（え？　何このマンガのお約束みたいな展開……）

そんなことを考えた瞬間、四方坂の無表情だった顔が沸騰し、

「――ッ！！」

平手打ちの代わりか、後頭部にすごい衝撃を感じて、俺は、

（あ、なるほど、この現実離れした展開。つまりこれが『ファンタジー』って奴か）

妙に達観して、そんなことを考えていたのだった。

7．現状把握

――『あの日』から、一ヶ月と半分くらい前。

『なんかね、みんなで街造りをしてるみたいな感じかな？』

俺が夢のことを尋ねると、縁はそう答えた。

『街造り？』

あまり縁のない言葉に、俺は思わずオウム返しに聞き返した。

『そう。何のルールも存在しない未開の世界に、法則という建物を建てて、概念という住人を呼び込んで、望む方向に発展させていくの』

縁はそう言って、『面白いよ』と笑ったが、俺にはその感覚は到底理解出来なかった。

『わたしは、のんびりできる場所が欲しいなって思ってるんだけど、今の感じだと違うものになりそう』

『どんなもの？』

『んー。モンスターがいて、魔法があって、戦うと強くなる。そんな現実離れした、うん、まるで夢みたいな感じかな？』

後頭部を強(したた)かに打ちつけたと思ったが、そもそも強い衝撃を受けても見えないスポンジに吸収されるので、大してダメージもなかった。

しかも、今回のは四方坂が何かをしたというより、何かの上に寝そべっていた俺が急に動いたために地面に俺の頭が落ちた、と言った方が正確なようだ。

しかし、何かも何も、氷の森に俺の頭を乗せるような場所などあるはずもなく、だとしたらさっきの感触は……。

「……膝枕？」

思わず、思ったことを口に出していた。

思っていたのか思っていなかったのか良く分からない所だ。

「――！！」

それを聞いた四方坂の目が、また一段ときつくなる。
ちょっとした失言くらいで、いちいちそんな人を殺すような目で見ないで欲しいが。

しかし、すぐに若干目つきをやわらげると、

「…あなたは、あの怪物を倒してすぐ、意識を失って倒れた」

こちらを見下ろしたまま、状況の説明と思しき物を始めてくれた。

「怪物は、あなたに斬られた後、光の粒になって消えた。
残ったのは、あの布と一枚の鱗だけ」

確かに俺の横には、おかしな模様のついた布とあの怪物の物と良く似ている鱗が残っていた。
さて、続きは、と思って四方坂をじっと見たが、それ以上彼女がしゃべる様子はなかった。

仕方なく、こちらから水を向ける。

「それで、四方坂は気を失った俺を介抱してくれたのか？」

俺のその言葉には、四方坂は随分と長い間沈黙していた。
しかし、しばらくの後、観念したように口を開いた。

「……あなたには、ふたつ、借りがある」
「二つ？」

一つはあの鱗の怪物から助けたことだろう。

だが、もう一つは何だ？
俺が、そう考えていると、

「…教室でのことは、私の勘違い。ごめんなさい」

予想もしていなかったことに、そうやって四方坂は、俺に頭を下げた。

（ああ、そうか）

それを聞いて、四方坂がやけに逡巡していた理由に気付いた。
俺は彼女に『四方坂』と呼びかけた。

それに答えるということは、つまり四方坂が、いや、この『四方坂にそっくりな少女』が、自分のことを『四方坂ナキ』だと正式に認めたことになる。
おまけに現実世界での話を持ち出して来たのだから、これは確定だろう。

これでは説明が足りないと思ったのか、四方坂は補足してくれる。

「教室での私は、ここでのことを、ほとんど覚えていなかったから」

（そういえば……）
確か、前に縁も、同じようなことを言っていたような……。

『わたしはこうやって光一に話してるし、全然問題ないんだけど、基本的には夢の世界での出来事って、あんまり覚えてないのが普通みたいなの。
また夢の世界に戻ってくるとちゃんと思い出すみたいなんだけど、

おかしいよね』

懐かしい声が、フラッシュバックする。
だが、今は感慨にふけるより大事なことがある。
俺は四方坂に確認する。

「それで、俺についててくれて……膝枕までしてくれたのか？」

あれ、大事なことって別に膝枕じゃないよな、と思いつつ、つい口にしてしまった。
四方坂にも、まだそこにこだわるか、というような顔をされた。

「…ただ、命の恩人を凍った地面に置けなかっただけ」

いや、結局してくれてんじゃん膝枕！
とは思ったが、そこは流石に俺も自重した。
というより、真実が明らかになった以上、騒ぎ立てる必要はないというか。

「……さっさと、それ、しまったら？」

しかしそんなことをしてあげたはずの相手に対しても、四方坂は態度を軟化させるでもなく、あの魚人もどきみたいな物が落とした布と鱗を指さした。

「あ、ああ」

その迫力に押され、一応そううなずいたものの、どこにしまったらいいのだろうか。
というか、これはしまうべき物なのか？

そんなことを思って俺がまごついていると、

「…インベントリ。使えるの、気付いてない？」

四方坂が近付いて、そんなことを言ってきた。

当然、インベントリなんて物は知らない。

「……見てて」

四方坂は落ちていた布を持ち上げると、左腕につけていた腕時計に一度触れ、布に押し付けた。

「なっ！」

すると、腕時計に布が振れた途端、布が吸い込まれるようにして消えた。

そして、さらに四方坂が時計を操作すると、何もない所から消えたはずの布が現れた。

「…あなたも、同じことができるはず」

茫然として言葉もない俺に、彼女は淡々とそう告げた。

半信半疑で自分の腕時計を見る。

一見すると普通の腕時計だが、画面に触れると、

「おわっ！」

文字盤が映っていた小さい画面が四分割され、

『インベントリ』

『ステータス』
『マップ・イベント』
『ＴＩＰＳ・ヘルプ』

の表示が出て来た。
なるほど、四分割前提だからこの大きさだったのか。道理でごつい時計だと思った、ではなくて、

「なんじゃこりゃ！」

俺は叫んだ。
助けを求めるみたいに四方坂を見る。

「…私も、昨日少しいじっただけ。詳しくは知らない」

それより早くしまえという視線の圧力に負けて、俺は受け取った布を腕時計に押し付ける。
すると、

「おおー！」

布は、さっきの四方坂の時のように腕時計に触れるなり消えた。
同じように、鱗も腕時計に押し付けて消す。

「インベントリ、押して」
「え？　あ、ああ」

言われるがままに腕時計の『インベントリ』の項目に触れる。
今度はウィンという小さな起動音と共に、

「こ、れ……」

空中に、ゲームのメニュー画面みたいなウィンドウが現れた。
そのウィンドウの一番上には『インベントリ』と書かれており、その下の網目状に仕切られたマスの中に、さっき入れた布と鱗のアイコンが収まっていた。

「アイコンにふれるか、腕時計側で操作をして決定すると、入れた物が取り出せる。
決定は腕時計の上、キャンセルは下にあるボタン」

驚く俺をやはり冷静に見つめ、そうアドバイスしてくる。
良く見ると、腕時計の縁に、押し込めそうな出っ張りがあった。

とりあえず入れたアイテムを出す必要性は感じない。
腕時計の下部の出っ張りを押し込むと、空中に投影されていたウィンドウが消え、腕時計の文字盤の部分に四分割された画面が戻って来た。

今度は『ステータス』のボタンに触れてみる。
中空に映し出されるウィンドウ。
そこにはＨＰ、ＭＰを初めとするいくつかの能力値と、俺の名前が書いてあった。

「そう、か。本当に、そうなんだな……」

その映像は、なぜか今まで見たどんな不思議な物よりも、俺にはっきりと思い知らせた。

この世界の詳しい仕組み、とか、どうして俺が、とか、何でこん

な世界が存在するのか、とか、そういう細かいことは一切分からない。

だけど、俺は確信した。

この、テレビ越しになら何度も見たようなステータス画面に、確信させられた。

「ここは……ゲームの世界だ」

それを、はっきりと認識した瞬間、

『ハロー、トラベラー。ナイトメアの世界にようこそ』

耳元で、そんな幻聴が聞こえた気がした。

8．試行錯誤と検証と

――『あの日』より、一ヶ月とちょっと前。

『わたしね。ゲームって、いっちばん最初が、実は一番楽しいんじゃないかって思うんだ』

『まあ、そういう考え方もあるかもな』

ちなみに俺は、中盤くらい、やれることの選択肢と自由度が増えた頃、限られたリソースをどう振り分けるか試行錯誤する時が一番好きだったりする。

『まだゲームのシステムとか、どうやったらうまく敵と戦えるのかも良く分からない時にさ。

仲間ときゃいきゃい言いながら、これはこうだ、あれはああだ、って話し合うのって、すごく楽しいよね？』

縁はそれこそ楽しそうに話題を振ってくるが、

『あー、いや、俺、あんまり他人とゲームしたこととかないからなぁ……』

残念ながら、俺にはやっぱり共感出来なかった。

それどころか、

『なんか、ほんと、楽しそうだよな』

縁が、俺の知らないことではしゃいでいるのを見ることに、ちょっとした胸の痛みを覚えていた。

そんな俺の心の機微に、縁が気付くはずもなく、

『楽しいよ。うん。でも、ただ一つだけ不満があるとすれば……』

『あるとすれば？』

『もし、そこに……ううん、何でもない』
いつもより長く俺を見つめた後、縁はやっぱり楽しそうに笑ったのだった。

口数があまり多くない四方坂から話を引き出すのは大変だったが、いくらか重要そうなことが分かった。

まず四方坂のことだが、俺と大体同じような経緯でこの事態に巻き込まれ、しっかりと事情を把握しているのではないということ。
インベントリを使ってみせたり、この事態に動じていなかったり

と、実は事情に通じているのかと思ったが、それはデータウォッチ（俺や四方坂がしているステータスとか開ける腕時計）についていたヘルプ機能を見ていただけで、どうしてこんなことになったかについてはさっぱりらしい。

ちなみにテレビゲームみたいなことが出来るのになぜ驚いていないのかを尋ねると、

「驚きは、したけど。でも、ここが現実と違うのはだいぶ前にわかってたから」

とのこと。

発言がちょっと電波っぽいと言えなくもないし、もしかしてキャラ的にオカルト方面大丈夫な人なんだろうか。

俺がそう考えて話を振ってみると、四方坂は俺のうかがうような視線を気にした風もなく、

「……空」

ただ、上を指さした。

俺もそれにつられて空を見上げる。

……何の変哲もない、青い空が広がっていた。

「明るいのに、太陽がない」

「え？」

慌てて太陽を探す。

確かに、こんなに明るいのに太陽が見つからない。

「本当に、ない……」

何かに遮られて良く見えない、とかでもない。

本当に空に太陽はなかった。

……変哲もないように見えていたのは、単に俺の目が節穴なだけ

だったらしい。

「それと、あの怪物」

「あ、ああ。そりゃ、あんなのがいたのは驚いたが……」

しかし実は軍の生物兵器だった、とかそういう解釈も不可能ではないんじゃないだろうか。

そう俺は思ったのだが……。

「粒子になって、消えたから」

「な、なるほど……」

四方坂の目の付け所は一味違った。

あの鱗の怪物はインパクトがあったが、それよりもそれが光になって消滅したことの方が、確かに物理的に考えるとありえないことだ。

どちらかというと不思議系かと思っていた四方坂だが、想像以上に理知的だった。

むしろ、俺よりずっと論理的な物の考え方をしている。

その理論派の四方坂からは、もう一つ重要な情報を仕入れることが出来た。

その話を聞く限り、どうもこの世界に俺たちが跳ばされる条件は『眠ること』ではなく、夜中の１２時、つまり『午前０時になること』らしい。

少なくとも四方坂は昨日も今日も起きていて、１２時になった途端にこっちに跳ばされたそうだ。

今日の俺がこっちに来たのも大体その時間だし、昨日は眠ってい

る時にこっちに来たとはいえ、逆に言えば『眠っている間に１２時を迎えた』とも言える。
『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』の記述とは矛盾するのが頭の痛い所だが、今の所、こっちの仮説が有力かと考えている。

ついでに、
「前回現実世界に戻った時、時間が経過していなかったこと。それに、１２時というキリのいい時間に世界の移動が起こることが問題」
と四方坂は語った。

前者については、まあ説明不要だろう。
例えこの世界が妄想の産物とか単なる白昼夢とかだったとしても、妄想していた時間くらいは経過していなければおかしい訳で、だとするとこれは、俺たちが確実に超自然的な事件に巻き込まれているという証拠になる。

後者については、現代人の盲点を突いた感じの指摘だった。
時計に支配された現代人の感覚からはあまり思いつかないが、日本時間で１２時というのはぶっちゃけ日本人以外にとってはなんら特別な時刻ではない。
そうすると１２時にこの世界に跳ばされるというのは人の意思が、ついでに言えばたぶん日本の人の意思が関わってると考えるのが自然なのだそうだ。

うん、四方坂ほんと頭いい！

と、なんで俺がこんなに他人事全開な態度を取っているかと言えば、四方坂の話よりもどうしたって気になることがあるからだ。
いや、四方坂に話を聞いたのは俺なのだから、本当はもっと真面目に聞かないといけないはずなんだが、どうしても集中出来ないのだ。

だって、そうだろう？

そりゃあ確かに俺は、そんなにＲＰＧとかにハマる方ではないし、寝食を忘れてゲームに没頭した経験なんてない。

――けれどそれは、普通のゲームの場合の話。

いくら現実の世界ではないかもしれないとはいえ、自分が剣を振るって巨大なモンスターを倒したり、実際に魔法を使うことが出来るかもしれないとなれば話は別だ。

はっきり言ってしまえば、この不可思議な現象も四方坂も縁のことさえも今は横においといて、とにかく俺はこの『ナイトメア』という名のゲームを遊んでみたくて仕方がなかったのだ。

一応の情報交換が済んだ所で、今度はもう一つの状況確認。
つまり、自分の能力値やアイテム、スキルなんかを確認することにした。

（よし、いよいよだ！）

さっきはステータス画面が開いたこと自体が衝撃で、ステータスの項目もろくに見ていなかった。

それからは四方坂と話をしていた手前、中座して自分のステータスを確認するような暇もなかった。

だが、もう我慢する必要はない。

とうとう解禁である。

俺は興奮に震える指でデータウォッチを操作して、もう一度自分のステータス画面を呼び出した。

【普賢　光一】

トラベラー
ＬＶ：５

ＨＰ：４５
ＭＰ：５
ＤＰ：５

魔力：７
理力：０
強化：１４
耐久：１２
俊敏：１３
器用：１７
理法：３
克己：２１

操作：６
信心：１
ＢＰ：８０

その画面を改めて眺めて、まず俺が思ったことは、

（能力値の意味が分からねぇえええ！！）

だった。

耐久とか俊敏とか器用はいい。
説明なんてなくても、なんとなく意味は分かる。
けど、魔力と理力ってどう違うんだとか、克己とか信心とか一体何に関係するんだとか、理法とかＤＰなんてそもそも言葉の意味が分からないとか不満が色々と噴出してくる。

だけど、そういう不満全てもひっくるめて、

（やばい！　何かワクワクして、テンション上がってきた！！）

まるで、生まれて初めてＲＰＧをプレイした時のような感動が胸の内に広がっていく。
これが直接自分の能力につながると考えただけで、その数字が何だか特別に思えてくる。

この瞬間だけで言えば、俺の中の優先順位はステータス＞縁だったかもしれない。
それぐらい俺は熱中し、この状況にのめり込んでいた。

逸る気持ちを抑え、まず自分の能力の傾向を分析をしてみる。
ＨＰ・ＭＰ・ＤＰについてはひとまずおいておくとして、比較的高い能力値が、強化・耐久・器用・俊敏・克己の五つ。
低めなのが魔力・操作の二つで、いっそもう絶望的なのが理力・理法・信心の三つ、といった所か。

自分の能力をそう分析してみて、

「戦士系、だな」

俺は迷わずそう判断を下した。

名前からして、強化や耐久、器用なんかは物理系の能力っぽい。
一方、数値が低めの魔力・操作、そして明らかに低すぎる理力・理法・信心はたぶん魔法系だろう。
物理系が高くて魔法系が低い、典型的な戦士タイプ。
いや、耐久が低めで器用が高めなので、一撃の威力よりも急所狙いや手数で勝負するテクニックタイプかもしれない。

今のクラスは『トラベラー』のようだが、転職が出来るなら目指すのは剣士か盗賊辺りだろうか。
いや、器用が高いから弓使いなんて選択肢もありかもしれない。
この世界に転職のシステムがあるかも分からないのに、どんどん

妄想ばかりが広がっていく。

あと気になるのは、最後に表示されていたＢＰという項目だったが、調べている内にこの謎も解けた。

ステータス欄の一番下に『ボーナスポイント振り分け』という項目があったのだ。

ＢＰとはおそらく、ボーナスポイントの略だろう。

ボーナスポイントの振り分けがキャンセル可能なのをきちんと確かめてから、試しにやってみる。

ＨＰやＭＰ、ＤＰなんかは選択出来ないようなので、とりあえず一番上の魔力を選択、決定すると、

「おっ！」

魔力が7から8に上がると同時に、ＢＰが８０から７９に減った。

それと同時に、ＨＰまで４５から５０に増えている。

どうも、魔力というのはＨＰに関係する能力らしい。

次にその下の理力を上げてみる。

理力が1から2になると、ＭＰが5から7に増えた。

ＨＰに比べて上がり幅はひかえめだが、理力はＭＰに関係する能力らしい。

それからも色々といじる。

とりあえずＨＰやＭＰまで変化するのは魔力と理力だけ、謎のパラメータであるＤＰを増やせる能力値はなかった。

魔力や理力についても詳しく検証する。
魔力を1上げると5ずつＨＰが上がるようだったが、理力は1上げるごとにＭＰが2上がるのと3上がるのを交互に繰り返していた。
つまり、ＭＰの上がり幅はＨＰの半分、2．5だと考えられる。

四方坂に同じことをやってもらうと、ＨＰが7ずつ、ＭＰが3と4ずつ上がると答えてくれた。
今のレベルが7だそうなので、どうやらＨＰは魔力を1上げるごとにレベル分増加し、ＭＰは理力を1上げるごとにレベルの半分だけ増加するようだと分かった。
あと、四方坂のレベルがさりげなく俺より二つも上だという事実も発覚したが、気にしないことにする。

しかし、魔力と理力がＨＰとＭＰに対応していると考えると、能力値の名前や並びから、それがどんな意味を持っているのか、想像が出来るようになった。
俺のあまり豊富ではないゲーム知識を駆使して、このステータス画面の能力値を普通のゲームの能力値に直すと、

魔力　↓　体力
理力　↓　魔力
強化　↓　力
耐久　↓　守り
俊敏　↓　速さ
器用　↓　器用さ
理法　↓　魔法攻撃力
克己　↓　魔法防御力
操作　↓　？？
信心　↓　？？

こんな感じになるのではないだろうか。
全部あっているとは思わないが、それほど大きく外してもいないような気がした。
しかしそうなると、自分の中で一番すぐれているのが魔法防御力になってしまうので、それはそれで微妙な感じはするが。

とりあえずボーナスポイントを戻し、ＢＰが８０になったのを確認してから、次に向かう。
次はお待ちかね、スキルの確認だ。
通常のステータス画面から、『スキル一覧』と『スキル詳細』画面に移動出来るらしい。

もしスキルの中に、魔法とか技とかがあったら早速使ってみよう。
そんなことを思って胸を弾ませながら、俺は『スキル詳細』の画面を開いた。

――ユニークスキル――

【真実の剣】

無属性　ＤＰ消費：１～（消費ＤＰによって射程が変化）

普賢光一の願望が形を成したモノ。
意志の剣を作り出す。

『真実の剣』は一度振るわれる毎にＤＰを消費する。
この剣が光一の望まぬ物を斬る事はない。

――アクティブスキル――

【魔力機動】　ＬＶ１

無属性　対象：自分　ＨＰ消費：１

魔力によって移動する技術。

ＨＰを１ずつ消費することによって、自身の体を動かす。
一度に移動可能な距離および速度は、使用者のＳＬＶ・操作の値によって変動する。

【オーバードライブ】　ＬＶ１

無属性　対象：自分　効果時間（５＋ＳＬＶ）秒

危地にあって、限界を超えて力を行使する術。

ＭＰが最大値の７５％以上の時にのみ発動可能。
発動すると最大ＨＰ・防御力２分の１、使用者への回復・強化効果の無効化、装備武器の摩耗率１０倍のペナルティを負うが、思考速度の加速、状態異常・弱化効果の無効化、スキルによるＨＰ・ＭＰの消費量１０分の１、全スキル効果（１００＋ＳＬＶ×２０）％アップのボーナスを得る。
効果時間終了後、使用者は全てのＭＰを失う。

――パッシブスキル――

【魔力親和性】　ＬＶ３

魔力になじむ体。純粋な魔力の影響を受けやすくなる。

取得ウィルに（ＳＬＶ×５）％のボーナス。

また、無属性の攻撃・補助を受けた場合、その効果に（ＳＬＶ×１０）％のボーナス。

【魔力感知】　ＬＶ２

魔力に対する鋭敏な感性。

付近の強い魔力を気配として察知することが出来る。

ＳＬＶが上がると精度と効果範囲が向上する。

【勇気ある者】

強大なる敵に立ち向かい、それを打ち破った、勇気ある者に与えられる称号。

自分よりも高レベルの相手から受けるダメージが５％軽減される。

【刀剣】　ＬＶ１

刀剣類を扱う技術。

刀剣による攻撃の際、その威力に（ＳＬＶ×５）％のボーナス。
このスキルの効果は他の武器系スキルとは重複しない。

「なるほど、ね……」
残念ながら魔法はないようだったが、ユニークスキルの『真実の剣』がちょっと面白そうだし、他にも見覚えのあるスキルがいくつかある。
確か四方坂を追いかけていた時と鱗野郎と戦っていた時、頭の中に『スキル発現』というメッセージが浮かんでいた。
見覚えのある名称の『魔力機動』と『オーバードライブ』はその時に習得したのだろう。

ついでに言うと、最初の戦闘。
突然気を失ってしまって何事かと思ったが、鱗人間に攻撃している途中で『オーバードライブ』のスキルが発動、武器の摩耗率が上がってショートソードが破損、さらに鱗人間を倒した所で効果が切れて、ＭＰがなくなってダウン、というのが事の真相だと想像がつく。

「一歩間違えれば死んでるな……」
思い返して、冷や汗をかいた。
『オーバードライブ』の効果がもうちょっと早く切れていたら、気を失った俺は鱗人間に殺されていただろう。

しかし、しんみりとしている暇はない。
今は、技の検証が先である。

なぜなら技や武器というのは、安定して使用出来ることに意味がある。
どんなに優れた技であっても、本番で出せなければ何の役にも立たない。
だから別に、好奇心からただ使ってみたいだけではなくて、非常時のための訓練としてあふれんばかりの必然性をもってここで使用するのだ、と無駄に自己弁護して、俺は『真実の剣』を使ってみることにした。

「しかし、スキルなんてどうやって使えばいいんだ？」
思わず首を傾げてしまう。

前に二回、俺はスキルを使ったはずだが、その時は無我夢中で何も考えていなかった。
だが逆に言えば、特に道具を使ったり技名を叫ばなくてもスキルが発動することはそれで証明されているとも言える。

とにかくやれることを一つずつ試していけばいいだろう。
とりあえず俺は、念じてみることにした。

（現れろ！　真実の剣！！）

……しかし、何も起こらなかった。

いや、まだだ。
まだ諦めるには早い！

「真実の剣！！」

今度は叫んでみた。
しかし、やっぱり何も起こらない。

待て待て、落ち着け。
まだ焦る時間じゃない。

前にスキルを発動した時、俺は無我夢中だった。
『魔力機動』を発動した時は早く四方坂に追いつかなければと思っていたし、『オーバードライブ』を発動した時は絶対にこの魚人を倒してやると思っていた。

つまり、目的意識だ。
強い目的意識を持って具体的に何かを望んだ時、スキルは発動するのかもしれない。

……うん、そうだ。
きっとそうだ。たぶん、おそらく、絶対、いやもう間違いなくそうに違いない。

「よし！！」

自分に気合を入れると、俺は目の前にあった、ちょっと大きめの凍った木の前に立った。
そして、俺の手に剣が生まれ、それがその木を断ち切る場面をイメージする。

――いける、気がした。

心を落ち着かせるため、一度深い息をして、心を平静に。
そして、俺はカッと目を見開き、

「真実の剣、とぉー！！」

手に剣を持っている体で、右手を真横に振るった。
その不可視の剣は鮮やかに翻り、木を上下に両断するすばらしいコースをたどって……。

「……」

まあ、当たり前ではあるのだが……。

結果、木は小揺るぎもしなかった。

うん、まあ、こんなこともあるだろう。
今日はちょっと調子が出なかっただけで、明日になったら手からもうすんごいのが出て、木こりとか目じゃないぐらい鮮やかな切り株とか作れるかもしれない。いやほんと！

そんな風に俺が自分で自分を慰めていると、後ろでカサッと氷を踏みしめる小さな音が聞こえ、

「――ハッ！？」

俺は恐ろしいことに気付いてしまった。

今ここにいたのは、決して俺一人ではない。

だがまさか、そんなことはないだろうと思いながらも、最悪の予感に俺は恐る恐る振り返る。

すると、

「……ごめんなさい。邪魔するつもりじゃ、なかったけど」

そこには、なぜか申し訳なさそうな顔でこちらを見ている四方坂の姿が！

（ぎゃぁあああああ！！）

心の中で、絶叫した。

（見られた見られた見られたぁあああああ！！！）

叫んで叫んで叫び倒した。

これじゃもう生きていけないおうちかえるー、とか言いたくなるくらいには錯乱した。

お風呂上りに鏡の前で、ちょっとほんとにこう魔が差して、

『多重影〇身の術！』

とか言ってるのを諒子さんに見られた時くらいの恥辱だった。

だが、それでも男とは見栄を張るもの。

「ああ。ちょっと、スキルの確認をしていたんだ。
肝心な時に使えないと、困るからな」

精一杯にハードボイルドな虚勢を張って、その場をしのぐ！

「うん。……本当にごめんなさい」

そしたらなんかまた謝られた。

（何でまた謝るんだよぉおおおお！！　余計傷つくだろぉおおおお！！！！）

と内心では再び絶叫しつつ、

「いや、構わないさ。それより、何か用かい？」

もうハードボイルドとか超えて、何がなんだか良く分からないキャラで対応する。

四方坂はそれを聞き、ちょっと嫌そうに顔をしかめて（地味に傷ついた）、

「……そろそろ、時間」

今度は門限を気にするお嬢様みたいなことを言い出した。

俺も釣られて時計を見る。

「え？」

だが、文字盤に表示された時刻を見て別の意味で驚く。
恥ずかしさも同時に吹っ飛んだ。

「１２時、２分…？」

１２時ちょうどに俺がこっちの世界に来たとすると、それからまだ２分しか経っていない計算になる。
もしかして時間の流れがおかしくなっているのかと俺は思ったが、

「ちがう。よく見て」

四方坂に言われて、もう一度視線を戻す。
しかし、何度見ても１２時２分の表示は変わらず……いや！
表示こそ変わりはしなかったが、それ以上に重要なことに気付いた。
この時計、確かに良く見ると『秒針が逆向きに回っている』。

「多分、制限時間。昨日はそれが０になった時、元の世界に戻った」

つまり、これは、１２時２分ではなく、残り時間が２分ということか。
だったら最初の日、１２時９分だと思っていたのも、残り９分で元の世界に戻るという意味だったのか？
俺の頭が、めまぐるしく働く。

「昨日は、最初は１０分。今日は２０分だった」

果たして時間が１０分ずつ増えているのは意味があるのか。
いや、それよりも、また俺はこの世界に来ることになるのか？
そんなことを考えている内に、残り時間が1分を切る。
俺は、時計から顔を上げ、四方坂を見た。
――銀色の髪、とがった耳。
そして、その全てを霞ませるほどの美貌を持つ、俺のクラスメイト。
学校で話をしたことなんて数えるほどしかないし、この世界でだってまだ３０分も、いや、ほんの数分しか話をしていない。
なのに、なぜだろう。
四方坂とは、随分と長い時間を一緒に過ごしていたような錯覚があった。
そして、だから、なのだろうか。
俺は自然と、四方坂に向かってこう言っていた。
「もし、明日もここで会えたなら、俺はもっと四方坂と話がしたい」
「――！？」
四方坂が、息を飲む気配。
なんだか初めて四方坂をやり込めたような気がした。
「……」
「……」

四方坂は、何も言わない。
俺も、何も言わない。

そのまま、無言の時間が過ぎていく。
時計は見ていないが、もう三十秒以上が過ぎただろう。
もういつ元の世界への転移が始まってもおかしくはない。

――駄目だったか。

俺が諦めかけた、その時、

「学校で……」
「え？」

澄んだ声が、確かに俺の耳を打つ。

「学校で、ここでの私の話、しないでくれるなら……」

彼女らしい、分かり難い肯定の言葉。
だが、そう言ってこちらを見た彼女の顔は、ほんのわずかだが笑っていた。

――その、一瞬。
俺たちの心は確かに通じ合ったような気がした。

呆けていたのは、たぶん数秒。

「っ！」

思い出して、時計を見る。
残り5秒。

マズイ！
時間がない！
逆回りの秒針が、無情にもタイムアップを報せてくる。

駄目だ！
このままじゃ駄目だ！
どうしてもまだ、四方坂に言わなきゃいけないことが、伝えなきゃいけないことが、残っているのに……。

「四方坂！」

俺は、全力で叫んだ。
俺の突然の大声に、無表情な瞳を少しだけ大きくさせる四方坂に向かって、俺は、

「さっきのスキル練習、忘れて――」

「――ください！！」

「う、うん。そんなに言うなら……。
というか、もともとそれ、お兄ちゃんのだし……」
「……え？」

気が付くと、妹に向かって全力で頭を下げていた。
突然の俺の剣幕に驚いた妹が、こっちに向かって本を差し出してくる。

――現実世界に、戻っていた。

「はあぁぁぁ……」
一気に、脱力する。
数時間分くらいの疲労が、一気に押し寄せたようだった。

なのに時計を見ると、
「１２時、ちょうどか……」
本当に、あれから全く時間が経っていない。

もはや超常現象確定である。
それにしても……。

「やっぱり、２０分じゃ全然、足りないよなぁ……」

「えっ？　なになに？」
怪訝そうな声を上げる結芽に何でもないと返しながら、向こうでの出来事を思い返していく。
今日はなんだか楽しかったせいで、時間が過ぎるのを早く感じた。
もう少し長くあの世界にいれたらいいなと、そう思ってしまった。

そんな風に、たぶん間の抜けた顔をしながら、向こうの世界のことを考えていると、
「お兄ちゃん。何か、あったの？」
いつもの髪留めを触りながら、妹が聞いてきて、
「ちょっと、ゲームがさ。やっぱり面白いかな、って」
それに俺は、嘘でも本当でもない答えを返した。

それから……。
「だったら、だったらね！」
妙に熱の入った勢いで、妹が身を乗り出してくる。
全身で俺にぶつかってくるみたいに、俺の瞳を正面から見つめて、
「結芽もいっしょにやったら、迷惑かな？」

その言葉があまりに切実で切なげで、俺は一瞬、息を飲んだ。
だから俺は、妹を傷つけないよう、慎重に慎重に言葉を探す。
「迷惑じゃ、ない。俺も、結芽と一緒に出来たら、楽しいと思う。けど……」
俺が話すに従って、結芽の顔がぱあっと明るくなるのを、申し訳

なく思いながら、

「無理、だと思う。これはちょっと、特別なゲーム、だから」

それでも俺は、はっきりと不可能を告げた。

「そっ、かぁ…」

輝いていた結芽の顔が、うつむいて見えなくなる。
だが少なくとも、次に顔を上げた時、

「でも、アドバイスくらいなら、いいよね？
お兄ちゃん、ゲームあんまり知らないから、それ読んだってきっと分からないよ？」

妹の顔は、いたずらっぽい笑みに彩られていた。

それが本心からの物なのか、無理に作った物なのかは分からない。
でも俺は、それに心の底から安心して、

「ああ、当然、お願いするよ！」

妹に負けないくらいの、精一杯の笑顔で、そう言ったのだった。

たぶん、この日、この瞬間。

――『ナイトメア』は、本当の意味で俺のゲームになった。

『ユニークスキルについて』（前書き）

ここから『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』が本編の間に挿入されます

『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』は、無理に読まなくても本編を理解できるように配慮するつもりですが、複雑なゲーム的要素についてはこれを読まないと理解が難しい場面が出てくるかもしれませんのでご了承ください

こちらも本編とリンクさせ、本編と関連した情報を開示していくつもりですので、掲載順に読んで頂ければ一番無理なく楽しめるかと思います

『ユニークスキルについて』

ペ「ハロー、トラベラーズ！　地獄から現れた超新星、ペイモンだぜぃ！！」

ア「はろー、とらべらーず！　じごくからあらわれたちょーしんせいあいどる、アスタナちゃんだよー」

ペ「今回オマエらボンクラトラベラー共に教えてやるのは、トラベラー最初の試練、選別の儀式についてだ！」

ア「あれー？　あいどるのくだり、『するー』されちゃったよー？」

ペ「初めてこの世界に来た時、何だか変なことを言われなかったか？『世界は暗闇に包まれ～』とか、そんなのだ。
その『質問によってユニークスキルを決める』儀式、それが選別の儀式なんだ」

ア「なんだー。おもったよりかんたんそうだねー」

ペ「そうだな。まあ別に難しいことは何もないぜ。単純な心理テストみたいなもんだ。
ただ、その結果によってユニークスキルが決まるってだけでな」

ア「へー、ゆにーくすきるなんてちょろいねー！
じゃあ役にたちそーなことをてきとーにいえばいいんだね？」

ペ「あのなぁ。大抵の奴は何も知らずにいきなり真っ暗なとこに引っ張り込まれて、急に質問されるんだぜ？

それにこの質問の時、本人の想いの強さも計られるから、考えて出した答えなんてほとんど何の役にも立たねえんだ」

ア「えー？　じゃあみんな何をいうのー？」

ペ「どうも今までの傾向からすると、『質問の答えは自分の夢や欲しい物、あるいはコンプレックスやトラウマと関係する』場合が多いみたいだな」

ア「こんぷれっくす？　あ、わかったー！　つまり、『ろりこん』だったら『ようじょ』とか言い出すんだね？　さいあくー！」

ペ「微妙にあってるけど違ぇよ！　……それに、同じコンプレックスを持ってても、ポジ型とネガ型じゃあ全然違うもんが出て来るしな」

ア「『ぽじがた』と『ねががた』？　うわーん！　だくてんがおおすぎていいにくいよー！」

ペ「トラベラーたちが考え出したユニークの分類だよ。
『暗闇の世界で見つけた物』って言われた時に、ポジ型、つまりポジティブな人間ならこれからその世界で役に立ちそうな物を、ネガ型、つまりネガティブな人間なら自分の恐れる物を、それぞれ選ぶ傾向にあるんだ」

ア「ぐたいてきにはー？」

ペ「例えば同じ水にトラウマを持ってる奴がいたとしても、ポジ型なら浮き輪とか水を克服するアイテムを、ネガ型なら魔法の津波とか水が襲ってくるような能力を、それぞれユニークスキルで獲得す

る可能性が高いってことだよ」

ア「え？　それじゃあ『ねががた』の方が強そうだけど？」

ペ「そうだな。意外に思うかもしれないが、ナイトメアの世界は人の意志が物を言うから、強いトラウマとか鬱屈した想いがあった方が強かったりするんだよ。
　んで、そういう奴は大抵ネガ型になるからなー」

ア「うわー、現実世界とはぎゃくだねー」

ペ「とはいえ、ポジ型にだっていい所はあるぜ。
　基本的に『ユニークスキルは、力が強く使用回数や制御に難があるネガ型と、力は弱いが回数が多くて応用が利くポジ型に分かれる』って言われてる」

ア「いっちょーいったんだねー！」

ペ「そーだなー。まあオマエらも選別の時には腹くくって、変に飾らずに自分の思った通りの答えを選べばいいさ」

ア「ペイモンちゃんペイモンちゃん。えらぶんじゃない。もーえらんだんだよー？」

ペ「あ、そういやそうか。オマエらはもうトラベラーだもんな。
　ユニークスキルなんてとっくに持ってるか」

ア「あれー？　そういえば、なんとなくでつかってるけど、『とらべらー』ってほんとはなんなのー？」

ペ「はあ？　オマエそんなことも知らずにハロー、トラベラーズとか言ってたのかよ！」

ア「うぅ……。でもアスタナ、ペイモンちゃんとちがってあんまり頭よくないし……」

ペ「しっかたねぇなぁ！　じゃあ説明するぞ？
　眠った時、何かの拍子にナイトメアの世界に紛れ込んじまった人間、こいつは『探訪者』あるいは『トラベラー』と呼ばれるんだ」

ア「え？　じゃあ、ナイトメアにきた人はぜんいん、とらべらーなのー？」

ペ「いい質問だな。実はこの世界にやってきた瞬間は確かに全員トラベラーだが、『正式にこの世界のトラベラーとして認められるには、選別の儀式をクリアする必要がある』んだ」

ア「あれ？　せんべつのぎしき、って……」

ペ「そう、つまり質問に対して強い想いを示して、ユニークスキルを手に入れられるかどうか、それがトラベラーになれるかどうかの条件なんだ」

ア「も、もしなれなかったらどうなっちゃうのー？」

ペ「トラベラーっていうのはつまり旅行者、この世界にやってきて、帰っていく者ってことだ。
　そうじゃなくなるってことは、つまり……」

ア「つ、つまり……？」

ペ「自分の意思を奪われ、ナイトメアの世界の操り人形になって、一生ナイトメアの世界に囚われ続けるらしいぜー！」

ア「キャーーーーーーー！！！」

ペ「……ま、そうは言ってもそもそもナイトメアの世界に行くような奴は、夢の世界に適性がある奴がほとんどだ。
そうそうユニークスキルが手に入らないなんてことないんだけどな」

ア「で、でもこわいねー。となりにすんでた人がいきなりいなくなったら、それは『せんべつのぎしき』に失敗したからだったりしてー」

ペ「あっはは、そうかもしれないな！　んじゃ、今回の復習だ！」

『質問によってユニークスキルを決める』
『質問の答えは自分の夢や欲しい物、あるいはコンプレックスやトラウマと関係する』
『ユニークスキルは、力が強く使用回数や制御に難があるネガ型と、力は弱いが回数が多くて応用が利くポジ型に分かれる』
『正式にこの世界のトラベラーとして認められるには、選別の儀式をクリアする必要がある』

ア「こんかい、まとめがびみょーだね」

ペ「オマエ…！　これ考えるのも結構大変なんだぞ」

ア「と、とにかくこんかいはこれでおわりだね！」

ペ「ちっ、仕方ねぇなぁ……」

ア「それじゃあまた、じかいまで……」

ペ・ア「グッナイ、トラベラーズ！　良い悪夢を！！」

ペ「あ、アバターの説明すんの忘れた……」

9．二人のうそつき

――たぶん『Xデー』よりも、二週間ほど前の記憶。

『なぁ縁。今時の女の子の、一般論的な考え方を聞きたいんだけどさ』

『んー、うん、いいけどー』

あたかも普通の会話の延長という感じで、出来るだけ何気ない感じで聞く。

縁はすっかり脱力した感じで、俺の話をそんなに真剣には聞いていない。

……チャンスだ。

『今欲しい物というか、もらって嬉しい物って何だ？』

俺がさりげなさを装ってそう尋ねると、縁はもう一度、「んー」と力の抜けきった声を出すと、

『そういえば、あと二週間でわたしの誕生日だったっけ。プレゼントなら、別に何でもいいよ』

いともあっさりと、俺の思惑を看破してきた。

動揺する俺を、縁は呆れた目で見て、

『光一、こういうの下手すぎ。

少なくとも女の子なら、誰でも何かあるって気付いちゃうと思う』

『そっかな？』

ちょっと悔しいので、俺はそっけない返事を返す。

すると、縁は含み笑い。

『ま、光一と話をする女の子なんて、わたしとみりんくらいなもんだと思うけどね』
『……いい加減そのあだ名やめてやれよ。きっと東雲さん、陰で泣いてるぞ』
共通の友人を引き合いに出して、意地悪く、くっくと笑う。
『それより、プレゼントだよ。何がいいんだ?』
『え?　……甘い物、かな?』
『何で疑問形だよ。ていうか、それはプレゼントじゃないだろ』
俺がそう言うと、縁はなぜか無駄に表情を作って
『あのね、光一。甘い物が嫌いな女の子なんて、いないよ』
妙に説得力のある言葉を言い放った。
しかし流石に、誕生日プレゼントに食べ物を渡すほど俺だって甲斐性なしじゃない。
『分かったよ。自分で考えてみるから』
俺は半ば意地になってそう言い切って、それを見た縁は、
『楽しみにしてるからね!』
と、本当に楽しそうに笑って……。

「お兄ちゃん、朝だよ？」

「…ん」

聞き覚えのある声に呼ばれて、俺は目を覚ました。

この声に起こされるのも何度目だろうか。

そんなことを考えながら目を開くと、そこにはもう完全に制服に着替え、学校に行く支度を整えた妹がいた。

「おはよう、お兄ちゃん」

「…あぁ。おはよう、結芽」

その顔からは、昨夜の疲れなんて微塵も感じられない。

昨夜は、というか今朝は、俺に付き合ってほとんど夜明けくらいまでマニュアルとにらめっこをしていたはずなのに、妹はいつもと変わらない様子だった。

目は開けていてもいまだ半分寝ているような俺とはえらい違いだ。

「あー、それと、昨日は、ありがとう」
一応昨夜の礼を言っておく。
実際、ゲーム知識豊富な妹の解説と助言は、かなり役に立った。
特にヘイト管理やらタゲ取りやらバフやらデバフやらポップ、リポップやらという専門用語は、このゲーマーな妹がいなければあんなにスムーズに理解出来ていなかっただろう。

「いいよ。わたしも楽しかったもん。
それで今日は？　またやるの？」
机の上に置いた『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』の方に目をやりながら言う妹に、俺は首を振ってみせた。

「いや、今日はやめとく。
……実はあの本、貸したい相手がいるから」
俺がそう言うなり、

「それってやっぱり天壌……ん、ううん、何でもない！」

結芽は一人で何かを言いかけたかと思うと、すぐに部屋の外に出て行ってしまった。

「あれって絶対、天壌先輩って言おうとしてたよな……」

思い返しながら考える。
確かに結芽に天壌先輩が気になっているとは言ったが、だからといってそんな相手にいきなりゲームの説明書とか貸してどうするのか。
……まあ実際に貸す相手は全然違うので、どうでもいいのだが。
そんなことを考えながら教室に着いた俺は、本当のターゲットを確認する。

――いた。

今日も教室の端の席で、ニット帽にマフラーという不審者レベルの重装備で自分の体を抱えるようにして縮こまっている。
賑やかな教室の中で、彼女の周りだけが凪いだように静かというか、ぶっちゃけて言えばあからさまに浮いていた。

（四方坂、あんなに美人で頭もいいのにな……）

向こうの世界での四方坂を見た俺としては、クラスで浮いている彼女が歯がゆく思えたりもするが、もしかすると過ぎたる美貌や才能なんて物は、現代社会を生きていく上では足かせなのかもしれない。
けれど今日の俺は、そういう障害を飛び越して、何とか四方坂と話が出来るようになるつもりだった。

――そう、今回の目標は、現実世界の四方坂と和解して、『ない

とめあ☆　の　あるきかた♪』を渡すこと。

四方坂には学校で夢の話をするなとは言われたが、話しかけるなとは言われていない。

もしかすると言外にそう言っていたのかもしれないが、ここはあえて無視させてもらう。

せっかく夢の中ではほんの少しだが打ち解けてきたのに、現実世界に戻ったら他人以下だなんて、そんなに寂しいことはない。

ここは何とか誠意を見せて誤解を解き、夢の世界と同じ、いや、それ以上の関係を築く。

それが、俺の今日の目標だった。

もちろん無策で何とかなるほど、四方坂は甘い相手だと思ってはいない。

だからそのために、特別に秘策も用意した。

昨夜、時間をかけてマニュアルを読み込み、妹も俺もすっかり煮詰まった頃だ。

四方坂との関係修復のヒントを掴もうと、俺は妹の協力を仰ぐことにした。

「なぁ結芽。今時の女の子の、一般論的な考え方を聞きたいんだけどさ」

「んー、うんー」

俺の言葉に、脊椎反射的に返事をする結芽。
本当に分かっているのかは疑問だが、あんまり真面目に聞かれて色々勘ぐられても困る。

あたかも兄妹の言葉のキャッチボールという感じで、出来るだけ何気ない感じで聞く。

「今欲しい物というか、もらって嬉しい物って何だ？」
「お兄ちゃんの愛かな」
「……」

ノータイムで返ってきた言葉の大暴投に、俺はしばし言葉を失った。
やっぱり俺の妹はちょっとおかしいんじゃないだろうか。

だがここで折れたら何の収穫もなしで終わってしまう。
俺は食い下がった。

「も、もうちょっと具体的な物で言うと？」
「じゃあ飴ー」

一気に即物的になった！
飴玉だったら容易に購入も可能だ。
しかし、一般的な女子という物は、本当にそんな物をもらって喜ぶものなのだろうか。

俺が妹の感性を疑っていると、それに気付いたのか、結芽はやっぱりトロンとした目をしたまま、それでも力強く言い切った。

「あのね、お兄ちゃん。糖分が嫌いな女子なんて、いないよ！」

やけに説得力のある言葉を頂きました！
というか、甘い物じゃなくて糖分ときた。
じゃあもう砂糖舐めてればいいんじゃね、と思わなくもないが、
そんな台詞はそれこそ女心が分からないというものだろう。

「だけど、そんなのでいいのか？
飴なんて、そんな子供っぽい……」
と言いかけた俺の言葉は、

「お兄ちゃん！　考えてもみて？
特に仲が良くもない男子にいきなりアクセサリーとか有名店のケーキとか渡されたらどう思う？
絶対ドン引きだよ？」
「あ、ああ。それは、そうかな…？」

嵐のような結芽の言葉にかき消された。
別にアクセサリーやケーキを贈るなんて一言も言ってないのだが、
なんとなく押されてうなずいてしまう。
さらに、結芽は胸を張って言った。

「どんな女の子でも、飴をもらったら絶対機嫌よくなるよ。
飴を何個か目の前に置いて、『プレゼントだよ』って言ってあげれば、今まであんまり話が出来なかった人とも仲良くお話できるかもね？」

結局その言葉が決め手になって、俺は飴玉作戦を実行に移すこと

に決めた。

俺は「ちょっと休憩する」と言って部屋を出て、その足でこっそりと家を抜け出し、近くのコンビニで飴を一袋買ってきた。

最近主流になっている一個ずつが密閉されているタイプではなく、カラフルなフィルムに包まれている、いかにもキャンディ的なタイプの物を選んだ。

しかも、妹の趣味に日々影響されているのか、包み紙が鮮やかな水玉模様の奴を取って来てしまった。

しかし、これなら女の子も大喜び……だろうか？

いかにも安物っぽい色合いで、これは全然ダメなような気もするのだが。

結局俺が飴を買ってきたことは妹にもバレて、

「お兄ちゃん、んー！」

なぜかキス待ち顔で迫ってくる妹の口に飴玉を突っ込んで、

「うん、あまーい！　……こへならまひがいないね」

聞き取りづらい妹の言葉を解読する傍ら、俺はそっと、買ってきた飴玉の内の数個を鞄の中に忍ばせた。

（これで明日は、何とかなるかな）

ひとまずそう考えて、俺は妹と『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』を読む作業に戻ったのだが……。

しかし、改めて考えると、こんな子供騙しが四方坂に通用するのだろうか。

あの時はほとんど徹夜状態で頭が働いていなかったし、結芽の勢いに押されてあたかも名案のように思えたが、仮にも年頃の女子高生が飴玉もらったくらいで喜ぶか？

というか、例え同じお菓子類を渡すとしても、せめてクッキーかチョコの方が良かったのではないだろうか。

俺の中に、今さらながらに飴玉作戦への疑念が湧く。

（……いや）

だが、俺は首を振って雑念を追い出した。

やはりここは、結芽の言うことを信じてみよう。

いくら中学生とはいえ、あれでも女の子だ。

翻って俺はというと、この一年は少しマシになったものの、生まれてからこの方、恋人どころか同年代の女子と満足に会話をした記憶もない。

そんな俺の判断よりも、妹の意見の方が絶対に正しいはずだ。

俺は意を決し、本と飴玉を手に、教室をまっすぐ横切って、四方坂の許へ向かう。

そして、

「四方坂！　この前は悪かった。お詫びのし……おわぁ！」

緊張で手が滑って、机の上に飴玉がこぼれる。
ボトボトと机の上を転がる飴玉。

（しまった！　せめて何か袋にでも入れてくるべきだった！）

そんなことを思うが後の祭り、もはやアフターフェスティバルだった。
ころころ転がる飴玉を見て、四方坂の目が鋭さと冷たさを増す。

「……これは？」

肌に突き刺さるような声で尋ねてくる。
いや、もしかしてこれ、怒ってるんじゃ……。
そう思ったが、一縷の希望にすがり、俺は答えた。

「ええと、プレゼント…？」

何で疑問形なんだよ、と自分にツッコみながら、四方坂の反応をうかがう

「……ふざけてるの？」

その声のあまりの冷たさに、俺は思わず身震いしそうになった。
実際、体感温度で三度くらい、周囲の気温が下がったような気がした。

うん、こうなれば女心とか関係なく俺にだって分かる。
もしかしなくてもこれ、怒ってる！

（ちっくしょう！　結芽の大嘘吐き！！）

心の中でこの場にはいない妹に悪態をつきながら、どうしようもなくパニクった俺は、

「と、とにかくこれ、読んでくれ！！」

まるでラブレターを渡すみたいな台詞と共に『ないとめあ☆　のあるきかた♪』を四方坂に押し付けると、一目散に自分の席に戻った。

そのまま机に突っ伏して、全ての情報をシャットアウト。

なんとなく周りの視線がこちらに集まっている気配を感じたが、見ざる聞かざる言わざるを自分に課して、ホームルームが始まるのを待つ姿勢。

ただ、そんな体勢でも、隣の席の滝川が、

「……ないわー」

と呟いたのだけは、ばっちり聞こえてしまっていた。

言っとくけどな、滝川。

……全くもって、同感だよ！！

「……ただいま」

それからの一日、学校で何をしていたのか、正直良く覚えていない。

ただ俺は貝だ、俺は貝だと自分に言い聞かせて一日を乗り切った。

「お、お兄ちゃん!?」

玄関を抜けると、憔悴しきった俺の姿を見て、結芽が驚きの声を上げる。

そういえばこいつの助言のせいであんなことになったんだな、と思わなくもなかったが、何も言わなかった。

常識で考えれば、いきなり良く知らないクラスメイトから飴玉をもらって喜ぶ女子高生がいるはずがなかった。

それを無視して安易な解決法に飛びついた俺が間違っていたのだ。

むしろ、今時飴玉一つで喜ぶこの妹の純真さを俺はもっと大切にするべきなんだろう。

そんなことを思いながら、兄として温かい目を結芽に向けると、

「ご、ごめんねお兄ちゃん!

ちょっとした悪ふざけのつもりだったのに、まさか、そんなに落ち込むとは思わなくて……」

なぜか結芽は俺に謝ってきた。

俺の混乱にも気付かず、結芽は一人で焦って言葉を続ける。

「で、でも、お兄ちゃんもいけないんだよ？

好きな人のそんな基本的なこと、ちゃんと調べておかなかったんだから」

「基本的な、こと？」

そして、俺との認識のズレに気付かないままで、結芽はとうとう後戻り出来ない言葉を吐いた。

「だって、天壌先輩が甘い物大嫌いだっていうの、すっごく有名なのに！！」

そこで、血の巡りの悪い俺の頭も、ようやく事の真相に気付いた。

つまり、あれだ。

（俺は結芽に、はめられた、のか……）

そしてそれが、最後の一押しだった。

もともと死に体だった俺は、その一言にトドメをさされ、

「お、お兄ちゃん？　お兄ちゃーん！！」

……死んだ。

まあもちろん死にはしなかったが、結芽と諒子さんに随分と労われ、今日はもう早く寝るようにとかなり早い時間に部屋に戻された。

その気遣いはありがたかったが、ありがた迷惑という言葉もある。

俺は一人、時計をにらみながら煩悶していた。

もし今日もナイトメアの世界に跳ばされるのなら、当然四方坂とも顔を合わせることになる。

そして夢の世界の四方坂は、現実世界でのことを全て記憶しているのだ。

「うわあぁ。どうしたものか……」

なんて言ってみた所で、事態が改善する訳でもなく。

せめて気持ちだけは引き締めようと、俺は時計を前に正座して、身じろぎもせずにその時を待った。

――そして迎えた、午前０時。

時計の針が頂点を指した瞬間、俺は四方坂と向かい合うように氷の森に立っていて……。

俺の姿を認めた四方坂は、その綺麗な顔にちょっとだけ困ったような色をにじませて、

「……ばか」

と言った。

『能力値について』

ペ「ハロー、トラベラーズ！　今日も絶好調！　魔界の超鬼軍曹こと、ペイモンだぜ！」

ア「はろー、とらべらーず！　みんなのマスカット、アスタナちゃんだよー！」

ペ「ブドウになっちゃってるよ！」

ア「？？」

ペ「いや、悪かった。オマエがそれでいいならいいんだ。果物にだって幸せはあるさ」

ア「んー？　変なペイモンちゃん」

ペ「さて、気を取り直して、今日オマエらに教えてやるのは、ナイトメアの世界でのオマエらの肉体についてだ！」

ア「えー？　げんじつみたいにうごいたりできるんじゃないのー？」

ペ「確かにそうなんだが、ナイトメアでは現実世界の体とはちょっとだけ違う体『アバター』を動かすことになる」

ア「それってなにがちがうのー？」

ペ「一番分かりやすいところでは、『アバターが傷付いても現実の体に影響はない』ことだな。

ただそのせいで、『アバターに宿っている記憶は現実世界に持っていけない』って言われてる」

ア「でも、げんじつのきおくは『あばたー』にもっていけるんだよね、ふしぎー」

ペ「その辺りのメカニズムは実はあまり解明されていないんだ。ただ、一部の魔力操作に優れた人は夢の世界の記憶を現実でも保持している場合もあるから、魔力と何か関係があるとは言われてるな。

アバターを完全に魔力で形作ることが出来れば、最終的にはアバターと現実の体が一つになる、なんて説もある」

ア「へー。ぜんぜんきょーみないやー」

ペ「じゃあ何で聞いたんだよ!!」

ア「ふいんきー。それより、『あばたー』のすごいとこおしえてー？」

ペ「雰囲気、な？　……もう一つ、『アバターの姿は本人の自己認識や願望、コンプレックスに左右される』んだ」

ア「あれ？　ゆにーくすきるとにてる？」

ペ「そうだな。まあこれもユニークスキルと大体同じだ。

背の低いことがコンプレックスな奴がいたら、アバターは本人の願望が作用して本人よりも背が高くなることもあるし、劣等感から実際以上に強調されて本人よりさらに背が低くなることもある」

ア「うわ、ひっさーん」

ペ「変わった所では猫耳を生やした奴とか、エルフとか竜人になった奴、性別を変えちゃった奴とかもいたな。
　とはいえ、相当自己認識が歪んでないと、あんまり自分とかけ離れた姿にはならない」

ア「でも、ここにくる人ってだいたいゆがんでそうだよねー？」

ペ「オマエたまにさらっと毒吐くよな。
　まあ色々言ったが、そんなのはオマケに過ぎない。
　アバターの一番すごい所は、世界にあふれる魔力『ヒュプノス・パワー』を使って、自分を強化できるところなんだ！」

ア「ひゅ、ひゅふのふ、はわー？」

ペ「ヒュプノス・パワー、略してＨＰだ！　これがないとトラベラーどころか、この世界でやっていけないってくらい大事な要素だぜ？」

ア「んー？　でも、すごくつよい人だったら『おのれのみひとつ』できょうてきもばったばったとたおしちゃうんじゃないの？」

ペ「チッ、これだから素人は。あのなぁ。もしお前と体の大きさ以外全部同じで、身長が5倍の奴がいたとしたら、そいつの体重はお前の何倍くらいだと思う？」

ア「えっ？　うーんと、うーんと、４倍くらい？」

ペ「なんで減ってるんだよ！！」

ア「だ、だって、アスタナさいきん『だいえっと』してるし……」

ペ「そういう問題じゃねえよ！　……はぁ。答えは１７５倍だ」

ア「ええー！　ペイモンちゃんそれ計算まちがいだよー！！」

ペ「間違ってねえ！　いいか？　さっきの条件だと質量は体積に比例するから、身長が５倍なら体積は５の３乗で１７５倍になるんだよ！」

ア「うん！　アスタナにはぜったいわからないってわかったよ」

ペ「とにかくそうなるんだよ！　で、お前は体重が１００倍以上ある相手と戦ったらどうなる？」

ア「そんなのとたたかったら、アスタナふみつぶされておせんべいみたいになっちゃうよー！」

ペ「そ。つまり、でっかい奴っていうのはそれだけで滅茶苦茶強いってことだよ。
　そしてこのナイトメアの世界には、そういう怪物がごろごろといる」

ア「で、でも、『まんが』とかでは……」

ペ「そりゃーフィクションだからだよ。生身のまま自分の技だけで怪物を倒すような漫画やゲームはたくさんあるけどな。
　でも、現実にはそんなことはありえない。人間はどんなに鍛えたって１０メートルもジャンプしたり出来ないし、１０トンの怪物を

持ち上げたりもできない。
　けど、それを可能にするのがヒュプノス・パワー、この世界に満ちる魔力なんだ！」

ア「そっかわかった！　つまり『ごつごうしゅぎ』だね！！」

ペ「……もうそれでいいや。
　とにかくヒュプノス・パワー、つまり『ＨＰは、アバターの攻撃力を強くしたり、攻撃から身を守ってくれたり、素早く動く手助けをしてくれたりする』んだ」

ア「で、でもでも、『まりょく』とか、つかうのむずかしそう……」

ペ「ところがどっこい！　なんと魔力による強化は全自動なんだ！
　しかも、『どんな能力が強化されてるかは、ステータス画面を見れば一目瞭然』だぜ？」

ア「すっごーい！　じゃあアスタナもさっそく見てみるのー！」

ペ「『ステータスを見るには、データウォッチを起動して、ステータスのボタンを押せばいい』んだけど、大丈夫か？」

ア「あっ、『すてーたす』がでたー。あ、あれ……？」

ペ「どうした？」

ア「アスタナ、『のうりょくち』のいみがわからないよー」

ペ「はぁ。しっかたねーなー。今回だけだぞ？
　能力値の詳しい解説は、これだ！！」

魔力　蓄えられる魔力量の限界。最大ＨＰに影響。
理力　蓄えられる理力量の限界。最大ＭＰに影響。
強化　攻撃を強くする力。物理攻撃力に影響。
耐久　攻撃に耐える力。物理防御力に影響。
俊敏　素早く動く能力。移動速度・反応速度に影響。
器用　スキルを扱う技術。スキルの成功率・成長速度に影響。
理法　理術に対する理解。理術属性スキルの威力・習得に影響。
克己　己を律する心。理術・状態異常への抵抗に影響。
操作　魔力を操作する技術。ＨＰ／ＭＰの変換効率、無属性スキルの威力に影響。
信心　世界を受け入れる心。ＨＰの自動回復速度、アイテムドロップ率に影響。

ペ「もちろんこれは全部ＨＰを利用して強化しているから、強い攻撃を放ったり食らったり、速く移動してもＨＰは減っていくし、当然使いすぎて『ＨＰが０になると全能力値も一時的に０になる』から気をつけろよ」

ア「ペイモンちゃん、ペイモンちゃん」

ペ「おっと、言い忘れてたが『アバターの初期能力値は本人の性格や性質に左右される』ぜ？
　これも詳しくは分からないが、年代的には１０代半ばの奴らが一番初期値が高く、その中でも『意志が強いと物理系、想像力が豊かだと魔法系の能力値が高いことが多い』らしいな。
　まあ初期能力値についてはばらつきがあるとしか言えねえなぁ……」

ア「ねーねー。ねーってば！」

ぺ「もっと詳しい話を知りたい奴は、『ステータス強化について』を読んで……なんだよ、アスタナ」

ア「あのね、いみとかのまえに、かいてある『のうりょくち』のかんじがよめないの」

ぺ「……ダメだこりゃ」

ア「おあとがよろしいようで」

ぺ「というところで、今回の復習だ。かなり量が多いから、しっかり覚えろよな！」

『アバターが傷付いても現実の体に影響はない』
『アバターに宿っている記憶は現実世界に持っていけない』
『アバターの姿は本人の自己認識や願望、コンプレックスに左右される』

『ＨＰは、アバターの攻撃力を強くしたり、攻撃から身を守ってくれたり、素早く動く手助けをしてくれたりする』
『どんな能力が強化されてるかは、ステータス画面を見れば一目瞭然』
『ステータスを見るには、データウォッチを起動して、ステータスのボタンを押せばいい』
『アバターの初期能力値は本人の性格や性質に左右される』

『意志が強いと物理系、想像力が豊かだと魔法系の能力値が高いことが多い』

ア「それじゃ、きょーはおわりだね」

ペ「オマエはこれから漢字の書き取りな！」

ア「ひーん！　うぅ、とにかく、じかいまで……」

ペ・ア「グッナイ、トラベラーズ！　良い悪夢を！！」

10．ゲームスタート！！

――今までで、一番、『あの日』、に、近い、記憶。きっと、三日、前。

ノイズ交じりの光景、

『恐れてたことが、現実になっちゃったよ』

その中でも縁は、何だか今にも泣きだしそうに見えた。

『――――――』

だから俺はたぶん何かを、縁を安心させようと何かを言ったのだと思う。

けれど、それは縁には届かなかった。

『今からじゃ、無理だよ。

それに、光一は夢の世界には向いてない』

反発するように、俺が何かを言う。

縁は、首を横に振る。

『そういうことじゃないよ。

夢に向いてないからこそ、せめて意志を強く持って』

また、俺が何か言う。

縁はうなずく。

『トラベラーに、なって。
そしたら、もしかしたら、いつかは……』

これがゲームだというのなら、自衛のためにも事態を解決するためにも、そろそろ動く必要がある。
そんな結論に達した俺と四方坂は、いよいよ本格的にナイトメアの攻略を開始することにした。

データウォッチを見ると、なんと残り時間は6時間あった。
10分、20分ときて、なぜここでいきなり時間がこんなに増えたのかは不明だが、今から攻略していくことを考えるとむしろ都合

がいい。

とりあえずは凍った森を抜け、通常のフィールドへの帰還を目指す。

当座の指針として、一面の森の中で唯一見える目印、森の切れ目から時折覗ける巨木に向かって進んでいくことにした。

そして凍りついた地面に苦戦をしながら歩くこと五分ほど、凍りついた木々のエリアをようやく抜けた頃、俺は前方に、小さな生き物を見つけた。

「四方坂、あれ」

そう四方坂に声をかけると、やはり気付いていたらしい四方坂が、すっと目を細めた。

この世界に来て初めての、いや、魚人についで二番目の人間以外の生き物。

ただし、あの魚人のように真っ黒な鱗をびっしりと生やしているとか、そういう恐ろしい生き物ではない。

見た目はただのウサギ。

ただし、耳がやたらととんがっていて、ちょっと物騒なイメージはある。

「『識別』した。ブレイドラビット。レベルは3」

観察をしていると、四方坂からそう声がかかる。

『識別』は四方坂の所持スキルの中にあった一つで、相手の能力が読み取れるらしい。

こっちのレベルが5と7だということを考えれば、レベル3のこのウサギは雑魚だと判断していいだろう。

……まあ、見た目からしてウサギだし、どう見ても強敵とは思えない。

攻略開始してからの初戦の相手としては、たぶん申し分ないだろう。

しかし、実は不安材料がない訳ではない。

俺はちらりと自分の右手を、そこに握られた自分の武器を見る。

あの鱗人間との戦闘でショートソードを壊してしまったため、今の俺の武器はそこら辺で拾ったただの木の枝。

四方坂に予備の武器でもあれば貸してもらおうと思っていたが、当然そんな都合のよい物はなく、メインの武器もそもそもロッドだった。

普通に地面に落ちているような物が戦いに使えるかという疑問もあったが、『鑑定』スキルを持っているという四方坂に見てもらった所、

【木の枝】

種別：棒

攻撃力：2

77／80

と出たらしいので、たぶん武器として使えなくもないだろう。
攻撃力は期待出来ないが、素手で戦うよりはマシなはずだ。
それに、もしかするとこの木の枝だって使っている内にレベルアップして、いつかはどんな剣にも負けない強い武器になるかもしれない。
……まあ、流石にありえない話だとは思うが。

ちなみに『鑑定』も『識別』と同じスキルの一種で、鑑定はアイテムを、識別はモンスターを、それぞれ詳しく調べられるらしい。
非常に便利だ。
確か『トラベラーの必須スキル』だとペイモン君も言っていた。

横目で四方坂をうかがうと、向こうも俺の方を見ていた。
分かっている。
いつまでもここで考え込んでいる訳にもいかない。

幸い相手は一匹。
まだこちらには気付いていない。

「四方坂。それじゃ、決めた通りに」

そう四方坂に囁いて、俺は右手の木の枝を強く握る。
もう一度、目標のブレイドラビットが俺に気付いていないことを確認してから、

「行く！！」

小声でそう宣言をして、飛び出していく。

――道中、四方坂とは大雑把にだが戦闘についての打ち合わせをした。

四方坂は俺とは違い、能力値のタイプは魔法（本当はこの世界では理術というらしいが）寄りで、いくつかの攻撃魔法を習得しているらしい。

せっかくなので魔法を見せてもらおうかとも思ったが、ちょっとした事情というかトラウマから断念した。

だって、四方坂に限ってまさかないとは思うが、だからこそ四方坂が魔法スキルの確認で、

「ファイアーボール、とぉー！」

とか言い出したら、俺はきっと立ち直れない。たぶん羞恥のあまり、恥ずか死とかしてしまうに違いない。

とにかく、敵に遭遇したら俺が左から回り込み、四方坂がその後ろから攻撃魔法を撃つ、というスタンスで戦うということを、大雑把ながら決めておいた。

なぜ左から攻めるようにしたかと言うと、俺たちはどちらも右利き。

素人考えではあるが、俺が左側に寄っていた方が後ろの四方坂は魔法を撃ちやすいだろうし、俺としても敵が右側にいた方が武器が振りやすいだろう。

その辺りを考えての配置である。

しかし逆に言えば、それ以外のことについてはほとんど決めていない。

アドリブが苦手な俺としては不安ではあるのだが、パートナーどころか自分がどこまで戦えるかも分からない現状、あまり色々と決めすぎても邪魔になるだけだろうという判断からだ。

――それが吉と出ると凶と出るかは、この戦闘で分かるだろう。

今はこの、ナイトメアにやってきてから二度目の戦闘が無事に終わるように全力を尽くすだけだ。

「援護は頼んだぞ、四方坂」

口の中でそう呟きながら、ブレイドラビットに向かって駆けていく。

連携という課題がある以上、制御の難しい『魔力機動』は使わず、自分の足で地面を蹴る。

足元でシャリシャリと霜を踏んづけるような感触がするが、足場は悪くない。

俺はあまり広くない道を、出来るだけ左側に寄るように気を付けながら走り抜け、ブレイドラビットに忍び寄った。

ブレイドラビットまで、目測で十歩ほど。

相手はまだ俺たちに背を向けていて、こちらに気付いている様子はない。

これは見つからずに攻撃出来るか、と思った瞬間、

「ッ！！」

野生の勘の鋭さか、そいつは機敏に振り返った。
そして、

「なっ！」

ブレイドラビットは接近する俺に気付くと、すぐさま敵意をむき出しにして俺をにらみつけ、まるで威嚇するように両耳をこちらに向けた。
その直後、俺はブレイドラビットの名の由来を知る。
立てた両耳が、鋭利な刃物になっていた。

（どうする？　こんな木の枝で、あんなのに対抗出来るのか？）

残り五歩。
足を止めないまま、束の間、逡巡する。
だが、

（いや、行く！）

迷いはあったが、振り切って進む。
これから先、もっと厳しい選択を迫られる場面がたくさんあるだろう。
いつも考えすぎて何も決められない俺だからこそ、迷いを振り切って決断することが必要だった。

（『魔力機動』がある以上、どんな状態でだって方向転換出来る。
相手が刃を向けてきても、かいくぐって一撃入れる！）

ブレイドラビットまで残り三歩。
俺がそんな捨て身とも言える覚悟を決めた瞬間、
――ヒュン！
高い音を立てて、俺の右側を閃光が駆け抜けた。
（四方坂の魔法の矢！！）
全速で走る俺を遥かに凌ぐ速度で飛んだ魔法の矢は、ブレイドラビットの耳に着弾。
凄まじい威力を見せて、刃ごと耳を吹き飛ばした。
（ナイスアシスト！　これなら行け……えぇ？！）
しかも、四方坂が放った魔法の矢は一発だけではなかった。
二の矢、三の矢、四の矢と、まさに矢継早な勢いで魔法の矢が次々とブレイドラビットに殺到、必殺の威力を持った魔法の矢が、ウサギの小さな体を蹂躙する。
目を丸くする俺の前で、結局１０本ほどの魔法の矢が魔物の体を貫いていき……。
ブレイドラビットは瞬く間に光の粒に変換され、空気に溶けていく。
後には、ドロップアイテムだろうか、ウサギの尻尾と思われるもこもこの毛の塊が残るだけ。

こうして、俺たちの二度目の戦闘は、俺たちの圧倒的勝利によって幕を閉じたのだった。

……というか、あれ？　俺の出番は？

『ウィルについて』

ペ「ハロー、トラベラーズ！　住所は地獄の一丁目、救世主悪魔のペイモンだぜ！」

ア「はろー、とらべらーず！　みんなのマスケット、アスタナちゃんだよー！」

ペ「銃になっちゃってるよ！」

ア「アスタナ、きけんなおんな？」

ペ「暴発の危険は常にあるな！」

ア「やん！　そんなほめられたらアスタナ、とけちゃうよぉ／／／」

ペ「これっぽっちも褒めてないし、オマエにそんな機能ねーから！！」

ア「それできょーの『ぎだい』は？」

ペ「意外と切り替え早いなオマエ！
今日の授業は、ナイトメアにのみ存在する特殊な物質、ウィルについてだ」

ア「た、たいくーん？」

ペ「知らねえけど間違いなく違ぇよ！　なんだよタイクーンって！
いいか、夢の世界ってのは、見ている本人の意思やら想像やらに

影響されてその通りに変わるだろ？
　ウィルってのはそういうもんを数値化した物なんだ」

ア「で、でも、ナイトメアにいるみんながかってにせかいをかえちゃったら、せかいが『めちゃくちゃ』になっちゃうよ？」

ペ「そうだな。だから逆に言えば、ナイトメアの生き物は、このウィルの分しか世界を変えることはできない。
　だからウィルってものは言い換えれば、世界にワガママを言って自分の思い通りの未来を作るためのエネルギーだとも言えるな」

ア「うぅー。ちょっとアスタナにはむずかしいよー！　ゲームでたとえると？」

ペ「経験値とお金を合わせたようなもの、だな」

ア「わー！　いっしゅんでわかっちゃったー！
　ペイモンちゃんも『しちめんどくさいりくつ』ばっかりこねくりまわしてないで、いまみたいにもっとましなこといえばいいのにー！」

ペ「あぁん？」

ア「な、なんでもないよ、ペイモンちゃん！　それで、ウィルってどうやってにいれるのー？」

ペ「『ウィルを入手するには、モンスターを倒したりイベントを達成する』のが一般的かな。
　その他にも、『食事をしたり、誰かと取引することでもウィルを手に入れられる』ことはある」

ア「ええ！　たべるだけでウィルがてにはいるなら、アスタナごはんたくさんたべるー！」

ペ「また太るぞ」

ア「うわーん！　ペイモンちゃんのひとでなしー！　あくまー！」

ペ「そのネタはもうやったろ！
　それに、食事や取引よりも、モンスターやイベントでウィルを手に入れた方が実はお得なんだ」

ア「おとくなの！？」

ペ「ああ、実はナイトメアでは、『モンスターやイベントで獲得したウィルの量が、レベルを決める』んだ。
　今までのウィルの獲得量が１０００を超えたらレベル３、２００を超えたらレベル４、みたいな感じだな。
　だから、たとえウィルを一回も使わなくても、モンスターを倒してたくさんのウィルを獲得すれば、それだけで高レベルになれるんだぜ」

ア「それはおとくだねー！
　あ、でもじゃあ『もんすたー』とか『いべんと』をなんとかしないと、『れべる』はあがらないの？」

ペ「それも違うんだ。実は逆に、モンスターやイベントから全くウィルを手に入れられなくても、ウィルを使うことでもレベルは上げることができる」

ア「え？　え？　な、なんかアスタナ、あたまがこんがるがってきたよ……」

ペ「いやオマエ、言葉までこんがらがってるぞ！？
『ウィルを使うと、１ウィルにつき２ポイント、獲得ウィルの値を上げることができる』んだよ！」

ア「え、ええっと？」

ペ「例えばオマエがモンスターを倒して、１００ウィルを手に入れたとするだろ？
この時点でのオマエの獲得ウィルは１００だ」

ア「う、うん。アスタナにもその『けーさん』ならわかるよー！」

ペ「や、まだなんも計算はしてないけど……。
とにかく！　そこで手に入れた１００ウィルをさらに獲得ウィルを上げるのに使うと、なんと獲得ウィルを３００にすることができるんだ！」

ア「すごいー！　おとくだねー！」

ペ「お得、なのか？
というかなんかオマエ、ぜんっぜん分かってないような気がするけど、大丈夫か？」

ア「だいじょぶだいじょぶ、イケる、イケる！
それで、ほかのウィルのつかいみちはー？」

ペ「他には『ウィルを消費することでスキルを習得したり、習得し

たスキルのレベルを上げることができる』のが重要だな！
ただ、これで覚えられるスキルはその時点で閃く可能性があるスキルだけだし、スキルのレベルも使用すればいずれは上がっていくから、どうしてもウィルを使わないといけない訳じゃない」

ア「つまり、ウィルは『せいちょう』をはやくしてくれるだけってこと？」

ペ「アスタナにしてはいいこと言うじゃんか！　その通りだ！」

ア「やん！　そんなほめられたらアスタナ、ふやけちゃうよー／／／」

ペ「オマエにはそんな機能もないし、照れ方の意味が分かんねーよ！！」

ア「ウィルでできることって、それだけー？」

ペ「いや、さっきも経験値とお金を合わせたようなものって言っただろ？
『ウィルはアイテムを買うのに使ったり、イベントやダンジョンの仕掛けに使ったり、とにかく色々な場面で必要になる』。
全部使いちゃいたい気持ちは分かるけど、賢いトラベラーなら一部は必ず残しておくことを推奨するぜ！」

ア「そっかー。だいじにつかわないといけないんだー。
あ！　でもウィルをはらってりょうりをかって、りょうりをたべてウィルをてにいれれば……はっ、『えいきゅうきかん』！！」

ペ「あ、いや、アスタナ！？」

ア「ちょっと『えいきゅうきかん』してくるのー！　ごっはんー！！」

ぺ「あ、ちょっ……って、もう行っちまった」

ぺ「ウィルが上がるようなアイテムは特別な食材アイテムだから、市場に出回ることはめったにないし、あってもとても高額で、食事で獲得できるウィルの量なんかじゃとても足りないんだが……もう、聞いてないよな」

ぺ「……」

ぺ「……」

ぺ「……」

ぺ「やっぱもどってこないか。仕方ない。今日はここで終わるか。さて、気を取り直してこれが今回の復習内容だ！　しっかり頭にいれとけよな！！」

『ウィルを入手するには、モンスターを倒したりイベントを達成する』

『食事をしたり、誰かと取引することでもウィルを手に入れられる』

『モンスターやイベントで獲得したウィルの量が、レベルを決める』

『ウィルを使うと、1ウィルにつき2ポイント、獲得ウィルの値を上げることができる』

『ウィルを消費することでスキルを習得したり、習得したスキルの

レベルを上げることができる』
『ウィルはアイテムを買うのに使ったり、イベントやダンジョンの仕掛けに使ったり、とにかく色々な場面で必要になる』

ペ「ちゃんと覚えられたか？　それじゃ……」

ペ「グッナイ、トラベラーズ。良い悪夢を」

ペ「……うーん、やっぱりひとりじゃ締まらねえなぁ」

11．オーバードライブ

――たぶん、『あの日』よりも三週間ほど前。

『そういえば、夢の中の縁って、一体どんな感じなんだ？』

『どうしたの、いきなり』

縁のお株を奪う俺の唐突な質問に、縁がきょとんとした顔で答えた。

『いや、そういえば色々と夢の中の話を聞いたのに、直接夢の中でのお前の話を聞いたことがないような気がしてな』

『そうだっけ？』

どうやら自覚はないようだが……。

『そうなんだよ。仲間がどうしたとか、こういう冒険をしたとか、そういう話は良く聞くけどさ。

実際のとこ、縁がどういうキャラを動かしてるのか、詳しくは聞いてなかっただろ？』

『そっか。やっぱり光一、わたしのこと気になるんだ』

『…馬鹿なこと言うなって』

ここで動揺を押し隠せた俺を、誰か褒めてくれてもいいと思う。

それでも縁は見透かしたように含み笑いをして、ようやく俺の質問に答えてくれた。

『わたしはね。魔法使いタイプ』

『魔法使い、かぁ……』

箒に乗って空を駆ける縁の姿を夢想する。

目を細め、気持ちよさそうに風を切って空を飛ぶ縁。
高い空の上から俺に向かって手を振って、至近距離から鮮やかなインメルマンターン！
……あ、パンツ見えた。

『あ！　今なんか、変なこと考えてる顔してた！！』
『根も葉もない言いがかりはやめてもらおうか！』
というか、箒に乗るのは魔女だ。
たぶん、ちょっと違う。

『魔法使いは魔法使いでも、接近戦もできる魔法使いだからね』
『へぇ？』

縁はちょっとおどけて言った。
『空を駆ければ縦横無尽、魔法の槍は巨人をも貫き、魔法の盾は竜の吐息すら防ぐ。
そんな魔法使いに、わたしはなりたい』
『ただの願望じゃないか……』
俺はちょっとだけ呆れた。

だがきっと、夢のことをこうやって明るく話せるようになったのは、いいことなんだろう。
『まだ、ただの願望。でも、あと一か月もあれば実現してるって自信もあるよ。
そしたら光一にも、見せてあげたいけど……』
『…そんな機会があったらな』
湧き上がった一抹の寂しさを押し隠し、まるで興味がないように、俺は答える。

ただ、もしもそんなゲームがあったなら……。

——俺も、縁と一緒に魔法使いをやるっていうのも、面白いかもな。

なんてことを、俺は思っていた。

あっという間に終わってしまった戦闘にしばらく呆然と立ち尽くしてから、俺は我に返って振り返った。

「四方坂。助かったけど、今のはちょっとやりすぎだ」

いや、本音を言うと、ちょっとどころではない。

完全完璧にやりすぎだ。

こんなに派手なオーバーキルは初めて見た。
全部で十発くらい撃っていたが、たぶん三発目くらいでもうあのウサギは倒せていただろう。

一応夢の世界ということでそういうリアルさが若干抑えられているのか、魔法の当たった場所で血や肉片が飛び散って……なんてことはなかったが、それでも生き物の体が次々と吹っ飛んでいくのはあまり心臓には良くない。

そして、もっと実際的な問題。

「それに、あんなに魔法を撃ってＭＰは大丈夫か？」

それはＭＰ消費だ。
例え、さっきの魔法の矢がＭＰ消費１の魔法だったとしても、１０発撃てば消費は１０になる。

ＬＶ５で物理系の俺はＨＰが４５、ＭＰが５だった。
ＭＰに関係する理力の値が０だった俺のＭＰは参考にならないにしても、基本的にＭＰの伸びは、数値的にＨＰの半分くらいらしい。
そうすると、ＬＶ７で魔法系の四方坂は、ＭＰ３０くらいだろうか。

さっきの魔法の矢がＭＰ消費１なら最大ＭＰの３分の１、消費が２だったらもう半分以上を使い尽くし、３だったらもうＭＰ残量０、なんてこともあり得てしまう。
しかし、俺の心配は杞憂だった。

「大丈夫。あと、１６０回は撃てる」

しれっとそう言ってのける四方坂。

……１６０ときた。

これはつまり、最低でも四方坂のＭＰは１７０以上あるということを意味する訳で……。

あれ？　ということは、ＨＰが４５しかない俺って……。

考え込んでいる途中で目の前に影が差した気がして、ハッと目を上げると、

「…どうか、したの？」

急に黙り込んだ俺を、訝しげに四方坂が見ていた。

「い、いや、なんでもない。……それより、このアイテム、どうしようか」

俺は慌ててごまかして、ブレイドラビットのドロップアイテムらしいウサギの尻尾を取り上げた。

……まあ、ここは順当にいって、倒した四方坂の物だろう。

ただ、毎回毎回どちらが倒したとか言って言い合いになるような事態は避けたい。

ドロップアイテムについては何か明確なルールを決めておきたい所だが……。

そんな風に迷う俺に、

「パーティ設定、して、パーティボックスにいれればいい」

四方坂が、そんな提案をしてきて、俺は少なからず驚いた。

パーティボックスというのは、パーティを組んだ者がドロップアイテムなんかを分配する時に使う機能で、パーティ全員がアイテムの分配に同意した時、あるいは何かの事情でパーティが解散する時、そこに入っているアイテムがランダムでパーティ内の誰かに配布されるシステムだ。

それを使うのは問題ない。

もし四方坂が言わなければ、こちらが提案していたかもしれないほどだ。

しかし、俺が引っかかったのは、四方坂からその話が出て来たことだ。

「四方坂、パーティボックスなんて良く知ってたな」

パーティボックスは、『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』の真ん中辺り、『パーティについて』に書かれていたから俺は知っているが、四方坂も知っているとは思わなかった。

もしかすると、データウォッチのヘルプに書いてあったのだろうか。

俺がそんな風に納得しかけていると、

「…ペイモンちゃんが、そう言ってたから」

四方坂が、意外な告白をした。
俺は目を丸くする。

「え？　もしかして、俺が渡したあの本、読んだのか？」

その俺の質問には、四方坂はこくんと小さいうなずきで答えた。

「そ、うなのか……」
それこそ、意外だった。
当然この夢世界には持って来れないあの本を読んだというなら、それは現実世界の、この世界のことを何も覚えていない四方坂が読んだということだ。

俺のことを怒っていたようだし、そんな俺から渡された本なんて、目を通すはずもないと思っていたのに。
さらに言えば、ペイモンを『ちゃん』付けで呼んでしまうほどあの解説悪魔に親しみを感じているのも意外過ぎだった。

「ん……」
四方坂はそれ以上取り合わず、素早くデータウォッチを操作。
データウォッチを通じて、俺にパーティ編成の要請をしてくる。

すぐにＯＫのボタンを押そうとして、しかし途中で動きを止めた。

（パーティ、か）

パーティの役割は、当然パーティボックスが利用出来ることだけではない。
この世界での経験値やお金に当たる『ウィル』の分配や、アイテムの共有、一部ステータスの開示など、様々な効果を持つ。

万が一悪用されれば、どんな被害に遭うか分からない。

「なぁ、四方坂。俺と……」

俺とパーティを組んでしまっていいのか、なんて聞こうとして、踏みとどまる。

四方坂が、そんな当然のことを考えていないはずがない。

なのに俺にパーティ結成の申し入れをしてくれたのだから、その意を汲むべきだろう。

「じゃ、じゃあ、組むぞ」

それでも一応そう宣言して、俺は初めて感じる興奮と緊張を覚えながらもボタンを押す。

すぐに無機質なメッセージが表示され、あっけなくパーティ編成は終了する。

データウォッチを見ると、パーティメンバーに、四方坂が加わっている。

なんだろう。ちょっと嬉しい。

初めて携帯に友達のアドレスを登録した時みたいな感動が、胸の辺りにこみ上げてきた。

考えてみれば、四方坂とも随分親しくなったものだ。

最初は見ただけで逃げ出されたのに、何しろ今ではパーティメンバーなのだから。

「よし、それじゃ四方坂……」

俺がご機嫌な気分で、四方坂に出発を告げようとした所、

「…それ、やめて」

絶対零度の声音が、俺の鼓膜を撃ち抜いた。

「え、っと？」

何を言えばいいのか分からず体が固まった。

――ヤバい。

もしかして俺、四方坂と仲良くなれたとか調子に乗って、変な笑いとかしてたか？

縁いわく、俺は邪念がすぐに顔に出るタイプらしい。

四方坂はそういうのに鋭そうだから、もしかすると見抜かれたのかもしれない。

破滅の予感に、ドッと汗が噴き出してくる。

「四方坂って呼ぶの、やめて。その名前、嫌い、だから」

続いた言葉は、そんなものだった。

考えを見抜かれた訳じゃないのか？

いや、でも、四方坂って呼べないなら、一体……。

「……ナキ」

「え？」

驚いて小さく声を漏らす俺に、四方坂はあいかわらず虫けらでも見るような目を向け、

「こっちの方が、気に入ってるから」

それだけを言い捨てると、勝手に歩き出してしまった。
残された俺は、呆然とするしかない。

「あ、れ？　これって、どういうことなんだ？」

下の名前を呼ばせてくれるなんて、普通に考えたら仲のいい証拠で、本当だったら有頂天になって浮かれてもいいくらいのことだと思うのだが。
四方坂の俺を見る目は、どう考えても友好的なそれではなかった。
はたして四方坂との仲は縮まったのか、はたまた怒らせてしまったのか、俺には判断不能だった。

「四方さ……ナキ。ＭＰは？」
「大丈夫。あと、９３発」
慣れないながらも四方坂……いや、『ナキ』を名前で呼び始めて１時間ほど。
また名前を呼び間違えてしまって、俺はナキに見えないようにため息をついた。
１時間経っても慣れない俺も俺だが、たまにうっかり四方坂と呼

んでしまうだけで、人とか殺しそうな目でこっちをにらみつけてくるのは如何なものだろうか。
どうやら本当に四方坂と呼ばれるのは嫌いらしいのは分かったが、ちょっとは手加減して欲しい。

しかし俺と四方……ナキとの仲とは裏腹に、探索自体は非常にうまくいっていた。
というか、実際敵を見つけても、

「ナキ！　グリーンウルフ、１」
「わかった。……マジックアロー！」

とまあ、これで終わりなことがほとんどなのである。

敵が一匹であれば、相手の気付いていない間に四方坂……ナキが、マジックアローを発射。
向こうが気付いた時には魔法の矢×３を浴びて即死。

敵が二匹以上であれば一応俺も接近するが、今まで一度も敵を攻撃したりされたりしたことはない。
相手が俺に気を取られている隙に、後ろから魔法の矢が飛んできて全滅させてしまうからだ。

一応囮としての役目は果たしていると言えるが、正直ナキ一人でも魔法の矢の命中率が少し下がるだけで、十分対処が可能な気がする。

また、この森には最初に見たブレイドラビットの他に、グリーンウルフという緑色のオオカミがいたが、戦う分にはブレイドラビットとあまり変わりはない。

強いて言うならブレイドラビットよりは動きが速いので、たまに魔法の矢が４本必要になるという程度か。

今の所、俺たちが最初に遭遇した魚人にはまだ出遭っていない。これだけ見つからないとなると、もしかするとあいつは、あの凍った森限定のモンスターだったのかもしれない。

魚人と氷というのはあまり縁がなさそうに思えるが、氷も融ければ水なんだから、関係ないとも言えないだろう。

などと考えている間に、また前方に魔物の気配。

「ナキ、前方ブレイドラビット、１」

「わかった。……マジックアロー！」

魔法の矢が飛び、あっという間に魔物が空に溶ける。

これを、一体何度繰り返しただろうか。

１６０撃てるはずの魔法の矢が残り９０くらいだから、２０回程度といった所か。

ドロップアイテムを回収するついでにちらりと自分のステータスを覗くと、そろそろレベルが上がりそうだった。

パーティメンバーが倒した分のポイントは、他のメンバーにも分配される。

何もしていないのにもうすぐレベルアップというのは、流石に申し訳なかった。

（やっぱり、このままってのも良くないよな）

特に何の感慨もなく先に進もうとするナキを、俺は引き留めた。

「…ナキ。ちょっと、話がある」

「なに？」

少しだけ、機嫌が良さそうにナキは振り向いた。
間違わずに名前を呼んだからだろうか。
その楽しそうな顔を壊すかもしれない提案に気が引けたが、俺は意を決して切り出した。

「パーティのことなんだが、ちょっと考え直さないか？」
「…どういう、こと？」
案の定、ナキの顔は急に不機嫌そうになった。
いや、ちょっと変化があったように見えるだけで、ナキの顔はあいかわらずの無表情と言えるから、それは俺の思い込みなのかもしれないが。

とにかく、全部言ってしまう。
「俺は全然敵を倒してないんだし、このまま俺にもウィルが入るのは不公平だろ？
だから、パーティは解除しないか？
そうしないと、四方坂の分のウィルが減って……」
「それは、困る」
俺の言葉の途中で、四方坂が口を挟んだ。

経験値だのお金だのに淡泊そうに見えたが、どうやらそうでもないらしい。
反応を見せてくれたことに安堵と、ほんの少しだけの寂しさを感じながら、俺は話を進める。

「そ、そうだろ？　だから、一度パーティ設定を解除して……」
「だから、困る」
「…え？」

しかし、その話を再び遮られて、俺は混乱した。
ナキは責めるように俺を見て、言った。

「パーティが解除されて、あなたの……コーイチのレベルがあがらなくなるのは、困る」
「ぁ……」

バーン、と胸を撃ち抜かれたような気分だった。
あいかわらず愛想がない言い方だったし、『あなたの』と『コーイチの』の間にドエライ間があったが、そんなことはどうでもいい。
その台詞に俺は心打たれたし、ナキに初めて名前を呼んでもらって、ナキのことを、なんというか、仲間なんだとはっきりと実感した。
馬鹿なことを言った、と思うと同時に、もっと頑張らないと、とも思った。

「…いこう？」

見ると、考え込んでいる俺を置き去りに、ナキは前に進んでいた。
それでも振り返って、俺を待ってくれている。

「ああ。行こう」

そう言って、俺はナキに向かって、足を踏み出した。
――小さな決意を、胸に秘めながら。

俺の決意を見せるその機会は、意外とすぐにやってきた。

「ナキ！　前方、ブレイドラビット2！」
「わかった。タイミングを見て撃つ」

ナキの返答に、俺はうなずき返しながら、ブレイドラビットに向かって駆けていく。

（よし、ここからだ……）

今までは、ただ敵の注意を引いているだけだった。
だが、今回は違う。
このまま、ナキにばかり負担をかける訳にはいかない。

1匹目のブレイドラビットまで残り7歩くらいまで近付いた瞬間、俺は身の内に宿る力を解放する。

――スキル発動『オーバードライブ』。

瞬間、五感が拡大する。
いや、この感覚は五感ではなくて『魔力感知』だろうか。

束の間の全能感。
感覚と思考が増大、加速して、ブレイドラビットがどう動こうとしているのか、手に取るように分かる。
それどころか、背後で四方坂が放った魔法の軌跡すら、肌で感じ取ることが出来た。

ナキの放った魔法は三つ。
その軌跡から考えて、その全てが俺の目の前にいるブレイドラビットに命中するだろう。

――だから、そいつは狙わない。

俺はすぐに『魔力機動』を発動。
通常の『魔力機動』の2．2倍の高速で、三本の魔法の矢の間をすり抜ける。

「……っ！？」

背後から聞こえた、驚きに息を飲む音を心地良く感じながら、俺は魔法の矢を受ける一匹目のブレイドラビットの横を通り過ぎ、

「やっ！！」

短い気合の声と共に、まだこちらを目で追えてもいない二匹目のブレイドラビットの顔面に向かって、手にした木の枝を思い切り叩き付ける。

肉を叩く鈍い感触を手の平に感じながら、俺は『魔力機動』でさらに加速、駄目押しの力を加えて、枝を振り抜く。
渾身の手応えと共にブレイドラビットの体がひしゃげ、次の瞬間光の粒子へと変わる。

（よし！）

探索を開始してから初めて、俺の力で魔物を倒した。
同時にデータウォッチが光って、レベルアップを告げる。
ちらりと左を見ると、1匹目のブレイドラビットは、既に魔法の矢を浴びて消滅する所だった。

それを見届けると同時に、ぐん、と体が重くなる。
『オーバードライブ』の効果時間終了だ。
ＭＰが0になっているはずなので、ＭＰを補充しない限りもうこのスキルは使用は出来ない。

しかも、たった一度、敵を攻撃しただけでもう時間切れである。
自己強化スキルの中でも、恐らくダントツのＭＰ効率の悪さを誇るだろう。

――だが、同時に確信もした。
この『オーバードライブ』。確実にレアスキルだ。

効果時間はＬＶ1だとたったの6秒間。
しかし、そのたった6秒の間だけで不利な戦況を覆せるだけの力を、このスキルは充分に備えている。
効果時間中の『魔力機動』はすごい速度だったし、『オーバードライブ』に能力値アップの効果はないはずだが、あの時の木の枝の

一撃はスピードとあいまってかなりの威力を……ん？

「あ……」

俺は自分の手元を見て、思わず声を上げた。

俺には鑑定スキルなんてないが、これは見れば分かる。

【木の枝】

種別：棒

攻撃力：２

０／８０

つまり、見るからに、耐久値０。

だからまあ、なんというか……。

俺が武器として使っていた木の枝は、ぽっきりと真っ二つに折れていた。

実に短い間の付き合いだった。

武器の摩耗率１０倍という、『オーバードライブ』の意外なデメリットを忘れていた。

やれやれ、やっぱり木の枝なんかじゃ武器にならない。新しい得物を探さなきゃな、と思った所で、

「ん？　なん、だ…？」

俺は……自分の背後に迫る、冷気に気付いた。
嫌な予感に駆られながらも、俺は恐る恐る振り返る。

「四方、あ、いや、ナ、キ…？」

後ろを向いて、ゾッとした。
ナキがこっちをにらんでいる。
しかも、その眼光の鋭さはいつもの比ではない。
いつかの教室、あなたを殺すと言われた時と同じくらい、いや、
それ以上の強さで俺はにらみつけられていた。

周囲の空気が、凍る。
俺の周りだけが、氷の森以上の冷え込みを見せる。
途轍もない迫力に圧し潰され、身動き一つかなわない。

「……」
「……あ、の？」

「……」
「……な、ナキ？」

「……」
「……さっきのは、その」

「……」
「……う」

「……」

「……」

言葉が続かない。

冷たい、けれど燃えるような怒りを感じさせる瞳で彼女は俺をたっぷり十秒間は見つめ、俺があまりのいたたまれなさに顔を伏せようとした時、ようやく彼女は口を開き、一言だけ、言った。

「…危険なこと、しないで」

当然俺に、逆らうなんて選択肢はなく、

「すみませんでした…」

深々と、頭を下げたのだった。

世の中色々、ままならない……。

『スキルについて』

ペ「ハロー、トラベラーズ！　解説こそ我が生き甲斐！　ペイモン様だぜ！」

ア「はろー、とらべらーず！　みんなのアスコット、アスタナちゃんだよー！」

ペ「あー、ネクタイの一種だっけか？　だんだん苦しくなってきたなー」

ア「ネクタイだけにね！」

ペ「別にうまくねえから！！」

ア「こんど、みんなの首をしめにゆきます！」

ペ「行かんでいい！　……という所で、今日のお題は『スキルについて』だ！」

ア「あ、スキルならわかるよー。ゲームとかによくでてくる『わざ』だよねー」

ペ「お、めずらしく正解だぜ！
　ただ、ナイトメアの『スキルは、その使い方からユニーク・アクティブ・パッシブに分けられる』んだ」

ア「ふふん。『あくてぃぶ』と『ぱっしぶ』ならアスタナしってるもんねー！

『あくてぃぶ』はひっさつわざとかまほーとか、そーゆーじぶんでつかうもので、『ぱっしぶ』はぼうぎょりょくがあがるとかてきが鳥だと『くりてぃかる』がでやすくなるとか、じどーでつかわれるものでしょ？」

ペ「オマエ、ほんとゲーム関係には詳しいなぁ。
そうだな。特定の剣筋をなぞることによって武器攻撃に威力や速度ボーナスがつく武技、特定の呪文を詠唱することによって様々な現象を起こす理術、なんかがアクティブスキル。
攻撃や防御とか、特定の行動に補正がついたりするのがパッシブスキルには多いかな」

ア「えっへっへ！　アスタナさいきょーせつふじょー、だよ！」

ペ「ま、もう少しきちんと定義をすると、『アクティブはＨＰ・ＭＰなどを消費して、その時だけ効果を発揮するスキル、パッシブは意識して使おうとしなくても、ずっと効果を発揮するスキル』ってとこかな」

ア「ん？　あれー？　そういえば『あくてぃぶ』と『ぱっしぶ』はわかったけど、『ゆにーく』は？」

ペ「ああ、こいつはちょっと特殊だな。
『ユニークスキルは人によって違うから、アクティブスキルのような物もあれば、パッシブスキルのようなものもある』。
ただし、普通のスキルと決定的に違うのは、『ユニークスキルはユニーク専用の能力値であるＤＰを使う』って所だな」

ア「ほかのスキルではＤＰはつかわないのー？」

ペ「ああ。ＤＰは完全にユニークスキル専用で、ＨＰやＭＰでユニークスキルを使うことはできないし、逆にＤＰを使って他のスキルを使うこともできない。
　そのおかげでＨＰやＭＰに余裕がない時でもユニークスキルはガンガン使っていけるが、『ＤＰを使いすぎて０になると、気絶してしまう』から注意が必要だな」

ア「ふーん。『ゆにーく』じゃない『あくてぃぶ』スキルはＨＰやＭＰをつかうんだよね？
　それはつかいすぎるとどうなるの？」

ペ「前にも言ったが、ＨＰは０になると全能力値が一時的に０になる。
　ＭＰはなくなっても理術が使えなくなるだけで特にデメリットはないな」

ア「う、うーん？　と、ところでなんだけど、そもそも、『りじゅつ』ってなに？」

ペ「そこからかよ！　……はぁ。とりあえず、前にしたＨＰの説明を覚えてるか？」

ア「ひゅふのふ・はわーだよね！！　アスタナ、ちゃんとおぼえてたよ！」

ペ「うん、ヒュプノス・パワー、な？
　ぶっちゃけると、スキルっていうのもこの世界にあふれる魔力って不思議パワーを使った超常現象みたいなモンなんだが、特性の問題で、ヒュプノス・パワーは物理攻撃と物質強化以外には使いにくいんだ」

ア「ええー？　じゃあ、このせかいには火のまほーとか水のまほーはないの？」

ぺ「いいや。たしかにヒュプノス・パワー、ＨＰじゃあ火や水は作りにくい。
だったら火や水を作りやすいように、魔力を作り変えてしまえばいいって考えた奴がいたんだ。
そしてその、『火や水に変化させやすく精製した魔力を理力、マジック・パワーって呼んでる』んだよ。これが、いわゆるＭＰだな」

ア「おおー！」

ぺ「そしてその『理力を使って火や水を起こすスキルを、一般的に理術と呼ぶ』んだ」

ア「『りじゅつ』ってそーゆーものだったんだねー」

ぺ「だから、スキルの属性によって消費する物や必要な能力値が違うんだ。
具体的には、

『魔力をそのまま使う無属性のスキルには操作の能力が重要で、ＨＰを消費する。
魔力を物理現象に変える物理系スキルには強化の能力が重要で、ＨＰを消費する。
理力を使って火や水を生み出す理術系スキルには理術の能力が重要で、ＭＰを消費する』。

って感じかな」

ア「なっるほどー！　じゅうぶんのいち、くらいわかったよー！」

ペ「全然じゃねえか！　……ま、色々言ったけど例外もあってさ。例えば理力だって魔力には違いないから、ＭＰを消費する無属性スキルとかもあったりするんだが、こういう例外は大抵効率が悪いんだ」

ア「？　どーゆーことー？」

ペ「操作の能力値が高ければ少しずつ効率は上がるんだが、基本的に、『ＭＰを１精製するためには、ＨＰが３必要』なんだ」

ア「つまり、ＭＰはＨＰの三倍の『かち』があるってことー？」

ペ「そんなとこだな。なのにＭＰを普通に無属性で使っても効果はＨＰの時とほとんど変わらないから、もったいないことになるんだ」

ア「もったいないおばけがでちゃうよー！」

ペ「それと、ナイトメアでは自然界にいくらでも存在していて、いつでも体に取り込める『ＨＰと違って、ＭＰは自然回復しない』から注意が必要だぜ。

ＭＰが足りないと思ったら理力精製だ。

『理力精製をすると、１秒間につき１ＨＰをＭＰに変換できる』。

初期状態だと、３ＨＰで１ＭＰができるから、３秒で１ＭＰが回復できることになるな」

ア「えー！？　そんなにおそかったらこまるんじゃないの？」

ペ「ああ。だから、理力精製の速度は速めることができるぜ。
ただし、『精製速度を2倍にするごとに、消費ＨＰが４倍になっていく』から注意しろよ」

ア「つまり、ＭＰをはやくつくろうとしたら、ＨＰをたくさんむだにしちゃうってこと？」

ペ「そうだな。普段３ＨＰで１ＭＰ作れる奴なら、速度倍の時は６ＨＰ。４倍なら１２ＨＰ。８倍なら２４ＨＰを、１ＭＰに変えることになるな」

ア「わーん！　そんなにむだにしちゃったら、こんどはＨＰがたりなくなっちゃうよー！」

ペ「ま、『ＨＰが最大の時には余ったＨＰで自動的にＭＰを精製する』から、十分に休息を取ればＭＰも全快するけどな。
あ、ちなみにＭＰからＨＰを作ることもできるが、１ＭＰで１ＨＰしか作れないから注意な」

ア「うぅ。アスタナ、『けいさん』しすぎておなかいたくなってきちゃったよ……」

ペ「や、オマエ計算してねぇし、そういう時は頭が痛くなるんじゃねぇのか？」

ア「すうじをいっぱいきいてたから、『すとれす』で……」

ペ「オマエどんだけ数字に弱いんだよ！
まあしょうがない。なら、今日はもう終わりにするか。
これが今回の復習な」

『スキルは、その使い方からユニーク・アクティブ・パッシブに分けられる』
『アクティブはＨＰ・ＭＰなどを消費して、その時だけ効果を発揮するスキル、パッシブは意識して使おうとしなくても、ずっと効果を発揮するスキル』
『ユニークスキルは人によって違うから、アクティブスキルのような物もあれば、パッシブスキルのようなものもある』
『ユニークスキルはユニーク専用の能力値であるＤＰを使う』

『火や水に変化させやすく精製した魔力を理力、マジック・パワーって呼んでる』
『理力を使って火や水を起こすスキルを、一般的に理術と呼ぶ』
『魔力をそのまま使う無属性のスキルには操作の能力が重要で、ＨＰを消費する。
魔力を物理現象に変える物理系スキルには強化の能力が重要で、ＨＰを消費する。
理力を使って火や水を生み出す理術系スキルには理術の能力が重要で、ＭＰを消費する』

『ＨＰと違って、ＭＰは自然回復しない』
『理力精製をすると、１秒間につき１ＨＰをＭＰに変換できる』。
『精製速度を２倍にするごとに、消費ＨＰが４倍になっていく』

ア「うぅ。まとめきいてたら、アスタナ、またおなかいたくなってきた……」

ペ「おまっ！？　さ、さあ、とりあえず終わるぞ！」

ペ・ア「グッナイ、トラベラーズ！　良い悪夢を！」

ペ「まだ話すこと残ってるんだが、この続きは『スキル習得について』で詳しく話すことにするか！」

ア「やー！　もうスキルはこりごりだよー！！」

12．レベルアップ

――たぶん、『あの日』から四週間ほど前。

『うー。頭いたい……』

珍しく、俺の前で縁が弱音を吐いていた。

『風邪か？　今日はもうゆっくり休んで……』

『う？　違う違う。ちょっとゲームの設定がね。色々とめんどうすぎて、覚えられないだけ』

『また夢の話かよ……』

一ヶ月くらい前から、縁との二人きりに会話では必ずと言っていいほどこの縁の変な夢の話が出るようになった。

夢の中でゲームをしている、なんて正直信じられないのだが、話のディテールが凝っている上にちょっと縁の発想では出て来ないような言葉や考え方がたまに出て来るので、完全に疑うことも出来ない。

最近ではとりあえず真偽については判断保留にして、縁の話を聞くようにしている。

色々と複雑な思いもなくはないが、楽しそうに話す縁を見るのは、うん、まあやっぱり嫌いじゃない。

『バージョンアップって呼ばれてるんだけどね。

夢の中でゲームをやりながらゲームを作ってるようなものだから、夢を見てる他の人たちの思い付きで、どんどんゲームの仕様とか設定が変わっちゃうの！』

『そりゃ、あんまり聞いたことないな』

ゲームのルールをプレイヤーが決められたら、自分に有利な仕様

ばっかり作ってしまいそうだ。

『まあ、悪いことばっかりじゃないよ。ゲームが始まった最初の頃なんて、ＨＰが減ると怪我する仕様だったからね。ＨＰが半分とかになれば容赦なく腕とか足がちぎれ飛ぶし、瀕死になると内臓がはみだしたり血を吐いたり、とにかくもうＨＰが減っちゃったら戦えるもんじゃなかったよ』

『うわぁ……』

それは確かに、阿鼻叫喚の地獄絵図だろう。

画面越しの光景だとはいえ、自分のキャラの手足がちぎれる光景なんて見たくないし、手足がちぎれてたらそりゃあ戦闘力も落ちる。リアリティを追及しすぎたゲームの問題点が浮き彫りになった形だ。

『そこから《ＨＰは体力じゃなくて体を守るバリアのエネルギー》みたいな設定になって、ＨＰが０になるまであんまり怪我とかしなくなったのは嬉しいよ。だけど、《そうなるとＨＰもＭＰもどっちも魔力ってことになる！》《じゃあＭＰは魔法用に性質を変えられた魔力って設定にしようぜ！》《よし、ならリアリティを追及して、ＭＰはチャージ制にしようか！》みたいな感じでどんどん設定を複雑にしてくから、覚えるこっちは大変なんだよね！』

縁が怒気も露わにまくしたてた。

いつもどこか余裕を残して、何だか思わせぶりなことばかり言う縁がこの態度である。

どうやら相当腹に据えかねる物があるらしい。

『そういう大規模な設定の変更や追加とかがあるとナイトメアのｖｅｒが変わるんだけど、数十回の更新を終えて、ようやくほんの三日前に正式安定版とか銘打ったｖｅｒ１．０になって、これでしばらくバージョンアップはないかなって思ってたら、今、もうｖｅｒ１．４だよ？

ひどすぎると思わない？！』

『ええと、ひどすぎる……かな？』

俺は共感は出来ず、かといって否定も出来ず、曖昧にごまかした。

しかしｖｅｒとは、何だか本当のゲームのような雰囲気だ。

夢の世界にｖｅｒとかつけるなよ、とは思うが、まあきっとそういうのが好きな奴らが集まったということなんだろう。

『たとえて言うなら、本編は３０分で終わるのに付属の設定資料集が三冊もある同人ゲームをやってるような気分だよ！』

『流石にないだろ、そんな業の深い物！』

『……じゃあ、本編が一話進むごとにゲームの説明書を一項目ずつ挟み込んでくる素人小説を読んでるような気分！』

『もっとねえよ！』

そんな物、もはや物語を読ませてるんだかゲームの説明書を読ませてるんだか分からない。

もしそんな物と同じなら、確かに怒って当然だ、と俺が初めての共感を覚えた直後、なぜか縁の顔がふにゃりと歪む。

『でも……そういうのを覚えるのが、けっこう楽しかったりするんだよねー』

『なんだよ、それ……』

結局、不満も含めて楽しんでいるだけなのだ、こいつは。

俺は心の底から呆れながらも、俺にだってあまり見せないその無防備な笑顔を横目に、こっそりと頬を緩めたのだった。

四方坂……もといナキとは、苦労はしたが一応の意思疎通が出来た。

俺の考えからすると、使うとＭＰの減っていく魔法は温存し、雑魚戦では出来るだけ近距離攻撃で敵を倒すのが最善だと思っていたのだが、ナキの考えは違ったらしい。

相手が雑魚とはいえ、接近戦ではどんな危険があるか分からない。だからＭＰがある内はリスクの少ない魔法攻撃を積極的に使って進

むべきだ、というのがナキの言い分だった。
ちょっと過保護だとは思うが、その考え方はまあ分からなくはない。

しかし、そんな時に勝手に俺が動いた。
しかもナキの目から見ると、俺は自分から魔法の矢に飛び込んで行ったように見えたらしい。
危険を避けるために頑張って魔法を使っていたのに、その目の前で自殺まがいの特攻をかけられたとなれば、それはナキも怒るだろう。

雑魚戦で近接攻撃をしないというナキの方針はどうかと思うが、だからといってナキに一言の相談もなく敵に突っ込んだのは、どう考えても俺が悪かったとしか言えない。
話し合いってやっぱり大切なんだなと思いながら、俺は改めて、ナキと今後の戦闘の方針を話し合った。

とりあえず、接近戦の経験も積まないといざという時に逆に危ないという理由から、敵が2体以上の時はナキに魔法を使ってもらって、1対1の時は俺が接近戦を行う、という所で落ち着いた。
ちなみにだが、壊れた木の枝の代わりは鑑定技能を持つナキに見繕ってもらった。

【硬い枝】

種別：棒
攻撃力：4

81／84

すげぇ！！　なんといきなり攻撃力が2倍に！！

……いや、分かってるから何も言わないで欲しい。

とりあえずまともな武器、特に『刀剣』スキルが使える剣系統の武器の入手は急務だが、店も何もない森の中ではそれも望み薄だ。

仕方なく、この新しい相棒で早速敵と戦ってみることにした。

標的は、単独で出て来たブレイドラビット。

相手が一匹だと確認すると、

「…任せる」

と言ってナキは持っていた杖を下ろした。

心置きなく戦闘に集中する。

やはり、発見されずに相手に先制攻撃するのは無理らしいので、用心深く近付く。

そろそろこっちの枝が届くかなという距離にまで近付いた所で、

「おわっ！？」

ブレイドラビットがいきなり凄まじい跳躍力で飛び上がって刃になった耳を振るった。

反射的に避けようとしたが躱し切れず、腹をかする。

「くっ！」

生身の時にやられていたら怪我をしたかもしれないが、幸いＨＰが攻撃を肩代わりしてくれた。
驚きはしたが、体にダメージはなし。

「このっ！」

むしろ攻撃をしたことでブレイドラビットの体勢が崩れている。
ここで反撃しようと俺が攻撃に移ろうとした直後、

――ドドドドドドド！！

哀れなウサギはどこからか飛来した無数の魔法の矢に貫かれ、ハチの巣になった。
って、

「ナキ！？」

いや、どこからかじゃねえし！！
明らかに魔法の矢の発生源は、俺の背後にいたエルフ娘だった。

俺が泡を食って振り返ると、ナキは無表情ながらに若干ふて腐れたようにそっぽを向く。

「…私が手を出さないとは、言わなかった」

いや、言ってたから！！
任せるって思いっ切り言ってたから！！

とは思ったが、ここで怒鳴り散らしたりするのも大人げない。
とりあえず、ステータスのチェック。

ＨＰ　３１／４５
ＭＰ　５／５
ＤＰ　５／５

見ると、やはりＨＰがいくらか減っていた。
戦う前は全快状態だったはずなので、さっきの攻撃で１４ダメージを受けたということだ。

戦闘中は『魔力機動』でも少しずつＨＰを使うだろうし、実質３回攻撃を喰らえばアウトか。
……結構厳しい。
俺が一人で、ブレイドラビット二匹に同時に襲い掛かられたりしていたら、実際危なかったかもしれない。
密かにナキの存在に感謝しつつ、次はうまくやると決意を固める。

その次のチャンスもすぐに来た。
二匹のブレイドラビット。
一匹はナキの魔法によって危なげなく倒してもらい、いよいよリベンジマッチの開始だ。
相手に近付けばジャンプして攻撃してくることは分かったので、後の先を取る。

同じ行動を取ってくれるか心配だったが、一定距離まで近付くとブレイドラビットが前と同じように飛びかかってきてくれた。

（ここだ！）

『魔力機動』を使い、俺は一瞬で真横に移動。
刃の耳を避けつつ、さらに直角に曲がるように直進。
ブレイドラビットの斜め後ろに回る。

『魔力機動』のいい所は、予備動作が全く必要ないことと、最初からトップスピードが出せることだ。
おかげで実際のスピードよりも速く動いたように相手は感じるだろう。
攻撃のために頭を下げていたこともあって、完全に俺の姿を見失ったブレイドラビットの後頭部を、木の枝ではたく。

一回殴っただけじゃ倒せなかったので、体勢を崩した敵を、続けて二度、三度とぶん殴る。
四発目を繰り出そうとした所で、ブレイドラビットは光の粒子に変わって消えた。

（まあ、こんなもんか……）

決して鮮やかとは言い難い勝ち方だったが、一応俺の勝利だった。
それを見てとって、ナキが俺に歩み寄ってくる。
その顔は、あいかわらずの無表情で、

「…もっとうまく戦って。心臓に悪い」

勝ってなお文句を言われる俺の立場ってどうなんだろう。

それからも敵が2体の場合はナキが魔法攻撃、1体になったら俺が接近戦、という具合に片付けていく。

そしてさらに数体の魔物を倒した時、俺はようやく思い出した。

すっかり忘れていたが、『オーバードライブ』で敵に突っ込んだ時、レベルアップしていたのだ。

俺はナキに休憩を頼み、慌てて自分のステータス画面を確認した。

レベルアップによる能力値の変化を見ると、こんな感じである。

【普賢　光一】

トラベラー

ＬＶ：５→６

ＨＰ：４５→５２

ＭＰ：５

ＤＰ：５→６

魔力：７

理力：０

強化：１４

耐久：１２

俊敏：１３

器用：１７

理法：３

克己：２１
操作：６
信心：１

ＢＰ：８０→１００

ＨＰが魔力の数値である7だけ上がり、理力が０なせいでＭＰは変化なし。ＤＰはどうやらレベルと完全に連動して１ずつ上がるようだ。

そして他の能力値をチェックしてみて、トラベラーのクラスはＢＰ以外の能力が全く上がらないというのが確定した。

カスタマイズ性が高いと言うべきなのかもしれないが、正直一気にこんなにポイントを渡されても困ってしまう。

能力値を腐らせておくのはもったいないとは思うのだが、ポイントの振り直しが出来ない以上、あまり下手な使い方は出来ない。

特に、これからの転職や戦闘スタイルまで見越した能力値の割り振りをと考えると、ゲームにあまり慣れていない俺には荷が勝ちすぎる。

そういえば『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』には、トラベラーからは早く転職するべきだとか書いてあった気がするが、それはなぜだっただろうか。

こんなことなら『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』の『クラスについて』に書いてあった各職業の特徴をよく読んでおくんだったと思ったが、それこそ後の祭りだ。

とはいえ、初期値のままでは流石にこれからの探索に支障が出るかもしれない。
まあ今の所は魔法系の能力は使い道がなく、素早さも『魔力機動』があるから当面は必要ない。
モンスター狩りの効率を上げるため、強化に３０だけ振って、１４から４４まで上げた。

流石に能力値が3倍にもなると効果が出るのか、これにより、ブレイドラビットもグリーンウルフも一撃で倒せるようになった。
今なら、最初に出て来た魚人だって『オーバードライブ』なしで一撃かもしれない。

俺の攻撃力を上げたことで戦闘の効率を上げた俺たちは、途中何度か休憩をはさみながらも、黙々と巨木の根元を目指して進んで行く。
幸い出て来る敵はブレイドラビットとグリーンウルフのみで、２匹以上の群れとも遭遇しなかったので、戦闘は楽勝だった。

たまに蛇行したり行き止まりに突き当たって戻ったり休憩したりしながらも順調に進み続け、目的地と定めていた巨木の近くまでたどり着いたのは、最初に歩き始めてから2時間くらいが経った頃だっただろうか。
いい加減パターン化した戦闘と会話のない道中に疲れ始めていた時、遠くに見えていたはずの巨木が存外近くにあることに気付いた。

最後の道程を小走りで駆け抜け、一気に開けた場所に出た。
とうとう巨木本体が見えて、心の中で快哉を上げる。
ついつい木の根元まで走り寄ろうとした俺を止めたのは、ナキの

鋭い制止だった。

「…まって」

俺はナキの緊張を訝しみながらも巨木の根元に目をやって、ナキと同じように目を細めた。

「ひと…？」

そこには俺たちと同年代と思われる数人の少年少女が、こちらを値踏みするような目で見ながら待ち構えていた。

『クラスについて』

ペ「ハローー、トラベラーズ！　悪夢の世界の赤ペン先生、ペイモン様だ！」

ア「はろー、とれべらーず！　みんなのパスカット！　アスタナちゃんだよー！」

ペ「もはや意味分かんねえし！　カットしちゃダメだし！」

ア「きょーは『くらす』について教えてくれるんだよねー！」

ペ「ま、まぁな！　オレ様にかかれば、クラスの説明なんてちょちょいのちょいだぜ！」

ア「わーい、たのもしー！　それで、『くらす』ってなんなのー？『せいばー』とか『きゃすたー』とか『ばーさーかー』とかのことー？」

ペ「まあ間違ってるとも言い難いが、オマエのイメージは間違ってると断言できる！
　クラスっていうのは、いわゆるゲームで言う職業のことだ。
　自分に合ったクラスを見つけることが、このナイトメアを生き抜くコツの一つだな」

ア「『くらす』がかわるとなにがかわるのー？」

ペ「クラスを選ぶ上で重要な要素は三つあってな。
『成長値とクラススキル、それから継承率の違いがクラスの性能

の差』だって言われてる」

ア「せっつめい！　せっつめい！」

ペ「一番分かりやすいのは成長値だな。
『成長値っていうのは、その職業でレベルが上がった時に上がる能力値のこと』だ」

ア「『しょくぎょう』によって『のうりょくち』のあがりかたがちがうのー？」

ペ「その通りだぜ！
例えば、これが物理系の基本職、戦士の成長値だ」

【戦士・成長値】

魔力：３
理力：１
強化：３
耐久：３
俊敏：２
器用：２
理法：１
克己：２
操作：１
信心：１

ＢＰ：１
総合：２０

ア「？　『まりょく』とか『きょうか』はまえにおしえてもらったけど、『ＢＰ』とか『総合（かんじがよめない）』ってなにー？」

ペ「ＢＰっていうのはボーナスポイント。魔力でも強化でも、自分の好きなところに割り振れるポイントだ。
総合っていうのは、ＢＰを含めた成長値の合計だな。
これが高いクラスほど上級職だって言われてるな」

ア「あ、『そーごーりょく』ってやつだね。アスタナわかるよー！」

ペ「次はこっちを見てくれ」

【魔法使い・成長値】

魔力：１
理力：３
強化：１
耐久：１
俊敏：１
器用：２
理法：３
克己：２
操作：２
信心：３

ＢＰ：１
総合：２０

ア「あれー？　『ＢＰ』と『総合』はおなじなのに、ほかがぜんぜんちがうよー！」

ペ「こんな風に、それぞれのクラスには成長値に特徴があるから、自分のスタイルにあった職業を選ばないとうまく活躍できないんだ」

ア「『のーきんやろー』が『まほーつかい』になってもしょーがないもんねー！」

ペ「オマエ……。そ、それにクラススキルって奴もある。
　この『クラススキルはその職業になっている間だけ使える特別なスキル』なんだ。
　例えば戦士のクラススキルは、戦士のレベルに応じて攻撃力と防御力を上げるパッシブスキルだな」

ア「じゃー『せんし』になっただけでこうげきりょくとぼうぎょりょくが上がるんだね、これはおとくだよー！」

ペ「まーここまでは普通のゲームと同じだな。
　ただ、最後の継承率っていうのはちょっと複雑だからちゃんと理解しろよ」

ア「ふっふーん！　アスタナにりかいできないものなんてないよ！」

ペ「数えきれないほどあったけどな！！
　はぁ。とりあえず、知っておかなくちゃいけないことは、『レベルっていうのはクラスごとの物だから、新しいクラスに転職すると、レベルが戻る』ってことかな」

ア「なるほどー。『つよくてにゅーくらす』だねー！」

ペ「いや、それがそうとも限らないんだ。
なにしろ、『クラスを変えてレベルが戻ると、能力値も基本能力値まで戻ってしまう』からな！」

ア「え、えぇー！　じゃあいままでほかの『くらす』で上げた『のうりょくち』はぜんぶ『むだ』になっちゃうのー！？」

ペ「いや、もちろん元のクラスに転職し直せば前のレベルと能力値が戻ってくるし、他のクラスに転職しても必ずしも全てが無駄になる訳じゃない。
つまり、そこで出て来るのが継承率なんだ。
なんと、『転職する時に継承率の割合だけ、そのクラスで鍛えた能力値を基本能力値にプラスできる』んだよ」

ア「ど、どゆことー！？」

ペ「じゃあもっと正確に説明するぜ。
本来ならそのクラス以外では使えない、そのクラスになってから増えた能力値をクラス増加値って呼ぶんだが、転職する時は継承率の割合だけ、クラス増加値を基本能力値に変換できるんだ」

ア「？？　ま、ますますわかんなくなったよぅ……」

ペ「だから、例えば戦士でがんばってレベル上げして、強化を５０上げたとするよな。
この時の強化のクラス増加値は５０。
戦士の継承率は２０％だから、この場合５０の２０％、つまり１

０だけが基本能力値にプラスされるってことになる」

ア「も、もっとわかりやすく！」

ペ「だから、継承率の分だけ元のクラスでの能力値を次のクラスに持って行けるってことだよ！！」

ア「な、なるほどー。ふ、ふいんきはわかった」

ペ「これだけ説明して雰囲気だけかよ！
はぁ。とにかく、『即戦力が欲しいなら成長値が、確実に成長したいなら継承率が、それぞれ重要』なんだ」

ア「ふ、ふーん。『けいしょーりつ』ってだいたいどれくらいなのー？」

ペ「戦士とか魔法使いとかの基本職は一律で２０％だな。
上級職はまちまちで、下は５％から上は１００％まで色々あるぞ。
……おっと忘れてた。基本職は一律２０％と言ったが、一番の基本クラスであるトラベラーの継承率は、なんと０％なんだ」

ア「そ、それって、とらべらーでいくられべる上げしても、『てんしょく』したら『のうりょくち』がほんとーにぜんぶ『むだ』になっちゃうってことー？」

ペ「そういうことになるな。
トラベラーは成長が自由だから使いやすいが、他のクラスを見つけたら絶対にすぐ転職した方がいいぜ！」

ア「うわー。じゃーとらべらーのまま『こうれべる』とかになった

ら『さいあく』だねー！」

ペ「やめろって、もし高レベルトラベラーが読んでたらどうするんだよ！
　トラベラーなんて、上位クラスがあるかも分からない隠れ地雷職なんだぞ！」

ア「あれ？　『じょういくらす』ってなに？」

ペ「あ、そういや言ってなかったか。
　実は、継承できなかったクラス増加値は無駄になるのが普通だが、唯一例外があるんだ。
　それが、その職業の上位クラスに転職することだ」

ア「ええと……そうすると、どうなるの？」

ペ「例えば『剣士』の上が『剣豪』、『僧侶』の上が『司祭』といったように、クラスにはそれぞれのクラスをパワーアップさせたようなクラスが存在することがあって、それを上位クラスって呼ぶんだが、『上位クラスは対応する下位クラスのクラス増加値やクラススキルをそのまま使える』んだ」

ア「じゃ、じゃあ『けんし』でつよくなったあと『けんごう』になれば、『つよくてにゅーくらす』ができるってことー？」

ペ「その通り！　だから、特別な理由がない限り、中盤以降は上位クラスを見つけたら転職、ってスタイルが流行っているみたいだな」

ア「ふーん。あ、そうだ！　『しょくぎょう』をてにいれたり、『てんしょく』したりってどうやるの？」

ペ「『能力値一定以上とか、レベル一定以上とか、クラスごとに設定された条件を満たすと自然とクラスは獲得できる』ぜ。
　そうやってクラスを獲得したら、『ステータス画面から転職が可能』だ。
　ただし、『一度転職をするとそれから12時間はクラスを変えられない』から、それだけ注意だな」

ア「じゃあいちどの『ぼーけん』で『しょくぎょう』がかえられるのは、だいたいいちどきりってことだね」

ペ「逆に一度は変えられる訳だから、最初はMP消費の多い魔法使いで探索して、MPが切れたら戦士で肉弾戦、なんてこともできなくはないな。
　その辺りはオマエらで適当に工夫しろよな」

ア「あ、もしかしてそろそろ『まき』にはいってる？」

ペ「オマエ、何でそういう微妙な言葉だけはよく知ってるんだ？
　とにかく、今回の復習はこんな感じだ！」

『成長値とクラススキル、それから継承率の違いがクラスの性能の差』
『クラススキルはその職業になっている間だけ使える特別なスキル』
『レベルっていうのはクラスごとの物だから、新しいクラスに転職すると、レベルが戻る』
『クラスを変えてレベルが戻ると、能力値も基本能力値まで戻ってしまう』
『転職する時に継承率の割合だけ、そのクラスで鍛えた能力値を基

本能力値にプラスできる』
『即戦力が欲しいなら成長値が、確実に成長したいなら継承率が、それぞれ重要』
『上位クラスは対応する下位クラスのクラス増加値やクラススキルをそのまま使える』

『能力値一定以上とか、レベルが一定以上とか、クラスごとに設定された条件を満たすと自然とクラスは獲得できる』
『ステータス画面から転職が可能』
『一度転職をするとそれから12時間はクラスを変えられない』

ペ「ま、クラス選びってのはこういうゲームの醍醐味って奴だし、それはこの世界でも変わんねえ。
しっかり悩んで、自分に合ったクラスを見つけるんだな」

ア「と、いうわけで、またじかいまで……」

ペ・ア「グッナイ、トラベラーズ！　良い悪夢を！！」

13．旅の仲間

――『あの日』よりも三週間くらい前の夜。

『そういえば、前にリーダーやってるって言ってたよな』

『うーん、まあ別にそういう役職がある訳じゃないんだけどね』

そう言って縁は深夜の月を眺めて、まるで月明かりが眩しいみたいに眼を細めて話を始めた。

『チームの仲間はみんなわたしにはもったいないくらいいい人たちだから、リーダーの仕事なんて全然ないし。

それに……うん、大体みんな、わたしより真剣っていうか、向こうの世界で生きてる人たちが多いから、逆に一番冷静なわたしが、ストッパーになってるって所はあるのかな？』

『向こうの世界で生きてるって？』

俺の言葉に、縁はちょっとだけ悲しそうに口角を上げた。

『……なんというか、わたしはね。

朝起きて光一と会うと、帰ってきたんだなって思うし、こうやって光一と話していると、やっぱりこっちがわたしの世界、というか、自分の家に戻ってきたような気がするんだ。

でも、仲間の中には夢を見ている時にそんな風に思う人もいるみたい』

『夢の世界が、本当の世界だ、って？』

それは一体どういう感覚なんだろうか……。

『本当っていう言い方が正しいのかは分からないけど……。

夢の世界の方が、生きてるって感じがするんじゃないかな？

ある意味で、命のやり取りしてる訳だしさ』

『命のやり取りって……』
そんなの所詮、ディスプレイ越しのことじゃないのか？

『だから、わたしにはみんなの気持ち、本当の意味では分からないのかなって思う時もあるよ。
でもだからこそ、わたしは仲間のために精一杯がんばりたいと思ってる』

『……そう、だな』
部外者でしかない俺には、そう言うしかなかった。

『とにかく、ね！』
暗い雰囲気を嫌ったのか、縁はわざとはしゃいだような声を出した。

『仲間っていうのは一番大事なものだと思う！　だから光一も出来た仲間大切にすること！
それと、わたしをそれ以上に大切にすること！』

『なんか、すごい場所に落ち着いたな……』
俺は頑張って呆れの表情を作りつつ、内心は縁の言葉に救われたような気持ちを感じていた。

大樹の根元にいる少年たちを観察する。
人数は、男三人に女二人、合計で五人。
見た所、顔立ちは日本人的に見えるが、男の一人が赤い髪、女の一人が金髪になっている。

武器は構えていないが、持っていない訳ではないようだ。
腰につけていたり、背中に背負っていたり、さりげなく左手に持っていたり、それぞれが何か武器らしき物を身に着けている。
こちらを見る視線は、若干不躾な感はあっても険悪ではなかった。
警戒の色は見えるが、どちらかというと興味が勝っているような……。

と、その微妙なにらみ合いは、赤髪の少年の素っ頓狂な叫び声によって唐突に終わりを告げた。
「おー！　すっげすっげぇ！！
エルフじゃん！！　おれ初めて見たよ！！」
無遠慮な台詞にちらりと横を見る。
ナキは、特に気にした様子はないようだ。

俺が胸を撫で下ろしていると、
「馬鹿ね。髪が銀色だからハイエルフでしょ？

第一この世界ではどんな姿だって自由なんだから、関係ないわよ」
眼鏡をかけた少女が、赤髪の少年の言葉を軽くあしらう。

「バッカ、オマエ……生エルフだぞ、生エルフ！
これぞファンタジー、って感じじゃねえか！
もっと感動とかないのかよ！」
「一緒にしないで！　馬鹿はあなたでしょう？！
全く、エルフよりモンスターの方がよっぽどファンタジーじゃない」
俺たちをそっちのけで口論を始める二人。
喧嘩するのは構わないが、本人を目の前にして言うような台詞ではないだろう。

「……ナキ、大丈夫か？」
俺は心配になって小声でナキに話しかけるが、
「…隙、見せないで」
ナキは全く揺るぎもせず、ただ前を見ていた。
「分かった」
俺よりずっと冷静だ。この様子なら問題ないだろう。
心置きなく俺は前に向き直った。

そこで頃合と見たのか、黒髪の柔和な顔立ちをした少年が一歩前に出た。
「ああ、すみません、驚かせてしまったみたいですね。
……ええと、君たちは僕らと同様、現実世界からこの世界に迷い込んでしまった『トラベラー』ということでいいんですよね？」
どうやら彼が一番まともに話が出来そうだ。

ちなみにあと二人、一度も口を開いていないやる気のなさそうな少年と金髪の少女がいたが、少年の方はどこか斜に構えた様子でこ

ちらを観察しているだけだし、少女は前に出た少年の陰からこちらを見て、警戒心も露わにうーっと唸っている。
よく見ると、少女が左手に持っているのは弓だ。あれは完全に戦闘態勢だろう。
……絶対に話は出来そうにない。

さて、トラベラーという言葉を使っているということは、彼らも俺たちと同じ状況なのだろう。
ここはどうするべきか。
俺がもう一度、ちらりと横を見ると、
「…まかせる」
ナキが前を向いたまま俺にゴーサインを出した。

交渉に応じるという意味合いも込めて、一歩前に出る。
「ああ。ということはそっちも？」
俺の相槌に、やわらかい雰囲気の少年は、嬉しそうにうなずいた。
「はい。ここにいる五人全員が、日本から飛ばされた『トラベラー』なんです。
それぞれお互いに面識はなかったですし、森の別々の場所に飛ばされていたみたいなんですけど、みんなこの大きな木を目印に歩いてきて、こうして合流することが出来たんです」

「……なるほど」
俺たちもそうだったが、あの進むべき指針が何もない森の中では、この巨木を目印にして進んでくるしか選択肢がない。
そうなると、俺たちのように森の中に飛ばされた人間は全てここに集まってくるというのは当然の帰結だ。

「じゃああんたたちは、ここで俺たちみたいな奴らを待ってたってことか？」

「あ、はい。色々調べてみたんですが、パーティの設定可能人数が最大8人みたいなんです。
だから5人では少し心許ないですし、他にも僕らと同じような境遇の方がいたらと思って、ここで待ってました」
そこで、皆さんが来てくれて良かったです、と彼はさわやかな笑顔を見せた。

しかしそんな彼の笑顔をぶち壊すくらい鮮やかに、赤髪の少年が口を出した。
「なぁソーヤ！
こんだけ集まったんだから、そろそろいいだろ？
さっさと村に戻ろうぜ？」
ソーヤと呼ばれた少年の笑顔が、ひきつって固まった。
いっそ尊敬出来るくらいの空気の読まなさだった。

しかし、彼の爽やか力も負けてはいない。
「……と、いう訳なんですが、どうでしょう。
この近くに村があるんです。
色々と情報収集も出来ますし、一緒に行きませんか？」
さらりと会話に組み込んだ。

「この場所を張ってなくていいのか？」
「ええ。7人もいれば、十分でしょう。
それに、村の場所も分かりにくいという訳ではありませんから、ここに辿り着いた人なら自然と見つけると思います」
「なるほどね」
少し安心した。
それなら、誰かいなくても、ここに来た人が途方に暮れるってことにもならなそうだ。

「でも、その前に自己紹介ですね。
どうでしょう？　自己紹介がてら、互いのステータスを見せ合うというのは」
「そうだな。いいんじゃないか？」
別に見られて困るような物もない。
俺は気楽にうなずいた。

実際妥当な所だろう。
ステータス画面は開示設定にすれば他人にも見せることが出来る。
そして、それを見せれば名前なんかも載っているから、偽名を名乗ったりなんてことも出来なくなる。
何よりパーティを組むなら相手の能力値までは自由に閲覧出来るようになるのだから、秘匿する意味もない。

「おっ！　いいねいいね！　おれのステータス見るか？」
「まあ、仲間になるっていうなら……仕方がないわね」
「へぇ。楽しみだな」
「奏也様がそう言うなら……」

向こうの人たちも、一部不満そうな人もいるようだが、一応全員が賛意を示した。
当然俺もＯＫ。
しかし、

「…なら、私は抜ける」

一人、俺の隣にいた気難しい奴を忘れていた。

「お、おい、ナキ？」
俺が慌てて制止しようとするが、もう遅い。
「…さよなら」
ナキは躊躇いもせず踵を返して、森に戻ってしまった。
「何？　何なのよ……」
「さっすがハイエルフ。プライドたけー」
呆然とする少年たち。
呆然とする俺。
って、呆けている場合じゃない。
「悪い！　すぐ連れ戻してくるから！」
俺は慌ててナキの後を追った。
また追いかけっこが始まるかと思ったが、案に相違して、ナキはすぐ近くで俺を待っていた。
「…おそい」
しかも、怒られた。
すごい理不尽だ。

俺が近付くと、逃げ出したことに対して何の弁解もせず、何の説明もなしで、

「…みて」

ナキは自分のステータス画面を開いた。

【四方坂　ナキ】

魔女
ＬＶ：７

ＨＰ：４９３
ＭＰ：３５８
ＤＰ：７３２９

魔力：６９
理力：１０１
強化：１４
耐久：１２
俊敏：２３
器用：２６
理法：８１
克己：５１
操作：４６
信心：６

ＢＰ：６

ナキのステータスを見て、俺はしばし言葉を失った。
……なんというか、あれ？
もしかして俺って、ものすごく弱い？

「…そっちも」

愕然としている所にそう促されて、俺は特に考えることなくステータス画面を開いた。

【普賢　光一】

トラベラー
ＬＶ：６

ＨＰ：５２
ＭＰ：５
ＤＰ：６

魔力：７
理力：０
強化：４４
耐久：１２
俊敏：１３
器用：１７
理法：３
克己：２１
操作：６

信心：１
ＢＰ：７０

「…ダメ。減点１」
そしたらいきなりダメ出しをされた。
やっぱり俺、そんなに弱いのか？
というかいつから減点方式の採点が始まったんだ？
俺が力なく顔をあげると、ナキは見て分かるほど険しい顔をしていた。

「…ステータスは、軽々しく他人に見せてはいけない」
お前が見せろって言ったのにか！
と反射的にツッコミを入れそうになったが、堪えた。
ナキは心構えのことを言っているんだろう。
ただしそれ以上の説明を加えることなく、ナキは俺のステータス画面をじっと見ていた。
そんなはずはないのだが、ステータス画面を通して心の奥底まで覗かれている気がして、なんとなく居心地が悪くなる。
やがて、ナキは画面から顔を外してこちらを見て、

「あなたは意志が強く、どちらかというと外向的な性格で、オカルト全般に強い忌避感を持っている。
想像力に乏しく、頭の回転も特段速いとは言えないが、いざとい

う時は自分を律することができる」

占いみたいなことを言ってくる。

というか、地味に今までで一番の長台詞じゃないだろうか。

「もしかしてそれ、能力値から分かったことか？」

「…半分は適当。いっしょに歩いていれば、それなりにはわかる」

まあ、そんなものか。

確か初期能力値は性格に左右されると『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』に書いてあった。

そこを逆に辿れば、初期能力値から性格だって想像出来るはずだ。

一応推測すると、魔法系より物理系が強かったために意志が強く、外向的。

魔法系が弱いんだから当然想像力は貧困で、オカルト全般に強い忌避感ってのはたぶんそれに加えて信心が1な所を考慮したんだろう。

頭の回転は俊敏で、自分を律するというのは克己が頭一つ抜けて高いせいか。

当たっているような、当たっていないような。

とりあえず血液型占いよりは信用出来そうかな、という程度だ。

ちなみにその線で行くと、ナキは、

『凄まじいオカルト大好きっ娘で非常に内向的な性格でありながらオカルト全般に強い忌避感を持っていて、頭の回転は速めでいざと

いう時でなくても自分を律することができる』

という感じだろうか？

……意味が分からない。完全に人格破綻者だ。

「…能力値で性格が確実にわかる訳じゃない。

でも、ＤＰが高すぎる人間と、信心が低すぎる人間には、注意して」

そんな俺に釘を刺すように、ナキはそんなことを言う。

そして、信心が低すぎるのは俺もあてはまるんだが……。

あ、でもＤＰが低いから大丈夫なのか？

とにかく、初期ステータスで性格とかも分かるから他人に見せるな、とナキは言いたかったのだろうか。

しかし今回は仕方ないだろう。

パーティを組めるのはやっぱり魅力だ。

そんな風に俺が思っていると、

「…でも、今回は、しかたない。仲間は必要」

ナキが全く同じことを口にした。

以心伝心だ。

いや、ちょっと違うか。

「…でも、私は見せないし、見ない」

「それって、さっきと言ってることが違わないか？」

俺はたまらずにくちばしを挟んだ。

仲間は必要なんじゃなかったのか？

するとナキは、例の居心地が悪くなる視線で俺を見た。
「…多分、私の理術は、ひとより強い。信用できるまで、隠しておきたい」
「そうなのか？」
俺が特別弱いのかと思ってた。
俺の答えに、ナキの瞳の温度がさらに下がった。

「トラベラーの初期レベルは1、能力値の平均は12程度。本にあった」
「そ、そうだったか？」
俺は全然覚えていない。
中盤からかなりぼんやりしてたからなぁ……。

なんて思っていたら、

「…あの本、どこで見つけたの？」

話がいきなり飛んだ。

「え？　あ、ああ。『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』のことか？
あれは、妹が俺の部屋で見つけたって言ってた。
あんな物を買った覚えなんてなかったんだが、知らない内に、だな……」
予想もしない所を攻められて、俺は動揺しながら答えた。
なんと説明したものか。自分でも把握していないので判断に困る。

俺のしどろもどろな説明を聞いて何を思ったか、
「…あれは、私が貸したもの」
「は？」
「…そういうことにして」

勝手にそんなことを言って、元いた場所の方へ歩き出してしまう。
話の展開が早すぎてついていけない。
何度でも言おう。

――まったくもって、意味が分からない。

すると、いつまでもついて来ない俺を訝しげに見つめて、

「…もどらないの？」

なんて聞いてくる。
そりゃもちろん戻る。
戻るんだが、

「その前に、一ついいか？」

その前に言っておくことがあった。

「…なに？」

あいかわらず感情を感じさせない声で、でもとりあえず歩みは止めてくれる。
ちょっと恥ずかしい台詞だが、こういうことはちゃんと伝えておかないといけない。
俺は照れくさい気持ちを表情に出さないようにしながら、口を開いた。

「ナキは俺がステータスを見せた時、減点1って言ったが、それは違うんじゃないか？
見せちゃいけないのは信用出来ない相手にであって、ナキは……」

「…やめて」

だが、ナキはそんな俺の言葉を不愉快そうに遮った。

「…減点１０。あなたには何も伝わってない」

ケタが跳ね上がった！！

なんてはしゃいでる場合ではなかった。
呆れや不快を超えて、敵意すらこもった目でナキは俺を見る。
そして、

「…私を一番、信用しないで」

そんな言葉を言い捨てて、ナキは今度こそ振り返りもせず、大樹の方へ歩いていってしまった。
残された俺は、こうつぶやくしかない。

「まったくもって、意味が分からない」

一人でもこんなに苦労しているのに、たくさんの仲間なんかと一緒にやっていけるのだろうか。
そんなことを思いながらも、俺はナキを追いかけた。

ナキと合流し、巨木の下に戻ると、ナキ以外の６人で自己紹介をすることになった。

「じゃあまず僕から行きますね」

一番手は、今までずっと俺と話をしていた少年だった。

よどみなくデータウォッチを操作して、ステータス画面を出した。

【三島　奏也】

吟遊詩人

ＬＶ：３

ＨＰ：７０

ＭＰ：３６

ＤＰ：１３２

魔力：２０

理力：２１

強化：１４

耐久：１８

俊敏：１７

器用：２９

理法：１５

克己：９
操作：３０
信心：５
ＢＰ：２

物理系とも魔法系ともつかない、器用と操作が高いという、珍しい感じの能力値だった。
信心と克己が低いのがちょっと気にかかる。
ＤＰは……判断材料が俺とナキしかないので、高いのか低いのか分からない。

「見て分かるでしょうけど、一応。
三島奏也（みしまそうや）、高校二年生、吟遊詩人なんてクラスをやってます。
ユニークスキルは演奏系で、モンスターの動きを止める曲が弾けます。
他のスキルも演奏関係が多くて戦闘にはあんまり役には立ちませんけど、補助スキルなら任せて下さい」
そう締めくくり、礼儀正しく頭を下げる。

「じゃ、次はもちろんおれだよな！」
そう言って前に出たのは、赤い髪の少年だ。
自慢げに自分のデータウォッチをいじると、ステータス画面を開いた。

【穂村　陽介】

剣士
ＬＶ：２
ＨＰ：３８
ＭＰ：１６
ＤＰ：４２
魔力：１４
理力：１１
強化：１９
耐久：１１
俊敏：１８
器用：１２
理法：８
克己：４
操作：５
信心：１９
ＢＰ：１

さっきの奏也に比べると、能力値は若干低めか。
ただ、明らかな物理系で、戦闘系の能力はそれなりの値を誇っている。

「おれの名前は穂村陽介（ほむらようすけ）！
新東京第一高校の二年生。
見ての通り剣士でユニークスキルは『炎の剣』！」
「いかにもありきたりなスキルね」
「ちょっ！　てめえ……ああ、とにかく、バリバリの前衛キャラ！

剣ってのはやっぱ男のロマンだよな！」
途中、眼鏡の少女からの横槍が入ったが、それで彼の自己紹介は終わった。

「なら次はわたしが行くわね」
今度は赤髪の少年、穂村に何度も茶々を入れていた眼鏡の少女がステータス画面を開く。

【七瀬　こずえ】

槍戦士
ＬＶ：４
ＨＰ：１７４
ＭＰ：５４
ＤＰ：２０４

魔力：４１
理力：２７
強化：３２
耐久：３２
俊敏：２５
器用：１９
理法：２６
克己：３０
操作：１６
信心：３２

BP：3

どちらかというと物理系寄りの能力値のようだが、総合的に全ての能力値が高い。
さっきの二人と比べると頭二つくらい抜けている印象か。
合計値なら、あるいはナキにも匹敵するかもしれない。

「七瀬（ななせ）こずえ。高校二年生。
得意武器は槍。接近戦主体のクラスだけど、理術スキルも一応使えるわ」
「威力は弱いけどなー！」
「うるさいわね、馬鹿はちょっと黙ってなさい！
あんまり協調性のない行動は好きじゃないからそこにいるハイエルフの子みたいなのは気に入らないけど、まあこんな世界だしね。
能天気にみんなで協力、とか言えないのは心情的には理解は出来るわ。
まあ、よろしく」
内容の八割は文句ではあるが、ナキに言及したのは彼女が初めてだ。
俺はちょっとだけ、彼女に好感を持った。

四人目、金髪の少女は、まとめ役の少年、奏也にうながされて渋々といった様子で前に出て来た。
不慣れな様子で操作されたデータウォッチによって、ステータス画面が空に投影される。

【月掛　立】

弓使い
ＬＶ：１
ＨＰ：２８
ＭＰ：１８
ＤＰ：２２
魔力：１８
理力：１３
強化：１８
耐久：４
俊敏：１２
器用：１６
理法：１１
克己：２
操作：１
信心：１９
ＢＰ：０

レベルが１のせいか、かなり弱い。
特に耐久の４は脅威の低さだ。
初めて俺と対等の力の奴を見た気がした。

「月掛立（つきがけりつ）。高校一年。
トラベラーから転職したばっかだからレベルは低いけど、奏也様に楯突いたら弓でやっつけてやるから！」
何とも分かりやすい言葉で彼女は自己紹介を終える。

最後は、
「ぁ？　まだ残ってんの、オレだけ？」
今まであまりしゃべらなかった、もう一人の黒髪の少年がステータス画面を呼び出した。

【四ツ木　明人】

スカウト
ＬＶ：３

ＨＰ：５５
ＭＰ：１５
ＤＰ：１１０

魔力：１５
理力：７
強化：６１
耐久：１５
俊敏：４４
器用：３５
理法：６
克己：１３
操作：６
信心：４

ＢＰ：２

意外と言うかなんというか、偏りはあるがかなりの強さだった。

能力値の傾向は若干俺と似ているが、ポイントの高さにはかなりの差がある。
特に、ボーナスポイントを使った俺よりも強化が強いってのはどういうことだろう。
そして、ＤＰが高めで信心が低い。
こいつは要警戒か？

そんな俺の視線にも気付かず、自己紹介を始める。
「オレは四ツ木明人（よつぎあきと）。
この世界って、なかなか面白いよな。
今は何が出来るかお試し中だけど、色々分かったらオマエらにも教えてやるよ」
口を開かなければ分からなかったが、どうやらかなり傲岸不遜な性格らしい。
ただまあ、邪気がない感じであまり憎めないのが救いか。

これで相手側５人全員の紹介が終わった。
正直あまり人の名前を覚えるのは得意ではないので覚えきれた気はしないが、付き合いが長くなれば自然と覚えていくだろう。

「それじゃ、次はこっちの紹介か。
あ、まず向こうにいるのは、四方坂（よもさか）ナキ。
俺と同じ高校の二年生、というか、実はクラスメイトなんだ」
まずは、少し離れた所で悠然とたたずんでいるナキを紹介する。
自分から名乗るような性格でもないから、これくらいは言ってしまってもいいだろう。

へぇー、とか、クラスメイトなんだ、なんて相槌に適当にうなず

き返しながら、データウォッチを操作する。
さっきナキに見せたばかりだが、もう一度ステータス画面を開く。

【普賢　光一】

トラベラー
ＬＶ：６

ＨＰ：５２
ＭＰ：５
ＤＰ：６

魔力：７
理力：０
強化：４４
耐久：１２
俊敏：１３
器用：１７
理法：３
克己：２１
操作：６
信心：１

ＢＰ：７０

「普賢光一（ふげんこういち）、高校二年生。
職業はまだトラベラー。
強化だけ高いのはボーナスポイント振ったからで、本当は１４し

かなかった」
　ステータス画面を開きながら、俺はそんな風に名乗った。
　ちょっと少なめの能力値であるが、そう恥じるほどの値でもないはずだ。
　俺はそう思っていたのだが、俺のステータスを見た5人はちょっとしょっぱい顔をしていた。
　中でも赤髪……確か穂村、が、俺に寄って来るといきなり肩を組んできた。
「なぁ、お前さ。ユニークスキル、しょぼいだろ？」
「はぁ？」
　しかも、内容もかなり唐突かつ失礼だった。
「いや、だってさ。お前のスキル、ＤＰ消費いくつだ？」
「1、だったと思うが……」
　それ以上使うと射程が変化、だったはずだ。
　俺の返答を聞くと、
「あー！　お前、終わったな！」
　穂村が大げさな身振りで天を仰いだ。
　流石にちょっと不愉快になる。
　そんな気配を微塵も察知せずに、穂村は自慢げに説明した。
「ユニークスキルってのは、ＤＰ消費が高いほど強いんだよ。
　ＤＰはユニークスキルのエネルギー源だからな。
　そりゃあ多いほど強いってのは分かるだろ？」
「なるほど……」
　ここは怒る場面かもしれないが、納得出来てしまった。
　そこで例によって、眼鏡の少女……ああそう、七瀬が横

槍を入れてくる。
「あんたのDP、この中じゃ二番目に低いけどね」
「う、うるせーな！　おれの炎の剣は低燃費なんだよ！」
「さっきと言ってること違うじゃない。
ああ、普賢君、だっけ？　こいつの言うことは気にしなくてもいいから」
一応その程度の常識はあるのか、七瀬の方がそうフォローをしてくれた。

「ただ……」
と思ったのが一転、七瀬は眼鏡を光らせる。
「トラベラーのまま、レベル6まで上げちゃったのはもったいないわね。
データウォッチのヘルプでトラベラーの継承率見たけど、0%よ、0%！
あ、ちなみに継承率っていうのは転職した時に持越し出来る能力値の割合なんだけど、分かるわよね？
とにかくそういうことだから、レベルが2に上がった時点で早く転職すべきだったわね」

助けてくれたと思ったら、出て来たのは結局苦言だった。
それにしても、トラベラーは継承率0%か、そういえばすっかり忘れていた。

釣られたのか、困ったような顔をして奏也も口を開く。
「能力値を見ましたけど……特に低いという訳でもないのに、微妙にクラス獲得条件を外れてますね」
「え、クラスの獲得条件なんて分かるのか？」
俺が聞くと、奏也と七瀬は親切に色々と教えてくれた。

何でもユニークスキルを決める時にクラス条件を満たしていれば、トラベラー以外からでもスタート出来ること。
一度クラスを獲得すると、データウォッチで調べることで、そのクラスの獲得条件、成長値、継承率、クラススキルなんかが分かること。
継承率なんかの用語の説明も、データウォッチのヘルプを見れば載っているということも教えられた。

なまじ説明書なんかを持っていたせいで気付かなかった盲点という奴か。
俺が説明をしきりにうなずいて聞いていると、七瀬は、
「だから、トラベラーなんかでレベル6まで上げるとか、ありえないワケ！　分かる?!」
と言って締めくくった。

そうは言っても……。
「俺、スタートした時既にレベル5だったんだよな。
あっちにいるナキの方も、レベル7だったし」
上げたレベルなんて1だけで、それもあまり苦労してレベル上げをした意識はない。

「何それ!?
レベル5とか7からスタートなんて、そんなの聞いたことないわよ!
ここにいる他のみんなだって、全員レベル1スタートのはずよ?」
七瀬の言葉に、その場にいた全員がうなずく。
そういえば、ナキからもそんなことを聞いた気がする。
……じゃあ、どういうことなんだ?

「ええと……」

助けを求めてナキを見るが、全く反応してくれなかった。
もしかすると、さっきナキのレベルをさらっと言ってしまったのを怒っているのだろうか。
少なくとも、助けてくれる気はないようだ。

「もしかすると、普賢君と四方坂さんは特別なのかもしれないですね」

場をとりなすように奏也が言う。
特別……そうなんだろうか？
俺は首をひねる他ない。

「それより……」

そして微妙な空気になりかけた場を収めようと動いたのは、やはり奏也だった。

「これから、よろしくお願いします」

絶妙な間の取り方で、俺に手を差し出した。

「ああ、こちらこそよろしく！」

俺もためらいなく、その手を取った。

すると、

「じゃ、おれもっ！」

その手に穂村の手が重ねられて、

「仕方ないわね、わたしも」

さらに七瀬が、

「そ、奏也様に続きます！」

金髪少女の月掛が、

「オマエらこーゆーの好きだよな」

口の悪い四ツ木までがその手を重ねる。

みんな来ちゃいましたね、とばかりに目が合った奏也がにこっと笑う。
だが、まだだ。
「……ナキ！」
俺は手を重ねたまま、振り向いて彼女の名を呼んだ。
ナキはしばらく俺を見ていたが、やがていかにも面倒だというようにこちらに歩き出して、
「……はい」
指を一本だけ、俺の手にくっつけた。
「ちょっと、あんたねえ！　こんな時くらい空気を読んで……」
それを見た七瀬が肩を怒らせて叫びそうになるが、
「よ、よし！　これで全員だな！！」
俺が大声をあげて、とりあえずうやむやにする。
しかしそのせいで、なぜか俺が何かコメントするような雰囲気になってしまった。
こんな時に頼れそうな奏也に目線を送るが、奏也はにこにこと笑うだけ。
俺は仕方なく、覚悟を決めた。
「と、とにかく、これも何かの縁だ。
この7人で力を合わせて、この世界を生き抜いていこう！
え、ええっと……えいえい、おー！」
苦し紛れの掛け声だったが、
「「「「「えいえい、おー」」」」」

一応みんな続いてくれて、一安心。
もちろん声はバラバラで、それをきっかけにまた穂村と七瀬が喧嘩を始めたりしたが、それはまあいい。
俺以外のメンバーが6人いるはずだったのに、声が5人分しかないのはナキが裏切って無言を通したからだが、それもまあいい。

今はただ、この状況を素直に喜べばいいはずだ。

だって、そうだろう？
ここにいるのはまだ、お互いのことなんか何も知らない、ただここで行き会っただけの寄せ集めのメンバーだけど……。

――もしかすると俺にも、『仲間』が出来たのかもしれないのだから。

13．旅の仲間（後書き）

キャラクターの能力値管理が面倒で泣きそうです。
ちゃんと職業成長値に従って成長させていくつもりですが、たまに計算ミスがあっても許して下さい。

『イベントについて』

ペ「ハロー、トラベラーズ！　悪夢の水先案内人、ペイモン様だぜ！」

ア「はろー、とらべらーず！　みんなのバスケット！　アスタナちゃんだよー！」

ペ「カゴになっちゃったよ！」

ア「あー！　ちがわないけどちがうよー！　バスケットはバスケットでも、『きゅーぎ』のほう！
　ペイモン先生、バスケがしたいです、とかのほう！
『いまふー』にいうなら、『篭球部（ろーきゅーぶ）』ってやつだよー！」

ペ「むしろ古くねその言い方！　あと何で部をつけた！？　篭球だけでよくね！？」

ア「…ふっ」

ペ「アスタナに、鼻で笑われた、だとっ！？」

ア「アスタナにおいつきたかったら、あと十年は『しゅぎょー』して、おととい来ることだね？」

ペ「物理的に不可能なこと言われたっ！？」

ア「？？」

ペ「しかも本人が分かってない！！　ああ、もういい！　今日の議題は『イベント』について！
　こいつも結構特殊だから、ちゃんと覚えるんだぞ！」

ア「よーチェックや！」

ペ「なんかうぜえなこいつ！
　いいか？　ナイトメアの世界で言う『イベントっていうのは成功条件を達成すると報酬がもらえる、ちょっとしたトライアルみたいな物』だと思っていりゃあいいんだが、これにも種類があって、『ナイトメアイベントとカスタムイベントの二種類に分けられる』んだ」

ア「な、ないとめあいべんと？」

ペ「まあ名前の通りだ。『ナイトメアイベントは、ナイトメアの世界が自動生成するイベントで、イベント達成の報酬とイベントの難易度が釣り合っているのが特徴』だな」

ア「じ、じどーせーせー？　だ、だれがつくってるのー？」

ペ「これについちゃあ諸説あるが、基本的にはナイトメアにいる人間の願望だの想像だのが集まって作られているって考えられてる。
　だから、『ナイトメアにいる人間の考えを反映したような物が起きやすい』傾向はあるって言うな」

ア「ど、どゆことー？」

ペ「モンスターが世界の各地に出て、みんなが、あー、モンスターをぱぱっとやっつける武器なんかが欲しいなーとか思えば武器探索

系のイベントがよく出て来るし、逆に、あー、このままじゃモンスターに町が滅ぼされちゃうよーとか思えばモンスター襲撃系のイベントがたくさん生まれる、って感じかな」

ア「ほーほーなるほどー」

ペ「他にも少人数でも想いが強ければ、イベントは発生しやすくなるぜ。

例えば、全滅しそうなパーティがいて、そいつらが全員助かりたいって強く願えば、近くにいるパーティに、そのパーティの救助イベントが発生する可能性はある」

ア「ぎゃくに、おれたちもーダメだーっておもったら、『モンスターしゅーげきいべんと』がはっせーしたり？」

ペ「そうだけど……。オマエ、たまにえぐいこと言うな」

ア「…えへへ」

ペ「褒めてないぞ？」

ア「…でへへ」

ペ「何でさらに照れた！？　ま、まあいい。

さらに、『ナイトメアイベントをクリアして獲得したウィルは、レベルアップに関係する』から、積極的に受けた方がお得だぜ？

洞窟に入れば洞窟のボスの討伐イベントが発生する、みたいに、『ナイトメアイベントは条件を満たすと勝手にウィンドウが開いて開始を報せる』から、それを見て色々と判断するんだな」

ア「おっけー！」

ペ「次にカスタムイベントだが、『カスタムイベントっていうのは、人が自分で作ったイベントのこと』を言うんだ」

ア「い、いべんとってつくれるのー？」

ペ「ああ。別に難しくはないぞ。
『データウォッチのイベントからイベント作成を選んで、条件を設定するだけでカスタムイベントは作れる』んだ。
あとはそれを他人に提示して引き受けてもらうだけだな」

ア「あ、アスタナにもできるー？」

ペ「もちろん。ただ、イベントを作る上で気を付けないといけないのは、そこで『設定した報酬やペナルティは、自動で譲渡・回収される』ってことかな。
例えばゴブリンの素材が欲しくてポーションを報酬にイベントを作ったとしよう。
他でゴブリン素材を手に入れたりポーションが惜しくなったとしても、誰かがそのイベントを達成したら必ずポーションを渡さなくちゃいけないって訳さ」

ア「なるほどー。『ずる』はできないんだねー」

ペ「まあな。だからアイテムトレードに活用する奴もいる。
ただ、ズルができないのはシステム上だけのことで、カスタムイベントならいくらでも不公平な条件をつけられるぜ？
ドラゴンを倒して報酬がポーション一個とか、理不尽なイベントも設定可能なんだ」

ア「そ、そんなくそげーゆるせないよ、おにいちゃんっ！！」

ペ「何いきなり変なこと口走ってんだよオマエ！　ていうかオレ様がオマエの兄とか、いろんな意味でありえねぇよ！！」

ア「ご、ごめん。ちょっと『えきさいと』しちゃって……」

ペ「とにかくカスタムイベントは色々リスキーだから、受ける時は慎重にな。
　特に、成功条件の他に失敗条件やその時のペナルティが設定されている場合もあるから、注意するんだぞ？」

ア「はーい！」

ペ「町の冒険者ギルドなんかにある依頼の類もこのカスタムイベントだな。
　ただ、ギルド員にはある程度イベントの公平さを見抜く能力があるから、ギルドのイベントに理不尽な依頼が並ぶことはそうそうないな」

ア「へー、たくみのわざ、だねー」

ペ「あ、そうそう。人が設定するのはカスタムイベントだって言ったが、実は例外もある。
　『ノークラス、つまりトラベラーになれなかった人たちが作ったカスタムイベントは、ナイトメアイベントになることがある』んだ」

ア「『のーくらす』って、よーは『えぬぴーしー』みたいな人たちでしょー？　あの人たちにも『とりえ』ってあったんだねー」

ペ「だからオマエ毒舌……。
　ま、まあその代わり、『ノークラスは基本的にナイトメアイベントを受けられない』からそれで相殺って感じだけどな」

ア「ほじょせんもんなんだねー」

ペ「……オマエ、今日はめずらしく話についてきてるよな」

ア「天才ですから」

ペ「うざっ！
　はぁ。あとは説明してねぇのはグレードか？
　『グレードは1から始まって、モンスターを倒したりイベントを達成したりすると数字が上がっていくし、逆にモンスターから逃げたりイベントを失敗すると減っていく』んだ。
　『グレードが一定以上ないと発生しないナイトメアイベントは多い』し、カスタムイベントでもそういう設定ができるから、高額なイベントを受けたいならどんどん上げていった方がいいな」

ア「『ぐれーど』をみれば、その人の『ぼうけんしゃのらんく』がわかるってことだねー」

ペ「そういうことだな。じゃ、そろそろ復習してみるか」

『イベントっていうのは成功条件を達成すると報酬がもらえる、ちょっとしたトライアルみたいな物』

『ナイトメアイベントとカスタムイベントの二種類に分けられる』
『ナイトメアイベントは、ナイトメアの世界が自動生成するイベントで、イベント達成の報酬とイベントの難易度が釣り合っているのが特徴』
『ナイトメアイベントをクリアして獲得したウィルは、レベルアップに関係する』
『ナイトメアイベントは条件を満たすと勝手にウィンドウが開いて開始を報せる』

『カスタムイベントっていうのは、人が自分で作ったイベントのこと』
『データウォッチのイベントからイベント作成を選んで、条件を設定するだけでカスタムイベントは作れる』

『ノークラス、つまりトラベラーになれなかった人たちが作ったカスタムイベントは、ナイトメアイベントになることがある』
『ノークラスは基本的にナイトメアイベントを受けられない』

『グレードは1から始まって、モンスターを倒したりイベントを達成したりすると数字が上がっていくし、逆にモンスターから逃げたりイベントを失敗すると減っていく』
『グレードが一定以上ないと発生しないナイトメアイベントは多い』

ペ「ま、今日はこんなとこだな」

ア「それじゃあ次回まで……」

ペ・ア「グッナイトラベラーズ！　良い悪夢を！！」

１４．戦闘イベント開始（前書き）

残酷描写はじめました

１４．戦闘イベント開始

――『あの日』よりもだいぶ前。たぶん、縁が夢に慣れ始めた頃の記憶。

『ＥＳＰネットワーク？』

縁の口から出たＳＦっぽい用語に、俺は驚いて聞き返した。

『あくまで仮説、だけど。でも、それが今、一番有力ってされてるこの夢の原因かな』

そんな俺の様子を少しだけ面白そうに眺めながら、縁は言葉を選ぶようにゆっくりと話し始めた。

『遠感とか、精神感応、だったかな。

そういう超能力が無意識に使われてわたしたちの夢はつながったの。

で、その夢に触発されて、夢を見てるみんなの能力も開発されてるから、今夢を見てるみんなは全員が少なからず超能力者、なんだって』

『つまり、縁も？』

『そういうことになるね』

あっさりと言ってのける縁に、毎度のことながら俺はぽかんとするしかない。

『だから、夢の世界にやってこられるのはそういう方面に適性のある一部の人間だけらしいんだけど、その制限も段々なくなっていくんじゃないかって』

『どういうことだ？』

『夢の世界にいる人たちの能力がどんどん高まって、能力を持たな

い人を入れても機能するくらい超能力が強まっていくから、だってさ』

『ふぅ、ん？』

どんな人間でも、たぶん、それこそ俺でも、縁の夢の世界に入れる。

それはとても魅力的なことだと思うのだが、俺はなぜか、同時にわずかな恐怖も感じていた。

『うん、それは、とても怖いことだよ。

もし、ユニークの発現もできない、トラベラーになりえない人たちが、たくさんナイトメアの世界に入ってくるようなことになったら……』

『ユニーク？　トラ、ベラー？

……それってその夢の専門用語か何かか？』

突然聞き慣れない言葉を使い始めた縁に俺が声をかけると、

『あ、あはは。なんでもないなんでもない！

それより、今日学校でみりんがね……』

縁は突然違う話をし始めて、その話題はそれっきりになったのだった。

奏也（優男）の提案で、俺たちは近くの村に移動することになった。

ただ、もしかするとまだこの木に移動してくる人間がいるかもしれないので、ここで一時間ほど休憩、その際にお互いの持っているこの世界に関する情報を交換することになった。

もちろん俺たちが提供するのは、ナキ（無愛想）が古書店で偶然に見つけた『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』という本（なんて設定になったらしい）に書いてあったことだ。

そこで一つ分かったことだが、やはり俺以外の全員がナイトメアの世界の記憶を現実世界に持っていけないらしい。

そのせいでナキに対し、ナイトメアの記憶がないはずなのにどうして『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』なんて本を手に取ったのか、と鋭い質問が飛んだが、

「…なんとなく」

の一言で切り抜けたナキは、それ以上に大物だと言えよう。

俺とナキは『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』についての情報

を噛み砕いて伝え、代わりにクラス獲得条件や、モンスターの弱点情報（ブレイドラビットは後頭部が弱点らしい）などの実際に経験しなければ手に入れられないような情報をいくつか教えてもらった。

さらに、

「オマエらさぁ。さっきから話してるの、ゲームのルールばっかりじゃねえか。

この世界のルールについても、ちゃんと知っとかないとダメだぜ？」

と明人（目付きが悪い）が言い出し、にわかに明人劇場が始まった。

「まず、オレたちの身体能力についてだが……」

「きゃっ！？」

明人はちらりと横を見ると、突然近くにいた七瀬（委員長キャラ）を持ち上げた。

「ヘルプとかオマエらの読んだ本には書いてなかったようだが、能力値を上げると身体能力も上がる。

どうやら強化は腕力にある程度対応してるみたいだな。

強化が高ければ、こうやって現実では持てなかったような重い物だって簡単に持てる」

「失礼ね！　重い物なんかじゃないわよ！」

七瀬が抗議の声を上げるが、明人は無視。

「さらに言えば、体力も上がってるな。

少なくとも、ＨＰがある内はいくら全力疾走しても全然疲れない。

それに、意外とみんな気付いてないみたいだが……」

そこで、明人は自分の持ち上げている七瀬を初めて真正面から見た。

「な、何よ……」

思わず気圧されたような返事をする七瀬。

そんな七瀬に、明人は、

「なぁ、オマエさ。こっちに来てから、小便したいとか思ったことあるか？」

平然とセクハラ発言をかました。

「な、な、な、な、なぁぁ……」

流石に真っ赤になって硬直する七瀬。

「おい、だから、小便したかって聞いてんだよ！　あ、別にでっかい方でもいいぞ？」

そこにさらに追い打ちをかける明人。

「な、ないわよ！　あんた、いい加減に……」

顔を真っ赤にしながらも、七瀬が必死で抗弁すると、

「とまあ、そういうワケだ。こんだけ小便近そうな顔のコイツがないって言ってるんだから、

オマエらみんなやってないだろ？」
「しょ……トイレ近そうな顔ってどんな顔よぉ！」

明人はしれっと話をまとめた。

「オレも前に村に行った時、ちょろっとお宅拝見してきたが、そこにはベッドや風呂はあっても、便所は一個もなかった。
つまり、この世界では排泄の必要がないってことだ」
「ちょ、ちょっと！　無視しないでよね！」

そんな風に耳元で必死に叫ぶ七瀬を完全に無視出来る明人は、真性のドSかなんかだと思う。
だが、なるほど。
ドSとかセクハラ発言とかはともかくとして、明人の言うことは確かに興味深かった。

「それだけじゃないぜ。
この世界で過ごし始めて数時間しか経ってないから確証はないが、少なくともこれまで眠いと思ったことはないし、腹が減ったと思ったこともない。
ついでに言やあ、間近でこんなにエロい女を見ても、犯したいとも思わない」
「え、エロくなんかないわよ！」
七瀬は宙づりになったまま、両腕で自分の大きな胸を隠しながら叫んだ。

「つまり……」
そこで、今までじっと聞いていた奏也が口を開く。

「――つまりこの世界では、食欲も睡眠欲も性欲も、果ては排泄欲までもないと、そう言いたいんですか？」

改めて言葉にされると、それは驚くべき指摘だった。

魔法が使えたり、超人的な力を持ったりというのも、それは大きな問題には違いない。

だが、自身の体が持つ欲求、そんな物を操作されたというのは、どこか生命の根幹を弄られたような、何とも表現し難い不気味さがある。

しかし少なくとも、明人はそのような感傷とは無縁なようだった。

「つうか、そうとでも考えねえと辻褄合わねえだろ？」

奏也の言葉に、何でもないことのようにうなずいてみせる。

「まあ、正確に言えば『ない』ワケじゃあなくて、『極端に少ない』ってだけの話じゃねえかと思うけどな。

特に腹が減ったり眠くなったりしないってだけで飯があれば食えそうだし、眠ろうと思えば眠れそうだ。

排泄についちゃあ分からねえが、セックスだって……例えばこのデカ乳女が裸であっはんうっふん言って迫ってきたら……」

「しないわよそんなこと！」

「……迫ってきたら、まあ勃つんじゃねえか？　なぁ？」

最後の『なぁ？』は男性陣に対する呼びかけである。

「……」

正直、そんな所で相槌を求められても困る。

俺は無言を押し通したが、奏也は、

「さぁ、どうでしょうね」
と苦笑で返し、穂村に至ってはコクコクとバカ正直に首を縦に振って七瀬ににらまれていた。

それで気が済んだのか、
「あ、もうオマエはいーや」
もう用はないとばかりに七瀬が放り投げられる。

「…きゃん！」
乱暴された子犬みたいな声を上げて、七瀬が地面に落ちる。
「あー、大丈夫か？」
地面に背中から着地した七瀬を気遣って、手を伸ばしたのだが、

「…全く、これだから男って奴は！」

何だか凄い台詞と共に、伸ばした手を振り払われた。
……少しだけ、この世の理不尽を感じなくもない。

一方、七瀬をリリースした明人は俺たちのやり取りを気にするでもなく、主に奏也とその後ろの月掛（金髪）相手に絶好調でしゃべり続けていた。
「やっぱよ。この世界はゲームなんだよ。
冒険をするって目的のためだけに人間性すら歪められた、ゲームの世界だ。
ここではモンスターを倒したり遺跡を探検したりするべきであって、生活するべきじゃないっていうのが、この世界を創った奴の考えなんだろうぜ！
全く、本当にもう呆れるくらい実に……」
「実に…？」

奏也の絶妙な相槌に、明人はにやっと笑って言った。

「……実に、オレ好みだ！」

そして、そのあまりに清々しすぎる笑顔を見て、俺は素直に思った。

――あぁ、こいつ変態だ、と。

という次第で、思わぬ有益な情報が飛び交った一時間の休憩を終え、俺たちは村に移動することにした。

隊列は、先頭から奏也（リーダー的存在）、月掛（奏也の金魚のフン）、明人（変態っぽい）、俺、穂村（馴れ馴れしい）、七瀬（エロい？）、ナキ（無表情）の順だ。

ちなみにメンバーの呼び方が名字だったり名前だったりするのは

本人の自己申告からだ。
具体的には奏也と明人（とついでにナキ）は自分から名前呼びを希望してきた。
一番名前呼びを要求してきそうな穂村が何も言って来なかったのが意外だが、単に何も気にしていないという可能性もある。

そして、肝心のこの並びの意味だが、特に深い意図などは込められてはいない。
少なくとも村までの道には敵は出て来ないらしいので、戦闘なんかは考慮されていない。
それに、ここにいるメンバー全員が、この辺りの敵なら単独で撃退出来る程度の実力はあるらしい。

実際、村までの道は今までの森の道と比べると道幅も広く、心持ち整備もされているようで、非常に歩きやすい。
空から暖かそうな光が降り注いでいるのものどかな気分を増大させ、まるで森林浴でもしているかのようだ。

ただし、そんなのんびりとした時間の中で、穂村がしきりに話しかけてくることだけが唯一面倒くさかった。
もちろん俺だって最初から穂村の相手をしようと思っていた訳ではなく、むしろ本当は最後尾でナキとのんびり歩いて行こうかと思ったのだが、さっきの一件のせいか明人のことをあからさまに避けている様子の七瀬に気付いてしまったのだ。
気の強そうな顔にかすかな怯えをにじませているその顔に、俺はなんとなくいたたまれなくなってしまった。
そして、ならせめて俺が間に入ってやろうか、なんて仏心を出したのが、間違いの始まりだったのだ。

俺が明人と七瀬の間に陣取ったちょうどその時、月掛に話し掛け

に行ってあえなく追い払われた穂村が、更なる獲物を求めて後ろに歩いてきた。
穂村はまず明人……を華麗にスルーし、特に誰とも話をしていなかった俺を与しやすしと見たのか、ただちにロックオンしてきた。

単独で穂村を相手にするのはつらすぎる。
後ろにいる七瀬かナキを巻き込めば……と後ろを見ると、今まで会話する気配すらなかった七瀬とナキが何か話をし始めていた。
うん、なんというか、あれだな。

――全く、これだから女って奴は……。

俺は内心の悲嘆を押し隠しながら、満面の笑みでこちらに歩み寄ってくる穂村に、引きつった笑みを浮かべたのだった。

「――そんでおれはな、そのブレイドラビットの一撃を華麗にかわして炎の剣をこうズバーッと、ズバババァッとくらわしてやったワケだよ！」
「ああ。ズバーッとな」
俺は穂村の自慢話に適当な相槌を打ちながら、この話、一体何回目だろ、とぼんやりと思っていた。

俺をロックオンしてからこちら、穂村は俺に口を挟む機会も与えずにひたすらこの世界に来てからの自分の活躍を語っていた。
活躍と言っても、ただただブレイドラビットを倒す話を無限ループで聞かされているだけなのだが、その倒し方も今の話のように炎の剣で倒していたり華麗な足技で蹴倒していたり持っていた剣で一刀両断にしていたり、いちいちディテールが異なる。
というか、穂村は確かレベル2だったのでそんなにたくさんの敵を倒したはずはないのだが、その辺りはどうなっているのだろうか。

「おーいー！　ここ、重要なトコだぜぇ？　しっかりしてくれよぉ、光一ちゃーん！」
そしていつの間にか、穂村の俺の呼び方が『光一ちゃん』になっていた。
さらに何を血迷ったか、「おれのことはほむっちって呼んでくれよ！」と言ってきたが、絶対に呼ぶまいと心に決めた。

それでも穂村は心行くまで話が出来たせいか、もはや鬱陶しいほど上機嫌だ。
「いやー、なんか光一ちゃんとは気が合うなぁ！
なんだろ、おれ、光一ちゃんとは一生モノの親友になれる予感がゆんゆん来るわー！」
「そうか。俺はお前にこれからずっと迷惑かけられる予感がひしひしとするんだが……」
「あっはは！　迷惑かけあえるのが、本当の親友ってもんだろ？」
一方的にかけられ続けるのは絶対親友ではないと思うのだが。

「それで、この奥の村ってのはどんな所なんだ？」
このままでは穂村のおしゃべりが止まりそうにない。
せめて有益な話題をと思って、仕方なく俺が話を振った。

「んー。なんつーか、こう、『村！』って感じかな？」
「……そうか」
これ以上ないほどに無益な言葉を聞いてしまった。

「いや、でもほんと特徴ないんだよ！
ＲＰＧにある村みたいな感じで、家もやったら少ないし……。
あ、でも待った！　すっげえ特徴があった！
あの村、村長の娘が美人だったよ！」
「……そうか」
誰かこいつ何とかしてくれないかな？

穂村はその村長の娘の顔でも思い出したのか、気持ち悪く体を揺らし、
「あー！　早く戦闘イベントとか起きねえかなー！！
そんでおれがモンスターをこうズバーッと、ズバババァッとやっつけて、村を救っちゃったりしてさ。
そんでそんで、あの人ってばカッコイイ、とか言われちゃったりさぁ……」
「ああ。ズバーッとな」
もう相槌を打つ気力さえなくなってきたが、穂村は全く気にせず笑っていた。

というか、そういうことを言うと本当に起きそうだから困る。
ナイトメアのイベントというのは、確かある程度人の願望に左右されるのだ。
不用意なことを言ったり望んだりするのは本当にやめて欲しい。

と、俺のげっそりとした様子とは裏腹に、そこでまたどんなろくでもないことを思いついたのか、穂村の表情が一層明るくなった。
「あ、そうだ！　光一ちゃんポーションとか傷薬持ってる？

おれ、たくさん持ってるんだけど、譲ったげようか？」
「ええと、ポーションと、傷薬？　それって何か違うのか？」
俺が聞くと、穂村は鬼の首を取ったかのように大騒ぎを始めた。

「おいおい冗談だろぉ、光一ちゃーん！
ポーションはＨＰを回復する薬で、傷薬は傷を治す薬に決まってるじゃんか！
そんなの赤ちゃんでも知ってる常識だろー？」
「……赤ちゃんはたぶん知らないんじゃないか」
ちょっと悔しかったのでそう反論しておいたものの、本当に常識っぽいことだった。
こういう情報が生死を分けるのかもしれない。
穂村から教わったことだけが業腹だが、久しぶりに聞く価値がある情報を聞いた気がした。

「しょうがないなぁ光一ちゃんはぁ！
よし！　なら今だけ特別価格、１本１１０ウィルで傷薬を譲ってやってもいいぜ？」
そんな俺の様子に脈ありと見たのか、胡散くさい商人みたいなことを言い始めた穂村の後頭部を、

「いい加減に、しなさい！！」

その真後ろを歩いていた七瀬が力いっぱいはたいた。

どうやら七瀬は、ナキとの会話を早々に諦めたようだ。
改めて穂村の横まで歩いてくると、

「普賢君、だっけ？　こいつに騙されちゃ駄目よ。
傷薬なんて、この奥の村に行けば一本１００ウィルで売ってるんだから、こんな奴に無駄にお金払う必要ないからね」
そう言いながら七瀬がギロリと睨み付けると、穂村は肩をすくめた。
「ちょ、ちょっとした冗談じゃないか。
もちろん、１本１００ウィルで売るつもりだったって！」
などと弁解するが、誰も信じる者はいない。

「お前って、割とどうしようもない奴だな……」
というか、単なるバカキャラかと思いきや、案外ちゃっかりしてる奴だった。
まあ傷薬１本当たり１０ウィルのもうけとか、どう考えてもせこすぎるとも思うが。

しかし、それはそれとして、
「１本１００ウィルでいいんだよな？
だったら、２本もらうよ」
俺はそう穂村に返事をしていた。

「あなた、正気なの？！
こいつ、あなたからお金をだまし取ろうとしたのよ！？」
七瀬が声を荒げるが、
「だけど、それは七瀬がちゃんと止めてくれたんだろ？
市場価格と同じなら構わないよ。
傷薬は欲しかったし、一度アイテムトレードってのをやってみたかったんだ」
俺は冷静にそう返した。

この世界では、実際に負傷することもありそうだ。

傷薬なんて便利な物があるなら、出来るだけ早い内に手に入れておきたかった。
さっき見た時、俺の所持ウィルは大体５０００弱だったはずだ。
２００くらいの出費なら問題ない。

「よっしゃ！　毎度あり！
やっぱ光一ちゃんは話が分かるぅ！」
そして、俺の言葉を聞いた穂村の反応は早かった。
パッパとデータウォッチを操作し始め、トレード画面を呼び出す。
俺もすぐにデータウォッチでインベントリを開いて、そこからトレード画面を呼び出した。

「トレードで金額を誤魔化したりしないでしょうね？」
「し、しねえよ！」
なんてやり取りがあったせいか、トレード自体はスムーズに進んだ。
穂村が傷薬２本を、俺が２００ウィルをそれぞれ提示して、すぐにトレード成立。
２００ウィルが減った代わりに、インベントリに傷薬が２個増えた。

もらった傷薬の内１本は、その場で実体化させた。
青色の液体が入った、栄養ドリンクみたいな外見だった。
しかし、別に眺めるためにインベントリから出した訳じゃない。
俺はそれを手に取ると、
「ナキ！」
後ろで我関せずとばかりに歩いていたナキに向かって放り投げる。

ナキは突然放られた傷薬を危なげなくキャッチしたものの、
「……なに？」

不信感だけで煮固められたような視線を俺に向けてくる。

……実を言うと、俺が穂村から傷薬をもらいたいと思ったのは、半分以上がナキに渡すためだ。

人間不信のきらいがあるナキのことだ。

もしかすると村に着いても人との接触を拒み、薬を買ったりしないかもしれない。

そうではないにしても、なんとなくナキには自分自身の優先順位を低く見ているような所がある。

だから、せめてこれくらい持っていることが確認出来ないと、危なっかしくてたまらない。

だが、素直にそう言ってもナキは受け取ってくれそうにない。

俺は頭をひねって結局こう言った。

「それ、お前が持っといてくれ。

それで俺が怪我をした時、そいつを使ってくれると嬉しい」

俺がそう言い切ると、ようやくナキは小さくうなずいて、傷薬をインベントリに入れた。

まるで自分のためにナキに傷薬を渡したみたいな言い方になってしまったが、こうでも言わないとナキは受け取ってくれなかったと思う。

そうは言っても渡してしまえばこっちの物だ。

いくら何でも、ナキだって自分がピンチになればこの傷薬を使って……使うよな？

ちょっと不安になったのだが、そんな俺の脇腹を穂村が突っついてきた。

「おいおい光一ちゃーん。

光一ちゃんも隅におけないねぇ」

「……何の話だよ？」
にやにやとしている穂村の笑顔に不吉な物を覚えて、俺はわざと不機嫌そうに言葉を返した。

そんな態度も何のその、穂村はさらに楽しそうに俺の脇腹を突っつきまくった。
「おいおいごまかすなよぅ、当然いま薬を投げたエルフっ娘のことだって！
四方坂ナキちゃん、だっけか？
もうお互い名前で呼び合ってるみたいじゃん？
もしかして、付き合っちゃってるとか？」
「……違う。
名字が嫌いだから、名前で呼んでくれって言われたんだよ」
何でこいつこんなにウザいんだろうと思いつつ、俺は律儀に答えた。

「ふーん。ま、四方坂って名前、たしかに乙女っぽくはないよなぁ。うん、わかるわかる！」
「……」
お前に分かられても、と思わなくもないが、まあ触らぬが得策だろう。

「ていうかそっか、そういうことなら、おれ、アタックしてこよう！」
「はぁ！？」
そして何なんだろう。
穂村はいきなりそんなことを口走ると、ナキの方へとスキップするように歩いて行った。

「ナキさん！　こんにちは！　おれ、穂村陽介です！」
「……」
呆然と見守る俺と七瀬の前で、穂村がナキに放った第一声がそれだった。
……キャラ変わってないか、お前。
そんな俺たちの呆れた視線など、当然気が付くはずも気にするはずもなく、
「あ、あのさ、あ、あのですね。ナキさんって杖持ってるけど、一体どんなタイプのキャラを……」
「――それ、やめて」
「ぅえ…？」
ノリノリで話し掛けていこうとしたが、それはナキの冷たい声で止められた。
「あ、あの、ナキさん？　それって言うのは……」
「…そのナキって呼ぶの、やめて」
他人の枝毛くらいの関心のなさをにじませ、穂村と目も合わせないままナキが告げる。
「えぇ！？　ええっと、でもよぉ……」
穂村が話が違うぜ、みたいな目で俺を見るが、そんなん知るかというのが正直な感想だ。
「…ナキって名前、気に入ってるから」

「う、うん？」
「…知らない相手に、呼ばれたくない」
「……おう！！」
知らない相手とまで呼ばれ、穂村が撃沈した。
なんというか、ナキって本当に気難しい奴なんだなと再認識させられる一幕だった。

そして一度は心折られたと思われた穂村だが、そこから驚異の粘りを見せ、ナキに無益な突撃を繰り返した。
「……」
ナキはしゃべることはおろか穂村を見ることすらしないが、本当に迷惑そうだ。
ここは流石に俺が助け舟でも出してやるかと思った時、
「あー。いいよいいよ。ここはオレが行く」

いつ嗅ぎつけたのか、前を歩いていたはずの明人が俺の肩に手を置いていた。
というか、どういう風の吹き回しだ？
「……お前が？」
俺が訝しげに明人を見返すと、明人はにやっと男くさく笑った。
「そんな顔するなって、分かってる。
似合わないってんだろ？
でもオレ、ワガママだからよ。
自分以外のワガママなヤツってのは我慢ならねえんだ」

「……はぁ」
良く分からん理屈だった。

だがとにかく、
「ま、任せときなって！　見事に解決してやるからさ！」
明人は俺の肩から手を放すと、ナキと穂村の所に歩いて行ってしまった。

しかし、精神的に無敵の耐久力を誇る穂村にどうやって対抗するつもりなのか、俺が多少ワクワクしながら見ていると、

「よーっす、ほむっちぃ！！　今日もご機嫌してるかーい！？」

何だかすっげえ馴れ馴れしい態度で穂村の肩にのしかかっていった。
あとセンスがおかしいし、ほむっちって呼び方を考えるとこいつもしかして俺たちのやり取り聞いてたんじゃないかという疑惑も出て来た。

ともあれ、
「え？　あ？　え？　なに？」
この先制攻撃には、流石の穂村も混乱する。
さらに、
「いやいや、そんな他人行儀な言い方するなよ！
オレとほむっちの仲じゃないか！
オレのことはアキアキでいいよ！！」
聞いてないどころか誰も名前呼んでないのにそんなことを言い始めた。

「いや…え？　それでアキアキは何の用？」
そして穂村も適応した！
だがまだ場の主導権は明人にあった。

さらに馴れ馴れしく肩を引き寄せると、本当に嬉しそうに言う。
「じっつはよー！　あ、ほむっちって、第一高なんだろ？」
「ん？　あ、あぁ。そうだけど……」
これにはあの穂村も押されていた。
まさかこういう制し方があったとは、勉強になる。

七瀬も同じ感想を持ったのか、
「まさか、あいつを撃退するのにこんなやり方があったなんてね。
やるじゃないあの男も……。
あ、セクハラは許さないけどね！！」
ちょっと混乱した感じの賛辞を送っている。

さらに気が付くと、
「一体どうしたんですか？」
「せっかく奏也様とふたりでおしゃべりしてたのに……」
「…コーイチ、気をつけて」
前を歩いていた二人と穂村に話し掛けられていたはずのナキまで
隣に来ていて、全員で『穂村ｖｓ明人』の好カードを観戦するよう
な運びとなっていた。

だが実は穂村は押しに弱いのか、状況は既にワンサイドゲームの
様相を呈していた。
「マジかぁ！！
やー、実はオレの中学時代のダチが第一高行っててよぉ！

で？　学年は？　あぁ、二年だっけ？
んじゃ、クラスは？」
「え？　あ、ああ、２－Ｃだけど……」
上がり続けるテンションに、穂村は戸惑いながらも答える。
それを聞いて、うんうんとうなずく明人。
「ふーん。２－Ｃかぁ。あ、ところでよぉ」
そこでふと、これ以上ないほどの自然な動作で上を指さし、
「あの木の上にあるのって、アイテムじゃね？」
「ぇ？　それってマジ――」
その指に釣られ、穂村が上を向いた瞬間、だった。
――銀光が、閃く。
その光は無防備に晒した穂村の喉をぱっくりと開き、
「…ぇ？」

わずかな時を置いて、そこから間欠泉のように赤い奔流が噴き出した。
その赤が、笑顔で穂村を見下ろす明人の体を濡らしていく。

「うっわ！　なんだこの勢い！　ありえねぇって！！　シャワーみてぇ！！」

そう言って彼が笑い出しても俺は、いや、俺たちはまだ、目の前で何が行われたのか、全く理解出来ていなかった。
目の前で起こった起こった凶行を、正しく認識出来なかった。

だが、

「あっはは！　こんなベタに引っかかる奴、いまだにいるんだな！！」

そうやって明人が血染めのナイフを閃かせ、さらに甲高い笑い声を上げて、

「…ぁ、ぇ、ぁぁ！！」

いまだ血の噴き出す喉を押さえた穂村が、驚愕の表情を浮かべて地面に倒れ伏した所で、俺の頭も動き出した。

「……お前、一体、何してるんだよ？」

俺の喉から、自分の物とも思えないようなかすれた声が出る。
だが、問題ない。
相手には届いた。
そして奴はこう言った。

「もっちろん、慈善事業だよ。
こいつ、さっき戦闘イベントが欲しいとかって言ってただろ？
だからさ。オレが、プレゼントしてやったんだよ」

あぁ、いつもの感覚が来る。
俺の意思とは無関係に、頭の芯が冷えていく。
轟々と、頭の回転だけが加速を始める。

「さぁ、どうする？　戦闘イベント、開始だぜ？」

『戦い』が、今始まった。

『属性について』

ペ「ハロー、トラベラーズ！　オマエらの旅を完全サポート！　お助け悪魔のペイモン様だぜ！」

ア「はろー、とらべらーず！　みんなのリストカット！　アスタナちゃんだよー！」

ペ「手首切ってどうすんだよ！　ってか怖いわ！！」

ア「アスタナも、そろそろこの『ろせん』に『げんかい』をかんじはじめているよ……」

ペ「はぁ。ま、もしかするとここでお別れなトラベラーもいるかもしれないし、そろそろ潮時かもしれねえな」

ア「え、ええー？！　この本の『のろい』がとうとう『はつどー』して、ここまでよんだ人みんな、リストカットしてしんじゃうのー！？」

ペ「何だその恐怖の本！？　これにはそんな呪いかかってねえよ！！　……そうじゃなくてだな。今回の『属性について』で、この『ないとめあ☆　の　あるきかた♪』の初級編は終わりなんだ。

初級編まで読んだとなれば、一応はナイトメアの最低限のルールは分かっただろうから、この本から卒業する奴もいくらか出そうだなって話だよ」

ア「ふむん。じゃあ『ちゅーとりある』はもうおわり、ってことでよろしいんだね？」

ペ「言い方は引っかかるが、まあそんな感じだな。
　当然この本自体は中級編、上級編とまだまだ続いていく。その中にはもちろんオマエらにとって有益な情報が詰まってるが、あんまり前情報が多すぎてもゲームはつまらなくなっちまう。
　個人的な意見を言わせてもらうと、ここらで一度本を読むスピードを緩めて冒険に専念してみる、ってのも、ナイトメアを楽しむ賢い手段かもしれないぜ？」

ア「きみたちはこの本のつづきをよんでもいいし、よまなくてもいい。…だね？」

ペ「ま、結局読む読まないは自由意志。オレ様たちがとやかく言うことでもねーやな。
　……つーわけで、今回のテーマは属性、だ！」

ア「え、えーと、『めがねもえ』とか、『ねこみみめいどいのち』とか、『つよきおねえさまけいこそしこう』とか、そーゆーの？」

ペ「ぜんっぜん違う！！　攻撃属性とか耐性属性とか、そういう奴のことだよ！
　いいか？　このナイトメアの世界には、『四つの主属性と、それに付随する無数の副属性がある』んだ」

ア「『しゅぞくせー』と『ふくぞくせー』？　それってなにかちがうのー？」

ペ「主属性がスキルの大まかな方向性で、副属性が細かい性質って感じかな。
　とりあえず『アクティブスキルには、必ず四つの主属性の内どれ

か一つの属性がついている』んだ」

ア「『しゅぞくせー』がちがうとなにがかわるのー？」

ペ「一番の違いは威力に関わる能力値かな？
スキルの説明の時に少し話したけどな。四つの主属性、つまり『物理・理術・無・時空のそれぞれどの属性のスキルかによって、対応する能力値が違う』んだよ」

ア「え、えーと？　そういうこともあった……ですか？」

ペ「中途半端に思い出してんじゃねえ！
って、こんなネタ会話やりたい訳じゃないんだよ！　つうかむしろお前全然覚えてないだろ！？
……はぁ、仕方ないからもう一度だけ言うぞ。
『物理属性なら強化、理術属性なら理法、無属性なら操作の能力値がスキルの威力に関係する』ぜ。
ちなみにこれは前に言わなかったが、『時空属性のスキルだけは、能力値によって威力が変わったりしない』んだ」

ア「ほへー。『じくー』だけはとくべつなんだねー」

ペ「それぞれ色々特徴があるけどな。
基本的に『全ての生き物には属性に対する耐性が存在して、攻撃を受けた時、耐性が低ければその属性のダメージは大きくなるし、耐性が高ければその属性のダメージは小さくなる』。
ただし、『物理属性と理術属性両方に強い耐性を持つ魔物は少ないし、時空属性に耐性がある魔物はほとんどいない。そして、無属性だけはそもそも耐性が存在しない』んだ」

ア「う、うーん？　じ、じんせいいろいろだねー？」

ペ「人生まったく関係ないけどな！
　で、あと関係するのはスキルの威力だな。これにも属性ごとに傾向があって、能力値補正、耐性なしの状況では、『時空＞物理・理術＞無』って法則が大体成り立つ。
　特に『無属性スキルは誰にでも効く代わりに威力が弱め』なんだ。万能だからって無属性スキルばっかり使ってると火力不足で押し切られる可能性大、だぜ？」

ア「つまり、『じくー』こそさいきょー？」

ペ「いや、『時空属性には能力値補正が乗らないし、消費ＭＰが多めで燃費が悪い』。どれも一長一短ってことさ」

ア「ほほー？」

ペ「まあそんな風に主属性はスキル一つに対して基本一つしかつかないが、そこに複数の副属性がついたりするんだ」

ア「あー、うんうん。あるよねー」

ペ「……どんどん適当になってるな、オマエ。
　副属性は無数にあって、しかもナイトメアの世界のバージョンアップの度に増えるから把握するのも面倒なんだよな。
　ただまあ主属性によって付きやすい副属性が決まっていて、『物理だと斬・殴・突属性、理術だと火・水・風属性なんかの性質を示す属性が付きやすくて、時空属性にはほとんど副属性は付かない。そして、無属性には副属性が付くことは絶対にない』んだ」

ア「まあ『むぞくせい』の『ひぞくせい』スキルとかいみわかんないですしね」

ペ「ま、まあそうだな……。
だから大抵は、物理・斬属性のスキルとか、理術・水属性のスキルみたいなのが多いな。
ただ、物理・欧・火属性のフレイムストライクとか、理術・土・突属性のアースグレイブとか、色々な属性の組み合わせはあるぜ」

ア「じつにきょうみぶかい」

ペ「オマエ、悪いもん食ってないよな。
副属性がたくさんついてた場合、属性耐性は属性全部の平均みたいなので計算されるから、必ずしも多いから有利って訳じゃない。
ま、この辺りは自分で試行錯誤してやってってくれよな」

ア「ふむ。べんきょうになるな」

ペ「……。きょ、今日の復習な」

『四つの主属性と、それに付随する無数の副属性がある』
『アクティブスキルには、必ず四つの主属性の内どれか一つの属性がついている』

『物理・理術・無・時空のそれぞれどの属性のスキルかによって、対応する能力値が違う』
『物理属性なら強化、理術属性なら理法、無属性なら操作の能力値がスキルの威力に関係する』
『時空属性のスキルだけは、能力値によって威力が変わったりしな

い』

『全ての生き物には属性に対する耐性が存在して、攻撃を受けた時、耐性が低ければその属性のダメージは大きくなるし、耐性が高ければその属性のダメージは小さくなる』

『物理属性と理術属性両方に強い耐性を持つ魔物は少ないし、時空属性に耐性がある魔物はほとんどいない。そして、無属性だけはそもそも耐性が存在しない』

『無属性スキルは誰にでも効く代わりに威力が弱め』

『時空属性には能力値補正が乗らないし、消費ＭＰが多めで燃費が悪い』

『物理だと斬・殴・突属性、理術だと火・水・風属性なんかの性質を示す属性が付きやすくて、時空属性にはほとんど副属性は付かない。そして、無属性には副属性が付くことは絶対にない』

ペ「最後だし、ちょっと量が多かったが大丈夫だったか？

……さて、ご苦労さん。これで初級編は終わりだ。

中にはしばらくお別れって奴もいるかもしれないが、オレ様はオマエらがまたこの本を開くって信じてるぜ？」

ア「そしてそのとき、あなたの目のまえには『ちてきキャラ』に『かれーなへんしん』をとげたアスタナのすがたが！？」

ペ「あ、それはないな」

ア「えー？！　なんでー？！」

ペ「それじゃ、また会う日まで……」

ペ・ア「グッバイトラベラーズ！！　良い悪夢を！！」

ア「じゃ、アスタナは『ちてき』になるために、さっそく『めがね』をさがしにいくのー！」

ペ「うん。まず知的になる第一歩として、オマエの中の知的像から改善していこうか」

ア「ふっ。しんぱいするな。アスタナの『でーた』によると……かちかちかちかち……アスタナが『ちてき』になるかくりつ、ひゃくにじゅうはちぱーせんと！」

ペ「だからそれが既にバカの発想なんだよ！！」

15．牙を剥く悪夢

――学校が、臨時休校になった。

考えてみれば当然の処置だ。

こんな時に勉強したいと考える奴もいないだろうし、保護者だって学校に通わせたいはずもない。

かと言って、いきなり家に帰れと言われても困ってしまう。

この時間、家には誰もいやしないだろうし、他に行く当てもない。

なんだかんだと考えながら、俺の足は自然と自宅への帰路を進んでいた。

まるで活気のない町並みを歩いて、何事もなく家に帰り着く。

隣の家を見上げても、やはり人の気配がしない。

もしかして……。

『――ッ！』

最悪の想像を振り払って、俺は逃げるように自分の家の鍵を開けた。

『……ただいま』

俺はあいさつというより、独り言みたいにそう言い捨てながら、玄関の扉を開けて、

『おかえり』

すぐにその返答が返ってきたことに驚いて、玄関の前でしばし、硬直した。

『おかえり、光一』

それが不満だったのか、自分の存在を主張するみたいに、もう一度声がかけられる。

それで、ようやく俺の硬直は解けた。

『なんだ、縁か』

そう安堵の吐息を漏らしてから、違和感に気付く。

……そうだ。

『ちょっと待て。お前、鍵はどうしたんだよ?』

こんなご時世だからこそ、空き巣が横行する可能性はある。

俺はそんなことを思いながら朝、しっかりと鍵をして出たのをはっきりと覚えている。

だが、

『わたしは、魔法使いだから』

本気とも冗談ともつかぬことを言って、縁はさっさと奥に入っていってしまった。

俺は手早く荷物を自室に置いて、手洗いなどを早々に済ませ、制服を着替える手間も惜しんで居間に戻った。
縁は、自分の家のようにくつろいでそこに座っていた。

やっぱりこれは異常だ。
縁は唐突な奴だが、他人の家に勝手に上がり込むようなことはしなかった。

『どうしていきなりうちに来たんだ？』
意識して少し険しい表情を作って俺はそう問い掛けるが、
『光一に会いに来るのに、理由なんているの？』
そんな台詞でごまかそうとしてくる。
だが、そんな言葉にすら心臓が跳ねてしまうのは、思春期男子の性という所か。

俺は内心の動揺を外に出さないように、出来るだけ気のない調子で言う。
『そういう台詞は、恋人にでも言ってもらいたかったよ』
『そう？　わたしはそれでも構わないよ？』
それは、何を考えて口にされた言葉だったのか。
俺は真意を探るように縁と目を合わせて、すぐに逃げた。

『ちょっと、飲み物を取ってくる』
自分でも弱いなと思いつつ、跳ねる鼓動を落ち着かせるために、少し時間が必要だと思った。
冷蔵庫に何かあっただろうか。
そんなことを考えながら、二、三歩、キッチンの方へ歩を進めて、

『……縁？』

背中にぶつかってきた縁の熱と重みに、俺は上ずった声を出した。
何が起こったのか、分からない。
ただ、ゆっくりと俺の胸にまで回された縁の手は、小さく震えていた。
くぐもった声が俺の耳を打つ。
『――昨夜、みりんが、消えたって』
まさか、とか、嘘だろ、とか、そんな言葉が頭を巡って消える。
だが本当は、いつそんなことが起こってもおかしくないことは、俺の理性がはっきりと理解していた。
『……バニシング・ドリームか』
人が消える夢、悪夢への誘い、永遠の夢への招待状。
誰よりもその夢に詳しい縁のおかげで、俺は他の多くの人よりも事態に詳しいはずだった。
それでも、身近な人間が巻き込まれたと聞けば、流石に穏やかではいられない。
『大丈夫。みりんのことは、わたしが《向こう》でどうにかするよ。だけど、わたしにももう、時間がない』
『もう危ない、のか？』
俺の問いに、背中で縁がうなずく気配。

『わたしの仲間も、二人、取り込まれた。
わたしについているのは《魔力親和性》だから、《魔力侵食》の人よりは進行が遅い、けど、この前レベル８に上がったから、あと一週間ももたないと思う』
『確か、レベル１０まで行ったら終わり、なんだよな？』
『たぶん、ね』
くぐもった、苦々しい声を聞く。

――《魔力親和性》。

縁が夢の世界での記憶を現実に持って来られる理由とされるスキル。
本当の所は知らない。いや、誰にも分からない。
だが、決して上げ過ぎてはいけないスキルだということは分かっている。

『だから、わたしは近い内に戦うよ』
『たたか、う？』
『うん。わたしは、あの悪夢の世界を、打ち倒す。そして――』
物騒な言葉とは裏腹な、どこか切なげな声で、縁は後ろから俺の耳にささやいた。

『――絶対、光一を守るから』

――そう、そうだった。

――これが、俺が思い出そうとして、でも絶対に思い出せなかった記憶の欠片、その一つ。

――全てが変わった『あの日』より、二日だけ前の出来事だった。

「おっ？」

いかにも愉快そうな明人の声にその視線の先を追ってみると、地面に倒れていた穂村が粒子になって空に溶けていくのが見えた。

視線を戻すと、明人の体の半分くらいにべったりとついていた穂村の血液も、時を同じくして剥離して、空に溶けていく。

「へぇぇ。『トラベラー』だって、死ぬと粒子になるワケね。こいつぁ興味深いな。ウィルが増えたかどうかも見てみたいが、そんな時間は流石にねえかな？」

明人はやっぱり楽しそうにこちらに流し目を送る。

それに初めに反応したのは、俺の隣に立っていた七瀬だった。全身から怒りを発散させながら、明人に向かって一歩前に出る。

「あなたは！　自分が何をしたか、ちゃんと分かって――」

「じゃあオマエは、オレが一体何をしたか、ちゃあんと分かってんのかよ」

糾弾の声は、しかし明人の言葉に上書きされた。

「確かにこいつはオレに喉掻っ切られて消えた。……それで？」

「それで、って、あなたは、人を、殺して……」

「そこだよ！！」

強気に出ていた七瀬をビクッとすくませるほどの大声を、明人は出した。

大袈裟な身振りで、まるで演説のように声を張り上げる。

「どうしてこれが人殺しなんだ？

そもそも人殺しだとして、これは悪いことなのか？

ここは、ゲームの世界なんだぜ？」

「げ、ゲームの世界だって、やっていいことと、悪いことが……」

七瀬はかろうじて反論するが、

「なぁ、ここがゲームの世界なら、ＰＫってのはルールの内なんじゃねえか？」
「そ、んなこと……」
「見ろよ」
明人の言葉に、俺を含めた全員の視線が穂村の体があった場所に向かう。
そこには、穂村が持っていた物なのか、いくつかのアイテムが落ちていた。
「人を殺すとアイテムドロップってのは、つまりＰＫ用の仕様なんじゃねえか？
ゲームならプレイヤー殺して経験値やアイテム奪うのも、遊び方の一つ、だろ？
オレはただ、オレなりに真剣にこの『ゲーム』を遊んでるだけなんだよ」
明人は全く悪びれる様子もなく、ゆっくりと七瀬に歩み寄っていく。
「それ以上、近付かないで！」
七瀬がヒステリックに叫んで槍を構える。
その先端が明人の体に突きつけられるが、それでも明人は表情を変えなかった。
その時、
「…あぶない。私の射線を、遮ろうとしてる」
不意にぼそりと、俺の右隣でナキが声を上げた。
そして、気付いた。

明人は巧妙に体の位置をずらし、ナキと自分の間に七瀬の体を入れ、ナキの攻撃を封じようとしている。

――つまり、何か仕掛けてくる?!

俺がその理解に至った直後だった。

明人が動く。

「わかったわかった。

オマエらはオレがこんなモン持ってるから信じられないんだろ?

なら、よ……」

明人は槍が自分の体に触れることにすら無頓着に、更に七瀬に体を寄せ、ゆっくりとナイフを持っている右手を上げる。

そして、

「このナイフ、捨ててやれば満足なんだろ?

……ほら!」

右手に持ったナイフを、上に放り投げ、

「…ぁ、え?」

次の瞬間、七瀬が身を二つに折って、地面に崩れ落ちていた。

「ぁ、うぁ、いた、い…痛い!!」

お腹を押さえて苦しむ七瀬を、明人は傲然と見下ろす。

「まったくよぉ。オマエらホントにちょろすぎなんだよ。
なぁんで一度やった手に、二度もひっかかるかねぇ？」

そんな明人が左手に持っているのは、さっき右手が投げたはずのナイフ。

しかも、誰かの血によって真っ赤に染まっている。

――ナイフを上に投げて注意を向けた瞬間、左手で七瀬の腹を刺した？！

そうとしか考えられない。

上に投げたはずのナイフが左手に移動したことだけが解せないが、流れ自体は穂村の時と同じ。

明人が危険だというのは分かっていたはずなのに、また目の前で犠牲者を出してしまうとは……！

俺が怒りを込めて明人を睨みつけると、

「あー、だいじょうぶだいじょうぶ。たぶん死んでねえよ？
こいつを殺したって、別にいいことないしな」

明人は軽薄に両手を横に開いて無実をアピールする。

「どういう、ことだよ？」

「あの穂村ってのを殺したのは、まあ単純にむかついたってのもあるにはあるが、この世界で死んでも本当に現実世界に影響がないか、調べたかっただけだ。

新東京第一高校の二年C組、だったか。
それだけ分かりゃあ十分調べられんだろ」

残った四人の鋭い視線を受け流しながら、明人はへらへらと笑った。

「問題は、現実でのオレがそれを覚えてられるかってことだが、そこのエルフ娘もなんとなく『ナイトメア』って単語を覚えてたみたいだし、まあ現実に戻る時に強く念じてればきっとちょっとは覚えてるだろ。
ま、失敗しても別にオレにリスクはないしな」
「そんな、ことのために……」

俺の左隣、金髪の月掛が、思わずといったようにそう漏らす。
その意見には、全くの同感だった。
そのために穂村は消えて、七瀬はまだ死にはしていないが、今も苦しんでいる。
正気の沙汰じゃない。

「――で、どうする？」

明人がにやにや笑いながら聞く。
主語も何もない言葉だが、その意味は明白だった。

「オマエらは許せないんだろ、オレを。
仲間の仇ー、とかって思っちゃってるワケだろ？
だけどよぉ……それでオマエら、オレを殺せるのか？
それってオレがしてることと、一体何が違うんだ？」

「……」

誰も、何も、答えられない。
確かに明人は許せないと、そう思う。
感情では、確かにそう思う。

だからといって、明人を殺してもいいのかと問われると、即答は出来ない。
そして、明人を殺さずに無力化出来るかどうかは分からない。
そもそも、ここで明人にかかっていって、更に犠牲が増えてしまったら？

……頭が、空転する。
俺の悪い癖だ。
肝心な時ほど考えばかりが頭を巡って、行動を起こせない。

笑う明人を前に、誰も何も出来ず、ただ、固まって……。

「アイスニードル！」

一人だけ、そんな葛藤を全く気にせず、動いた奴がいた。
その出所に視線を走らせると、きらめく銀髪に尖った耳が見える。
ナキだ。

「…あんなのに、つきあう必要ない」

ナキはクールに言い放つと、

「アイスニードル！」

更に連続で魔法を放つ。

放たれたのは、棒切れほどの大きさの、氷の槍。

ニードルなんて名前が詐欺に思えてくるほどの凶悪な魔法だ。

「おわっ！　こりゃっ！　すごいな！」

それでも明人は、その氷の槍を機敏な動きで後ろに跳んで回避する。

それを見て、俺も覚悟を決めた。

「悪いが、俺はここで死ぬ訳にはいかない！」

ここには、縁が、消えた幼なじみの手がかりがあるかもしれないんだ。

だから多少の無理をしてでも、俺は我を押し通す。

そんな風に俺が心を決めた時、

「アイスニードル！！」

そんな俺の決断を後押しするように、ナキが声を張り上げる。

今度生まれた氷の槍は三本。

それは微妙な時間差をつけて明人に放たれる！

「やるっ！！」

明人は二本までを姿勢を崩して避けたが、完全に体勢の崩れたその胸の中心に、最後の氷の槍が迫る。

ほとんど完璧なタイミングと位置。

俺はそれを見た瞬間、当たった、と思った。
だが、

「――ッ！？」

信じられないことが起こった。
明人の胸に吸い込まれるはずだったその最後の氷の槍は、明人に当たったと思った瞬間に反転、一直線に術者、ナキを狙う！

「ナキ！！」

そして俺は見た。
明人に向かった時と同じ、視認が困難なほどの速度で氷の槍が飛び、その槍がナキにぶつかっていくのを。
見るからに質量のある氷の槍、その尖った先端がナキの華奢な体に刺さり、その身を吹き飛ばすのを、はっきりと見た。

――頭の中の全部が、吹っ飛んだ。

「『オーバードライブ』！！」

小賢しい計算とか、人としての倫理とか、この世界での目的とか、そんな物はもう俺の中になかった。

頭の中が煮えたぎるほど沸騰して、なのに思考だけはいつもよりも速く動いていた。

『オーバードライブ』の加速が確認出来るや否や、俺は即座に『魔力機動』を発動、今の俺に出来る最大の速度で高速移動をして、

「借りるぞ！」

隣にいた月掛の腰から、ショートソードを抜き取った。

「ちょ、ちょっと…！？」

抗議の声が聞こえるが、そんな物はどうでもいい。

「奏也！　ナキを！」

そう言い捨てると返事も待たず、俺は明人に向かって飛ぶ。

『オーバードライブ』の有効時間はたったの６秒。

この時間の間に勝負を決める。

そもそも、能力値は軒並み向こうの方が上。

俺にアドバンテージがあるとしたら、この『魔力機動』と『オーバードライブ』のスキルを持っていることだけだ。
そして、『オーバードライブ』で攻撃力を強化するためには、『刀剣』スキルを使うために、どうしても『剣』カテゴリの武器が必要となる。
そして今、俺が使えそうな『剣』は、元々トラベラーだったらしい月掛が持っていた、このショートソードしかなかったのだ。

加速した思考でそんなことを考えながら、明人を観察する。
俺が仲間の武器を奪った時はわずかに意外そうな顔をしていたものの、その顔から余裕の色は消えない。

なら、それでいい。
その慢心の隙を、俺が突く！

「来いよ」

ナイフを構えて、明人が誘う。
そして元より、俺に退くなんて選択肢はない。

俺は『オーバードライブ』で強化された『魔力機動』を全開にして、一直線に明人に飛び込んで行き、

「あぁ？！」

直前で、その軌道を変える！
『魔力機動』の特徴は、足場や予備動作なしに、どんな風にでも動ける所にある。
俺は明人の目の前で右に移動、それから急角度で右側から明人に襲い掛かる、Ｖ字の軌道を描いた。

当然直進を予測していた明人のナイフは空を切り、

「これでっ！！」

殺すこともいとわない勢いで放った俺の斬撃が、明人の左肩に吸い込まれ……

――パキン！

想像したより、乾いた音が鼓膜を叩く。

「くぅ！！」

ショートソードが明人に当たる直前、驚異的な勢いで体をひねった明人のナイフが防御に間に合った。

不自然な体勢、苦し紛れの勢いのない防御だったはずだが、

「折れ、た…？」

一瞬の接触だけで、明人のナイフは俺の振るったショートソードを真っ二つに切り裂いていた。

距離を取って地面に降りると同時に、『オーバードライブ』の効果時間が終わる。

世界が急速に重みを増し、体がねっとりした物に包まれる感覚。

呆然とする俺に、明人がにこやかに声をかける。

「いや、正直惜しかったと思うぜ。

ただ、こいつは初心者が持つにしちゃあ上等なアイテムなんだよ」

「その、ナイフは…？」

かすれた声で尋ねると、明人は嬉しそうに答えた。

「こいつはな、村のある家の金庫からかっぱらってきたんだ。
昔冒険者だったとかいう爺の目の前で、ちょっと婆を脅すだけの簡単なお仕事だったよ。
あ、もちろん両方とも用が済んだら殺しといたけどな」
そうして、この世界じゃ死体が残らないから完全犯罪し放題だな、と明人は笑った。

怒りが、体を駆け巡る。
だが、打つ手はあるのか？
最大の切り札を失った俺に、この半分になったショートソードで何が出来る？

しかし、俺には考える時間すら与えられなかった。

「へへっ」

明人はなぜか俺の顔を見てそんな声を出すと、

「なっ！？」

無防備にも、俺に背中を向ける。
そして、これ見よがしにナイフを持った右手を振り上げる。
その刃の向かう先には……。

「――七瀬！！」

傷ついた、七瀬がいた。

「……ぅ、あ、あ…！」

戦いが続いていた間ずっと苦しみ続けていた七瀬が、振り上げられる凶刃を見てはっきりと恐怖の色を浮かべる。

「くそっ！！」

この位置からでは、かばうとか助けるとか、そんなことは出来ない。

だから、明人が七瀬を斬るより先に、背中から明人を斬る！

「こ、の――！！」

それ以上を考えている暇はなかった。

再び『魔力機動』を全開にして、俺は明人に突撃する。

俺の折れたショートソードが、明人の背中に届くかと思われたその瞬間、

――ゾワッ！！

俺の背中を、悪寒が走る。

同時に襲うのは、半身になった明人の左手。

そこには、さっき右手に握られていたはずの、血塗れのナイフがあって……。

（罠かっ！！）

初めから狙いは俺だった。

七瀬を救おうとやってきた俺を斬るのが明人の真の狙いで、

（――これ、避けられな…！？）

走る死の予感。

回避は出来ない。

かろうじてナイフの軌道に自分の剣を差し入れるのが精一杯で…

…。

――パキン！

そして俺の耳に、金属が切り飛ばされる乾いた音が響いた。

１５．牙を剥く悪夢（後書き）

オマケ

『ちょっと、飲み物を取ってくる』

自分でも弱いなと思いつつ、跳ねる鼓動を落ち着かせるために、少し時間が必要だと思った。

冷蔵庫に何かあっただろうか。

そんなことを考えながら、二、三歩、キッチンの方へ歩を進めて、

『……縁？』

背中にぶつかってきた縁の熱と重みに、俺は上ずった声を出した。

何が起こったのか、分からない。
ただ、ゆっくりと俺の胸にまで回された縁の手は、小さく震えていた。
くぐもった声が俺の耳を打つ。

『――昨夜、みりんが、消えたって……食卓から』
『食卓からっ！？』

全国の煮物がピンチだった。

16．彼女のための戦い

『ごめんね、光一。さよなら……』

――あれ？

剣が切られた音が聞こえてから、俺は反射的に目を閉じて『その

瞬間』を待ったが、いつまで経っても予想された痛みはやって来ない。

俺が目を開けると、そこには珍しく不可解そうな顔をしている明人がいた。

……何だ？

俺は、自分の手を見る。

半分ほどになっていたショートソードはさらに刀身を削られ、ほとんど根本くらいしか残っていなかった。

やはり明人のナイフに切り飛ばされたのだと分かる。

しかし、

「――なんだ、今のは？」

明人のナイフもまた、刀身を折られていた。

握りに近い場所でぶつかったのか、俺のショートソードよりも短いくらいだ。

明人は狐につままれたように顔をしているが、混乱しているのは俺も同じだ。

お互いの武器のどちらかが短くなっているのなら分かる。

それはどちらかの武器が勝って、相手の武器を切り飛ばしたということだ。

――だが、両方の武器が切られているというのはどういうことなんだ？

「っと！」

そこで明人が我に返り、後ろに飛び退いた。
俺からも、そして七瀬からも距離を取り、仕切り直しをする。

「どういう仕組みかは知らないが、おもしろいな。
今のがオマエの『隠し玉』か」

心の底から感心したような声で明人が言う。
そこにはもう、こちらを馬鹿にしたような響きはなかった。
こんな時だというのに、少し胸がスッとした。

とはいえ……。
『隠し玉』も何も、俺にだって何が起こったのか分かってはいない。
だが、これなら行けるかもしれない。

「まだやるのか？
戦うのがキツイなら、そろそろ白旗上げてもいいんだぜ？」

わざと余裕ぶった顔を作りながら、俺はそう明人に問い掛ける。
降伏勧告だ。

――死の淵に立って、少し頭が冷えた。

このまま明人と戦っても勝てるか分からないし、何よりナキや七瀬の状態が心配だ。

ナキがやられた瞬間、カッとなってしまって戦うことしか考えられなかったが、七瀬は傷からの出血が心配なもののまだ生きているし、ナキだってあれ一発で死んでしまったとは考え難い。
例えここで明人を倒せても、その間にナキや七瀬が死んでしまっては何もならない。

「そいつぁ気遣いありがとさん。
まあしかし、そいつは無用な心配ってもんだ」

だが、明人は俺の言葉を笑い飛ばすと、データウォッチを操作、一秒にも満たない時間で新たなナイフを呼び出し、折れたナイフの代わりに右手に握りしめた。

（……ちっ！　やっぱりそう簡単にはいかないか）

内心で悪態をつく。
ショートカットキーの設定による特定アイテムの取り出し。
相手はこういう状況も想定していたってことだ。

おそらく今取り出した新しいナイフはスカウトの初期装備だろう。
攻撃力は確実に落ちたはずだが、向こうに武器があってこっちにないという状況はかなり不利だ。

「いいのか？　そのナイフだって、一本目と同じ運命を辿ることになるぜ？」

それでも俺は精一杯の虚勢を張った。
これで相手が攻撃をためらってくれれば御の字だ。
しかし、明人は愉快そうに頬を歪めた。

「いいや、無理だね」

そして何を思ったか、ナイフを持った手を背中にまわす。

（……何をするつもりだ？）

相手の意図が全く読めない。

背中に隠したナイフで抜き打ちのようなことをするつもりなのだろうか。

とにかく何があっても対応出来るように、明人の手の動きを見張っていようと目を凝らした瞬間、

――ゾワッ！！

再び俺を襲う悪寒！

しかも、さっきよりも明確で、何より近い！！

「く、ぅ！！」

逡巡する暇はなかった。

ヤバイと感じた瞬間、『魔力機動』で無理矢理体をよじる。

そして、さっきまで自分の頭があった場所を振り返って、俺は驚きの声を上げた。

「なっ！？」

そこに見えたのは、おおよそありえない光景。

――刃が、空中から生えていた。

わずかな時間とはいえ、はっきりと呆け、硬直する俺。

その時、

「…気をつけて。そいつは多分、離れた空間をつなげる能力をもってる」

俺の耳に、待ちに待った声が届いた。

「ナキ！！」

もちろん俺は歓声のような声を上げて後ろを振り向き、

「敵から目を離さないで！」

……早速怒られた。

だが、これでこそのナキだ。

一瞬見ただけだが、目立った外傷もなさそうに見えた。

また、ナキと並んで、奏也と月掛も武器を構えている。

どうやら戦う覚悟を決めてくれたようだ。

思わぬ援軍を得て、俄然勢いづいた俺たちに、

「はいはい。やめやめ！」

明人はあっさりとナイフをしまうと、両手を上げた。

「どういうつもりだ？」

また何かの計略だろうか。

俺は決して油断しないように、折れた剣を構えながら問い掛ける。

しかし、明人の瞳からは先程までの爛々とした輝きが消えていた。

「さっき言ったろ？

別にオレとしては、今オマエらと戦う旨みってのは実はほとんどないんだよ。

しかも、ユニークスキルのタネまで割れちまった。

ネタのわかってる手品ほど、見ててつまんねぇもんもねえだろ？」

「そんな理屈、信じろってのか？！」

今まで散々俺たちを騙しておいて、よくも言う。

それ以上に、ここまでやっておいてつまらなくなったから帰るなんていう発言が、俺のはらわたを煮えくり返らせた。

「別に信じなくたって構わねえよ。

ただ、まあ、そうだな。

今から……二、三日は襲わないでいてやるよ。
約束する」

俺たちはそう言われてもまだ、油断なく身構えていた。
今更そんな口約束、信じられるはずもない。
だが、俺の心は確かに休戦に傾いていた。
だから明人がナキを警戒しながら下がっていっても、動かないし、動けない。

「じゃ、ま、そういうことでな！」

最後に明人はそう言うと、何の気負いもなく俺たちに背を向け、森の奥、村とは反対の方向へ歩き出していってしまった。

「…いまなら、殺せるかも」

明人の後ろ姿にナキがぼそっとつぶやくが、俺は首を横に振った。
最大の脅威だった業物のナイフは潰したが、高い敏捷と強化の値、それに『離れた空間をつなげる』らしいユニークスキルはいまだに顕在だ。
正直、今からもう一度戦っても勝ち目があるか分からないし、俺にはまだ人殺しが出来る自信がない。

ここで逃がして後で不意打ちなんてされたら余計に勝ち目はない

が、俺は不思議とあいつは約束を守るような気がしていた。
それに、何より、

「今は、それより七瀬の治療だ。
ナキはあいつが戻って来ないか、見張りを頼む」

事は一刻を争う。
俺は倒れたままの七瀬に駆け寄った。

「…ぁあ、ぅ、ぁぁ！！」

七瀬は右手に槍を握ったまま、左手で傷口を押さえて苦しんでいる。

「七瀬！　傷薬だ！」

インベントリから取り出した傷薬を、七瀬に渡そうとするが、

「…ひっ！　く、るな！　くるなぁ！！」

錯乱した七瀬は、近付く俺を警戒して、槍をぶんぶんと振りまわす。

「七瀬！　俺だ、光一だ！
もう明人は行った！　もう大丈夫だから！」

そう必死に呼び掛けるが、七瀬からの反応は槍の一撃だった。
これじゃあ近付けない！

「奏也！　月掛！　何か、傷薬以外に回復手段はないのか！」

俺は後ろを振り返って尋ねるが、二人は首を振る。

「HP回復スキルはあっても、傷を癒すスキルは……」

「わたしは、戦闘系だから……」

そう話している間にも、七瀬の傷口からはどんどんと血が溢れ出している。

「くそっ！」

俺は覚悟を決めた。

槍がまた目の前を横切った隙を見計らって『魔力機動』を発動させると、七瀬に思いきりぶつかって、地面に組み敷く。

「ひぅ！　やめ、やめ、てぇ…！！」

半狂乱になった七瀬の槍が、俺の背中を打つ。

だが、

「これ、を！！」

俺はその間に、傷薬を開けて七瀬の傷口に振りかける。

「ぁ、ぁあああああああああああ！！！」

耳を覆いたくなるような絶叫が響いた。
傷口からは泡と煙が立ち、相当な痛みが七瀬を襲っていることが想像出来る。
だが、こうでもしなければ七瀬は助からない。

「七瀬！　大丈夫、大丈夫だから！！」

七瀬の体を必死で押さえつけながら、俺は傷薬を掛け続ける。
ランクの低い薬だからか、なかなか傷は塞がらない。

「あぁああ！！　あぁあああぁ！！」

七瀬の抵抗が激しくなる。

「がぁ！！」

偶然にも振り回された槍の穂先が、俺のわき腹に当たり、思い切り肉をえぐられる。
それでも、

「だい、じょうぶ。七瀬は、大丈夫だから…！！」

俺は、薬を振りかけるのをやめなかった。

脇腹が熱い。
疲労と激痛で、気が遠くなりかける。
だが、七瀬の傷口は、確実に塞がってきていた。

（もう少し！　あとちょっとだけ、こらえれば！）

それだけを必死に念じて、半ば七瀬にしがみつくようにして、治療を続ける。
そして、

「…ななせ？」

もうそろそろ傷口も塞がろうという時、急に下からの抵抗がぱたりと止んだ。
慌てて彼女の顔を見ると、七瀬は目を閉じていた。

「七瀬っ！？」

まさか、間に合わなかったのか？！
俺は慌てて脈を確かめようとするが、

「…スリープの魔法をかけた」

上から、誰よりも心強い、ぼそっとしたつぶやきが降ってきた。
声の主が誰かなんて、もはや確かめるまでもない。

「流石だな。そんなスキルも覚えてたのか？」

俺が問うと、ナキはにこりともせずに答えた。

「…いま、覚えた」

そう答えたナキの目の前には、確かにデータウォッチのスキル画面。

「ははっ！　おまえはやっぱ、最高だよ」

こいつと出会えたことが、この世界での俺の最大の幸運だと素直に思えた。

訳もなく、大声で笑いだしたくなる。

けれど、実際にはそんな体力も気力も残ってなくて、

「んじゃ、あと、たのんだ……」

頼れる相棒に全てを任せ、俺は意識を手放した。

17．リスタート

――夢は、見なかった。

「……」

起きた瞬間、氷点下を下回る絶対零度の瞳に迎えられた。

なんともさわやかな目覚めだ。

「おはよう、ナキ」

「……」

一応あいさつしてみるが、返事はなかった。
だが、やや間があって、
「…気絶したあなたは村のベッドに運ばれて、いままで、三十分ほど寝ていた。
それと、彼女も無事。まだ寝ている」
これからの俺の質問を先回りしたみたいな状況説明をしてくれる。
彼女、というのは七瀬のことだろうか。
七瀬が無事だというのはとにかく喜ぶべき材料だろう。
「……」
「……ええっと」
そして、状況が理解出来た途端、話題が消えた。
ナキのまるで感情の浮かんでいない顔が気まずいので、無理矢理に話をひねり出す。
「明人は、睡眠欲なんてないって言ってたけど、あれは嘘だな。
あの時、ものすごく眠くなって……」
「睡眠中は回復の速度が速くなるという記述が本にあった」
「あ、いや、その……すいません」
ナキさんは容赦なかった。
雑談を振ったはずが、なぜか俺が怒られて終わる羽目に。
このままでは良くないと、話題を変えることにした。
「あ、あー、とにかく、さっきはありがとう！
明人への攻撃も凄かったし、スリープの魔法で手助けしてくれたり、本当に助かった！」

「――ふざけないで」

「…え？」

素直な感謝を伝えたはずなのだが、なぜだかその言葉が一番、彼女を怒らせたらしい。

隠し切れない憤りを瞳ににじませながら、ナキが俺のいるベッドまで近付いてくる。

「な、ナキ…？」

俺が上ずった声を上げても、ナキは止まらない。

ナキはベッドに体を半分起こした体勢の俺を見下ろすと、スッと手を伸ばした。

ナキの小さな手が俺のわき腹、ちょうど七瀬の槍にえぐられた箇所に触れる。

「――ッ！」

痛みを覚悟したが、もうそこにあったはずの傷は完治しているようだ。

ただ、布越しにも分かるナキのひんやりとした手の感触が何だかくすぐったかった。

「お、おい…？」

顔を上げてナキの顔を見て、ギョッとする。

その顔は一見いつも通りの無表情だが、見て分かるほどに強く、その薄い唇を噛み締めていた。

「やめろって、唇切れるぞ」

むしろ俺が慌てて、わき腹に伸びていた手をつかんで制止する。
「……」
俺の忠告が分かったのだか分かってないのだが、ナキはなんだこいつ、みたいな無機質な目でひとしきり俺を見下ろして、それから唐突に俺から距離を取った。
そのまま俺の言葉には結局何も答えることなく、部屋の外に向かって歩き始め、
「……次は、もっとうまくやる」
それだけ言い残し、ナキは家から出て行ってしまった。
そして、
「やぁどうも。こうして二人きりで話すのは初めてですね」
その代わりのように入れ替わりでやってきたのは、奏也だった。
珍しく、金髪の腰ぎんちゃくの姿も見えない。
「お前が俺をここまで運んでくれたのか？」
俺が先制攻撃代わりにそう聞くと、奏也は肩をすくめた。
「まさか。あなたを運んだのは、彼女ですよ」
「彼女？　……もしかして、ナキが？」
あの細い体で俺を運んでいく映像が、どうやっても思い浮かばない。

「どうやら僕は彼女にあまり信用されていないようですからね。
あなたの体には、指一本触れさせてはもらえませんでした」
「やめろよ。そんな言い方するとお前が俺に触りたかったみたいじゃないか」
俺が言うと、
「ふふふ……」
奏也は含み笑いをした。
やめろ、マジ怖いよそれ。

が、すぐに真顔に戻る。
「とまあ、そんな冗談はともかく」
良かった、冗談だったのか。
「戦力が問題です」
「戦力？」
奏也はうなずいた。

「パーティの最大人数は8人だと言いましたよね。
最初、僕らは7人いました。
しかし今はたったの4人です。
これは最大人数のたったの半……」
「…待て」
奏也の言葉を、俺は遮った。

「4人じゃない。5人だろ？
……七瀬だって、助かったはずだ」
たぶん奏也は、まだ七瀬の目が覚めていないから数に入れなかっただけなんだろう。
だが、それはどうしても見過ごしておけなかった。

「……そう、だといいですけどね」

やけに含みのある言い方をする。
「どういう意味だ？」
自然、言葉が冷たくなった。

「体が治っても、心が治るとは限らないという話です。
……あなたは、彼、四ツ木明人のことをどう思いますか？」
「どう、って……」
正直、思い出したくはない。
俺たちは、あいつ一人に完全に踊らされた。

後から冷静になって考えてみると、色々と見えてくることもある。
ナキが言っていたが、あいつのユニークスキルは『離れた空間をつなげる能力』だそうだ。
『離れた空間をつなげる』ではイメージし難いが、要は『小さなどこ〇もドアを作る能力』とでも言えば分かり易い。
それが本当だとしたら、不可解だったいくつかのことが理解出来てくる。

あいつと戦っている時、右手に持っていたはずのナイフがいつの間にか左手に移動している、という場面が何度かあった。
あれはあいつのスキルで右手と左手の傍にそれぞれ『ドア』を作り、そこを通じてナイフの受け渡しをしていたのだろう。
たぶん、ナキの魔法を跳ね返したのもそうだ。
『ドア』の入口と出口の向きを反対にすれば、疑似的に相手の攻撃を跳ね返すことだって出来るはずだ。

更に言うなら、戦闘中に何度も走った悪寒。
あれは明人のスキルが発動したことを、俺の『魔力感知』が捉えて警告してくれたのだと考えられる。

それを踏まえるとスキル的な相性は悪くはないが、正直二度とは戦いたくはない相手だ。

俺がそれを素直に伝えると、

「それくらいで済んでいるのなら、あなたは大丈夫だということです」

と笑顔で答えられた。

「そうかよ」

自然と言葉はぶっきらぼうになる。

言いたいことは分かる。

七瀬は明人とのことがトラウマになって、まともに戦いなんて出来ないだろうと言いたいんだろう。

もしかするとそれは真実なのかもしれない。

しかし、他人の心まで勝手に決めつけるような話し方は、どうしても俺に不快感を覚えさせた。

「とにかく、僕らのパーティは最大でも5人にしかならないということです。

今、月掛さんにもう一度あの大樹の所まで人を探しに行ってもらっていますが、望み薄でしょう」

「ちょっと待て！　月掛を一人で行かせたのか？！」

パーティの人数云々より、そのことが俺の気にかかった。

まだ明人がどこにいるか分からないのに、単独行動させるなんて正気の沙汰とは思えない。

しかし、奏也は全く動揺しなかった。

「はい。むしろ、今が一番安全だと僕は思っていますから。

彼が戦わないと約束した今が、動くチャンスなんです」

「あいつが約束を守ると？」
「さぁ？　でも約束をした直後の方が、気が変わる可能性も少ないでしょう。
僕らは出来るだけ早く、戦力の充実を図らなければならないんです」
「……」
俺は黙ってしまった。

俺自身、あいつは約束を守るのではないかと思っている。
一方でほんの気まぐれからあっさり約束を破るような気もしているが、その危険性は約束をしてから時間が経てば時間が経つほど増していくだろう。

それを正確に見て取って、トドメとばかりに奏也は言った。
「今僕らが一番警戒しなくてはならないのは四ツ木君だと思います。しかし、彼を恐れてグズグズとこの村に留まっていては、逆に最悪の事態を招きかねません。
僕の計画はこうです。
この村で数日、多少の無理をしてでもレベルを上げます。
そしてレベルが上がったら、四ツ木君から離れるために、一気に大きな町を目指して進む」
「大きな町にって……。
人に紛れたくらいであいつがあきらめるのか？」
明人はむしろ、他人の目があるとはしゃぐタイプのような気がするのだが。

奏也は首を振った。
「彼が本気であれば無意味でしょう。
ですがそもそも、彼の興味が長く持続するとは思えません。
他にたくさんの人がいる町になど出れば、すぐに僕たちのことな

んて忘れるでしょう」
「それは……あるかもな」
明人が俺たちを攻撃したのは、ナイトメアの仕様を確かめたかったのが半分、気まぐれが半分、といった所だろう。
現状、特に俺たちに特別な興味を抱いているという感じはない。なら、他に興味をひかれそうな物が多い町に脱出するというのは、単純だが有効な離脱手段になり得る。

ここまで聞けば、奏也がどういう方向に話を誘導したいのかもそろそろ見えてきた。
「で？　お前は一体、何をやりたいんだ？　そこまで言うなら、レベル上げの手段についてももう目星はつけてあるんだろ？」
そして案の定、にやりと笑う奏也。

さっきまでも薄々とは思っていたが、今、確信した。
――こいつたぶん、結構性格悪い。

俺がそんなことを考えているなんて知る由もなく、奏也は心持ち自慢げに話す。
「はい。あなたが気絶している数十分の間に村を回って、色々なイベントを収集していました。
そこで見つけた、短時間でこなせそうで実入りの多いイベントは二つ。
その内の一つを、これから現実に戻るまでの三時間で済ませてしまいたいと思っています」
「……どんなイベントだ？」
俺の問いに、奏也は性格の悪い笑みを更に深めて、言った。

「目的は、東の森に現れた特殊モンスターの撃退。
レベル１３のユニークモンスター『ヘルサラマンダー』の討伐です」

18．遠い人たち

奏也から今回のモンスター討伐イベントの話を聞いた俺は、もちろん反対した。

「ちょっと待て！　レベル13のモンスター？　流石に無謀すぎるだろ、それは！」

俺たちはまだ、全員がレベル一桁だ。

いきなり二桁レベルのボスを倒すなんて、無茶を通り越して無謀に思えた。

「村で次の移動場所についても検討を重ねました。大樹から北に進めば大きな町に着くそうですが、その途中のフィールドでは15レベル前後のモンスターが現れるそうです」

「だからってなぁ！」

レベル差が10もあるような敵と戦って勝てるとは思えない。

「よく、考えてみて下さい。クラスの成長値を見れば分かりますが、1レベルにつき能力値は平均で2ずつ上がります。

10レベルだと、それぞれの能力値に20程度の差が出るということです。

それは結構な差ではありますが、初期能力値やスキルでカバー出来ないこともないと僕は思います」

「その根拠は？」

「あなたは四ツ木君と一対一で渡り合いました」

そう言われた途端、俺は一瞬言葉に詰まった。

確かに、明人の方が俺よりも能力値は高かったし、強力な武器と

いう要素も含めれば、その戦力差はあるいは２０程度の能力値差を越えるかもしれない。
その明人と、スキルを駆使して何とかやりあったというのは嘘ではないが……。
明人の武器が破壊された原因はいまだ謎で、それも含めてもう一度やれと言われても出来るか分からない。
しかし、その辺りのことを言い出す前に、奏也が言葉をついだ。

「もちろん、次は僕らもためらいません。
このメンバーが４対１で戦えば、たとえレベル１３のモンスターが相手でも後れを取ることはないと、僕は信じています」
「奏也……」
はっきりとそう言い放つ。
その覚悟には、少し胸打たれるものがあった。

しかしその直後、
「しかも、物凄く実入りがいいんです、このイベント。
一匹モンスターを倒してドロップアイテムを届けるだけで、１２０００ウィルももらえるんですよ？」
満面の笑みでそう口にする奏也の言葉に、

（やっぱこのイベント、危ないんじゃねえかなぁ……）

俺は不安を隠せなかったのだった。

俺は奏也との話を一区切りつけると、運び込まれた家から外に出た。
そして、

「……ぉお」

思わず感嘆の息を漏らす。

穂村はＲＰＧに出て来るような普通の村で、特徴なんてないと言っていたが、それは嘘八百もいい所だった。

そもそも、ＲＰＧに出て来る普通の村が実際にあったら特徴がないはずなんてなかった。

どこの匠が作ったんだと言いたくなるような、木と藁で作った感じの、今時現実世界じゃお目にかかれない家々が並び、更にその屋根にはもさもさと木の葉がつけられてアフロみたいに盛り上がっていた。

もしかすると、木に偽装してモンスターから姿を隠そうとしているとかかもしれない。

まあ、横から見ると普通に家だと丸分かりなのであまり意味はなさそうだが。

「ここは、ハリルの村と言うそうですよ？」

思わず足を止めてしまった俺に、奏也が横に並んで言う。

「初めて見ると、それなりに壮観でしょう？」

「ああ……」

俺は素直にそう答えるしかなかった。

こんな景色を見せられると、改めてファンタジー世界に来たと実感させられる。

「折角ですので村を案内してあげたい所ですが、あまり時間がありません。

月掛が戻って来る前にこちらも準備を整えておきましょう」

「ああ。そうだな。

ナキも、探さないといけないし……」
俺も渋々と景色から目を引きはがしてうなずいた。
現実に戻るまで、残り2時間半程度しか猶予がない。
イベントをこなすなら、観光は後回しにするべきだ。

「なら、道具屋に行きましょうか。
装備もアイテムも、そこで全て手に入ります。
月掛にも、ここにいなかったら道具屋まで来るようにと言っておきましたから」
道具屋、と言いながら、簡単な武器防具も扱っているらしい。
小さい村なので、別々の店舗を構える必要も余裕もないんだそうだ。

そんな説明を受けながら歩いていると、村の人とすれ違った。
「おや、旅人さんかい？
なぁんもない村だけど、ゆっくりしていきなよ」
「ありがとうございます」
通りすがりに声を掛けてくる村の人に、如才なく返事を返す奏也。
一方の俺は固まってしまって、何も言えなかった。

――人が、あまりにリアル過ぎた。
それこそ、現実世界の人間と何も変わりがないような……。

「……びっくりしましたか？」
それを見透かしたように、
「この村にいるのは、僕たち以外は全て『ノークラス』、つまりNPCなんだそうです。
なのに誰もが自然に話し、考え、行動しています。
まるで、現実の世界の人間と同じように……」
奏也が口元に笑みをにじませながら、語る。

「そしてこれは、まだ誰にも言っていないことなんですが……。
彼らは一度も見たことがないはずなのに、『テレビ』や『パソコン』、『インターネット』なんて言葉についての知識を持っているんですよ。
にもかかわらず、彼らはここで原始的な狩猟民族のような生活を送っている。
何の疑問も持たずに、ね……。
これって結構、恐ろしいことだと思いませんか？」
あくまで柔和なその笑顔に、俺はぞわっと体の毛が逆立つのを感じた。

あの本から得た知識で、俺たちがまだ奏也たちに伝えていないことがある。
ユニークスキルを決める、選別の儀式。
その儀式に失敗した者が、『ノークラス』、つまりこの世界のＮＰＣとなって、世界の操り人形にされるという荒唐無稽な仮説。

黙り込んだ俺の様子から、一体何を読み取ったのか。
「つまらないことを言ってしまいましたね。
道具屋に案内します。
予定通り、月掛が戻るまでにこちらの準備を整えましょう」
奏也は話を切り上げて、先に立って歩き出した。

狭い村だ。
道具屋には、ほんの二分ほどで着いた。
「よぅ！　いらっしゃい！」
かけられた声に中を覗くと、店のカウンターには気の良さそうなおじさんがいた。

やはり彼も普通の人間としか思えない。
奏也の言葉が脳裏に蘇る。
いや、今は考えても仕方ない。

「……武器、ありますか？」

俺はとりあえず、自分の目的を優先することにした。

「まいどありぃ！」
おじさんの威勢の良い声を聞きながら、俺たちは店を後にする。
店にはポーションと傷薬の他には、それぞれの職の初期装備になりそうな武器が一種類ずつ置いてあるだけだった。
俺はポーションを２本、傷薬を２本、ショートソードを２本買った。
値段は、ポーションが１本２００ウィル、傷薬が１００ウィル、ショートソードが６００ウィル。

合計で１８００ウィルになるはずだったが、
「お、兄ちゃんこれから東の森の化け物退治しに行くんだって？
あいつらおっかないからね！
兄ちゃんの活躍に期待して、１５００までまけといてやるよ！」
気の良さそうな店のおっちゃんが気の良い所を見せて、３００ウィルまけてもらった。

とはいえ、それなりの大金。これによって、大樹に着いた時には５０００近くあった所持金が、３２００にまで減ってしまった。
それなりに懐は痛んだが、止むを得ない出費という奴だろう。

ちなみに、だが、ブレイドラビットを倒すと一体につき８０ウィル、グリーンウルフを倒すと１００ウィル程度もらえるらしい。
どう考えても５０匹もあいつらを倒した覚えはないので、なぜ５０００もウィルが溜まっていたのかは不明だ。

ついでに言っておくと、どうして６００ウィルもするショートソードを２本も買ったかというと……。

「奏也様！　ただいま戻りました！」

今ちょうどこちらに駆けてくる、金髪の弓使いのためである。

月掛は横にいる俺を気にも留めず、敬愛する奏也の所に報告をしに走り寄って行った。
まあ内容については聞かなくても分かる。
誰も連れてきていないのだから、大樹の傍には誰もいなかったのだろう。

それはそれとして、
「あー、月掛？」
楽しそうに報告をしている月掛に横から近付いて、声をかける。

「……何？」
ただ話し掛けただけのなのに、凄い目付きをされた。
なによせっかく奏也様に褒めてもらってたのに邪魔しないでよね、みたいな心の声が聞こえてくるようだ。

一瞬心が折れそうになったが、かろうじて踏みとどまって、買ったばかりのショートソードを月掛に差し出した。
「悪かったな。

お前の剣、勝手に使って、壊しちまって。
遅れたけど、これ、代わりに使ってくれ」
俺の言葉に、月掛はきょとんとした顔をして、奏也をうかがうように見る。

奏也は、
「なるほど、そういうことでしたか……」
とつぶやいて、月掛を促すようにうなずいた。
ここで月掛もうなずいて、俺の差し出したショートソードを受け取る……と綺麗に収まったはずなのだが、しかし、

「いらないわよ、そんなの」

月掛は、俺が差し出した手を、押し返した。

「え？　あ、いや、でもな……」
まさか突き返されるとは思っていなかった俺はまごついてしまうが、そんな俺に、月掛は両腕を腰において、
「あの時は一応、予備の武器として持ってたけど、あたし、弓使いなの。
だから、そもそも剣なんていらないの。
……わかる？」
背が低いながらに精一杯背をそらして、上から目線でそう言った。

「それにあんた、トラベラーなのに武器持ってなかったってことは、初期装備のショートソード、壊したんでしょ？」
「まあ……」
「ふん！　やっぱりね！
あんたみたいなヘボトラベラーは、また武器を壊すわよ、きっと

！」

「そんな決めつけられても……」

というか、話がズレて来ている気がする。

「それで結局、何が言いたいんだ？」

痺れを切らして俺が尋ねると、

「あ、あんた頭わるいんじゃないの！？

だ、だから、また武器を壊されたら迷惑だし、それはあんたが使いなさいってこと！！」

月掛はなぜか真っ赤になりながら叫ぶ。

「え、でも、いいのか？」

そして、俺の確認の言葉に更に顔を赤くすると、

「いいのかって……あ、あたりまえでしょ！

ば、バカ！　もう知らないわよ！！」

そんな言葉を吐くと、一目散に走って逃げてしまった。

能力値補正だろうか。

意外な俊足で、あっという間に見えなくなる月掛。

そして、

「ええと……なんでだ？」

それを間抜け面で見送る俺。

意味が分からない。

本当に、意味が分からない。

何で月掛が逃げるんだ？

混乱している俺に、奏也が苦笑しながら近付いてきた。

「すみませんね、普賢君。
ここだけの話、実は彼女……ツンデレなんです」
「ああ、なるほど、ツンデ……うん？」
こんなに近くにいるのに、何だか奏也まで遠くに行ってしまったような気がした。
――良く分からないが、とにかく世の中、色んな人がいるらしい。

一度は走り去った月掛だが、当然別に行き場もなく、すぐにバツが悪そうな顔をして戻ってきた。
今は奏也の陰からこっちを見て、うーっと唸って威嚇している。
もしかすると情緒不安定な感じの子なんだろうか。
正直あまり関わり合いになりたくないなと横に視線をそらしてみると、ちょうどこちらに歩いてくるナキの姿を見つけた。

「ナキ！」

これぞ天佑と、俺はナキに駆け寄った。
足音から、少し遅れて奏也と月掛もついてくるのが分かる。

「…なに？」

あいかわらずの落ち着いた、というよりは冷たく突き放したような口調に、なぜか安心してしまう。
俺は、奏也から聞いた話を踏まえ、これから東の森にモンスター討伐に行きたいと説明した。
敵は強いかもしれないが、大量のウィルが入るし、危険なモンス

ターを倒すのは村の人たちのためにもなる。
そんな風に説得したのだが、なぜだか話せば話すほど、ナキの瞳に懐疑的な色がにじんでいき、

「…化かしあいなら、他所でやって。
私は、茶番につきあうつもりはない」

そう言うと、俺たちに背を向けてどこかに歩き出してしまった。

「ナキ?!　ちょっと待ってくれ!」

俺は慌ててその後ろ姿に呼びかけるが、振り向いてすらもらえない。
何が彼女の逆鱗に触れたのかは分からないが、どうやらひどく怒らせてしまったらしい。

だったらせめて、と思い、
「分かった。ナキが嫌なら一緒に来いとは言わない。
でも、もしこの村に残るんなら、七瀬の面倒を……」
そう口にしかけたのだが、
「私にも、行くところがあるから」
それすらも断られ、ナキはとうとう振り返りもせずに、村の外れの方に歩き去っていってしまった。

呆然と立ち尽くす俺の後ろから、

「……感じわるいヤツ」

とつぶやいた月掛の声が、妙に耳に突き刺さった。

19．最初のモンスター、討伐イベント

――森を駆ける。

現実世界では不可能なくらいの速度で、俺たちは一心不乱に森の中を駆け抜けていた。

現実の俺であれば、仮にこの速度で走ることが出来てもすぐに息切れして足を止めてしまうだろう。

だが、この異世界での体は休憩すら必要としない。

立ち止まるのは、分かれ道で奏也が方位磁石を確かめる時と、

「敵だ！　前方、グリーンウルフ２！」

俺がモンスターを発見した時だけ。

「分かりました。：月掛！」

「はいっ、奏也様！」

声と共に、グリーンウルフ目がけて弓が引き絞られる。

俺はそれを横目で確認しながら、グリーンウルフに気付かれないギリギリの距離まで近付いて、

「行きますっ！」

そんな月掛の声が耳に届くと同時に、『魔力機動』で前へ飛び出していく。

――ヒュン！

そして、俺の耳元をかすめて追い抜いていった矢が先頭のウルフ

に刺さり、たまらず苦悶の声を漏らした所を、

「キャウン！！」

更に追い打ち。

ウルフの上げるいじめられた犬みたいな鳴き声に気が咎めるが、これぱっかりは仕方ない。

無防備な頭を斬りつけて、まず手負いの一匹を仕留める。

先頭の一匹が粒子に変わる頃には二匹目がこちらに向かってきているが、一対一なら問題ない。

「よっ、と！」

飛び掛かってきた所を『魔力機動』で平行移動、後頭部に一撃、のコンボで仕留める。

新たに手に入れたショートソードとボーナスで上げた強化のおかげで、援護なしでも一撃で倒すことが出来た。

実は木の棒時代はグリーンウルフだと当たり所によっては一撃で死なないこともあったのだが、村で剣を買ってからはそんなことも起こらなくなった。

「……ふう」

俺が剣を腰に戻しながら息をつくと、

「お疲れ様です」

と奏也が声を掛けてくれて、

「ふん！」

と月掛が鼻を鳴らした。

今回のイベントに参加をしたのはこの3人。
メンバー構成は、旅人に弓使いに吟遊詩人という異色のトリオだ。
バランスも何もない適当な編成なのだが、トラベラーである俺が前衛を務め、弓使いの月掛が遠距離攻撃、吟遊詩人の奏也が回復と補助で……なんて説明してみるとまるでまともなパーティみたいで怖い。

素早くウルフのドロップを回収、すぐにまた走り出しながら、俺はもう一度、俺たちが受けたイベントを確認した。

――ナイトメアイベント『ヘルサラマンダーを倒せ』――

【イベント達成条件】
ユニークモンスター『ヘルサラマンダー』を倒し、そのドロップアイテムである『火蜥蜴の徽章』をハリル村の『トマス』に渡す

【イベント達成ボーナス】
１２０００ウィル
『炎のシミター』×１

【イベント失敗条件】
1. 『火蜥蜴の徽章』の破壊
2. 『トマス』の死亡

【イベント失敗ペナルティ】
なし

【受諾可能グレード】
1～

これが、俺たちの受けた最初のイベントの内容だ。
依頼はパーティで受けることが出来、その場合、報酬のウィルは山分けでなく、全員に丸々同じだけ入るらしい。
つまり俺たちは俺と奏也と月掛でパーティを組んで受けたので、全員に１２０００ウィルずつ、合計３６００００ものウィルが手に入ることになる。
破格の報酬だが、その分のリスクも想像出来るイベントだ。

正直に言えば、ナキが参加を断った以上、奏也がこのイベントを受けるとは思わなかった。
これは中止かなと思ったのだが、奏也の判断は逆だった。

「見ていると、彼女は他人に対して無関心なようですが、あなたには甘い所があります。
あなたが死地に赴くというのなら、多少の無理をしてでもついていくか、あるいはあなたの参加自体をやめさせようとするでしょう。
その彼女が同行せず、あなたがイベントにチャレンジするのも止めなかったということは、つまりこのイベント、危険性はそう高くないと彼女が判断したということです」

それを聞いて、こいつどんだけポジティブシンキングなんだ、と俺は呆れたが、ナキに同行を断られたことで、俺も引っ込みがつかなくなっていた。
こうなったらばっちりとモンスターを倒してナキの鼻を明かしたい、という気持ちが、俺の中でメラメラと燃えていた。

奏也が言うには、情報収集の結果、『ヘルサラマンダー』は大樹から歩いて二時間程度の場所にいる可能性が高いらしい。
村を出た時点で残り時間は2時間と少し。
戦闘や捜索の時間を考えると、やはり時間が少し厳しい。
そこで、自分たちの限界を確かめる意味も込めて、全員で駆け足での行軍となったのだった。

「次の分かれ道、右です」
「分かった！」
「りょうかいです、奏也様！」
方位磁石を持っている奏也が東に近い方向を調べ、それに従って道を選ぶ。
かなりアバウトな道の選択だが、これでも問題ないらしい。

また、これだけの速度で走っているのに、敵と遭遇することすら稀だった。
森の中の風景はどこも似たり寄ったりで、正直ナキと二人で歩いてきた道と同じように見えるが、エンカウント率にはかなりの差があるらしい。
しかし、時間がない時にこれは嬉しい。
この調子なら、一時間もかからずに目的地まで着けるかもしれない。

「普賢君！　そろそろ目的地が近いかもしれません。
モンスターと遭遇したら、その様子を詳しく観察するようにしてください」
走りながら、奏也がそんなことを頼んでくる。
「モンスターの様子を？　どうしてだ？」

俺も走りながら叫び返す。

「イベントモンスターのような強力なモンスターがいると、それ以外の雑魚モンスターは逃げ出すそうです。
なので、特定の方向からモンスターが逃げてきたり、特定の方向を見て怯える仕種を見せれば……」

「そっちに『ヘルサラマンダー』がいるってことか、了解！」

それなら話は早い、と思ったが、奏也の言葉はそれで終わりではなかった。

「それに『ヘルサラマンダー』は、レベル９のモンスター『ヘルリザード』を何匹も連れて、ここら一帯を支配しているそうです。
一匹でも『ヘルリザード』がやられれば、ボスである『ヘルサラマンダー』が寄ってくるそうですから、すぐに見つけられますよ」

なんて新情報を、あっさりと告白してくる。

「聞いてないぞ、そんなこと！

倒すのは『ヘルサラマンダー』だけじゃなかったのか？！」

俺がたまらず叫ぶが、

「だって、事前に言っていたら、来てくれなかったかもしれないじゃないですか」

そう言って、黒い笑いを浮かべる奏也。

なんて奴だ。

「大丈夫。僕だって死にたくはないですし、勝てそうになかったら逃げましょう。
まだＢＰは残っているんですよね？
いざとなればそれを全部俊敏に振れば、最悪あなただけなら簡単に逃げられるはずです」

「お前なぁ！」

ここまで来た以上、こいつら二人を置いて、自分一人で逃げるなんて出来そうにない。
そして恐らく、こいつはそんな俺の性格すらも織り込んで、こんなことを言っているのだ。

俺がもう一度、何か文句を言ってやろうとした時だった。

「ッ！？　ちょっと、待って下さい！
あそこ、何か、様子がおかしい」

珍しく奏也が切羽詰まった声を出して、俺を制止した。
そして俺も、前方、奏也が見つけた物と同じ物を見て、硬直した。

――青々とした木が立ち並ぶ中、俺たちが進もうとする先の木々だけが、一面に枯れていた。

「もしかすると、これもイベントの一部かもしれません。
……慎重に、進みましょう」
奏也が心なしか声を潜め、そう提案してくる。
俺も月掛も、これには一も二もなくうなずいた。

周りを見回す。
意識的に『魔力感知』も発動させて魔物の気配を探ってみるが、近くに敵がいる様子はない。
油断出来る状況ではないが、少しだけ緊張を緩める。

「あ、あれ…！」
すると今度は、月掛が声を上げた。
その指差した先には……。
「なんだ、あれ？」
――いくつもの小さなクレーターが出来た地面があった。
こんな物は見たことがない。
何か強い力が加えられて地面がえぐられたのだろうが、どれだけの力が加えられたらこんな風に地面に穴が開くんだ？
まるで、人間離れした力を持った乱暴な子供が、癇癪を起こして何度も何度も地面を叩いたような……。
「こんなの、ふつうじゃない……」
つんとした生意気な顔にはっきりと怯えの色を乗せて、月掛がそうつぶやいた。
「月掛…？」
俺に見られていたことに気付くとハッとして強気な表情を繕ったが、湧き上がる不安は隠せていない。
さりげない様を装って、俺たちの方に近付いてきた。
「……行きましょう」
奏也もそのクレーターを気味悪げに見ていたが、退く気はないようだ。
俺たちを促して、先頭に立って枯れた森へと足を進めていく。

「……ぅ」
それを見て、月掛が躊躇う素振りを見せた。
奏也の指示には従いたいが、恐怖に固まった足がついていけないのだろう。
俺はその小さい肩を、ポンと叩いた。
「なっ、なっ、にゃぁ！」
すると、叩いたこっちがびっくりするくらい飛び上がって、口をぱくぱくさせた。
「大丈夫だ。奏也だって、引き時は心得てるさ」
何か言われる前に、そう言ってやると、
「あ、あったりまえでしょ！
あたしだって、奏也様を信じてるわよ！」
とこっちに小声で怒鳴って、ぱたぱたと奏也の方に駆けて行った。
やれやれ、とは思うが、月掛が元気になったのならそれが一番だ。
「ほらー！　あんたもいつまでもびびってないで、早くこっちに来なさいよ！」
という声に背中を押され、俺は奏也たちの後を追った。
「生命力が奪われている、という感じですね」
見渡す限りの枯れた森を歩きながら、先頭を行く奏也がぽつりと漏らした。
枯れてしまった木を良く見ると、全体的にしおれ、確かに生命力が感じられない。

そうして木々が全面的に生命力を失っているのに、地面がぬかるんだように湿気を帯びているのが不気味さを煽る。
それにしても、これだけの広い範囲の木から力を奪うような物とは一体なんなのか。
想像もつかないだけに、恐怖を感じずにはいられない。

それに、枯れた森の中に入ってからもう数分が経つが、まだ『ヘルサラマンダー』はおろか、他の雑魚モンスターの姿も一度も見かけていない。
これは明らかに異常な事態だと言えた。

ちなみに隊列だが、先頭が奏也、月掛、しんがりが俺、という並びに自然と変わった。
本当は俺が先頭を行くべきなのだが、この不気味な森を積極的に進む勇気は俺にはなかった。
月掛もやはり恐ろしいのか、たまに後ろを振り返っては俺がいるのを確認してホッとした様子を見せ、その後なぜか目をつりあげて不機嫌そうな顔をして前を向く、という奇行を繰り返している。

本当に何を考えているんだか。
俺がこっそりため息をつこうとした時、淀みなく歩いていた奏也の足が、不意に止まった。
また後ろを振り向こうとしていた月掛がその背中にぶつかりそうになり、慌てて足を止めた。

「何があったんだ？」

俺も疑問の声と共に奏也の肩越しに前を見て……その理由を知った。

ここにやって来てから、三つ目の異変。

――それは、真っ二つに切り倒された大木だった。

その木は、ちょうど俺の胸の辺りで、綺麗な真一文字に切り倒されていた。

大木、と言ってもせいぜい一抱えくらいの大きさだが、それでも切り倒そうと思ったらそれなりの労力が必要だろう。

それに、何より……。

「切断面が、綺麗過ぎる……」

切り株となった木の表面を撫でて、俺はつぶやいた。

切断面に、段差やざらつきが全くない。

余程鋭利な刃物で一息に切らなければ、こんな切り口にはならないだろう。

試しに、と、切り株の隣に落ちた木の上半分に、俺は渾身の力を込めてショートソードを振り下ろした。

サクッと思ったよりも軽い手応えが伝わって、ショートソードが木の中にめり込む。

しかし、刃が完全に木に埋まった辺りで刃は止まり、それ以上は力を入れても進みそうになかった。

少なくとも、一太刀で木を真っ二つ、なんて、俺にはとても無理だろう。

「一体どれだけの力があれば、こんなことが出来るんでしょうね」

それを見て、奏也も流石に顔色を青くしている。

月掛は奏也の後ろで小さく震えているようだ。

俺だってこんなことが出来る化け物とは戦いたくない。

だからこそ、重い口を開いた。

「『ヘルサラマンダー』っていうのは、もしかして手にハサミでもくっつけてるのか？」

冗談めかして尋ねる。

これが『ヘルサラマンダー』なら相手は相当な強敵ということになるし、そうでないなら別の恐ろしい何かがこの森にいたということになる。

「『ヘルサラマンダー』は、『ヘルリザード』と同じくリザードマンの亜種です。

当然人型の魔物で、今回は村の人間に、曲刀を持っている姿を目撃されたそうです」

「……つまり？」

「恐らく、これを行ったのは『ヘルサラマンダー』でしょうね」

沈鬱な声で答える奏也の声。

そしてそれを最後に、俺たち3人の間に沈黙が落ちる。

奏也は未練がましく何か抜け道を探すように木の切断面を撫でている。

月掛はそんな奏也を不安そうに眺めながら、物音がする度に大袈裟なほどビクッと反応して、心細そうにしている。

その様子を見て、俺は、

「……戻ろう」

とうとうその言葉を口にした。

即座に反応したのは奏也だった。

「そんな、ここまで来てっ！」

と激昂しかけるが、

「……いえ、そうですね。その方が、いいかもしれない」

自分を抑えるだけの理性はあったようだ。

一方で、

「あ、あたしは、奏也様がいいって言うなら、もどっても……」

月掛は奏也に気を遣いながらも安心した様子だった。

俺はと言えば、本音を言えばここで諦めたくないという気持ちはある。

だが、ここでの異変の原因が『ヘルサラマンダー』だとすると、相手は木を一太刀で両断出来るほどの剣の腕を持っていて、素手でも地面をえぐるほどの力を持ち、最悪の場合広範囲にわたるエナジードレインの技まで持っているかもしれないのだ。

くだらない意地なんかで戦っていい相手ではない。

（……これでいいんだ。これで）

俺は湧き上がる悔しさとやるせなさを胸に押し込めて、先頭に立って枯れた道を戻っていった。

――こうして、俺たちの初めてのモンスター討伐は、始まる前に終わってしまったのだった。

皮肉にも、帰り道は行きよりも順調に進んだ。
俺たちはイベントを失敗した鬱憤を晴らすように足を速め、大樹に戻る道を急いだ。
おまけに行きでモンスターを倒していたせいか、魔物とのエンカウントも輪をかけて少なかった。

そのような要素もあり、結局俺たちは現実世界に戻る１０分前にはもう、村の入り口まで戻って来ることが出来た。
「まず、七瀬の様子を見に行こうか」
やはり気落ちしている様子の二人に気を遣って、わざと明るくそう提案した。

七瀬が寝ているという家を覗くと、そこには先客がいた。
後ろ姿だけで分かる。
銀髪に尖った耳。
……ナキだ。

「ナキ。七瀬についててくれたのか？」
俺が声を掛けると、
「…用事が、思ったより早く終わっただけ」
そうつれない言葉を残すが、俺の言葉を気にしていてくれたのは明らかだった。

「それでもありがとう。

そっちの用はうまくいったのか？
残念ながら、こっちは失敗しちゃってさ」
悔しさを紛らわすようにわざとらしくははは と笑うと、そんな俺
をナキが冷ややかな目で見た。

「……そんなの、当たり前」

そして、ぽつりとこぼしたのはそんな言葉。
その言葉が、イベントの失敗に苛立っていた月掛を暴発させた。

「あ、あんたねっ！　勝手なことを言わないでよ！
あんたは、あれを見てないから……」
苛立ちをぶつけるようにそう叫ぶが、ナキはあくまで冷静だった。

「もちろん私にだって、無理。だって……」

そう言って、ナキは俺の顔を見ながら、

「……『ヘルサラマンダー』は、ずっと前に死んでいるから」

突拍子もないことを口にした。
一泊遅れ、

「「「…は？」」」

俺と月掛、奏也の顔までが、驚きに染まる。

「ど、どういうことなんだ?!
もしかしてナキ、お前、『ヘルサラマンダー』を前に倒して……」

俺がそう問い掛けるが、ナキは首を横に振った。

「私じゃ、ない。倒したのは……」

そうして、ナキの細い指が示したのは、

「――え?　俺?」

なぜか、俺だった。

「普賢、君?」
奏也が信じられないというような顔で俺を見て、
「……」
月掛が、うわ、こいついつかやると思ってたわよ、みたいな軽蔑の眼差しを俺に向けた。

「ちょ、ちょっと待てよ!
俺はここに来るまで『ヘルサラマンダー』なんてモンスター、見たことも聞いたこともなかったんだぞ!?
一体いつ……」

俺は慌てて抗弁しようとするが、

「…インベントリ、開いてみて」

というナキの言葉に、渋々インベントリを開く。

「ここに何があるって言うんだ？」

俺はそう言いながら一つ一つアイテムを確認していく。

ポーションに傷薬、予備のショートソード。

それ以外にあるのはモンスタードロップのウサギの尻尾に、最初の魚人がドロップしたアイテムだけで……と最初の二つのアイテムにカーソルを合わせて、

『火蜥蜴の徽章』

『ヘルサラマンダーの鱗』

俺は、完全に固まった。

なぜだろう。

暑くもないのに汗が噴き出て、だらだらと流れて止まらない。

うん、落ち着こう。
落ち着いて、ちょっとだけ考えてみようか。
俺は努めて冷静になって、最初の夜にナキを襲おうとしていた鱗野郎、俺が初めて倒したモンスターのことを思い出す。

今思えば、あいつは他のグリーンウルフやブレイドラビットなんかのモンスターに比べると、若干毛色が違うというか、ちょっと強そうじゃなかっただろうか。
それに、ナキに切り付けようとした剣はなんとなくだが曲刀っぽかった気がするし、ついでに良く思い出してみれば、あの鱗の感じは魚人というよりなんとなくリザードマンっぽかったような気も……。

そして、それが本当なら、つまり……。

――俺たちは、もうとっくに倒した相手を探して森をさまよって、既に持っているアイテムを渡すだけのイベントのために、あんなに神経をすり減らしてたってことか？

こんなの、言える訳がない。
俺はインベントリから視線を逸らし、こっそりと皆の様子を盗み見た。

あからさまに動揺している俺に眉をひそめている奏也。
何かを予感しているのか、腰に手を当てて説教モードに移りそうな月掛。
呆れた様子で俺に冷たい視線を送っているナキ。

三者三様の反応だが、確実に言えることは、全員が等しくその目に懐疑と不審の色を備えているということだった。

（ど、どうしよう…！？）

俺は針のむしろのような視線に晒されながら、貴重なクエストアイテムの入ったインベントリを前に、ただだらだらと汗を流し続けていた。

――こうして、俺たちの初めてのモンスター討伐は、始まる前に終わってしまっていたことが発覚したのだった。

20．クラスチェンジ

「……ふぅ」

現実世界に戻ってきた俺は、大きくため息をついた。

「……なんとか、生き残ったな」

あれから本当に大変だった。

自分のインベントリに『火蜥蜴の徽章』が入っていることに気付いた後、

「あ、あれー？

な、なんでかしらないけどおれのいんべんとりにひとかげのきしょうがはいっているぞー？

こっこれはすごいぐうぜんだなぁー」

と俺が叫んだ後の沈黙と来たらそれはもうヤバかった。

イメージで言うなら軽蔑のブリザードがビュービュー吹き荒れ、視線の槍がザックザクで俺は血塗れハリネズミみたいになった。

もしも沈黙で人が殺せるなら、俺は阿僧祇を越える死を体験し、那由多の輪廻の果てにとうとう悟りの境地に至っていたに違いないと思う。

「しかし、参ったな……」

それでも何とかノリで押し切って、イベントを終了させて、こう

して現実世界に戻ってきた訳だが、

「転職するの、忘れてた……」

ということに、気付いてしまったのだった。

「よし、こんなもんかな？」

夕食を終えた俺はすぐに部屋に閉じこもり、ルーズリーフに奏也たちから聞いたクラスについての情報を書き込んでいった。

クラスについて、もう一度腰を据えて検討するためだ。

トラベラーのクラスは、継承率が０％で上位職の情報もないというかなりの地雷職だ。

これからもナイトメアを続けていくのなら、転職はほぼ必須と言える。

本当は『ヘルサラマンダー』のイベントを転職した状態でクリアして、新しいクラスのレベルを上げるつもりだったのだが、騒動のどさくさですっかり忘れていた。

ついでに言うと、そのことについてナキに相談しようかなとも思

ったのだが……。
ナキには、学校で夢の話をするなと言われている。
そして、それより何より、学校では当然ナキの姿を見かけたが、話し掛けることは出来なかったのだ。

俺の方が色々と気まずくて話し掛けられなかったというのもあるが、それだけではない。
一昨日のお前を殺す事件に続けて、昨日の飴玉ぽろり&これ読んで下さい事件。
そのせいでなんとなく俺はクラスの女子連中に危険人物認定されてしまった節があり、それとなく俺をブロックしているような感じがしたのだ。

普段接点がないくせに、こういう時に連携するのは女子の奇妙な生態だろうか。
ここでナキに突貫していく勇気は俺にはなかった。
俺は必死でナキの方を気にしてないよアピールをしつつ、つらい学校の時間を乗り切ったのだった。

そんなことを思い出しながら、俺が書きあがった表を見て満足げにうなずいていると、

「お兄ちゃん？　いるー？」

妹が、部屋のドアをノックした。
今は結芽の相手をするのは面倒だ。
俺は躊躇いなく、

「いないぞー」

と返事をすると、怒ったようにドアが開かれた。

「いないって言ったのに！？」

とまあちょっとしたボケを挟みつつ、俺は観念して結芽を手招きした。

一人で考えるのも心細いと思っていた所だ。

考えてみれば結芽は俺よりもゲームに詳しいし、いいアドバイザーになってくれるだろう。

俺はクラスチェンジの助言をもらいたいだけだったのだが、結芽がゲームの詳しい話をせがんできたので、もうこの際だと今までの話を全部ぶちまけることにした。

もちろんナイトメアが別の世界で実際に冒険をするゲームであることや、仲間の名前などの固有名詞は伏せて、だが、最初のスタートからあのイベントをこなした所まで、ほとんど全部を結芽に話した。

「へー」とか「うわー」とか「ひゃー」とか、いちいち大仰なリアクションで俺の話を聞いていた結芽だったが、一番気になったのは、やはり『ヘルサラマンダー』との戦いについてだった。

「お兄ちゃん、やっぱりそれ、おかしいと思う」

はっきりと異を唱えてきた。

「やっぱり、お前から見てもそんなにおかしいか？」

俺も漠然とおかしいなとは思っていたが、ゲーム経験が少ないせ

いか、今一つピンと来なかったのだ。

それを俺の表情から理解して、妹は少し考えるような顔をする。

そしてパッと顔を輝かせると、話し始めた。

「じゃあ、ゲームに疎いお兄ちゃんのために、わかりやすくゲームで例えると……」

そこはかとなく矛盾した発言だが、話の腰を折らないように俺は黙っていた。

「レベル1の勇者（ひのきのぼう装備）が動いてる石像を一撃でノックアウトするようなものだよ？」

「それは無理だ！！」

確かにすごく分かりやすかった。

リアルで想像してみても、そんなことしたらひのきのぼうが折られるだけだろう。

というか実際、俺のショートソードは壊れた訳だし。

しかし、ナイトメアは純粋なゲームという訳でもなく、疑似的ゲーム世界というかなんというかであり、その辺りは色々と抜け道がありそうである。

「でも、現に倒しちゃったからな。

たぶん、『オーバードライブ』の効果だとは思うけど……」

しかし、なぜかその言葉にも困ったような顔をして言うことには、

「それなんだけど……。

たぶん『オーバードライブ』は、あんまり関係ない気がする」

ということらしかった。

「そもそも、『オーバードライブ』って能力値を上げるワケじゃなくて、現状、ただスキルの効果を2倍くらいにするだけなんだよね？」

「まあ……そうだな」

「だったら、話を聞く限り、攻撃力に関係ありそうなスキルは『刀剣』スキルだけ。

でも、たった5％の補正が2倍になったって、それだけじゃあんまり意味がないと思う」

「あー……」

正論過ぎて、ぐうの音も出ない。

「それにリザードマンと言えばどのゲームでも防御力高めって相場が決まってるし、その上ユニークモンスターでレベルも１０以上上だったら、絶対初期状態のお兄ちゃんに勝てる相手じゃないはずだよ」

「そう、だなぁ……」

最初に俺がステータスを見た時、俺はもう既にレベル5だった。

だから俺の初期レベルは5なのだと思っていたのだが、これは恐らく『ヘルサラマンダー』を倒した時のウィル、つまりは経験値、が既に加算された結果だったのだろう。

つまり、トラベラーレベル１の俺ＶＳレベル１３のユニークモンスター『ヘルサラマンダー』。

……勝てる要素がない。

「だったら俺は、どうしてあいつに勝てたんだろうな」

ほとんど独り言のようにつぶやかれた言葉にも、結芽は丁寧に言葉を返した。

「お兄ちゃんと出会った時、すでに瀕死だったのか……。

あるいはもしかすると、お兄ちゃんのユニークスキルが発動した

のかも……」

「ゆ、ユニークスキル？　どうしてだ？」

一瞬声がどもってしまったのは、……まあ、あれだ。

ユニークスキルについては、結芽にもあまり詳しくは話さなかった。

結局出せたことがないし、アレには色々とトラウマが多いからだ。

もしかしてあの話もしなくちゃいけないのかな、と思っていたが、結芽にはその辺りを聞こうとする意志はないようで、

「お兄ちゃん、『ヘルサラマンダー』を倒してすぐ、気を失っちゃったんだよね？」

「あ、ああ……」

そしてそのおかげでナキに膝枕を……という邪念は捨てて、結芽の話に集中する。

そんな俺の邪な思いに気付くはずもなく、結芽は思案顔で続ける。

「ＨＰやＭＰがなくなったら、疲れて眠くはなるかもしれないけど、気絶まではしないはずだよ。

でも、ＤＰがなくなったら絶対に気を失う。

だからお兄ちゃんは、『ヘルサラマンダー』との戦いで無意識にユニークスキルを使って、それで倒れたのかもって思ったんだけど……」

「なるほど、それはあり得るな……」

妹の冴え具合が留まる所を知らなかった。

「それにしても、そんなこと良く知ってるな。

他のゲームにはＤＰとかないはずなのに……」

「だ、だって、わたしだって本読んだから……」

そう言って、前髪をいじいじとやりながら妹は照れた。

（しかし、ユニークスキルか……）

戦いの間、意識して発動させようとした記憶はないが、『魔力機動』や『オーバードライブ』も最初の発動は無意識だった。

そういうことが、なかったとは言えない。

（そういえば、明人との戦いの時も……）

折れたショートソードで相手の剣を受けようとして、明人の持っていた高レベルのはずのナイフを切ったことがあった。

――似ている、と思う。

剣が壊された直後という状況。

そして、あり得るはずのないほどの攻撃力。

（『真実の剣』、か……）

仮初めの剣が壊れた時だけに現れる、本当の剣。

なんて解釈をするのは、少し夢を見過ぎているだろうか。

（今度、向こうに行ったらどうにかして調べてみないと……）

やるべきことが増えた。

「そ、それよりお兄ちゃん、転職！

転職するんでしょ？

は、早く、クラスを見てみようよ！」

もしかすると、俺が考えている間もずっと照れ続けていたのだろうか。

妙に焦った声でそう言ってくる妹にはいはいと答え、俺は今度こそクラス性能の書かれたルーズリーフを、妹の前に広げたのだった。

そうして数分後、

「ぜったいぜったい剣士！！」
「いや、ここは手堅く戦士だろ！」

「手堅さなんて求められてないよ！
ここはガツンと剣士一択だよ！」
「そんなリスキーな選択が出来るか！
攻防のバランスがいい戦士が一番だ！」

「お兄ちゃんの分からず屋ー！」
「お前だって十分頑固じゃねえか！」

俄かに兄妹喧嘩が発生していた。

ちなみに俺が妹に見せた資料はこんなんである。

【戦士】
《成長値》
魔力：３
理力：１
強化：３
耐久：３
俊敏：２

器用：２
理法：１
克己：２
操作：１
信心：１

ＢＰ：１
総合：２０
継承：２０％

《クラススキル》
パッシブ『戦の手腕』
攻撃・防御が上昇

《クラス獲得条件》
魔力・強化・耐久１２以上

【槍戦士】
《成長値》
魔力：３
理力：１
強化：２
耐久：３
俊敏：２
器用：２
理法：１
克己：３
操作：１
信心：２

ＢＰ：１
総合：２１
継承：２０％

《クラススキル》
パッシブ『鉄の防護』
防具の防御・耐久が上昇する

《クラス獲得条件》
魔力・耐久１５以上
『槍』スキルレベル１以上

【剣士】
《成長値》
魔力：２
理力：１
強化：４
耐久：２
俊敏：３
器用：３
理法：１
克己：１
操作：１
信心：２

ＢＰ：１
総合：２１
継承：２０％

《クラススキル》
アクティブ『ブーストパワー』
一定時間攻撃力を上昇させる

《クラス獲得条件》
強化・俊敏１５以上
『刀剣』スキルレベル１以上

【魔法使い】
《成長値》
魔力：１
理力：３
強化：１
耐久：１
俊敏：１
器用：２
理法：３
克己：２
操作：２
信心：３

ＢＰ：１
総合：２０
継承：２０％

《クラススキル》
パッシブ『理術の知識』
理術の攻撃力が上がる

《クラス獲得条件》
理力・理法・操作１２以上

【魔女】
《成長値》
魔力：３
理力：４
強化：１
耐久：１
俊敏：１
器用：２
理法：５
克己：２
操作：３
信心：１

ＢＰ：１
総合：２４
継承：２５％

《クラススキル》
パッシブ『ウィッチクラフト』
理術発動速度短縮

《クラス獲得条件》
理力・理法３０以上
女性限定

【吟遊詩人】

《成長値》

魔力：２

理力：２

強化：１

耐久：２

俊敏：２

器用：３

理法：２

克己：１

操作：３

信心：２

ＢＰ：１

総合：２１

継承：２０％

《クラススキル》

パッシブ『優れた奏者』

演奏関連のスキル効果がＵＰ

《クラス獲得条件》

器用・操作１５以上

『演奏』スキルレベル１以上

【弓使い】

《成長値》

魔力：２

理力：２
強化：３
耐久：１
俊敏：２
器用：３
理法：１
克己：２
操作：２
信心：２

ＢＰ：１
総合：２１
継承：２０％

《クラススキル》
パッシブ『射撃の習熟』
遠距離武器の射程ＵＰ

《クラス獲得条件》
器用２０以上
『弓』スキルレベル１以上

【スカウト】
《成長値》
魔力：２
理力：２
強化：２
耐久：１
俊敏：３

器用：４
理法：１
克己：１
操作：２
信心：２

ＢＰ：１
総合：２１
継承：２０％

《クラススキル》
アクティブ『簡易探査』
近くの敵やアイテムを察知する

《クラス獲得条件》
俊敏・器用１５以上
索敵系スキルを所持

全部向こうの世界でみんなに教えてもらった物を思い出して書き出しただけだが、たぶん間違ってはいないと思う。
実はこういう意味のない数字や文字列を暗記するのは得意だったりするのだ。
そのおかげで入試で苦労した覚えはないし、それなりな進学校である宿鳳（しゅくほう）高校でも落ちこぼれていないと言える。

まあそれはともかく、だ。
喧嘩の内容を聞いてみれば分かると思うが、俺と妹の間で意見が割れた。

とりあえず俺の理術系の能力は絶望的だ。
まず真っ先に魔法系は消えた。
次に、特別なスキルを必要とする上に仲間と職業がかぶる槍と弓が消える。

最終的に候補に残ったのは戦士と剣士とスカウト。
そこで俺は物理系能力のバランスのいい戦士を推し、妹は攻撃に特化した剣士を推し、先程のようなやり取りに発展したということである。

戦士も剣士も、総合力や継承率に大差はない。
この場合の争点は防御もこなせるバランス型でいくか、攻撃特化でいくかという一点だけだ。

俺はやっぱり色々な場面で対応出来る方が強いと考えた。
一撃の重さっていうのは確かに貴重だが、それで防御がおろそかになっては元も子もない。
だが、結芽の考えは違うようだった。

「お兄ちゃん。前に教えたはずだよ？
パーティには役割が大切だって。
タンクをやるならもう槍使いがいるんだから、お兄ちゃんはアタッカーをするべきだと思う」
タンクというのは、味方の盾になって攻撃を引き付ける役。
一方でアタッカーとかダメージディーラーとか呼ばれるのが、攻撃に特化して敵にダメージを与える役だと前に教わった。

結芽の言うことは分かる。
分かるが、
「だけど、なぁ……」

特化しているというのは、その分何かが足りない、つまり不安定だということだ。
あまり今すぐに特化したスタイルを選ぶと、逃げ道がなくなりそうで嫌だという心理もある。

何より今の所、俺の仲間には後衛が多い。
盾役が出来る人間は多い方がいい気がするというのもある。
それに、

（今の七瀬に、タンクなんて任せていいのか？）

という疑問もあった。
しかし、詳しい事情を話していない妹に、そのことが伝わるはずもなく……。

――結局この喧嘩は、風呂が空いたと諒子さんが結芽を呼びに来るまで続いた。

そして、

「結局、決められなかったな……」

――午前０時。

明確な答えを出せないまま、今日も悪夢の幕が上がる。

21. R. P. G

『な…？　季…イベ…ト？』

『…う。ち…っと、面…そ…なイベ…トがあった…だ…ど、時期が……てたから、…きなく…』

『…あ、覚…ている…ら、後で…けば…いん…ゃない…』

『…ん。…うだね。そう…る。

ね…、もし、そ…時…、……がこっち…来…たら、一緒に――』

「――コーイチ？」

耳を打つ涼やかな声に、俺は目を見開いた。

「あれ…？」

見ると、俺の顔をナキが覗き込んでいる。

いつの間にか、ナイトメアの世界にやってきていたようだ。

「…どうか、した？」

あまり興味がなさそうにナキが聞いてくる。

「いや、どうも、してない」

なんとなく、懐かしい夢を見たような気がしていた。

けれど、良く思い出せない。

――だったらたぶん、そう大したことじゃないはずだ。

そう片付けて、俺は頭の中のもやもやした物を振り払った。

意識して、話題を変える。

「そういえば、奏也と月掛は？」

この前現実に戻った時は、大体同じ場所にいたはずだが、姿が見えない。

俺の疑問に、ナキは、
「…七瀬の、ところ」
いつも通り過ぎて安心すら覚えるそっけなさで答える。

「そっか。現実世界で一日挟んだから、七瀬も起きてるかもしれないな。
じゃあ、俺たちも行くか」
そう言いかけて、俺は今更ながら、大変なことを忘れていたことに気付いた。

――東の森のことだ。

イベントだとか転職だかにかまけてすっかり忘れていた。
俺は東の森の一角が不可思議にも生命力を奪われているのを見たし、そこでは大きな木が何者かに切り倒されていたり、地面が散々にえぐられていたりした。

あれはてっきり『ヘルサラマンダー』の仕業だと思っていたが、『ヘルサラマンダー』は既に死んでいた。
だとすると、もしかすると全く知られていない、未知の脅威がこの村に迫っているかもしれなかった。

「なぁ、ナキ。ちょっと相談があるんだが……」
いざとなれば、俺たちがその原因を調査するか、せめて村の人に危険を報せなければならない。
ナキにも状況を知ってもらおうと東の森で俺が見たことを話すと、
「……」
話の初めの頃には少しだけ険しくなっていた無表情は、俺の話が進むにつれ、なぜか通常時と同じ俺への呆れと侮蔑に変わった。
……それが通常ってのも、改めて考えるとかなり哀しい物がある

が。

話を聞き終わったナキは、俺を諭すようにゆっくりと口を開いた。

「…それ、たぶん私たちが最初にいた場所」

「……なんだって？」

そして、三つの異変の意外な犯人が明らかになった。

まず、

「…生命力が奪われた森は、木が凍っていた場所」

らしい。

俺も言われて思い出した。

――あの『氷の森』だ。

あんなに暖かい森が何で凍るのかという疑問があったが、やはり一過性の現象だったらしい

そして、あんな風に凍ってしまったのだったら、葉が抜け落ちたりしてしまっても不思議はない……のか？

しかし、俺たちが最初の場所に戻ってきてしまっていたと考えると、一つしっくり来ることがある。

敵のエンカウント率だ。

もし俺たちが来た道を辿っていただけなら、奏也たちと進んだ時に敵がほとんど出なかったことにも説明がつく。

既に俺とナキがあらかた片付けてしまっていたと考えれば、あの

低いエンカウント率にも納得がいく。

そして、その考えを裏付けるように、ナキは次に、

「…抉られた地面は、私が初めて魔法を使った場所」

とのたまった。

「そうか！　俺たちの最初の戦闘！」

しばらく何のことを言っているのか分からなかったが、ようやく思い出せた。

初めてブレイドラビットと遭遇して、ナキが魔法を使って倒した時のことだ。

あの時、ナキはかなりオーバーキル気味にマジックアローを連射していたことを思い出した。

……え？

ということはつまり、その時にあまった魔法の矢が地面に刺さってクレーターを作ったということだろうか。

半端ないな、マジックアロー。

そして、最後の一つ。

「切られた、木は……」

そこで、初めてナキは詰まった。

「…？」

なぜか、俺の顔色をうかがうようにして、しばらく無言を続け、

「……とぉー」
「は？」

ようやく口を開いたと思ったら、謎の言葉を繰り出した。
……もしかして、もしかしてとは思うが、今のは彼女なりのギャグだろうか。
何が言いたいんだか、全然分からなかった。
しかし、すぐに自分でも恥ずかしくなったのか、

「…何でもない」
「そ、そうか」

そう言って、ナキは顔をそむけた。
しかし、自分で何でもないと言いながら、心持ちナキは不機嫌だった。
まるで他人のギャグで滑ったみたいな不本意そうな顔で、

「…とにかく、危険はないから」

と言い捨てて、勝手に歩き出してしまう。

「あ、待てって！」
俺は慌ててその後を追いかける。
そのせいで、俺はその話について考えるのを止めてしまった。

だから、森が凍った原因が分からない以上、危険がないとは言い切れないんじゃないか、と思い至ったのは、もっと後になってだっ

た。

ナキが向かっていたのは、七瀬の所だったらしい。
途中で、気落ちした様子の奏也と、それを所在なさげに見守る月掛に遭遇した。

「七瀬は、どうだったんだ？」
俺の問いに、奏也は肩をすくめた。
「幸い、目は、覚めていました。
でもひどく錯乱していて……」
相当に苦労したらしい。
いつもの笑みも、若干くすんで見える。

「話も出来なかったのか？」
「……ええ。まだ苦しそうだったので、体力回復の歌を、と思ったのですが、演奏を始めた途端、いきなり物を投げつけてきて……」
怯えすぎていて会話も成り立たない、ということだろうか。

――正直、無理もない、とは思う。
仲間だと思っていた相手に裏切られたのだ。
人間不信になってもおかしくはない。

「とにかく、俺も一度行ってみるよ。
まだ、明人が襲ってくると思ってるのかもしれない。
少なくとも、状況だけは話しておかないと」
俺が言うと、奏也は難しい顔をして、
「無駄だと思いますが……いえ、健闘をお祈りします」

それでも、そう言って送り出してくれた。

奏也と月掛とはそこで別れ、ナキも、
「…ひとりで、行った方がいい」
と主張したため、結局俺だけで七瀬の様子を見ることになった。

「……七瀬？」
家の中に顔だけを差し込んで、中をのぞいてみる。
七瀬が暴れた……のだろうか。
中は物が散乱してひどい有様だった。

人の気配はない。
ただし、ベッドに盛り上がりが見える。

「七瀬？」
もう一度呼びかけてみる。
この距離だ。
起きているなら聞こえているはずだが、やはり返事はない。

更に近付いて観察してみる。
布団が、少し上下した気がする。
あそこにいるのは間違いなさそうだ。

俺はベッドの横まで近寄った。
そして、その布団のふくらみに、
「なぁ、もしかして、寝て……」

三度呼び掛けようとした時だった。

突如、布団の中から腕が伸びた。

引き込まれる！

「ちょっと待っ…うわ！？」

待たなかった。

何が起きたのか良く分からない内に、俺は布団の中に引きずり込まれ、

「な、七瀬っ！？」

布団の中で七瀬に馬乗りになってのしかかられ、その爛々と輝く瞳と相対していた。

――殺される？！

その瞳には狂気にも似た色があった。

命の危険を覚える。

なのに、七瀬を跳ね除けようという気は起きなかった。

七瀬には、前にわき腹を槍でえぐられてはいる。

だがあれは事故で、七瀬は明人とは違う。

まだ会ったばかりで大したつながりがある訳ではないが、七瀬のことは仲間、少なくとも味方だという意識があった。

何とか説得出来ないだろうか。

そう思った一瞬の隙に、胸にズンと響く、重い感触。

次いで、そこから熱い何かが広がっていく。

――刺された?!

まず考えたのは、そんなこと。

だが、違った。

「……かった、…す」

「え?」

俺にぶつかってきたのは、ナイフじゃなくて、七瀬自身で、

「怖かった、です、光一さぁん」

胸に広がる熱い物は、七瀬の涙だった。

――俺の胸に顔を押し付けて、七瀬は泣いていた。

しばらく経って、ようやく七瀬が落ち着いた。

涙と鼻水でデロデロになった俺の服を見て、ごめんなさいとまず謝った。

なぜだろう。

前に話した時とは、受ける印象が随分と違う気がする。

とりあえず、何か話さなくては始まらない。
「まあその、安心したよ。
奏也が来た時は、錯乱してた、なんて言ってたから」
俺が切り出すと、七瀬はうつむいたまま、きゅっと拳を握った。
「……こわ、かったんです」
「怖かった？」
やはり、あの時のトラウマだろうか。

俺が次の言葉を待っていると、七瀬は思わぬ強い感情のこもった目で俺を見つめた。
「あの人、部屋に入ってくるなり、突然演奏を始めて……。
すごく、嫌な音だったんです。
だから絶対、やめさせないとと思って……」
「演奏？」
奏也は回復の歌を聞かせようとしたと言っていたが、そのことだろうか。
それに対して七瀬が過敏反応してしまったということはあり得る。

「奏也は、体力回復の歌を聞かせようとしたって言ってたぞ？」
出来るだけ七瀬を刺激しないように、やんわりと誤解を解こうとする。
「……信用、できません。
わたしが過敏になっているのは認めます。
でも、休んでいたのでＨＰもＭＰも全快してますし、回復の歌なら事前にわたしに説明してくれてもいいはずです」
奏也の話とは少し食い違う。
単なる誤解だと思うが、これ以上この話をしても水掛け論になるだけのような気がした。

俺は違う話題を探して、すぐに七瀬の雰囲気の変化に思い至った。

口調が前とは全然違うし、そういえばいつもしていた眼鏡がない。
そのせいで、七瀬からは前よりずっと控えめな印象を受けた。

もしかするとデリケートな問題に触れるかもしれないが、どうせこのまま流すことは出来ない。
緊張をごまかすようにそっと唇を湿らせてから、意を決して切り出した。

「なぁ。……その、言い難いんだが、前とちょっと雰囲気が変わってないか？
前に話した時はもっと……」
「キツイ性格、でしたか？」
「そこまでは、言わないが……」
七瀬のはっきりとした言葉に、俺は少しうろたえた。
それを見て七瀬は、いいんです、と笑った。

「あれは……こっちに来て、頑張って作り上げた性格です。
元々のわたしは、あんなに強気な人間じゃありません」
「ロールプレイか……」
俺は思わずつぶやいた。
役割（ロール）を演じる（プレイ）、ということ。
ある程度一般にも浸透している用語だが、ネットワークゲームなんかでも使われるらしい。
ゲームの中で自分と違う性格の人間に成り切って遊ぶことを、確かそんな風に言ったはずだ。

七瀬は小さく俺の言葉を肯定した。
「昔から、引っ込み思案な自分が嫌いでした。
自分の考えをはっきりと言える人間になりたいって、ずっと思っ

てました。
だからこの世界で、わたしは『あのわたし』になったんです。
……結果は、まあ、あんなことになってしまいましたけど」
そう言いながら、七瀬は自分の手を見た。
その手は、小刻みに震えていた。

「やっぱり、あの時のことが？」
俺の言葉に、七瀬はうなずいた。
「ちょっとした、トラウマになっちゃったみたいですね。
現実世界でも、人が怖いんです。
……不思議ですよね。
この世界の記憶は、ないはずなのに」

目の前で人が殺されて、そして自分も刺されたりすれば、そうなってもおかしくはない。
しかも、それをやったのがつい数分前までそれなりに親しく話をしていた相手となれば、ショックは大きいだろう。

俺は、どうなんだろう？
どこかでここは現実じゃないと考えているせいなのか、そういう意味でのショックはあまりなかった気がする。
穂村の死についても、どうしても仇を討ちたいとか、つらくてどうしようもないとか、そういう感情はない。
薄情だとは思うが、それが俺の正直な気持ちだった。

七瀬は……穂村とは、俺以上に親しかった。
それに、自分が刺されたとなれば、この世界が現実でないなんて自分に言い訳することも出来ないのかもしれない。
奏也の言葉が思い浮かぶ。
俺は一回だけ目を閉じてから、聞かねばならないことを聞いた。

「じゃあ、やっぱり……もう俺たちと行くのは無理か？」

避けては通れない質問。

この世界用に作り上げた人格をあっさりと捨て去ってしまうくらいだ。

てっきり七瀬は、その言葉にもうなずくと思っていた。

しかし、

「いいえ。できるなら、光一さんと一緒に行かせてください」

七瀬は予想外にも、俺の言葉に首を横に振ったのだった。

その答えに、俺は少なからず驚いた。

「いいのか？

これからまた、絶対に戦いはあるぞ？

せめてしばらくは、この村に留まった方が……」

しかし、七瀬はまた、首を横に振る。

「少なくとも、魔物との戦いなら大丈夫だと思います。

どうしてもあの時のことを思い出してしまうから、刃物はまだ怖いですけど、でも……」

「でも？」

「魔物相手の方が、まだ気楽ですから」

「……そうか」

その七瀬の返答には、俺は何も言えなかった。

「それに……」
七瀬が顔を上げて、俺をまっすぐに見た。
その弱々しい瞳が、なぜか俺をたじろかせる。

「今、わたしが信じられるのは、光一さんだけですから」

そうして思った通り、七瀬は俺に予想外の言葉を投げつけてくる。
「どうして…？」
思わず漏れた俺の言葉には、七瀬は何も答えない。
ただ、困ったような顔で、曖昧に微笑んでいた。

けれど、それでは足りないと思ったのか。

「わたし、頑張ります。
モンスターとだって、ちゃんと、戦いますから。
だから、もう少し、あなたについていって、いいですか？」

七瀬は俺に向けて、俺だけに向けて、そんなことを言う。
瞳の弱々しさは変わらない。
だがそこには、確かに俺に向ける信頼の色があった。

――俺が、七瀬の傷を治したから？
――あるいは俺が、明人と戦っているのを見たから？

七瀬のその信用の理由は、俺には分からない。
だがその信頼は、俺には少しばかり重過ぎると、そう思った。

それでも、今の七瀬を振り切って捨てるには、あまりに俺は意志

が弱過ぎた。

「――こちらこそ、よろしく頼むよ」

だから俺は、七瀬に手を伸ばした。
その手を、おずおずと、けれど嬉しそうに七瀬が取る。

――彼女を引き起こした右手が、なぜだかひどく重く感じた。

22．ハリルの村で

七瀬と家の前で待機していたナキを連れて道具屋に向かうと、奏也には随分と驚かれた。

「その、びっくりしました。
正直に言えば七瀬さんはもうダメかと思ってましたから」

奏也のその言葉に、七瀬は何の返答もしなかった。
ただ俺の背後に隠れて、警戒する猫のようにじっと奏也を見ていた。
ナキと合流してからは途端に無口になっていたし、俺以外を信用していないというのも誇張のない事実なのかもしれない。

一方で月掛の反応もはっきりとしていた。
七瀬を一瞬見た後、ずっと俺にどこか非難の混じった視線を向けていた。
解読するとこんな感じだろうか。

『あんた、こいつに何やったワケ？』

目は口ほどに物を言うとは言うが、月掛の視線は饒舌過ぎていたたまれなかった。

そんな膠着状態とも言えるような状態を打ち破ったのは、やはり奏也だった。

「でも、それならちょうどいいですね。
これから三時間くらい後に、あの大樹の場所でイベントが起こるんです。
ここにいる全員で行きましょう」

温和な笑みを浮かべ、そう提案した。

「そういえば、実入りのいいイベントが二つある、って言ってたな。
一つは『ヘルサラマンダー』だとして、二つ目はもしかしてそれのことか？」
「はい。こちらは獲得ウィルは４０００。
『ヘルサラマンダー』の討伐と比べると随分と落ちますが、それでもここで狼や兎を狩るよりずっと効率がいいと思います」

自信満々の笑みで奏也は答える。
だが七瀬ではないが、こいつの笑顔ほど信用出来ない物はない。

「言っとくが奏也。下手な情報の出し惜しみはやめろよ？
今度こそ、時間に余裕があるんだ。
今回はきちんと全部、説明してもらうぞ？」

俺が釘を刺すと、奏也はやはり完全無欠な笑顔で答えた。

「もちろんです。
先程も言いましたが、次のイベントは三時間後。
場所は僕たちが初めて会ったあの大樹。
そして、肝心のイベント内容は……」

皆の注目が集まっているのを確認してから、十分にもったいぶって、言った。

「――『渡り竜』を見ることです」

イベント開始までの三時間弱は自由時間に充てることになった。

奏也と月掛は早々にどこかに消え、俺とナキと七瀬がその場に残る。

「な、なあ？」

「……何？」

「その……いや、やっぱり何でもない」

「……そう」

「……」

「……」

ナキとは、本当に会話が続かない。

それが気づまりとは言わないが、やはり数時間を過ごすのはちょっとキツイ。

だから、もう一人の七瀬と世間話を試みたのだが、これが最高に

気の滅入る時間だった。
俺には女子と話せるような話題のストックはないので七瀬に話を振ったのだが、それが間違いの元だったと言える。

七瀬のちょっと悲しい話（小学生時代に胸が大きいことを理由に女子からやっかまれ、男子からはからかわれた話。無理して小さいブラを使おうとして体調を崩したこともあったらしい）やちょっと嬉しい話（ある日戯れに眼鏡をかけたら世界にフィルターがかかった気がして他人からの視線が少しだけ気にならなくなり、それから伊達眼鏡は欠かせない、という話）を聞いたのだが、どちらもただの世間話にしては塩味の効き過ぎた思い出だった。
話を聞いているだけで俺の心のＨＰはガシガシと削られていく。

それからも七瀬はぽつりぽつりと何か話していたが、正直右から左だった。
というか、

「……だから、こうやってファンタジーみたいな世界にいることはわたしだって嬉しいんです。
わたしの灰色しかなかった人生に、初めて色がついたような気がして」

なんて心の底から嬉しそうに語っている奴に何と返せばいいのか。
頼むから誰か教えて欲しい。

話が一段落ついた所で、俺は色々と理由を出して逃げ出した。
一人で村を回る。

奏也が言うには、『渡り竜』というのは、正に渡り鳥の竜版らしい。
渡り鳥と同じように気候に関係しているのかは分からないが、一年に二度、この地域の上空を飛竜の群れが通りかかる。
それを大樹から双眼鏡を使って盗み見をするのがイベント内容で、なぜか知らないがそれでウィルをもらえるらしい。

もちろん『渡り竜』も竜の仲間。
まともに戦ったら、初心者パーティに勝ち目はない。
万一盗み見をしている所を見つかったら確実に命はないが、少なくとも今まで、『渡り竜』に見つかった冒険者はいないらしい。

ちなみにこの村、家の屋根がすべからく葉で覆われているのはその渡り竜対策だそうだ。
なるほど、確かにアレだけ葉っぱをつけていれば、空から見れば普通の木々と同じに見えるだろう。
最初に魔物に対する擬装ではないかと考えた俺の勘は、外れてはいなかったことになる。

「しかし、『渡り竜』かぁ……」

ナイトメアのイベントは、ナイトメアにいる人間の想像力で作られていると聞く。
誰がこんな物を思いついたんだろう、と考えながら歩いていると、

「へぇ？　また面白そうなことやってんなぁ」

横から声を掛けられた。
まさか、と思いながら振り向いて、そこにいた人物に俺は、驚くより先に呆れてしまった。

「何で、こんな所にいるんだ？　……明人」

そこには四ツ木明人が、穂村を殺し、七瀬を刺したその男が平然と立っていた。

「ま、そんな警戒すんなよ。言ったろ？
しばらくお前らに手を出すつもりはないって……」
明人は両手を上げてそう言ったが、当然信用出来るはずもない。

「何をしに来たんだ？」
俺の問いに、明人は首をすくめた。

「あー、実はな。穂村のことだが、ダメだったんだよ。
現実で会いに行こうと思ったんだが、すっかり忘れちまっててな」
身勝手なことを、と思う。

こっちの世界で死んだ穂村が現実世界でどうなっていたか確かめるという話だろう。
頭に血が昇ったが、ここで明人に躍り掛かっても勝ち目はない。
俺は唇を噛んで明人を睨み付けた。
しかし、そのくらいで堪えるのなら、あんな行動は起こさないだろう。

明人は平然としている。

「それで、オマエらのことを思い出したんだよ。
たくさんいれば、誰か一人くらい覚えてるかもしれないだろ？
だから……」

「そうか。なら用事は済んだな。
仲間にも伝えてやるからさっさと村から出て行ってくれ」

少なくとも、俺はなぜかこの世界でのことをはっきりと憶えている。

実際にやるかどうかはともかく、俺が憶えていれば穂村の様子を確かめることは不可能ではないだろう。

俺のにべもない返答に、明人は顔をしかめた。

「だぁから、そんな警戒しなくても手は出さねえって。
ま、それに穂村のことはただのついでだ、ついで。
オレはこれから、北に向かうんだ」

「…北？」

俺にはこの世界の地理の知識はない。
北に何があるのか、すぐには思い至らなかった。

「そ。でっかい街があるそうでな。
この村に来たのは最後の補給だ」

「……そうか」

奏也が言っていたのと同じ方向だろうか。
だが、村から出てくれるというのなら引き留める理由はない。

そんな様子を見て、明人はぽりぽりと頭をかいた。

「しっかし、テメエらはぬるいな。
村の奴らに何も言わなかったのか？
普通に道具が買えちまって、拍子抜けしたぜ？」

「……言ったって、お前を止められる訳じゃないだろ？」
それよりは、下手に刺激して殺されない方が重要だ。

明人は同意するように両肩を上げた。
「ま、そーかもな。
じゃ、まあオレは行くぜ。
……また、会えるといいな？」
「俺は二度と会わないように祈ってるよ」
そんな言葉を別れの挨拶に、明人は本当に村から出て行った。

「……はぁ」
重たい息を吐き出す。
「……皆の所に、戻ろう」
まだ時間まで二時間近くあるが、これ以上一人でいる気にはなれなかった。
明人が戻ってくるとも思えないが、万一ということもある。
今、七瀬と明人が遭遇するのも避けたい。

――俺はこれからの二時間を三人で過ごす覚悟を決めて、来た道を戻り始めたのだった。

23．渡り竜と魔法使い（前書き）

ようやくここまで来た！！

23．渡り竜と魔法使い

――ナイトメアイベント『渡り竜を追え！』――

【イベント達成条件】
1．ハリル村横の大樹の上から、双眼鏡で飛竜の群れを目撃する
2．飛竜を倒す（追加ボーナス条件）

【イベント達成ボーナス】
1．４０００ウィル
2．飛竜一匹につき３６０００ウィル

【イベント失敗条件】
なし

【イベント失敗ペナルティ】
なし

【受諾可能グレード】
1～

あれから何事もなく二時間を乗り切った俺たちは再び奏也と月掛とも合流し、パーティを結成、大樹への道を歩んでいた。

ナキはいまだに自分のステータスを他人に見せたがらないが、パーティを組んだ時のステータス開示設定をいじれると分かったため、今回のパーティには参加している。

ちなみに今の俺たちの職業とレベルを並べると、こんな感じだ。

【普賢　光一】
トラベラー　ＬＶ１０

【三島　奏也】
吟遊詩人　ＬＶ９

【月掛　立】
弓使い　ＬＶ９

【四方坂　ナキ】
魔女　ＬＶ１３

【七瀬　こずえ】
槍使い　ＬＶ４

『ヘルサラマンダー』のイベントをこなしていない七瀬がまだレベル４なのは理解出来る。
そのためにも『渡り竜』のイベントは是非とも成功させたいなと素直に思えるというものだ。
しかし、イベントをやっていないナキがこの中で断トツにレベルが高いというのは一体どういうことなのか。

「…ひとりでレベル上げ、してたから」

それに対してナキは簡潔にそう答え、それ以上の解説を寄越さなかった。
いつも思うが、大物過ぎる。

ついでという訳でもないが、話がレベルのことに及んだので、俺は自然とパーティのみんなに自分の職業のことを相談してみた。

奏也は、
「戦士がいいんじゃないですか？
壁役は必要ですし、やはり一番安定すると思います」

月掛は、
「なに？　わたしはあんたのクラスなんて興味ないわよ。
……まぁでも、剣士、とかいいんじゃないの？
そういう戦闘スタイル、合ってると思うけど」

七瀬は、
「スカウトか、剣士をお勧めします。
……あの、高速戦闘はわたしには無理です。
光一さんの方が、そういうの、向いてると思います」

ナキは、
「……戦士。死ににくそう」

と、見事にバラバラだった。
基本的には戦士と剣士で2対2に分かれた、という所か。

だが前に妹にも話した通り、俺自身は戦士に惹かれていた。
奏也が言う通り、安定性というのはやはり武器だ。
性格的にも、戦士の方が俺の性に合っている。

この世界で焦る理由なんて何もない。
勇者や英雄になりたい訳でもない。
今の俺は、ただこの仲間たちと楽しくやれればそれでいいと思っている。
だから大切なのは、死なないこと。
つまり、どんな状況でも生き残ることだ。

――うん、やっぱり戦士にしよう。

俺がそう決意を固めたその時だった。

「着いたみたいですね」

あの大樹が、目の前にそびえたっていた。

結局、いまだに転職をしないまま、俺は木に登ってしまった。
もちろん、今からでもボタンを数個操作するだけで、簡単に転職は終わる。
なのにまだ何か見落としがある気がして、俺はまだ迷っていた。

もう、飛竜が来てしまう。
そうしたら、転職後のレベルを上げる絶好のチャンスをふいにしてしまう。
それは分かっているのに、なぜか指が動かない。
一番大切な何かを、決して忘れてはいけない何かを忘れている気がして、決断出来ない。

そして、

「奏也様っ！　あれ！！」

月掛の声に、データウォッチに落としていた顔を上げる。

最初は、ただの鳥の群れかと思った。
だが、すぐに違うと分かる。
いや、分からされた。

近付いてくるにつれて理解出来る、一匹一匹の大きさ。
そして何よりも、その生き物の放つ、圧倒的な存在感。
『竜』という存在を、否応なく脳に焼き付けられる。

それが何十、何百と連なり、一斉に移動しているのだ。
圧倒されないはずがなかった。

「あれが、渡り竜……」

隣で、誰かが呆然とつぶやくのが聞こえた。

しかし、そこに来ると奏也は流石だった。
渡り竜の姿に感銘を受けていない訳ではないだろうが、奏也はそれを押し殺すことの出来るリアリストだ。

「皆さん！　そろそろ竜たちが上を通ります！
双眼鏡を用意してください！」

言われて、俺や七瀬は慌ててデータウォッチを操作する。
村で待機している間に、奏也は抜け目なく人数分の双眼鏡をそろえていた。
震える手でデータウォッチを操って、その双眼鏡を取り出した。
すぐさまのぞきこむ。

「うわっ！？」

その双眼鏡は思った以上の倍率で、のぞいた途端、まるですぐ近くに竜がいるような錯覚を覚えた。
と、同時に、頭の中でファンファーレ。
イベントの達成を報せる。

他のみんなも、最初の数秒で目的は達しただろう。
それでも誰一人、双眼鏡から目を離す者はいなかった。
世界の王者たる竜。
その威容を、誰に言われるでもなく、目に焼き付けようとしていた。

そして、ようやく全体の半分が通過しただろうかという時だった。

俺たちの中で唯一泰然と飛竜を見上げ、奏也に言われる前から双眼鏡をのぞいていたナキが、鋭い声を発した。

「群れの中央やや先端寄り、右端！　見て！」

その声に含まれた切迫した響きに、俺ばかりでなく、その場の全員がナキの示した場所に双眼鏡を向ける。

そして俺たちは、一様に驚きの声を上げた。

「まさか……人？！」

飛竜の群れに向かって、一人の生身の人間が、無謀にも突撃をしかけようとしていた。

「どういうことなんだ？」

俺が尋ねると、奏也は困惑したように答えた。

「もしかすると、飛竜を倒すつもりなのかもしれません。ほら、このイベントにも、飛竜を倒すことが条件に加えられています。

だから、あの人も……」

答える奏也の言葉にも、いつもの勢いがない。

奏也も、あの圧倒的な存在感と力強さを備えた存在を、たった一人でどうにか出来るはずがないと、そう考えているのだ。

もちろん俺も、同感だった。

一対一ならあるいは、という思いはある。

今は無理でも、冒険者として経験を積み、パーティ全員が全力で挑めば、何とか勝てるかもしれない。
だが、あれは無茶、無謀だ。
たった一人で飛竜の群れに飛び込むなんて、正気の沙汰じゃない。

「あの人、本気みたいよ！」

月掛が俺たちの注意を促すように、声を上げる。
魔法使い、なのだろうか。
その人物は、道具も使わずに空を飛び、一直線に飛竜の只中に飛び込んでいこうとする。
だが、

「危ないっ！！」

思わず、といったように、隣の七瀬が叫んだ。
魔法使いの接近に気付いた一匹の飛竜が、わずらわしそうに首を曲げ、

「炎のブレス！！」

口から火を放った。
火炎放射器、どころの騒ぎではない。
恐らく想像を絶するような高温のブレスが、飛竜の体を丸々包み込むほどの大きさに膨れ上がって魔法使いを襲う。

だが、魔法使いは、軽やかな飛行でそれをあっさりとかいくぐる。
そして再び現れた魔法使いの手には……巨大な、魔法の槍！？

――ドクン、と心臓が跳ねる。

その鼓動一回の間に、事態はめまぐるしく推移した。
魔法使いが槍を投擲、それは火を放った飛竜に突き刺さり、

「そんな!?　一撃で?!」

巨大な魔法の槍を受けた飛竜は、一瞬にして粒子になって空に還った。
俺も唖然としてしまう。
信じられない威力だ。

しかし、その事実は他の飛竜の本気を引き出す結果となった。
今までたかが羽虫一匹と侮っていた飛竜たちが、全員で魔法使いに向き直る。

そして飛竜は、モンスターとは思えない見事な連携を見せる。
それぞれが魔法使いから距離を取るように動き、半包囲を完成させる。
相手もさる者、魔法使いはその間に更に魔法の槍で飛竜を二匹粒子に変えていたが、その程度で数の優位は微塵も揺るがない。

飛竜たちが、同時に口を開く。
飛び出すのは、容赦のない灼熱の十字砲火。

吐き出される炎を魔法使いは正に魔法のような機動で避け、躱し、振り切っていく。
だが、それにも自ずと限界があった。

誘い込まれたのは、飛竜二匹の口の前。
そこから絶対不可避の炎が放たれる！

「ああっ！？」

誰かの、悲痛な声が聞こえた。
だが、

「魔法の、盾……」

声が、震える。
それでも魔法使いは健在だった。
自分の目の前に魔法の盾を発生させ、全てを溶かし尽くすはずの竜のブレスを、あっさりと防いでいた。

数瞬の後、盾と入れ替わるようにして飛び出した魔法の槍が、ブレスを吐いた二匹の飛竜を新たな粒子に変えた。

「すごい……」

横から、呆けたような声が聞こえる。
だが、違う！
分かってない！
全然分かっていない！

すごいんだ！
本当に、本当に、すごいんだ！！

俺が、心の中で叫んだその時、

「――！？」

見えるはずないのに、向こうがこちらに気付いた。
はっきりと、俺たちの方を、この大樹の方を凝視している。
そして、高い空の上から、相手の攻撃を回避しながら手を振って、

「――ッ！？」

鮮やかなインメルマンターン！
残念ながら、パンツは見えない。
……そりゃそうだ。
だってあれは、俺の妄想なんだから。

「…コーイチ？」

ナキが訝しげな声を漏らす。
俺の頬を涙がボロボロと伝っているのを、不審がっているのかもしれない。

だが、止められなかった。
止められるはず、なかった。

「なんだよ、すげぇ、じゃねえか……」

声が、漏れる。
そうだ。そうだよ。
こうじゃなきゃいけない。
こうなるんだって、一年も前に約束した。

「空を駆ければ縦横無尽、魔法の槍は巨人をも貫き、魔法の盾は竜の吐息すら防ぐ」

無意識にこぼれる声は、低くかすれていた。
これだ。
これが、接近戦も出来る魔法使いだ。
耳の奥にはっきりと残る懐かしい言葉。

『まだ、ただの願望。でも、あと一か月もあれば実現してるって自信もあるよ。
そしたら光一にも、見せてあげたいけど……』

見てる。

俺は、見てるんだ！

俺は、今、見てるんだ！！

俺は、今、お前を見てるんだ！！！

もう止まらない。
止められない。
止まるはずがない。
誰にも、止めさせはしない！

「いるんだ！　俺は、ここにいる！
お前を探して俺は、普賢光一は、ここまでやって来たんだ！！」

俺は、他の全てを忘却し、天空に向かって叫んだ。

「会いに来たんだ、縁ッ！！！」

――俺は、とうとう、お前を、見つけた！！

24．飛翔、そして……

「一体どうしたのよ、いきなり！！」

月掛がヒステリックに叫ぶ。

しかしその声は俺の耳には入っても、俺の心を震わせることはなかった。

俺の意識は全て前に、向こうで飛竜と戦っている縁に向けられていた。

俺がどれだけ叫んでも、縁にこの声は届かない。

何しろ縁がいるのは遥か高空。

声など届く距離ではない。

では、こちらに気付いてもらうにはどうすればいい？

合図になるような派手なスキルやアイテムを使う？

いや、今の俺にはどちらもない。

それに……。

――俺は、呆然とこちらを見ている四人の姿を視界に収める。

最後の理性が俺を押し留めた。

ここで竜を呼び寄せれば、俺だけでなくここにいる全員に累が及ぶ。

なら、諦めるのか？

目の前に縁がいるのに、彼女がどこかへ飛んで行ってしまうのを指をくわえて見守って、次の幸運を待つのか？

――そんなこと、出来る訳がない。

そしてだとしたら、俺が取れる手段なんて、もう一つだけに決まっていた。

「みんな、悪い。……俺はちょっと、行ってくるよ」

だから俺は、呆ける四人にそう告げた。

不安定な樹上で立ち上がる。

ここからあの竜たちまでの距離はどのくらいだろうか。

百メートル、いや、二百メートル、……もっとか？

目測ではその距離は判然としなかった。

だが、行ける。

行けると信じる。

俺の『魔力機動』は地面に足をつかずに移動することが出来た。

なら、空を飛べない道理はない。

俺は全身に横溢する魔力を感じながら、縁の許へ、今も飛竜と戦い続けている縁の所まで、飛んでいこうと体に力を入れて、

「い、行かないで、ください……」

自分の手が、小さくひんやりとした何かに掴まれているのに気付

いた。

「……七瀬」

七瀬だった。

七瀬こずえが、震える手で俺の手を掴んでいた。

「じ、事情は、知りませんけど、危ない、ですよ？
だってあんなに竜がいるんですから、危ない、すごく、危ない、です。
……だから。だからわたしを置いて、行かないで、ください」

虚ろな笑い。

どこか俺の機嫌をうかがうような怯えた声で、七瀬は俺に懇願する。

――俺は、俺の手を掴む、七瀬の手を見た。

小さい手だ。

失う恐怖に震える手だ。

そしてそれは、一度は俺が取った手でもある。

口には出さずとも、面倒だとは思いつつも、共に歩むことを決めた相手の手だ。

だが、今の俺に、迷いは微塵もなかった。

「……悪い」

俺は、その手を引きはがす。

「……あ」

七瀬は笑顔のまま固まって、ただ振りほどかれた自分の手を見ていた。
その姿に少しだけ胸が痛んだが、それでも俺は七瀬に背を向けた。

少しだけ、『魔力機動』でその場に浮き上がる。
高い場所でも、問題なく使える。
大丈夫、飛べる。

空を、俺が行くべき場所を見上げる。
もう少し、そこにいてくれよ、縁！
今、俺が、会いに行くから……。

そう思って、飛び出そうとした時だった。

「…んっ？」

俺は、裾が引かれる感触に動きを止めた。
七瀬がまた、手を伸ばしたのだと思った。
もう一度、振りほどこうと思った。
しかし、

「…行っては、ダメ」

聞こえた声は、七瀬の物ではなかった。
その声はもっと静かで、もっと澄んでいた。

「……」

なぜか俺は何も言えず、振り向くことすら出来なかった。
振り向いたら、もう飛べなくなってしまう気がした。
それは困る。
だって、目の前に縁がいるんだ。
俺が行かないと、いけないんだ。

「……行、く」

自分でも驚くようなか細い声を出して、俺は『魔力機動』を発動。
その手を振り切って、空に飛び出していく。

「コーイチ！！」

名を呼ばれる。
聞いているだけで身を切られるような、感情のこもった声。
なぜかその声は、ナキの物のように思えた。

だが、あり得ない。
いつも冷静で、どんなに怒っている時ですら言葉を乱すことのなかったナキが、あんな声を出して俺を呼び止めるなんて、あり得ない。
第一、ナキがどんな声で俺を呼ぼうと、今の俺には関係…ないことだ。

なのに耳から、その声が離れない。
その残響を振り切るように、ぐんぐんと高度を伸ばす。

飛ぶ。

飛ぶ。
飛んでいく。
この世界で手に入れた全てを地上に置き去りにして、俺は空を、縁の許へと飛んでいく。

「こっ、の！」

『魔力機動』は飛行能力ではなく、任意の場所まで体を動かすだけのただの移動術で、そのため小刻みな移動しか出来ない。
もともと継続的に空を飛ぶようには出来ていないのだ。
俺はカクカクと不器用な飛行をしながら、必死に上へと向かう。

縁と飛竜たちはまだ戦闘を続けていた。
しかし、戦いの趨勢はもう明らかだった。
飛竜は数が多いが、しかし能力に差があり過ぎる。
今も縁の一撃に片翼を落とされ、一匹の飛竜が地面へと墜落していく。

羽を失った飛竜はもがくが、一枚だけの翼で空が飛べるはずもない。
どんどんどんどん落下していく。

――もしＨＰが切れたら、俺もああなるのか。

考えて、ぞっとする。
確か俺のＨＰは５２だったはずだ。
ポーションでＨＰが全快すると考えても、俺が『魔力機動』を使えるのは、最大でも１５０回ちょっと。
それまでに縁の許に辿り着けなければ、俺はあの飛竜のように地面に落ちて死ぬ。

「いや、絶対に、辿り着く！」

帰り道のことは、あえて考えなかった。
出来る限り一回の機動で距離を稼ぐことを考えながら、俺は空を駆けた。

――まずいな。

状況が変わったのは、俺が二個目のポーションを飲み終えた時。
視界に映る飛竜の姿が目に見えて大きくなり、この調子ならＨＰが切れる前に辿り着けると安心した頃だった。

縁の強さに、これは勝てないと判断したのか、飛竜たちが方針を転換した。
縁を無視して、移動を再開したのだ。
今まで自分たちが向かっていた方向に向かって、それぞれが少しバラけながら最高速度で逃亡する。
そして縁がそれを逃がすはずもなく、飛竜たちと同じ速度で並走

しながらも、もはや一方的に飛竜たちを狩っている。

飛竜に追いつくことなんて造作もない縁からすれば、相手が攻撃しなくなった分、むしろ倒しやすくなっただろう。

だが、問題は俺だ。

こうなると、そもそも大した速度が出せない俺は、縁たちから引き離されていく。

このままでは永遠に追いつけない。

決断が、必要だった。

――行くしかない、か。

俺は静かに覚悟を決め、予定を変更した。

目標を変える。

この速度で移動する縁には追いつけない。

だから……。

――最後尾の飛竜に、攻撃を仕掛ける。

無謀だというのは、分かっている。

だがこのままでは、縁たちには引き離されるばかりだ。

俺が追いつける可能性があるとしたら、もう最後尾の飛竜くらいしかいない。

そしてそいつを攻撃すれば、後ろの方の何匹かの飛竜は、俺に対するべく何らかの動きを取るだろう。

もしかすると、縁が飛竜の異変に気付くかもしれない。

もしかすると、縁が俺に気付くまで、飛竜の攻撃を避けられるかもしれない。

もしかすると、縁が最後尾までやってきて、俺に気付いてくれる

かもしれない。

仮定に仮定を重ねた可能性。

だが今の俺には、それにすがるしか手段が思いつかなかった。

「『オーバードライブ』！」

虎の子の『オーバードライブ』を発動する。

一時的にだが、『魔力機動』の飛距離と移動速度が増大。

飛竜よりも、瞬間的に速くなる。

――これなら、届く！！

最後尾の飛竜まで、あと『魔力機動』二回分程度の距離しかない。

幸か不幸か相手はまだこちらに気付いていないが、それでも問題ない。

これなら間に合う。

何とか届く。

「もう、少し…！」

グンッと風が躍る。

空気を裂いて、飛竜が迫る。

「よし、行け――」

俺が届いたと確信した、その刹那、

「――っが?!」

衝撃が、貫く。

遅れて、背中に鈍い痛み。

『魔力機動』に使っていた集中が途切れる。

「――――?!!?!?!!?」

何が起こったのか分からない。

ただ、気が付くと俺は落ちていた。

「あ、ぁあ、うわぁあああ!!」

飛竜が、縁が遠ざかる。

這い上がろうと必死で手をばたつかせる。

体が回転して、上下左右も分からない。

「『魔力機動』！」

それでも俺は諦めなかった。

自分の向いている方向すら分からなくても、体を止めることなら出来る。

それから、もう一度飛竜のいる場所を見定めようとして……。

――その時、奇跡的にそれが見えた。

俺が後にしてきた、あの大樹。

奏也が、月掛が、七瀬が、それにナキがいるはずの大きな木。

そして、そこから高速で飛来する氷の槍を見て、俺は全てを理解した。

「ぐぅっ…！」

避けよう、と思う暇すらなかった。

俺にぶつかった氷の塊が、俺の残ったＨＰを、俺の意識ごと吹き飛ばす。

落ちる。

落ちていく。

どこまでも、落ちていく。

朦朧とする意識の中で、遠ざかっていく縁の姿が見えた気がした。

『……光一？』

頭を、撫でられる感触。

『まだ、起きてる？　でも、そのまま眠ってて、ね？』

なぜだろう。
目が、開かない。

『突然こんなこと言われて、びっくりしたよね』

早く目を開けて、縁の顔を見なくちゃいけないのに……。
焦る心とは裏腹に、体がぴくりとも動かない。

『でも、大丈夫だよ。目が覚めたら、今の話も、わたしのことも、全部忘れてる』

何、言ってるんだ？
俺は、お前を忘れない。

『だから光一は、もう何も心配すること、ないから……』

俺が縁のことを忘れるはずなんて、ない。
ずっと一緒にいたんだ。
これからも、ずっと一緒にいるんだ。

『たとえわたしを忘れても、光一がどこかで生きていることが、わたしの希望、だから』

そんなの当たり前のことで。
当たり前のことの、はず、なのに……。

『だから、わたしは行く、ね』

気配が遠ざかっていく。

『ごめんね、光一。さよなら……』

遠ざかる気配に向かって、動かない手を伸ばす。

なぜ、体が動かない。

今だ。

今、縁を止めなくちゃいけないのに。

なぜ、舌が動かない。

今こそ縁の名前を呼ばなくちゃいけないのに。

――縁！

心の中で、彼女の名前を叫ぶ。

なのに、俺の口はぴくりとも動かない。

それでも声なき声で叫ぶ。

叫び続ける。

縁！

行かないでくれ、縁！！

（――縁！！）

「――縁！！」

反射的に手を伸ばして、自分がまだ空にいることに気付いた。

衝撃で数秒間、意識を失っていたようだった。

『魔力機動』が使えなくなった俺の体は今も落ち続けているが、その速度は思ったほどではない。

「これ、は…？」

俺の体を包む薄い光の幕が、落下の速度を軽減しているようだった。

それでも楽観出来るほどの速度という訳でもない。

「く、ぅっ！」

HPがなくなった以上、俺に空中で出来ることはない。

成す術もないまま、地表が近付く。

――ぶつかる！！

ドン、という鈍い音が腹の奥まで響いて、俺は悶絶した。

「……はは、いてぇ」

だが、何とか生きてはいる。

体の下の固い感触が、今は心強い。

痛む体を動かして、体を仰向けに転がす。

空を、見上げた。

「遠いな……」

今も戦い続ける飛竜と縁が、空の向こうに小さく見えた。

手を伸ばしても、到底届かない場所だ。

これから追いかけても、俺には絶対に追いつけないだろう。

（終わった、か……）

失意と喪失感が、気怠く体にのしかかる。
何を考えたらいいか、分からない。
考えなくてはいけないことが多過ぎて、頭が働かなかった。
ただぼんやりと、未練がましく空を見上げる。

不意に、空を見る俺の視界に影が差した。

「……ナキ」

どこをどうやって俺を追いかけてきたのだか、ナキの服はボロボロで、額からは血が流れていた。
少し耳を澄ませば、荒い息遣いまで聞こえる。

それでもナキは、いつもと変わらない平静な声で、俺に問いかける。

「…頭は、冷えた？」

その言葉に、俺の脳は瞬間的に沸騰した。
いくつかの恨み言と、同じだけの感謝の言葉が同時に脳裏に湧き上がった。

……分かってる。

あのままだと俺は、勝算もないまま飛竜に突っ込み、何も成すこ

となく死んでいただろう。
だからナキは大樹から俺を狙撃して俺を止め、落下速度を軽減する魔法をかけて、俺の命を救った。

攻撃魔法を当てたこと自体は責めるつもりはない。
そうでもしないと俺は止められなかっただろうし、こうして生きているということは、ナキはきちんと威力まで計算して魔法を撃ったということだろう。

それでも、あのまま進んでいればほんの僅かでも縁に会える可能性はあった。
だから止めないで欲しかったという想いと、命を救われたという想いがぶつかって、息が詰まった。
そうして、結局俺の口から出たのは、

「……ああ」

という短い肯定の言葉だけだった。

「……」
「……」

それきり、何も言えないでいる俺の顔に、ぽたり、と滴が落ちる。
涙かと思ったが、拭ってみると赤かった。

だが、ナキはそんなことは全く気にしない。
自分の負傷などないかのように、黙って俺の顔に杖を突きつけた。

「……ナ、キ？」

杖を突きつけたまま、俺を見下ろす。
そして、そんな状況でも表情一つ変えないまま、ナキの唇がゆっくりと動いた。

「やりたい事を、やればいい。行きたい所に、行けばいい。でも……」

冷え切ってなお、ぎらつく眼光が俺を貫く。

「…命を捨てるような真似だけは、絶対、許さない」

――あぁ、ナキはいつだって正しい、と思う。

本当は、俺にだって分かってた。
今の俺じゃあ、あそこまで届かないってことは。

仮に縁が、あの場から動かなかったとして……。
俺のＨＰが、そこに着くまでなくならなかったとして……。
そして戦闘中の縁が、ちゃんと俺に気が付いたとしても……。

一体俺に、何が出来ただろう。

俺にはあの飛竜の攻撃を防ぐことも、避けることも出来ない。
縁にかばわれて、それでも生きていられたか怪しい。
足手まといになった挙句、縁さえ危険に晒していたかもしれない。

縁は遠い。遠過ぎた。
今の俺には届かない場所に、縁はいた。
俺はそれを認められず、我儘な子供のように振る舞って、自分の命を捨てようとしたんだ。

――強くなろう、と思う。

ただ、縁を見つけるだけじゃない。
今の縁に並び立てるだけの力をつけて、見つけてもらうんじゃなく、自分から縁に声をかけたい思う。

「なぁ、ナキ……。ナキ?!」

それをナキに告げようとした時、ナキの体が、不意に傾ぐ。
杖がカランと横に落ちて、力を失った体が俺にのしかかってきた。
鈍い体に鞭打って、かろうじてその細い体を受け止める。

「限界、だったのか」

度重なる魔法の行使、怪我に出血、そして疲労。
それでも俺の所に駆けつけてくれたことに、胸の奥が熱くなる。

（……大丈夫、そうだな）

耳元で聞こえる規則正しい寝息に、俺はちょっと安心した。
ナキの体が地面に落ちないように抱え直して、驚く。

あんなに冷たい目をしているくせに。
学校では、ブリザードなんて言われているくせに。

「温かいんだな、お前の体……」

それだけのことが何だか新鮮で、後から後から涙が出た。
じんわりと温かいナキの体を抱いて、俺は、静かに泣いた。

――最後にもう一度だけ、空を見上げる。

あれだけ大きかった飛竜は、もう空の小さい点に変わっていた。
どうやっても追いかけられそうにないし、もうそんな気はない。
今の俺には届かないのだと、はっきりと理解出来た。

もちろん、諦めた訳じゃない。
いつか俺は、あの高みまで駆け上がる。
そして、胸を張って縁に会いに行く。

だけど、今は……。

「ただいま、ナキ」

――俺はここに、みんなのいる地上に、戻ってきたのだった。

25．考えてみた

『……あのね。
光一はよく、わたしにもっと考えろって言うけどさ。
考えれば考えるほどメチャクチャなことを思いつく光一の方が、わたしはよっぽど問題だと思うよ？』

「だ、大丈夫ですか？
やっぱりもうちょっと休んでいた方が……」
「え？　あ、ああ。いや、大丈夫だ」

懐かしい気配に意識が引っ張られそうになった所を、七瀬の心配

そうな声に引き戻される。
俺が戻ってきて以来、七瀬はなにこれと俺の世話を焼くようになった気がする。

ナキを背負って大樹に戻った俺は、まずみんなに「勝手な真似して悪かった」と頭を下げた。
そんな俺を見て奏也は苦笑して肩をすくめ、月掛は半泣きで殴りかかり、七瀬は号泣して俺をドン引きさせた。
七瀬に平謝りに謝って何とか泣き止ませた後、みんなで村に戻ることにした。
ナキは疲れて眠ってるし、俺は疲労困憊しているし、七瀬はそんな俺から梃子でも離れようとしない。
この状態で何か行動を起こすなんて、出来るはずもなかった。

帰り道では、色々なことを整理する時間があった。

まず俺は、今まで自分が縁のことを完全に忘れていたのだと自覚出来た。
信じられないような事実だが、これには色々と思い当たる節がない訳でもない。

一部だけよみがえった記憶によると、どうも俺には縁のことを忘れさせるような力が働いているのだと考えることが出来る。
俺は無意識にでもこの力に抗っていたのだと思うのだが、最近はナイトメアの世界に夢中になって、縁のことを考えることが減っていたような気がする。

そしてたぶん、トドメになったのが明人の一件だ。
明人との戦闘中にナキが負傷して倒れた時、俺の頭の中から縁の

ことが一瞬とはいえ完全に消えた。
これがきっかけになって、俺は縁のことを全く思い出さなくなってしまったのではないかと考えられる。

「……光一さん？」

また黙って考え込んでいると、再び七瀬に声を掛けられた。
やはり、心配そうな顔をしている。

「あ、悪い。調子が悪い訳じゃないんだ。
ただ、考え込んでただけで」
俺の返答に、七瀬はピンと来る物があったようだった。
「もしかして、転職のことですか？」
まあ、答えは大外れだが。

「クラス、か……」
それについても改めて考えてみる。
縁と会うまでの俺は、バランスが取れていて死ににくい戦士を選ぼうとしていたが……。

――今となっては、その選択はありえない。

何がバランスだ。
何が死なないように、だ。
そんなことを考えていた昔の俺は悠長だと言うしかない。

俺は一分一秒でも早く強くなる。
そのためにはバランス型じゃダメだ。

出来るだけ速く、効率良く敵を倒し、経験値を稼げる手段を確立する。
そのために必要なのは汎用性ではなく、何か特化した能力だ。
特化した能力を持つことと、安定した戦力を持つことは、必ずしも矛盾しない。
必勝パターンさえ確立出来れば、一人で色々な状況に対応することも出来るはずだ。
特に経験値効率を考えるなら、パーティよりもソロで戦えるのが理想だ。
そして実際に、俺はその実例を目にしている。

――縁だ。

飛竜は格下の相手かもしれないが、あれだけの数を相手に縁が戦えたのは、彼女の魔法、つまり理術の能力が優れていたからだろう。
恐らく縁は理術特化キャラだが、理術だけで攻撃、防御、移動、その全てを高水準でまかなっていた。

あの時の縁の姿は、戦闘スタイルがハマれば単独でも戦力になり得るという事実を俺に教えてくれた。
高望みだとは分かっているが、可能なら俺も、一人で戦えるだけの安定した強さが欲しい。

――もっと具体的に考えてみよう。

まず必要なのは攻撃手段だ。
種類は何でもいい。

物理攻撃でも魔法でも、アイテムでもいい。
とにかく強い攻撃手段、そのための能力値が必要だ。

今の所、その条件に一番合うのは剣士だと思われる。
攻撃力を上げるには、強化を上げて物理攻撃か、理法を上げて理術攻撃が手っ取り早い。
そして、俺が転職出来る職業の中では強化４という数値は一番高い。
更にＢＰを毎回強化に振るようにすれば、強化が５ずつ上がることになる。
これを越えるような特化が出来るクラスは俺の知る限りは一つも……いや、一つしかない。

しかし、前衛職を選ぶなら、防御手段も必要になってくる。
大きなダメージを受けて回復に回らなくてはいけなくなったら戦闘の効率も落ちる。
そして、その点も剣士はある程度クリアしていると言える。

剣士は戦士より防御力は低めだが、素早さが高い。
戦士以上に攻撃を避けられればダメージも少ないはずだ。
スキルを使う敵が増えてくれれば分からないが、当面は回避能力が高ければ防御の面でも問題はないと言えるだろう。

一方で魔法職、理術スキルを中心に戦うクラスも検討してみる。
しかし、やはり絶望的に低い理術系能力がネックになる。
とても理術メインの戦いは出来そうにない。

ただ、理術をサブ的に使うという選択肢はないでもない。

物理特化は強力ではあるが、物理攻撃が効かない相手に対して無力になること、複数攻撃の手段に乏しいこと、が弱点になる。
理術も使えれば、その辺りの問題も解決出来るが……。
やはりそれは一番の下策だろう。
物理も理術もと欲張れば、戦士どころではない器用貧乏になる。
上げる能力値は出来るだけ絞った方が効率がいいのだ。

ならば、やはり俺が転職するべきなのは剣士なのだろうか。
いや、と俺は首を振る。
結論を出すのは早い。

もっとだ。
もっとしっかりと考えてみなくてはいけない。

視点を変えよう。
妹もキャラクタービルド、つまりキャラの育成方針の基本は、長所を伸ばすことだと言っていた。
ならば俺の長所とはどこなのか。
現状、俺の強みは何かを考えてみる。

能力値で比較的高いのは強化だが、これはＢＰで上げた物。
転職すればなくなってしまう。
これは違うだろう。
同様にレベルとＢＰも除外だ。

すると、能力値でずば抜けて高い物はほとんどなくなってしまう。
ずば抜けて低い能力ならあるが、だからどうしたという話だ。

だとすると、スキルはどうだろうか。
『魔力機動』は便利だし、『オーバードライブ』はここ一番で驚くほどの力を発揮する。
ついでに言えば、ユニークスキルの『真実の剣』も凄いポテンシャルを持っている……気がする。
発動条件さえ分かれば、有用なスキルになってくれるかもしれない。

ただし、『魔力機動』は無属性スキルのため、その性能は操作の能力値に左右される。
特に物理特化にするなら、操作の能力値が上げることはあまりないだろう。
素早さが上がってくれれば、不要なスキルに変わっていくことも考えられる。

『オーバードライブ』も難点ありだ。
効果時間が短いくせに使えばＭＰがなくなるので、ＭＰ消費スキルとは致命的に相性が悪い。
ＨＰと防御力も下がるし、武器が壊れやすくなるのも大きな問題だ。

こうして考えると、本当に長所なのか分からなくなってくる。
物理特化にすると『魔力機動』は段々使えなくなってくるし、『オーバードライブ』で武器が壊れまくる。
理術特化にすると『魔力機動』なんて使い道がないだろうし、『

オーバードライブ』で魔力が一気に枯渇する。
どちらにせよ活用が難しくて……。

――あれ、待てよ？

その時ふと、俺の頭に『ある考え』が閃いた。

物理特化か理術特化かで悩んでみたが、そもそもそのどちらかにしないといけないと決まっている訳じゃない。
第三の選択肢を選ぶというのもありなんじゃないだろうか。

もう一度、しっかりと考え直してみる。
さっきまでの思考の要点を拾う。

必要なのは、
高い能力値に裏打ちされた強い攻撃手段。
防御あるいは回避の手段。

改めて分かったのは、
複数の能力値を上げても効率が悪くなること。
理術関連の能力値が絶望的に低いこと。

今の俺の強みは、
ＭＰが使えず武器を壊す『オーバードライブ』。
物理特化では使えなくなる『魔力機動』。

これらの要素を全て考えると、今まで思いついてもいなかった選択肢が浮かび上がってくる。
攻撃手段には若干不確定な要素が混じるが、まあうまく行くまでは他で補ってやればいい。

……穴は、たくさんある。
だが、その考えにはそれを補ってあまりあるたくさんのメリットがあるように思える。
いや、むしろ今の能力を活かすなら、この選択しかありえないとすら思えた。

「――よし、決めた！！」

そうとなれば善は急げだ。
俺は突然の大声にビクッと肩を震わせた七瀬にも構わず、データウォッチでステータス画面を操作。

考え付いた通りのキャラクターを作り上げていく。

「も、もしかして、クラス、決めたんですか？」

ちょうどデータウォッチの操作を終えた頃、七瀬がそう問い掛けてきた。

……そうだな。

ここは一つ、みんなにも説明しておいた方がいいかもしれない。

俺は七瀬にうなずきかけると、

「ちょっとみんな、聞いてくれ！」

そう言って、いまだ眠ったままのナキを除く三人の注意を引いた。

「みんなには前も相談したが、クラスのことについて考えたんだ。ようやくこれからの成長方針を決めたから、みんなにも話しておきたい」

三人の視線が集まる。

口頭で説明するよりステータス画面を見せた方が早いだろう。

俺はステータス画面を開示設定で呼び出した。

中空に、俺のステータス画面が表示される。

「……え？」「……あ、あんた」「これは……」

なぜか口を半開きにする三人の前で、俺は胸を張ってこう言い放った。

「これが、俺の考えたキャラクタービルドだ！」

時計が、動いた。

――００時０１分。

現実世界に戻った俺が、ベッドに腰掛けて今日の出来事を反芻していると、

――バン！

という音がして部屋の扉が開いた。

「な、なんだ！？」

思わず俺が動揺した声を漏らすと、

「むー。このくらいの時間にいきなり部屋に入ったら、もしかするとお兄ちゃんがこっそりゲームやってるとこ見つけられるかと思ったのに……」

乱暴に髪飾りをいじりながら傍迷惑な乱入者が言った。

「そんな訳あるか！」

と叫びながら、俺は内心結芽の勘の良さに舌を巻いていた。

ある意味一分前までゲームをやっていたのだ。

偶然だろうが、いや、偶然だからこそ、驚きの的中率である。

……それでも、その方法で俺がゲームをやっている現場を押さえるのは不可能ではあるのだが。

「ああ、でもちょうど良かったかもな。

お前にも相談したけど、クラス、というか、今後の成長方針を決めたんだ」

そう俺が言うと、妹は俄然食いついてきた。

「何にしたの!?　やっぱり戦士?!　それとも剣士?!　まさかのスカウト?!」
「まあちょっと待ってろ」
やはり口で言うより見せた方がはっきりするだろう。
さらさらっと前に使ったルーズリーフの裏に俺の能力値を書いて、妹に突きつける。
どれどれ、とばかりに結芽は俺の手元をのぞき込んできて、
「……は?」
なぜだろうか。
他の三人と同じように、口を開いて固まった。
ちなみに、だが。
決定した俺のキャラクターのスタイルはどんな物かというと、
【普賢　光一】
トラベラー
ＬＶ：１１
ＨＰ：８７
ＭＰ：５

DP：11
魔力：7
理力：0
強化：44
耐久：12
俊敏：13
器用：17
理法：3
克己：21
操作：176
信心：1
BP：0

――操作極振りのトラベラー。

たぶん、世界初である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6970y/

異世界回帰ナイトメア

2012年1月15日01時54分発行